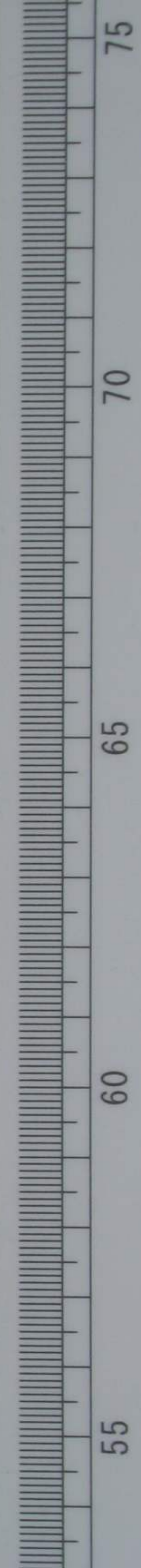




ゲーテ原著
高橋五郎譯

フアウスト

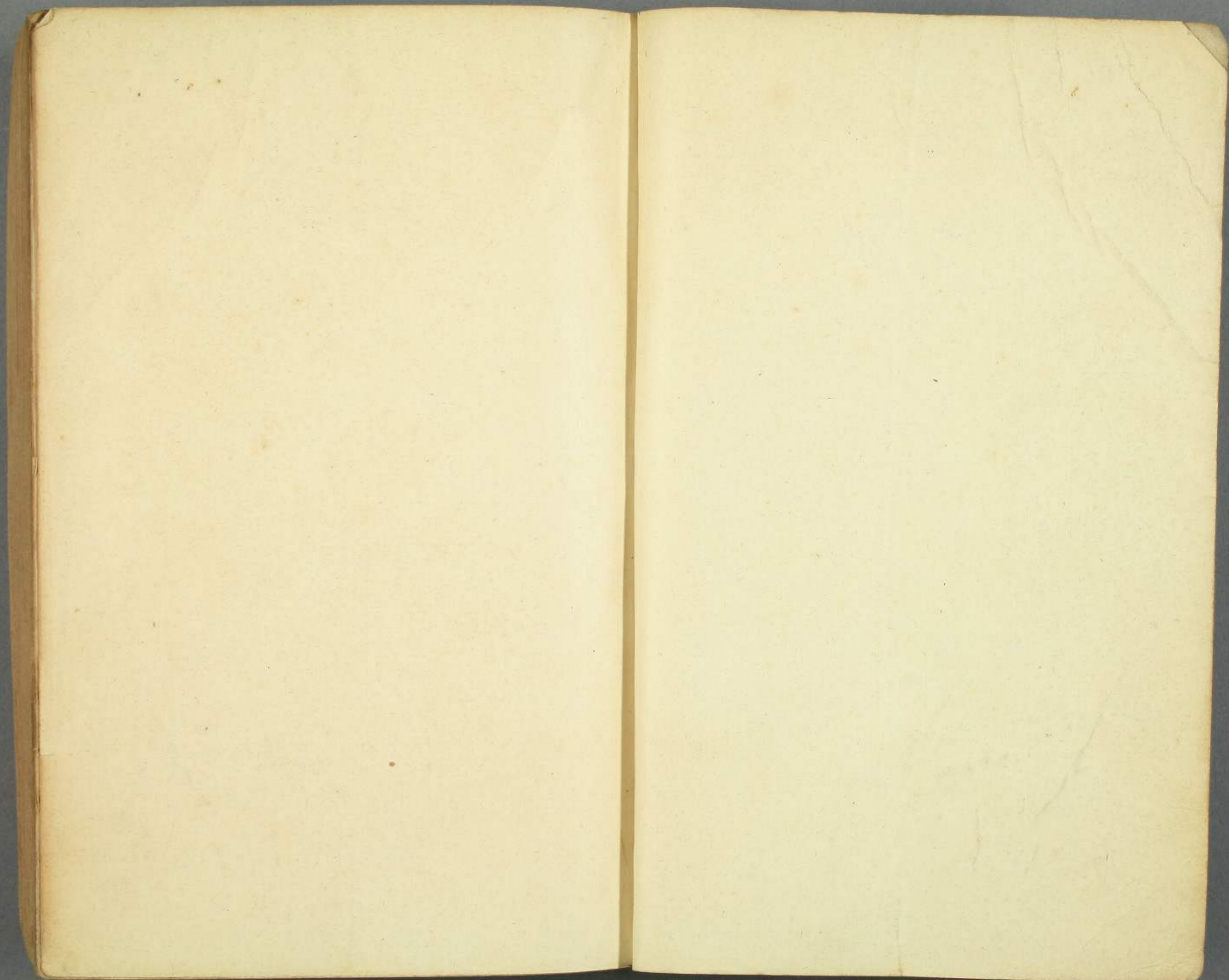


フアウスト

高橋五郎トシノ原著
高橋五郎トシノ譯

V
H





FAUST
GOETHE

フ
ア
ウ
ス
ト

獨逸
グーテ著
日本
高橋五郎譯

再
版

東京
文榮閣藏版

FAUST
GOETHE

フ
ア
ウ
ス
ト

獨逸ゲーテ著
日本高橋五郎譯

再
版

東京文榮閣藏版

自序

余本書の翻譯に着手してより既に數閱月、意外の多日子を之に費やす事となりぬ、因て今其巔末を略記して、序文に代ふ、

初め余輩は、其嚮に翻刻略註したる英譯ファウストを本文とし、獨逸の原本を參考として、之が翻譯をなさんと欲したりしが、劈頭に於て既に已に其不可なるを發見したり、开は他なし、韻文翻譯は音節(所謂平仄の類)韻字等の爲めに、屢々無用の文字を増挿せざるを得ず、往々有用の文字を省略せざるを得ざれば也、其甚だしきに至りては、ドライデンのイニーイッドの如く、ポープのイリア

ドの如く、原文とは殆んど別書なるが如き大逕庭を生ずるに至らんとす、

テーロルの英譯ファウストは二三十種の英譯ファウスト(最近なる英譯をも含んで)中に於て比較的にも最も原文に忠實なる者にして、余輩も之が爲に該譯を我が英學界の爲めに翻刻せしめたる程なれども、それすら上記の缺點は到底免かるべくも非ず、往々靴を隔て、痒を搔くの憾なきに非ず、是に由て斷然其最初の計畫を變更し、専はら獨逸文(原文)ファウストを本書とし、テーロル(其他若干)の英譯を參考とし、極めて忠實に、原文一行譯文一行、兩々相對して形影明鏡裏に相對照するが如く、翻譯せんことを

期せり、萬一文義を明瞭ならしむる爲め止むを得ずして原文に無き文字を補足したる時は、一々鈎括弧を藉て之を區別し、以て責任を明らかにす、之を總るに、ファウストは——譏譽褒貶は如何に千差萬別なるにもせよ、——兎に角十九世紀の最大文豪の最大傑作と最多數の人士に許されたる者なれば、世の讀書家にして、ファウストを讀まざる者は、我が國にては日光を見ざるが如く、伊西班牙にてはセビラ市 (Sevilla) を見ざるが如く、俱に美術界に、否美文界に結構を説く能はざらん、恐なきに非ず、高きに登りたりと稱する者にして、未だ富嶽を攀ぢずば、豈視界の濶大を誇り得んや、

4
 本譯文は即ち文學界の富嶽に登る人の爲めに一本の
 金剛杖を供給せんと試むる者のみ、夫の先達の人士に
 至りては、固より獨力飛登す、何ぞ斯の如き助を要せん
 や、

終に臨んで一言す、ファウストは一種の文學的戯曲に
 して、其内容は中古の神秘主義(魔術杯を)を借り、以てゲー
 テの大人。生。觀。を吐露したる者とす、主人公ファウスト
 博士は蓋し夫子自ら言へる而已、恰も「チャイルド、ハロ
 ルド」の主人公がバイロン其人の化身なるが如けん歟

明治卅七年八月十日

高橋五郎

目次

獻本詞	一頁
舞臺に於る序話	二
天上に於る序話	三
第一場 夜景 <small>(ファウスト獨語の段)</small>	四
第二場 城門前の光景	九
第三場 書齋 <small>(惡鬼を攘ふ)</small>	一三
第四場 同く書齋 <small>(惡鬼と契約を結ぶ)</small>	一六
第五場 酒窟 <small>(魔王醉漢を弄そぶ)</small>	二三
第六場 妖婆の煉藥場 <small>(ファウスト若還りの藥を服す)</small>	二六

第七場 市街(フアウスト美人に邂逅す) 二八三

第八場 初夜(フアウスト美人の寢室を訪ふ) 二九三

第九場 散歩(悪魔の大失敗) 三〇七

第十場 隣家(悪魔婦女子を誘惑す) 三二三

第十一場 市街進行(フアウスト美人の許へ往く) 三三九

第十二場 庭園(才子佳人と相契る) 三三五

第十三條 園亭内(喃喃語る) 三五七

第十四場 森林洞窟(フアウストの座禪觀想) 三六三

第十五場 美人マーガレットの室内(マ娘煩惱を訴たふ) 三七七

第十六場 マルタが家の奥庭(フアウスト其宗教を吟味せらる) 三六二

第十七場 噴井の傍(某女子の淫奔を譏る) 三九五

第十八場 城壁内(マーガレット熱心に祈る) 四〇〇

第十九場 夜中の格闘(マ娘の兄フアウストに殺さる) 四〇四

第二十場 教會堂裏(マ娘心の鬼に責めらる) 四一九

第二十一場 ワルプルギスの夜(百鬼夜行) 四三五

第二十二場 間狂言妖魔の金婚式 四四五

第二十三場 黯澹たる日子(フアウスト美人の零落を弔らふ) 四六九

第二十四場 夜行(妖婆の社) 四七六

第二十五場 獄裏の慘況(フアウスト美人を救ひ出さんとす) 四七六

大叩則大鳴、小叩則小鳴

道彌高則和彌寡

本劇中の人物一覽

舞臺に於る序話中に出る人物、

座主——作劇詩人——滑稽家（以上）

天上に於る序話中に出る神物、

天帝——（天使長）ラファエル——（同）ガブリエル——（同）ミカエル——（魔王）
メフキストフェレス（以上）

本劇中に出る人物及び神鬼の類、

（主人公）ファウスト博士——（魔王）メフキストフェレス——（學僕）ワグネル
——（美人）マーガレット——（マ娘の隣婦）マルタ——（マ娘の兄）パレンチーン——
（マ娘の知女）エリス——（漢醉）フロシ——（同）ブランデル——（同）ジーベル——（同）ア

ルトマイエル——妖婆——魔術師——鬼火——怪物若干——其他種々

間狂言中に出る仙鬼等、

オベロン——チタニヤ——アリエル——プック等若干



須臾^{シバラク}弄罷^ビ寂無^{ムヤトシテ}事^シ、

還似^{マタタリ}二^ニ人生一夢^ニ中^ニ



獻本詞

(二)君等再び臨めり、嗚呼彷彿たる面影よ、
曩に嘗て此の朦朧たる眼に映ぜし者、
余今能く君等を確と引留めおくべき乎、
吾が心は尙夫の夢想に戀々たるを余感ずる耶。
嗚呼君等愈よ逼るぞよ。然らば善し、茲に主たれ、
煙靄霞霧の窈冥裏より余が周邊に君等起ち現はる



2
と随まに。

吾が胸は若やかに躍るを自ら感ず
君等が進み來る路に吹き起る一陣の靈風に。

(二)君等は已れと偕に昔日の影像を夥しく齎らし、
衆多の親愛き遊魂は顯はれ來る哉、
或る古き半ば消えたる口碑傳説の如く、
初戀は友愛と偕に憶ひ起さる。
悲痛は復活す、人生の崎嶇羊腸たる迷路
顧み來りては頻りに歎聲を漏らし、

また佳人を名ふては惆悵す、皆花盛りの時をもて、
惡運兒に欺むかれつ、余が掌裏より消え去りにたり！

(三)彼等はもはや爾後の歌を耳にせじ、
嗚呼彼等余が最初の「歌」を歌ひ聽かせし人々よ、
夫の友愛なる群士は遠く散ばりぬ、
最初の應響は嗚呼哀い哉寂たり、
吾が歌は「今」知らぬ人群に向ひて響くのみ、
彼等が喝采すらも吾が心を痛ましむ、
嘗て吾が歌を楽しみたりし者は、

縦し尙生くとも、天下に遠く遊べり。

(四) 一種の久く感じ慣ざる渴望我を執へつ、

夫の静寂に嚴肅なる靈神界へ飛んとす。

吾が顫へる歌は恰も鳴風琴の如く、

今ぞ定まらぬ調子にて鳴り出しぬる、

寒戰余を犯し、涕涙は汎瀾として涕涙に次ぐ、

流石に猛き心も鎔て柔かなるをこそ覺ゆれ、

今余が有てる物は「朦朧として」宛然遠くに於る如く

見ゆ、

而して既に消え去りし物は却つて余に實在と成り
來れる哉。

(註) 以上は全く獨逸の原文を忠實に直譯し來れる者とす、以下本文に於ては對照研究其他の利便の爲め、テールルの英譯を眼中に置き、きて一々原文と對照し、雙方に通ずべく翻譯せんと欲す、要するにテールルの英譯は、英語にて出來得るだけ、縦や多少艱澁の迹はありとも、忠實なる直譯なれば也、

按ずるに、語學に暗き人は往々彼此兩國語中に於ける音綴相似たる若くは相同じき文字を以て互に相翻譯し、思へらく最も忠實なりと、何ぞ知らん音綴は相同じからんも、相似たらんも、意義は却つて雅俗淺深等大に同じからざる者あるを、是れ翻譯者の知らざる

可らざる一大事なりとす、テロルの獨逸語に精しかりしや、此點に其力を費やせる頗る大なる者ありき、究むるに彼此用法をそれぞれ何如んと顧るべき而已、

(因云、括弧中の文字は原文には有れども日本語には無きを善しとする者、又鉤括弧中の文字は原文には無けれども日本文には必要なる者、)

今聊か之が大意を説明せん、ゲーテのファウストは其尙青壯なる時代に於て既に思を構へたる者にして、其逝去の二三年前、即ち八十一歳の時に完成したれば、——而して又ゲーテは开が部分を處々一千七百七十五六年の頃より斷片 (Fragmente) として世に公やけにし來りしかば、晩年に至りて顧みるに、最初此等の所謂斷片を傾聽し喝采したりし人々は、大抵已に或は黄泉の客となり、或は遠邦の住民となりて、復た相會ふ可らざりき、是に於てか慨然として

此の獻本詞 (デヂケーション) を賦したり、但し實は是れ獻本詞にあらず、述懐詞として、今昔の感を舒し者とす、即ちゲーテ今茲に故人の遊魂が己れの心眼に續々再現し來るを認め、過にし昔を以て現在と爲し、却つて今を過去と見做したる也、

第八行なる『靈風』は、直譯すれば『魔風』Zauberhauf, magic air なれども、魔風とは日本語にては妖怪などの出る時に吹く者と見做したれば、故らに『靈風』と改めたる者とす、怪風と云ふも當らず、——『君等が進み來る路に吹き起る』と云ふ原語は僅々四字 *der ewigen Zug umwirt* (that around your march breathe) にて、直譯すれば『君等が行路のまはり、に吹く』の義なり、殊に其 *umwintern* (breathe-around) はサンデルの大辭典にすらも載せざる俗語に係る者とす、原語講究家の爲めに併せて一言す、

『悲痛は復活す』以下六行(十行より十五行)の如きは尤も感慨の無量なるを見るべし。

第二十行『最初の應響は嗚呼哀い哉寂たり』は昔し故人が我のファウスト斷片を聽きて喝采したりし其音響が今は早寂として音なきを説ける者とす、而して其次なる二行

『吾が歌は今知らぬ人群に向ひて響く也、

彼等が喝采すらも吾が心を痛ましむ』

“Mein Lied ertönt der unbekanntem Menge,

Ihr Beifall selbst macht meinem Herzen bang.”

はゲーテが世俗の讚否を度外に措き、群民の毀譽を蔑如したる證驗と見做れ來れり、寔にゲーテは舞臺に於る序詞中に於て詩人(戯曲家)をして同様の觀念を吐露せしめたり(六十行を見よ)

第二十七行なる鳴風琴は所謂 *Eolian harp* とて自然の風に觸れて天籟然と鳴る者とす、元と希臘の *エウリア* 國にて創製せられたりとて「*エウリア* 琴」と號す、獨逸語に *Aeolsharfe* と云ふ、*Harfe* は *harp* に同じと知る可し。

最後の二行(即ち三十二三行)は是また原文に在りては簡潔を極む、曰く

“Was ich besitze, seh' ich wie im Weiten,

Und was verschwand, wird mir zu Wirklichkeiten.”

“What I possess, I see as (if) at a far off distance,

And what disappeared becomes to me realities.”

是れ正に余が直譯したる所の者のみ、*テロル* は押韻と聲調との爲めに先づ *wie*(as, as if) を省き、而して次に原文を變更せり、換言す

れば彼は原文に無き數箇の文字を加へて義譯したる者とす、lying
(横はり)及び undying (不死)の二文字を加へ『消[○]去[○]り[○]た[○]る[○]所[○]の[○]者[○]』
を『余[○]が[○]喪[○]な[○]ひ[○]た[○]る[○]所[○]の[○]者[○]』と改め、becomeをgrowと書ける也、獨逸文
にては日本語の如く何々に成る、何々と成ると書くを得る者とす、
即ち其[○]は[○]』と成る、或は『に[○]成[○]る[○]』の』と『若くは』に』に相當す、

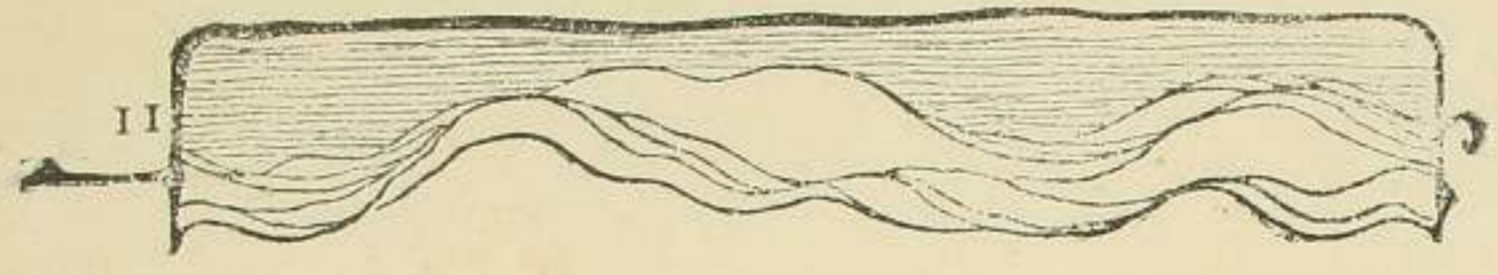
ファウスト

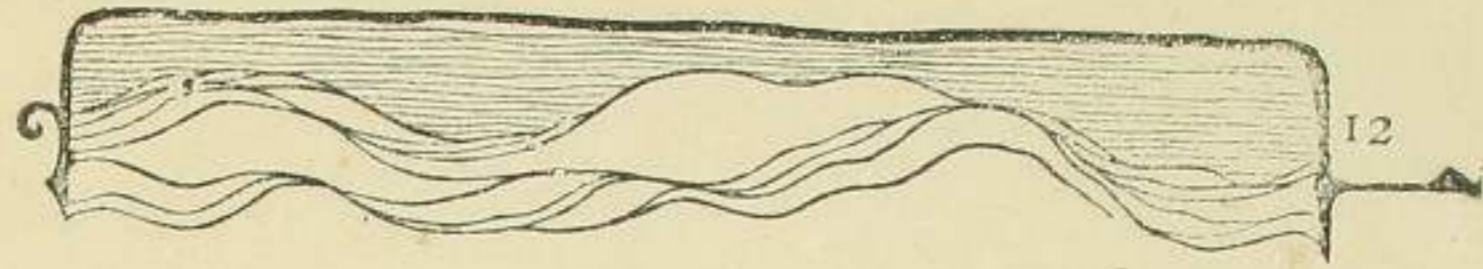
舞臺に於ける序話

(登場者) 座主、作劇詩人、滑稽家

座主

君等二人、我を今まで屢々
困難苦境の中に助けたる者、
請ふ言へ獨逸の地に於ける此の[新]事業は
君等の眼中に於て其成敗果して何如ん。



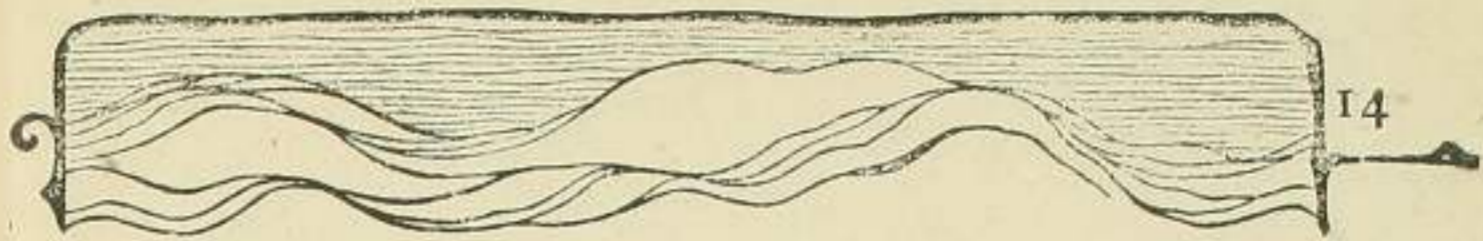


我は公衆を満足せしめんことを太だ希ふ、
 特別にも彼等は自ら生活し又我をも生活せしむれば也。
 柱は既に建られ、板壁は附られ了りぬ、
 皆我が與へん饗宴を待てり。
 既に彼處には好奇の眉を擧げつ、
 皆静まり坐して、耳目を驚かされんを欲す。
 我は人民の精神を如何に満足せしむべきかを知る、
 然ど今の如く當惑したることは嘗て有らず、
 固より彼等は極美なる物を見慣れたるに非れど、
 其の讀むことは嗚呼それ怖ろしい哉。
 如何にせば其脚色皆新鮮にして、
 而も亦意味深長に、愉快なるを得べきぞ。



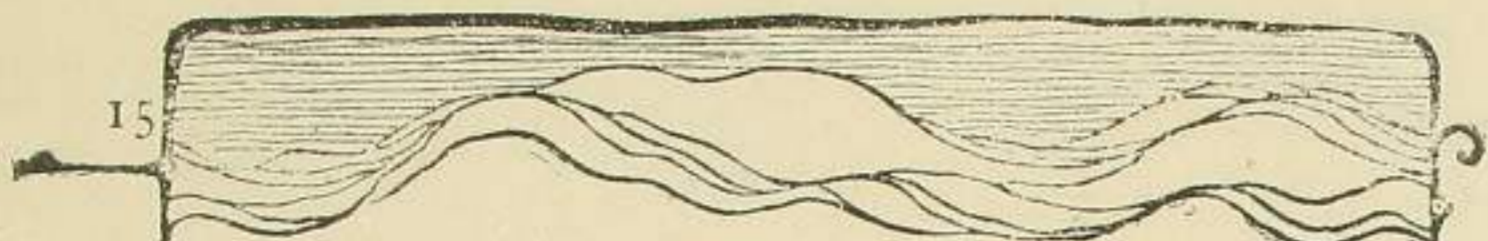
寔に滔々として群衆の潮流、
 我が板舎に漲ぎり寄するを見るは嬉し、
 勢ひ鋭どく押あひ壓あひつ、
 窄き木戸なる天門に詰込ぞ芽出たし、
 白晝より、四時前より早くも既に、
 撃あひ突あひて出札所に迫るや、
 恰かも匏匏欲しとて饑饉の際に、
 匏麵屋の門に札請ふて頸折ん如し。
 此の奇蹟を斯る雑多の人衆に行なふは、
 獨詩人のみ、今先生これを爲たまへ。

詩人



夫の難駁なる群衆を我に云々せざれ、
 之を見るだも神韻は飛び去るぞよ、
 此の漲ざる群衆を請ふ吾が目匿くせ、
 我々は意ならずも其渦流に曳こまれんとす、
 否な、請ふ我を閑静なる天の一角に導びけよ、
 彼處にこそ獨り詩人の爲に清き樂は花咲け、
 彼處にこそ神手鬼腕を以て愛と友とは、
 我等が心の福祉を造り且守るらめ。

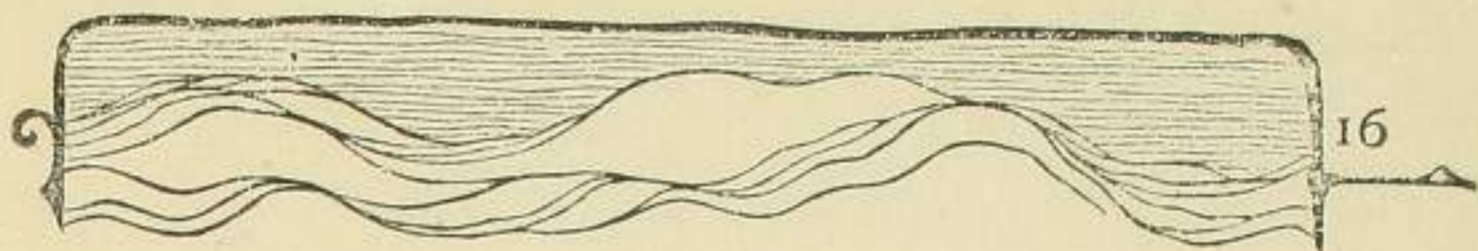
嗚呼、凡そ深き胸の裏より涌き出し來れる者、
 凡そ口の中より怖る恐る訥り出たる者、
 即ち時に或は失敗し時に或は幸ひに成功せる「構思着想」も、



嗚々喧々たる一時の俗勢に吞滅せられん而已、
 此の思想や往々年を多く重るの後、
 圓滿なる姿形もて始めて顯はれ來る哉、
 凡そ人目を眩曜する者は只一時の爲めに生る也、
 眞に價値ある者は永く後世に存して湮びず、

滑稽家

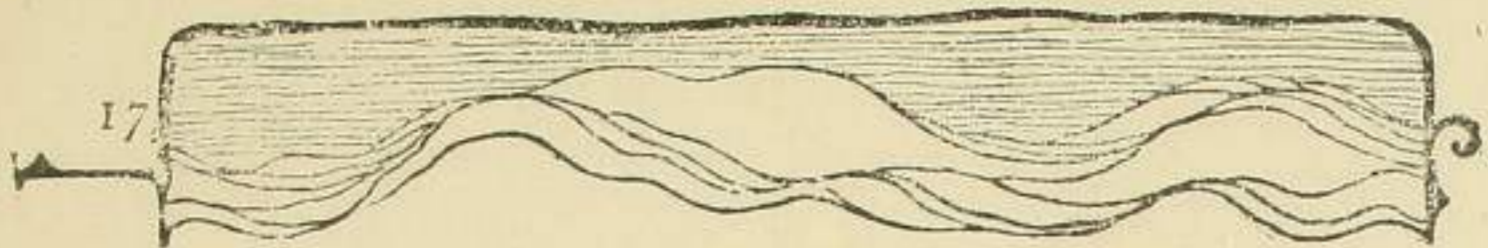
後世！嗚呼後世の話は聞かざらんこともがな、
 「滑稽家たる」我もし後世を喋々すべくんば、
 誰が復今世に嬉笑を來さん耶。
 嬉笑は今人これを欲し、又實に之を要す、
 我が如き諧謔なる青年の「演劇に」現前するは、



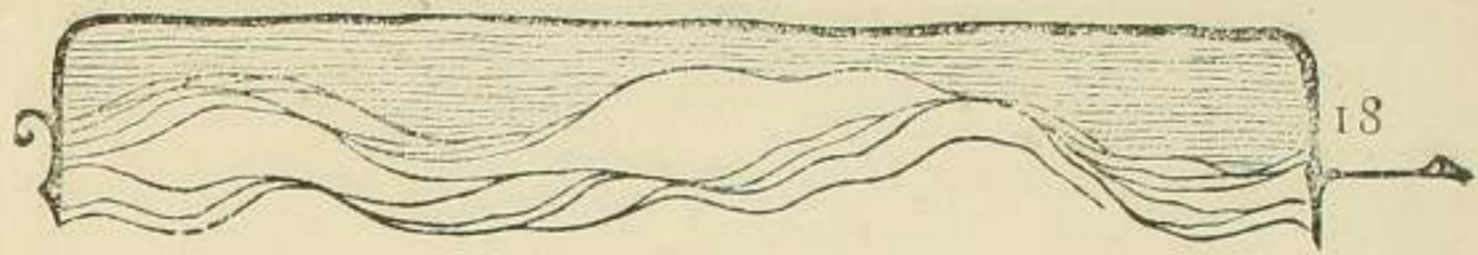
想ふに必らず多少の観るべき者あらん。
 夫の愉快なる己が性質を衆に霑然たらしめ得る者は、
 看客の輕刺なる待遇に遭ふても亦怒らじ。
 彼は其力を一層盛んに衆に振はん爲にとて、
 大勢の看客をこそ獲んとは求むべけれ。
 されば唯請ふ勇敢なれ、大家の手腕を顯はせよ、
 想像をして其すべての歌班を率ゐしめよ、
 理性、思慮、情緒、悲哀を必ず伴はしめよ、
 但し又善く心せよ、癡愚をしも決して脱さじと。

座主

特に然し乍ら出來事多からしめよ、



人は看にとて來る、人は盛んに觀覽せんをこそ欲すれ。
 夥しく目の前に紡ぎ出し將て來れ、
 然ば群客は愕然として口あかん、
 斯く君は單に量の多きを以て亦稱譽を得つ、
 一舉にして大好評の人となりねほせん。
 群は只君群を以て動かすを得ん而已、
 各々遂に自ら何物かを己れに選び取らん、
 夥しく齎らす者は何物をか衆多の人に齎らす也、
 各々満足して劇場より還り去らんとす。
 君斷片を有せば何ぞ綴らん、又均く片々として之を與へよ、
 斯る割烹は必らず君に成功を招かん、
 是れ容易に膳に上ぼさる可く、容易に工夫せらる可し。



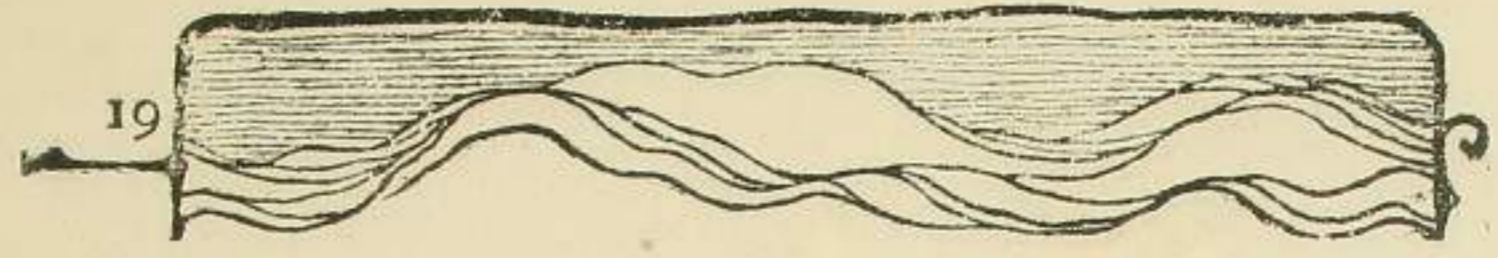
されば全部を取揃へて持ち出すは果して何の用ぞ、
公衆は忽ち之を分割して、思ひ思ひに拵ひ取らん而已、

詩 人

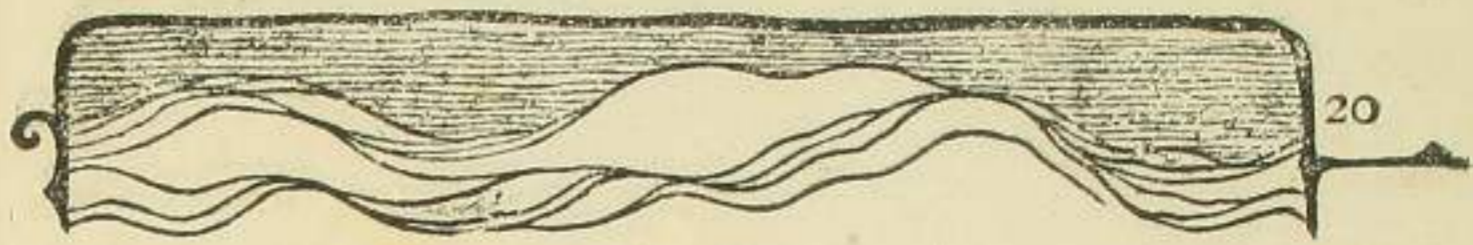
君は斯る手工の如何に陋き者なるかを感ぜず、
嗚呼是れ眞箇の美術家には如何に適はぬ者ぞよ、
似而非才子の悪詩拙作こそは、
察するに、早や君が主義とせる者なりし歟、

座 主

斯る譏諷は余を怒らしむる者に非ず、
蓋し善く事を成さんと思ふ人は、



最も利き器具を持たざる可らず、
請ふ思へ、君は柔き木を割るべき者ぞ、
又誰が爲に書きつゝあるかを願みよ、
甲某若し閑を消する爲めに來らば、
乙某は酒宴に飽きて到る、
殊に悪しきは、許多の徒輩、
新聞紙を讀むよりして奔せ來る事ぞかし、
彼等は舞蹈へ往く如く空然として茲に急ぎ、
只好奇心かれらが步趨をはやむる而已、
婦人は其容顔と美服とを衒かしたつ、
無報酬にて开が役割を演ず、
君は其高詩壇に何を夢想しつゝある耶、

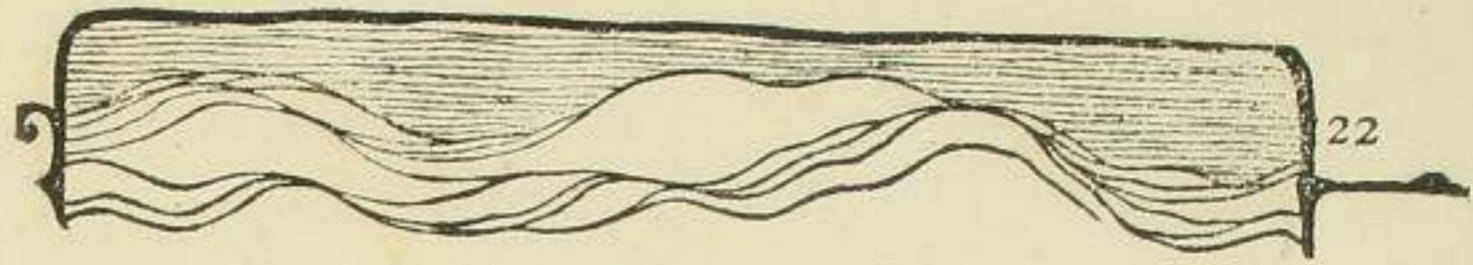


君は満場を均く喜ばせ得べしと思ふ乎。
 請ふ近よりて善く看客の顔を見よ、
 一半は冷淡に、一半は無風流没趣味なり、
 或は演劇の後に骨牌遊を望み、
 或は女子の胸に一夜の荒淫を冀ふ。
 何とてか嗚呼君等愚かなる詩人、
 斯る目的にミウズの天祐を覓むる耶。
 君に告ぐ唯請ふ多く、愈よ多く書き與へよ、
 然かせば君や決して「名利の」目的を外れじ、
 唯人々を煙にまかんことを務めよ。
 彼等を満足せしむるは難事なり、
 君は如何にせしや、是れ恍惚たる者か、苦痛か、

詩 人

請ふ去りて、卑屈なる詩人を他に自ら求めよ、
 詩人豈其の神妙なる権理を抛つ可んや、
 天の之に賜へる最勝の人權を、
 争でが君の爲にとて妄りに棄つ可けんや、
 何に由て彼は萬人の心を動かす耶、
 如何にして彼は各元素に克つ耶、
 是れ彼が胸より湧き出す所の一和、
 滿天下を彼が心に回收する諧調に非ずや、
 天若し人生の絲の限なき長さを、
 妄りに繰りつゝ、錘子に捲かんには、





若し萬生の亂調なる群品、
互に相軋り相戻らんには、
誰が其混々沌々たる列象を、
音節整然として躍らしむべく活し割たんや、
誰が各箇を全體の大諧調に呼び入れつ、
之をして彼處に洋々金聲玉音を發せしむる耶、
誰が暴風雨に喜怒哀樂を寓せしむる耶、
誰が晚霞を熱して沈思の伴侶とならしむる耶、
誰が春の美しくしき花を悉とく撒散して、
我が戀ふる佳人の路には打敷く者ぞ、
誰が凡庸なる綠葉を編みつ、
萬種の達人に名譽の冠を與ふぞや、

誰がオリンパスを必占せしむるや、群神を相合する耶。

「曰く是れ詩人の身に顯はるゝ人間の偉能のみ。

滑稽家

然らば其美なる能力を働かし、

且詩人の天職を行ふこと、

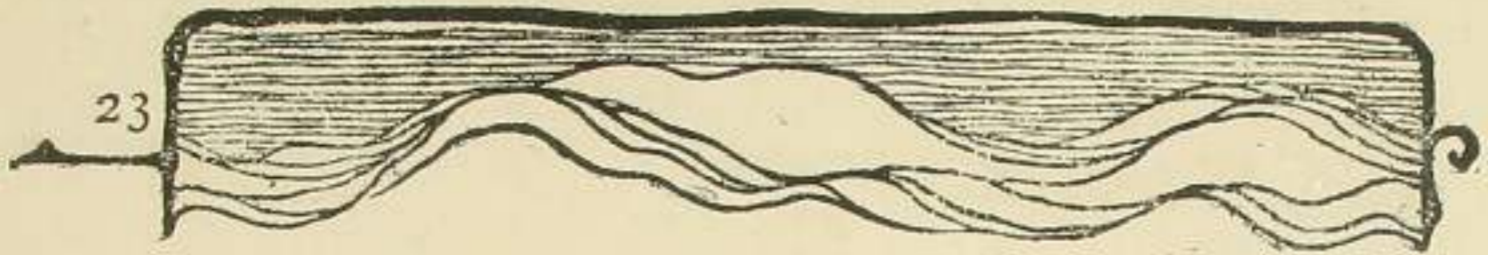
恰かも人が情事を行ふ如くせよ。

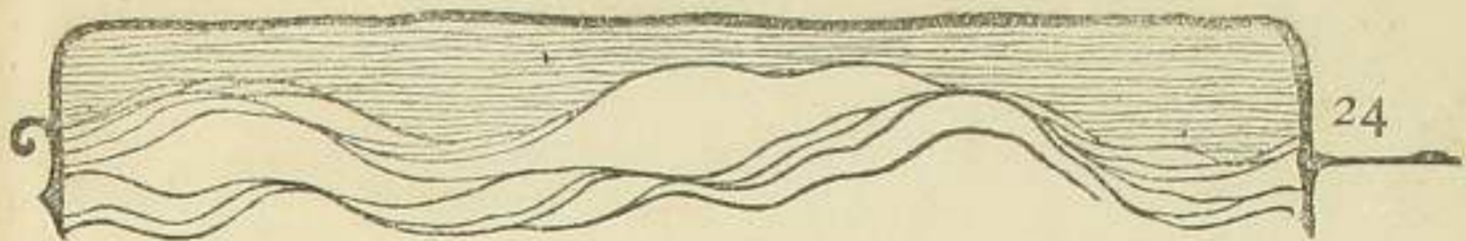
夫れ人は偶然に相近づく憎からず思ふ止まる、
而して段々と交結纏綿し來る也。

斯て幸福愈よ極らんとするや、忽にして變はる、

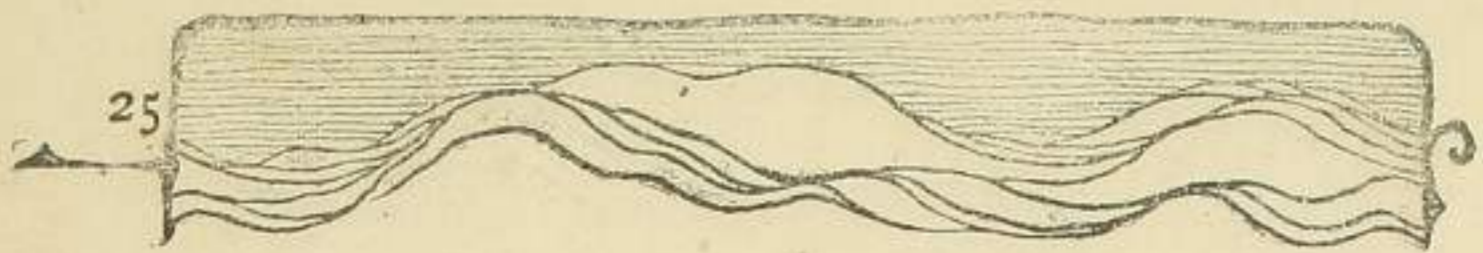
先づ恍惚として樂むや、傷心事茲に起る、

而して瞬く間に一篇の小説は結了す！





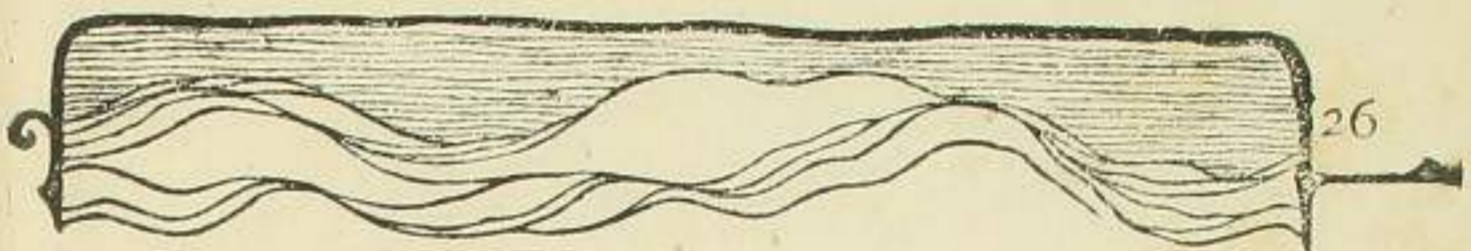
されば我々も斯くこそ戯曲を編むべけれ
 唯請ふ人間生活の全部を生擒り將て來れ！
 斯の生活や、解らぬ者多けれども、各箇これを度れば、
 何處を執ふとも、面白からぬ無し。
 其描畫や、色彩は陸離たれ、意義は朦朧たれ、
 許多の謬見に眞理の微光を「加味せよ」、
 斯してこそ最良の飲料は醸さるれ、——
 全世界の人々は鼓舞せられ、亦感化せらるれ、
 是に於て乎花盛りの少青年は
 君の演劇に群がりつ、其托宣を傾聽せん、
 是に於て乎總て其氣質柔婉き者は
 君の著作よりして自ら涕涙の餌を吸とらん、



時としては此人、時としては彼人、感動せられ、
 各々己が心に持つ所の描き出されたるを見ん、
 彼等青年は泣くにも笑ふにも、恒に吝ならず、
 常に君が思想の高飛を尊び、其看る幻觀に心酔す、
 凡そ既に成れる人は、剛復にして、満足せしむる難し、
 今成りつゝある青年こそ何時も感謝して「教を受る」なれ、

詩 人

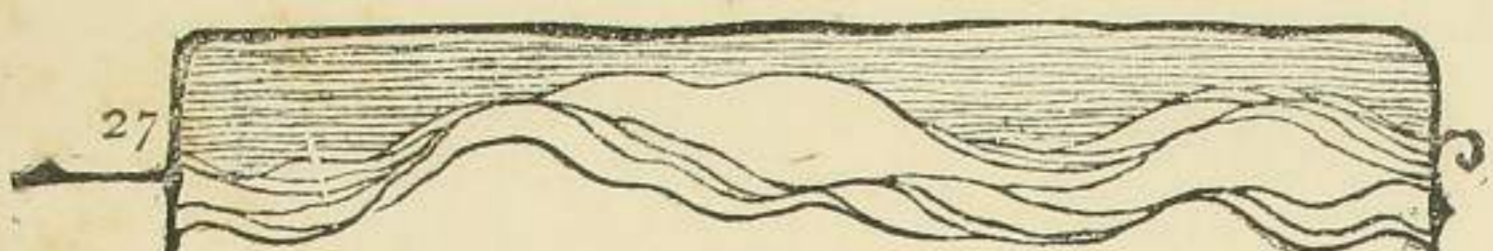
さらば請ふ我に夫の過ぎにし日子を還し與へよ、
 彼の時には我なほ自ら成長しつゝありき、
 彼の時には群がれる詩歌の源泉
 混混として自ら涌き出たり、



彼の時には彩霞わが爲に世界を罩め、
 發芽嫩葉は尙空中に樓閣を築きぬ、
 彼の時に我は野邊に滿ち咲ける
 千草の花を摘て遊べり、

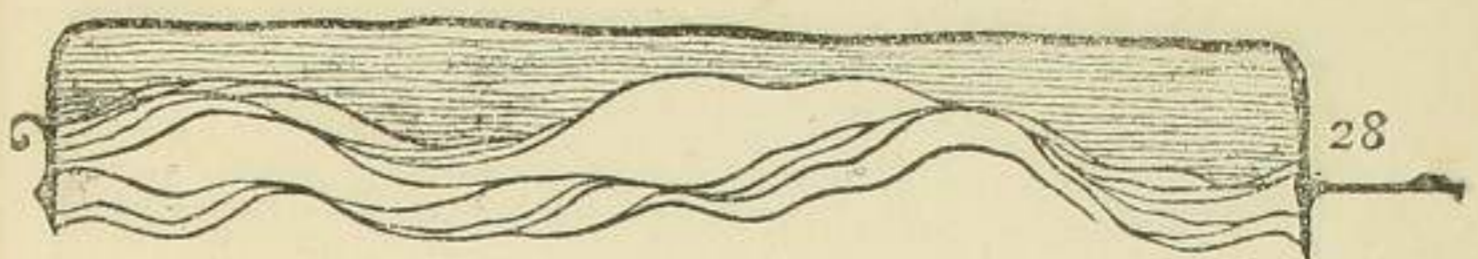
當時我は一物も無かりしかども足りぬ！
 眞理に奮ひ進み、迷想に樂み耽りたれば也。
 請ふ昔日の感情を酣に練かへせよ、
 夫の苦痛に瀕するほどなる深き幸福を、
 憎惡の力や戀愛の大能を練かへせよ、
 嗚呼請ふ吾が少壯の月日を我に還し與へよ！

滑稽家



良友よ、少壯の齡を君は確かに要す、
 戰鬥裏に敵人の君に逼らん時、
 情熱の燃るばかりなる處女子が
 君の手に一生懸命縋らん時、

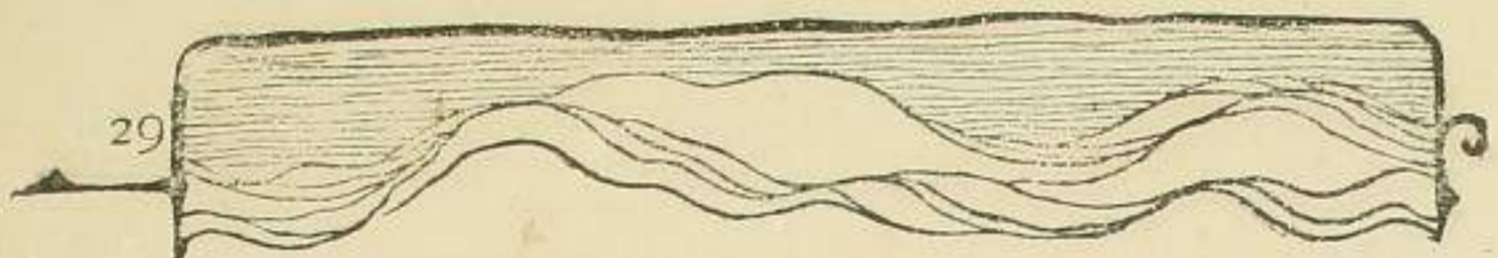
競走の月桂冠遙かに懸かりつ、
 苦んで達すべき決勝點より磨ねかん時、
 活潑なる回轉舞蹈を行りて後
 一夜を飲あかささん時ぞ君は之を要す、
 併し乍ら手馴たる線絲の琴を
 活潑に愉快に搔彈ること、
 自から豎たる目標にむかひつ
 曲折の妙を極めて歌ひ行くこと、



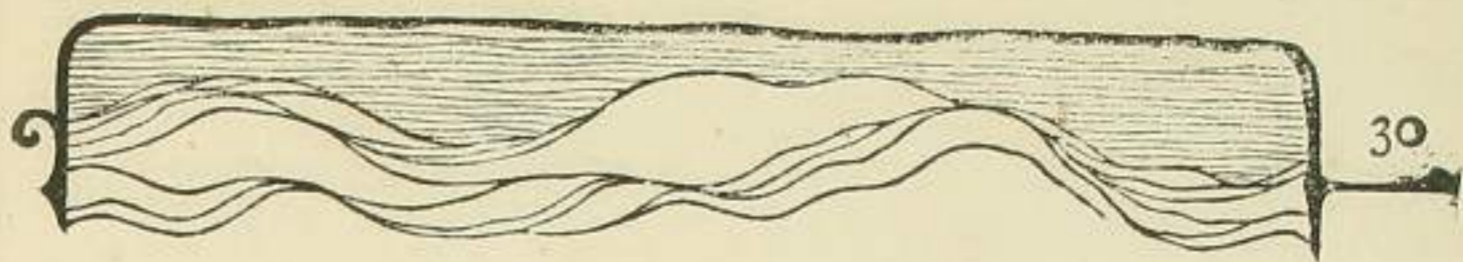
是こそは、翁よ、君の義務職掌なれ、
而して我々は之が爲に決して君を輕んぜじ。
老齡は世に言ふ如く人を小兒然たらしむる者に非ず、
却て惟我々を眞の小兒とこそ看出すなれ！

座 主

言葉は既に十分闘かはされたり、
請ふ終に業を余に示されよ！
君等が推稱の轆轤然と轉りつゝある間に
何か或る有用なる件を君等は持出すことを得ん、
徒らに調の高妙を論ずるは何ぞ益する多けん。
高調妙曲の物たる、狐疑逡巡する者には絶て臨まじ、



君等一たび自ら詩人と稱せんには、
其言葉の如く請ふ詩を自在に操縦せよ。
我等が茲に要する所は君知れり、
我々は強く濃き飲料を啜らんと欲す、
請ふ今我が爲に之を直ちに醸せ、
今日生ぜざる事は明日も爲されざらん、
一日をも躊躇して空く過す可らず、
果斷なる者は猛然として直ちに
可能兒の前鬢を引攪むべき爾、
然る上は復これを放ち遣らじ、
止む無く愈よ益す書き將て行かん。
君は知る我が獨逸の舞臺にては、



各々その腕を縦肆縦しきにこそ試むれ。
 然れば今日に於て脚色を立つるには、
 風景をも機械をも更に惜まず、
 天の光を大小ともに借り用ひよ、
 爛然たる星をも亦盛んに撒き散らせ、
 水にも火にも斷崖絶壁にも
 走る獸にも飛ぶ禽とびにも乏しき勿れ、
 斯く此の狭苦こしき假棚やの裏うちに
 森羅萬象を悉く描き出せ、
 慎重なる歩武を以て駸々と進み、
 天國より、世界を経て、地獄にまで奔れ。

天に於ける序話

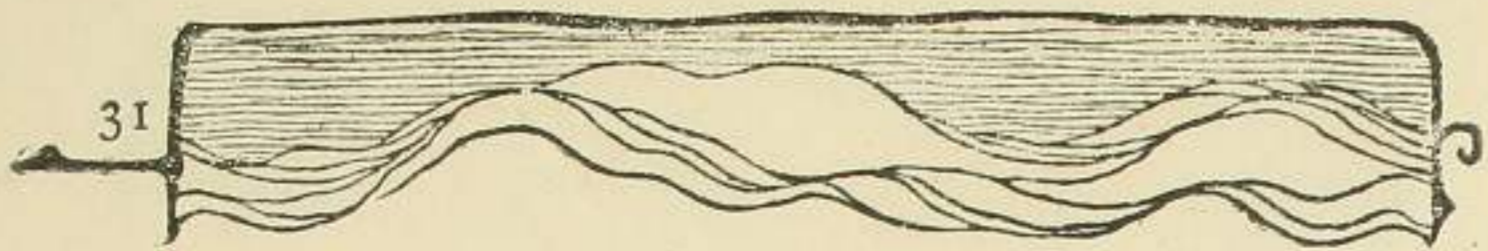
天帝、天軍、後ち魔魁メ、メフキスト

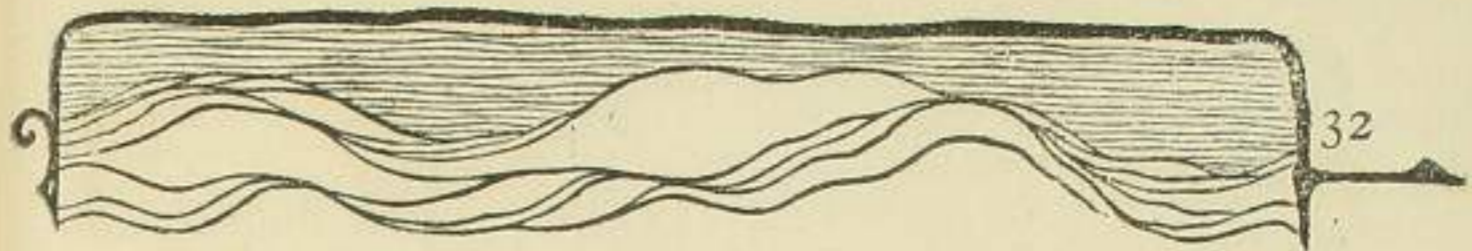
フェレス登場、

三箇の大天使ラファエル、ガブリエル及びミカエル 前み出づ、

ラファエル

日輪は舊様依然洋々として吟唱し、
 其兄弟たる群星の中に競歌かどひうたを謳ふ、
 而して其預め命定せられたる進路をば、
 轟々たる雷行を以て段々之を完たうす。
 「斯の太陽や誰も之が深大」を量り得る無し、
 天使は之を看て偉能ちからを身に受く也、

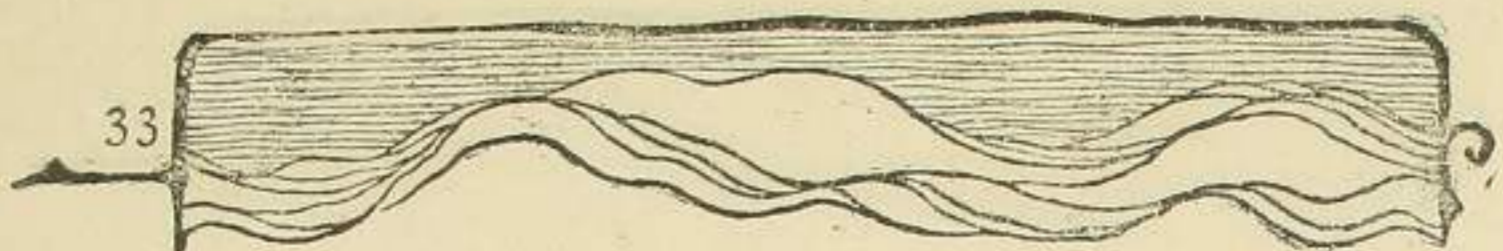




夫の不可思議なる妙工巨作(星辰)は、
開闢の初に於る如く爛燦極まれり。

ガブリエル

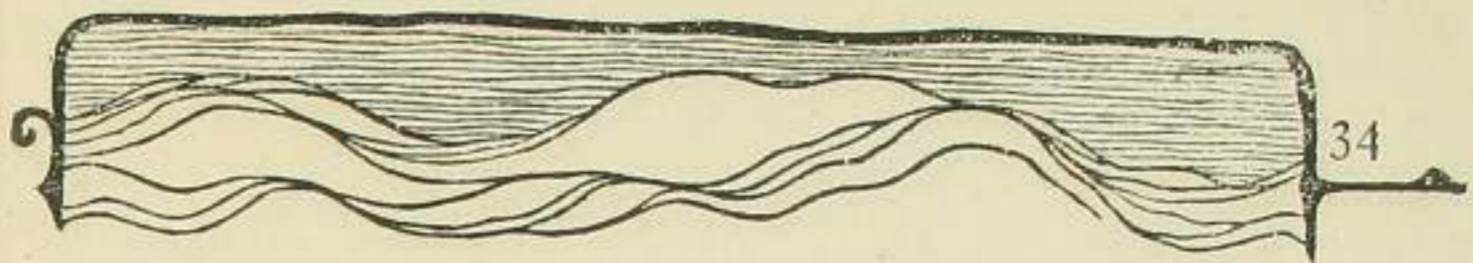
疾速に、理會す可らざるほど疾速に、
大地の燦爛たる(圓球)は回轉し、
赫灼たる樂園(デーン)の清輝は
怖ろしき深黒の夜と交も相代る、
海は滔々たる潮となりて泡立ちつ、
巖石の深き根基にぞ打碎くる、
又巖も海も雨ながつ相驅られて、
天體の永快なる運行に伴なふ也。



ミカエル

而して暴風狂雨は互に相馳逐しつ、
海より陸に、陸より海に至り、
怒號激越、地球のまはりに漲りつ、
神妙なる活動の連鎖を造り出し來る。
彼處にや炎々たる破壊作用は起り、
雷撃電掣の猛征途上に爆然轟發し來る、
然は云へ、上帝、主の御使等が崇め奉るは、
却て平穩に進むなる主が恒常の日の光榮にこそ。

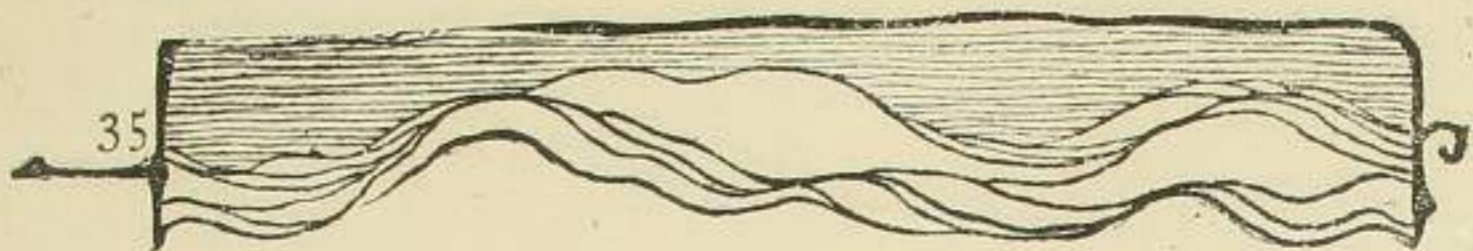
三大天使一同



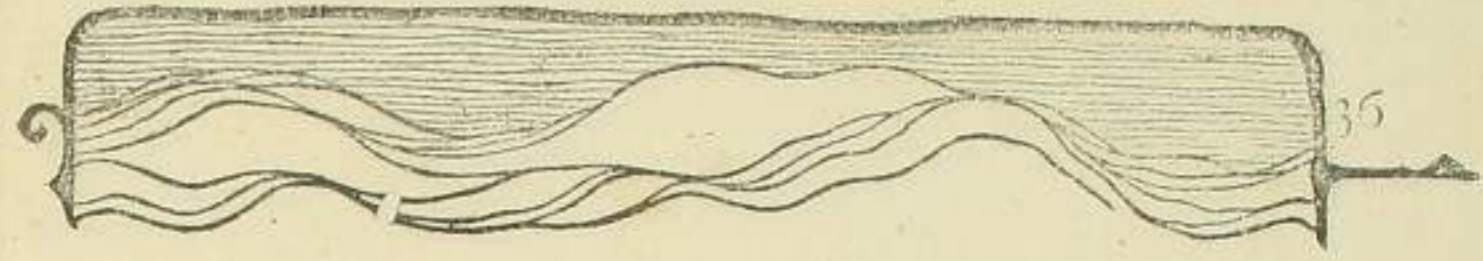
〔我が上帝や誰も主の深大を量り得るなし、
群天使は主を仰ぎ觀て偉能を身に受く、
而して主の諸の妙工巨作(日月星辰)は、
開闢の初に於る如く爛燦極まれり。

メフキストフェレース

嗚呼上帝、主は幸ひに再び我等(惡徒)に近づきめされ、
而して忝なくも我等の安否を問ひ給ふ。
主は從來恒に奴を悦び見たまひたれば、
やつがれも亦今主の群臣中に罷り侍る。
請ふ宥したまへ、奴は高談巍論を呈する能はず、
又此の全衆(天使)は奴を藐視ると雖も是非なし。



主もし笑喙を自ら斷ち給ふたるに非ずば、
奴の悲憤は必ず好笑を主に來たさん。
群太陽や衆世界の事に就ては奴何も白すべきを知らず、
奴は只如何に人類が自ら懊惱するかを見る耳。
斯の世界の小鬼矮神(即ち)は尙依然舊様を持し、
其戲論に耽るや恰も開闢の初に於る如し、
主若し愨に天光の一微輝を彼に給はざりしならば、
彼は却つて一層善く生活するならん。
此の微光を彼は理性と名け、其之を用ふるや、
一に唯有ゆる獸よりも倍して獸とならんとす也。
恐れながら、奴より見れば、彼(即ち)こそは
脚長き蠡斯(アリ)の一に彷彿たりと見ゆるなれ、



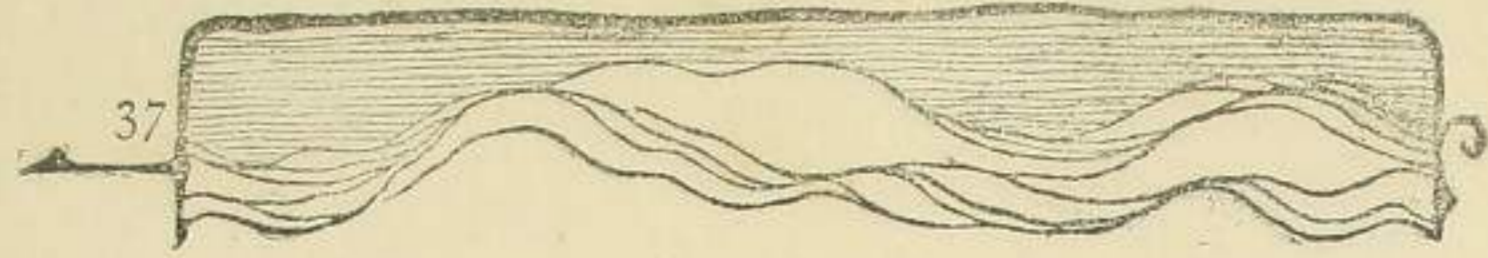
二六時中常に飛び、飛びては跳ねつ、
 何時も同く草の中に其舊き小歌を歌ふ耳、
 吁嗟彼や唯草の中に恒に横たはらば善からん、
 然るに有ゆる糞堆に彼は其鼻を突込む也。

天帝

汝は其上何も申し立つべき事なき乎、
 唯汝は何時も翹へんとてのみ來るや、
 地上には永遠、一も正善なる東西汝に見ゆる無き耶。

メフキストフェレーヌ

主よ、無し、奴は彼處に物事が例の如く極めて邪惡なるを見



る、
 寔に人類は其悲境を以て我に哀憐を催ほさしむ、
 奴は斯の不幸なる徒輩を惱ますだも肯てせじ。

天帝

汝ファウストを知るや、

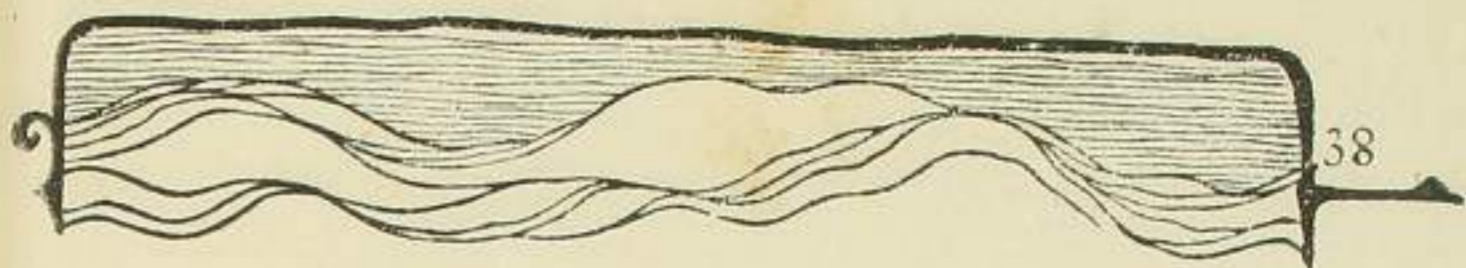
メフキストフェレーヌ

ファウスト博士なるか。

天帝

然り、我が忠僕、

メフキストフェレーヌ



彼なる哉、彼は奇なる状態にて主に事ふ。
 彼の愚人の飲物や食物は此世のものに非ず、
 内心の沸騰は彼を驅て高く遠く奔らしむ、
 彼は己れの狂態を半ば自ら覺知す、
 天よりは最も美はしき星を要め、
 地よりは有ゆる最も高き佳物を要む、
 凡て近き物も、凡て遠き物も(即ち天地萬物の謂)
 彼が深く悶へ動ける胸臆を安んずる能はざる也。

天帝

彼今は唯昏昧にして我に事ふと雖も、
 我は速かに彼を明快の域に導き入れん。

抑も園丁は、其樹の芽む間にすらも早や既に、
 花と實とが來ん年を装ふべきを知るに非ずや。

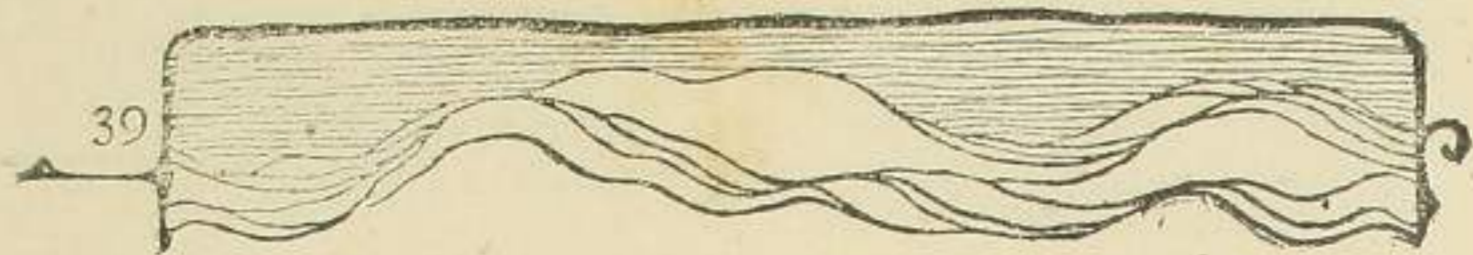
メフキストフェリース

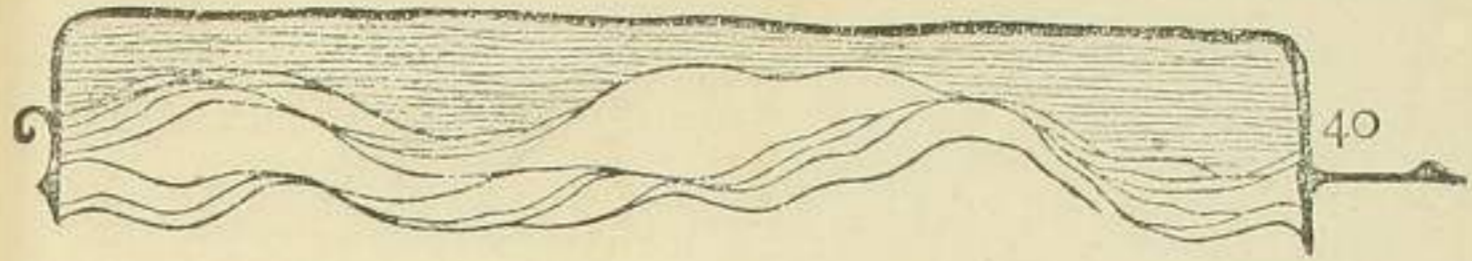
主は何を賭け給ふや、主は尙彼を失ひ給ふべし。
 若し彼を柔かに吾が道に誘ふべく、
 主に於て允許を我に與へ給ふならば。

天帝

彼れ地上に生存らふ間、

其間なんぢ此の事を禁ぜられじ、
 寔に人や奮進む間は躓かざるを得ず。

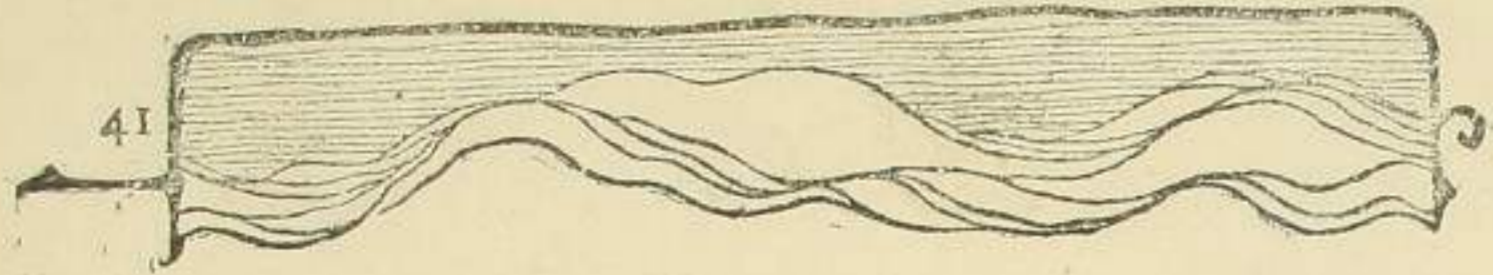




メフキストフェレース
 开は有難し、多謝す、所以は何如ん、
 我は決して死者に與するを欲せざれば也、
 我は肥膩ける鮮爽き臉をこそ最も愛すれ、
 我は死屍に向ひてや甚だ不得意に侍り、
 我が爲す所は鼠を捕へ弄ぶ猫の如き而已、

天帝

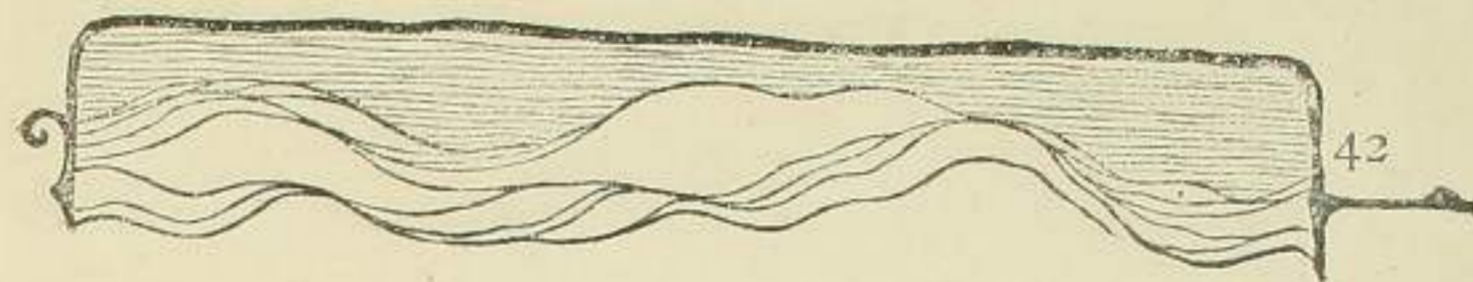
善し、开は汝に許さる、
 斯の人を其本源より導き去れ、
 汝能く彼を執へ得るなれば、



彼を携へて共に汝の邪道に相下れよ、
 而して若し能はずば、赧然と愧て告白せよ、
 善士は其の暗中に冒進するに當りても、
 猶自ら心裡に正路を全くは見失はざる也と、

メフキストフェレース

宜し、是は必ず長くかゝらじ、
 奴が賭物につきては毫も心配ならず、
 奴若し开が目的を達したらば、
 満腔の喜を以て奴に凱歌を奏させ給へ、
 彼は須らく塵土を——而も旨がりて——食んこと、
 恰も奴が姪たりし有名なる蛇の如くすべき耳、



天帝

此にも亦汝は自由に振舞ふを許さる。

我は汝の若き徒輩を決して憎まず、

諱否を事とする諸の靈鬼中には、

嘲笑の靈こそ最も倦厭の荷たること輕けれ、

抑も人間の活動は極めて緩み易し、

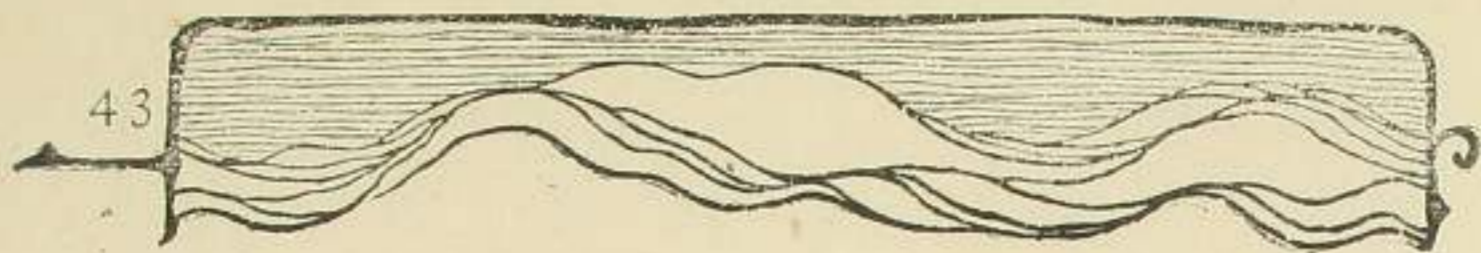
彼は忽ち無限の安佚を愛重せんとす、

されば我は悦んで彼に此の伴侶を與ふ。

此伴侶や刺激す云爲す其働くや惡魔然たらざるを得ず、

然れども汝等真正の神子等は、

夫の豊滿なる活ける美觀を喜び樂めよ、



夫の大能成力夫の永遠に活き且働きつゝある者は(大造)

愛の甜く美しき限界裏に汝等を包めよ、

夫の千變萬化する現象に泛々蕩々浮動しつゝある者をば、

〔汝等の〕終古朽ざる思想裏に定着把住せよ。

(天閉ぢ、大天使等散ず)

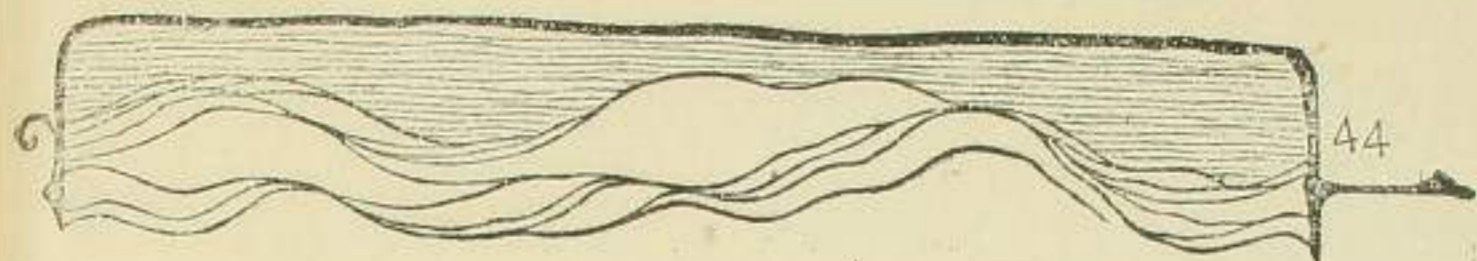
メファストフェリース(低聲獨語)

時々我は老爺(天)を見るを好む、

而して彼と諍ひ絶たざるべく竊かに用心す、

寔に彼が如き高天主にして斯くも人間らしく

惡魔と言ふは世に慇懃の至なる哉。



悲劇前篇

第一場

夜中の景

(天井高く狭きゴチク風の寢室、——ファウスト書卓に向ひて椅子に坐し、何となく心落つかぬ煩悶の様子)

ファウスト

嗚呼今我や既に哲學をも、
法學をも、醫學をも、

而して又哀い哉や神學をも、

熱烈なる精苦もて詳細つまびらかに學びぬ、

而して我、可哀あはれなる愚物や、今此に立つに、

露ばかりも前より智かしこくは成らぬ也、

固もとより先生とは呼ばれ、博士とは稱せらる、

早や既に此十年が間、

上へ下へ、縦に横に、

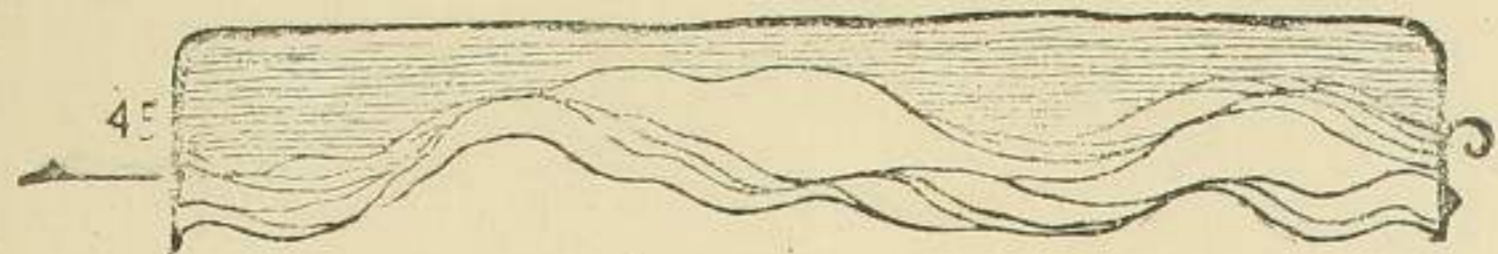
吾が學生を曳ひまはせり、——

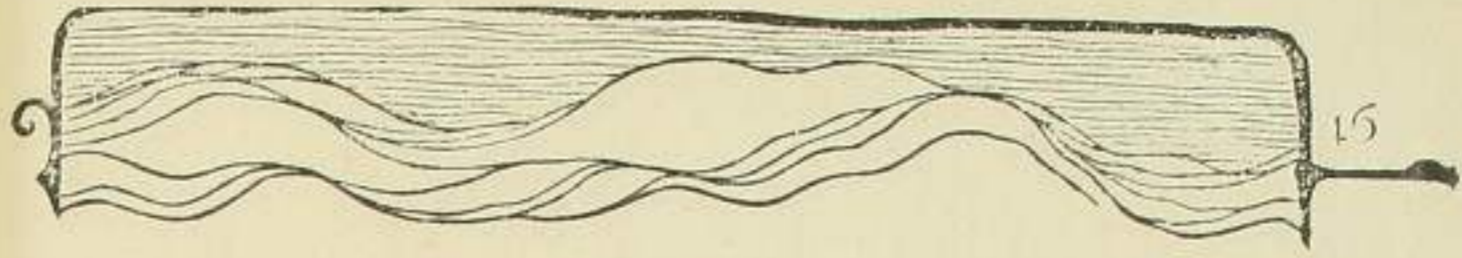
而して遂に吾々は何事も知る能はずと悟りぬ！

斯このの發見は殆んど吾心を焚やんとす、

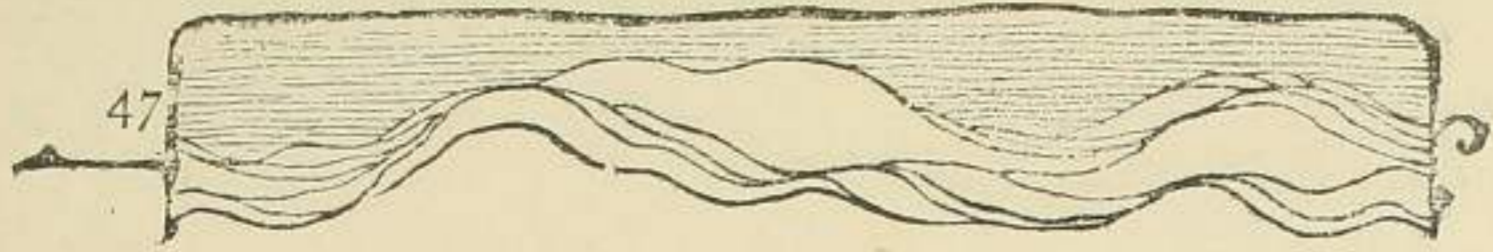
固より我や夫の羣か虚か術家よりは、

博士、先生、學者、教師輩よりは、さ憐あれし、



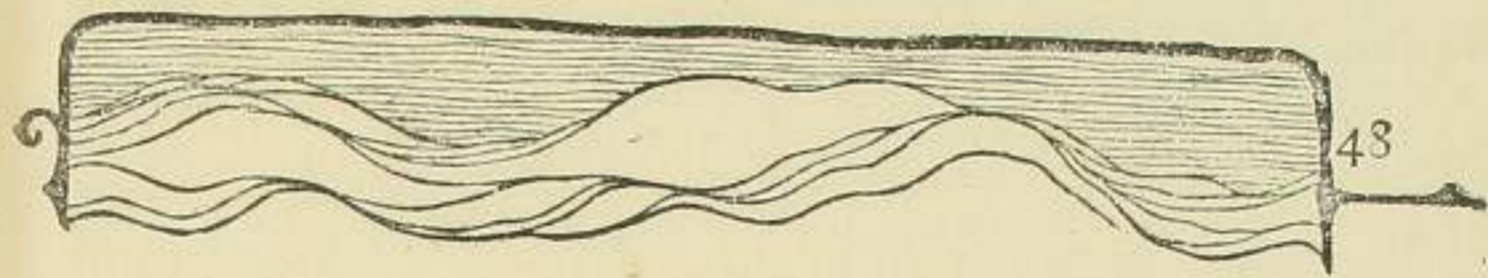


何の畏怖も疑惑も我を惱ます無く、
 地獄も悪魔も復我を懼れしむる無し。
 「然ながら」一切の樂も亦爲に我より奪ひ去られき。
 我は敢て何事をも正しく知り究むとは言はじ、
 我は人類を改善し又は感化すべく
 何事にまれ教へ得べしとは敢て言はじ、
 亦我は財産も無く、金銀も無く、
 世間の榮譽も尊爵も無し、
 犬だも斯くては是より長くは生きじ！
 されば我は魔術に身を委ねたり、
 庶幾くは神靈の力と口とに藉りて、
 幾多の秘密明らかに成り來らん歎。



然らば我はもはや苦しき汗たらしめて、
 自ら識りもせぬ事を説きたつるを要せじ、
 然らば我は夫の世界を
 裏面に深く結合する力を識るを得ん、
 諸の能造力および胚種を窺ひ見ん、
 而して復空言虚辭を「商賣」にせじ。

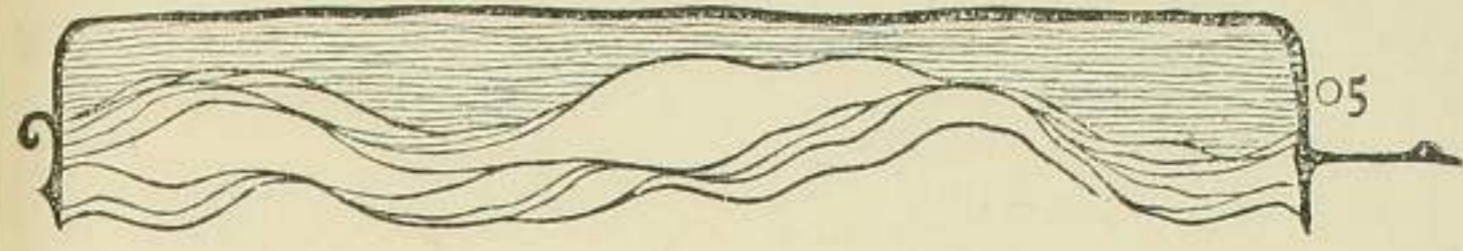
嗚呼圓なる月影よ、願はくは汝
 我の苦悶を今夜見をさめよかし許多度、
 汝の光を我は許多度眞夜中に
 此の書卓より觀守れり、
 其時には、嗚呼陰鬱なる友よ、



48
 汝は書籍文書の堆上より我を憐み照したり。
 然は云へ今は我漂然と山嶽の巔に、
 汝の麗しき光に乗じて往んこともがな、
 願くは山嶽の洞窟に神靈と偕に翱翔らん。
 願くは汝の淡光の裏に原野の上を徘徊せん、
 願くは學問の迷霧を脱離して、
 汝の新鮮なる露華中に健かに浴せん哉。

吁嗟我は斯の密室牢獄に尙固着しをる乎、
 斯の痛く嫌惡すべき陰濕なる書齋よ！
 茲にては吾人の愛する天の光明すらも、
 書硝子を通じて朦朧に通ずる而已。

49
 身は此の書籍堆裏に閉圍まれてあり、
 此等羣籍たるや、蠹魚に食れ、塵に覆はれ、
 高さ天井までも聳む達せんとし、
 四壁の紙は黯澹として燻れる哉。
 鏡や箱に周邊を圍まれ、
 機械を一面に堆かく積まれ、
 先祖代々の家具を以て塞がれる、
 是れ汝が世界ぞ、嗚呼何たる世界ぞよ！
 而るも汝尙敢て問ふや、如何なれば汝が心は
 戦々競々と汝が胸の裏に痛むやと、
 何が故に不可解の痛苦は



汝が生命の潮脈を悉く壅がんとするや、
 天帝が人類を其中に創造し給ひし
 自然なる活天地の代りに、
 禽獸の骸骨や人の枯骸體
 煙に燻り微を帶て汝を繞り圍めり。

飛よ！起てよ、いざ廣濶かなる地に出ん、
 此の神秘なる法術書、

ノストラダマス師の手ら著はせる者、
 是れ十分なる郷導にあらずや。

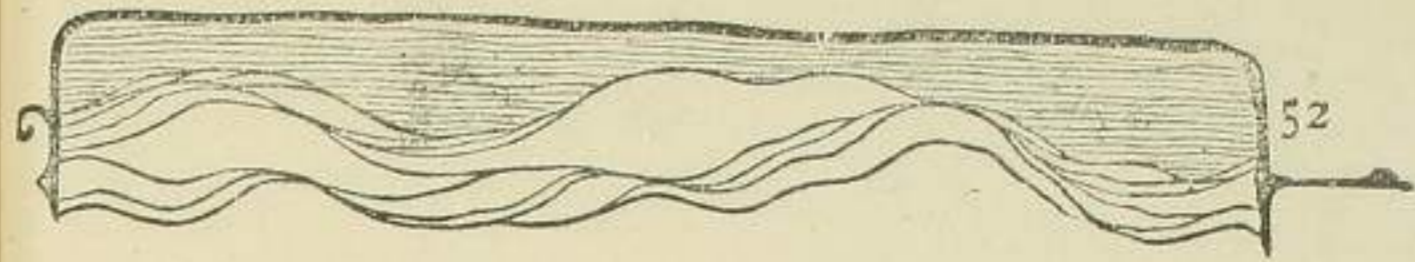
汝若し星辰の步趨を明らめ曉らば、
 自然の天若し其妙理を汝に誨へなば、

然らば汝が靈魂の力は高まらんこと
 恰かも神靈が神靈に言ふ如けん、
 此等神聖なる符號を空しくも
 此處に兀々と解讀しをるは、徒勞のみ。
 嗚呼汝等神靈よ、汝等は吾が傍に徘徊す、
 汝等吾言を聽くならば、請ふ、我に答へよ。

(彼該書を開きて、大天地の符號に着目す)

ハ、何等の恍然たる大悅樂、我の之を看るや、
 忽焉として諸の覺官に流れ溢るゝぞよ！
 我は感ず、年少神聖なる生命の福祉
 新たに熱しつゝ、吾が有ゆる神經と纖維を走るを、
 此等の符號を書たる者は是れ神なりし乎、





何ぞ其れ能く吾が内心の狂風を打鎮め
 斯の惘然なる心に充すに悦樂を以てし、
 また能く不可測なる神通を以て
 自然力の秘奥を吾が周邊に拓發し來るぞよ、
 我は神なる乎、吾が目何ぞ明かなるや、
 此等玲瓏たる文字の中を視るに、

天(然自)の化工妙用吾が眼前に灼然たる哉、
 眞人が宣たる所を今ぞ我始めて悟りぬ、
 「(目)神靈界の門は閉鎖れてあるに非ず、
 爾が目閉たる耳爾が心死せる耳！
 起てよ、門弟子、倦ず撓まず、
 爾等が地胸俗心を朝紅に洗ひ清めよ！」

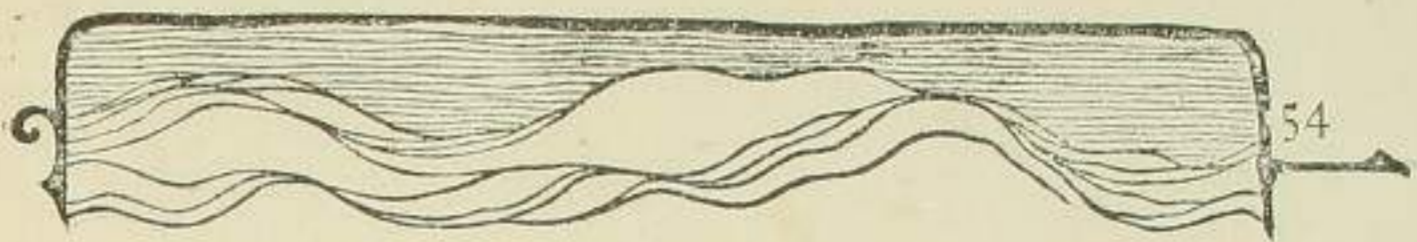
(斯くて其符號を熟視す)

如何に各箇の物は全體の中に己を編こむぞよ、
 「如何に萬象は相互に働き且活るぞや、

如何に許多の天使は昇りつ降りつ、
 黄金の甕を互に相交換しつ、
 福德を簌落す羽翼を振ひてや、
 天より地を経て颯然と舞ひ來りつ、
 微妙の音楽を以て一切を満たす哉！

何等の偉觀ぞや、嗚呼然り乍ら唯一偉觀のみ！
 無限無極の天地よ、何處にか能く我汝を捕攫せん、
 混々たる靈乳よ、何處ぞよ、嗚呼汝萬生の源泉よ、





天地萬物は之が中に懸れり、
枯涸たる心は之を渴望す、
寔に汝は溢る、汝は善く飲す、而も我は空く渴死せん哉。

(彼憚然として該書の紙葉を繰りあげつ、遂に地靈の符號を發見す)

此の符號は如何に善く吾が意に適ふぞや。

地の神靈よ、汝は一層我に近し、

早や既に我は吾が能力の高まれるを覺ゆ、

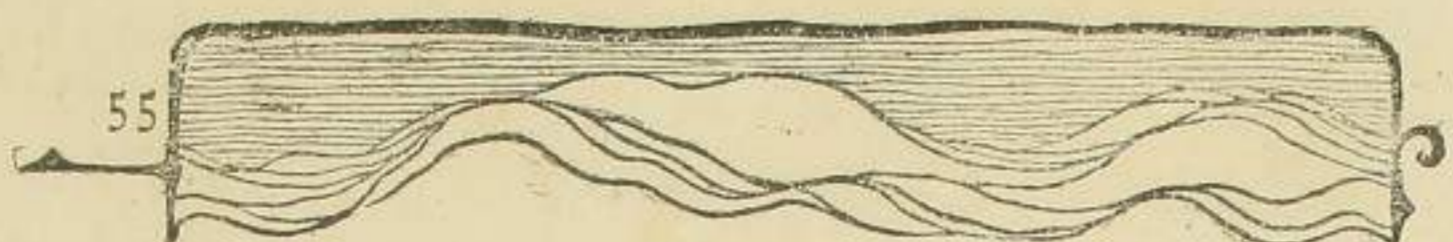
早や既に我は新き酒に酔へる如く熱す、

我は敢て世間へ乗出すべき勇氣あるを感ず、

敢て此世の殃禍、此世の福祉を忍受せん、

敢て暴風雨と自ら競ひ闘かはん、

難破船の轟然たる爆聲にも敢て慄かじ。



吾が頭上は曇り來れり、

月は其の光明を隠せり、

燈火は消ゆ、

霧は起る、——赤き光線は起りつ、

吾が頭のまはりに閃めくよな、

天井より一箇の怖ろしき者降り、

而して我を攫む。

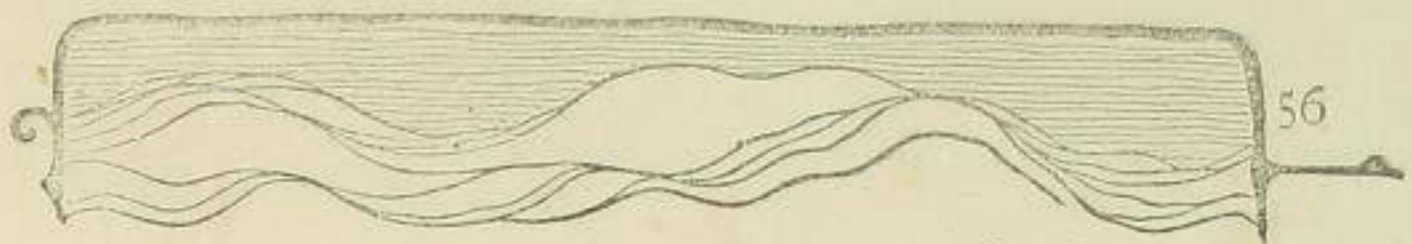
嗚呼、顯び出されたる神靈よ、

汝の本體を現はし來れ、

ハ、吾が心の裏は如何に裂くるぞや、

新奇しき感覺を得んとて

吾が耳目は飛び張る哉！



我は吾が心の全く汝に吸收らるゝを感ず、
必ず出よ、必ず顯れよ、吾が命は失なば失せよ、

(彼該書を執へ其神靈の呪文を唱ふるに、一陣の紅焰起るや同神靈との火焰の中に現出す)

神 靈

誰が我を呼ぶや。

ファウスト (顔を背けて)

吁嗟怖ろしき形姿よ!

神 靈

汝は我を強く牽けり、



吾が領界を久しく吸へり、
而して今や――

ファウスト

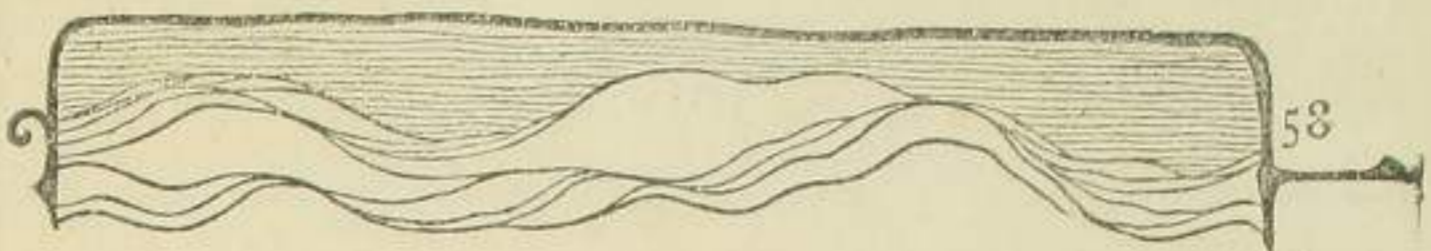
吁嗟怖ろし、我は汝に得堪へず、

神 靈

汝は切に祈れり我を直視するを、
我が聲を聽くを、我が顔を見るを、
汝が大心願力は我を牽き降しぬ、

我は茲に在り、――何たる憫笑すべき臆病心

人間以上の汝を執へしや、汝が靈魂の叫呼は何處ぞ、
夫の胸臆は何處ぞ、夫の一世界を己れに創生し、



之を負ひ且養ふ心、夫の歡喜もて膨脹つ、
我等神靈と拮抗すべく自ら高むる魂は何處ぞ、
汝ファウスト、其聲嘗て我に響きし者、
其あらゆる力を盡くして我に逼りし者は何處ぞ、
汝は是れ夫の我が氣息に吹まぐられつ、
五體百骸ことごとく振ひ慄く者なる乎、
一箇の蹈潰されて懼れ蠢めく蟲是なる乎。

ファウスト

我豈火焔の姿なる汝に負く可けんや、
我はファウストぞ、然り、我は汝の匹敵者ぞ。

神靈

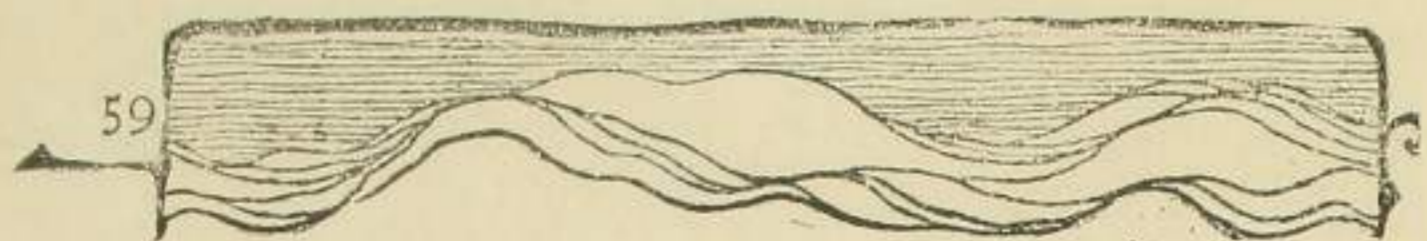
生活の潮流上に、活動の風雨上に、
我は波と成つて一起一伏し、
梭と成て一左一右す、
生誕と墳墓、

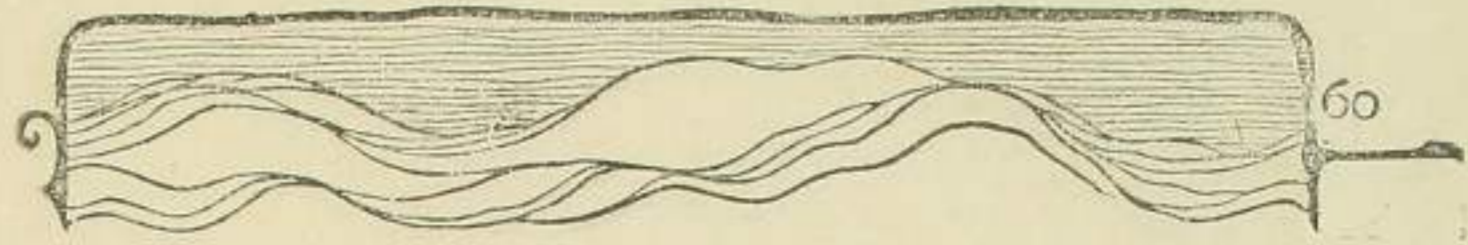
無窮なる大海、
彼此飛交ふ機杼、
熱烈なる生活、

斯く我は光陰の廻り嘯く機もて經營し、
神明の活ける衣裳(諸活現象)をこそ織り出し來れ、

ファウスト

汝この廣大なる世界を行き巡る者、





多忙なる神靈よ、如何に我は汝に近く覺ゆるぞや。

神 靈

汝は汝が領會する所の神靈に似たり、
我には似ず、

(神靈の姿消え失す)

フアウスト

汝には似ぬとな!

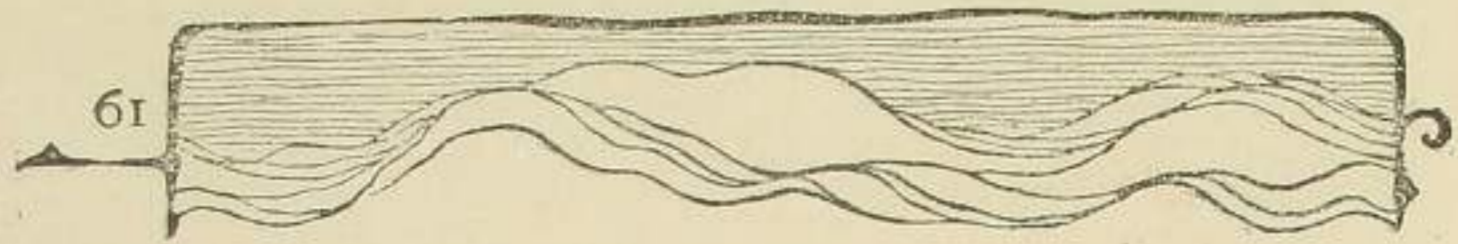
然らば誰に似るぞや、

嗚呼我や眞神の象影なる者!

汝にだにも似ざるとな!

(戸を叩く音す)

吁嗟死なる哉——解了たり——是は吾が學僕ぞ!



我が最も美なる幸運は皆無になりぬ。

此の豊満なる幻象異觀を

夫の無腸乾燥なる下劣漢斯く妨げんとは、噫。

(ワグネル 寝衣を着、夜帽を冠り、ランプ片手にて入り来る、——フアウスト 顔を擧めて振り向く)

ワグネル

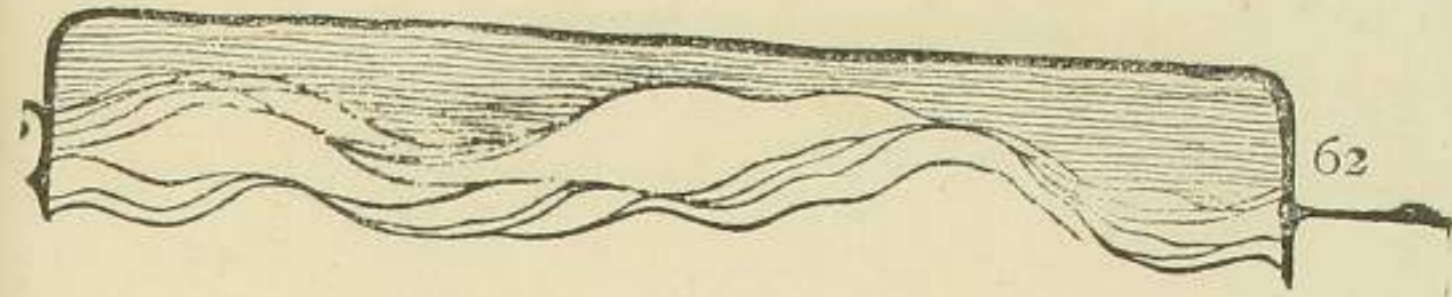
仁免たまへ、生は先生が朗誦せらるゝを聞けり、

想ふに必ず希臘の悲劇を讀をられつらん。

此の術に生は幾分か上達せんことを欲す、

如何と云ふに、今日此術は益する多ければ也。

生は屢人々の言ふを聞けるあり、



俳優は能く牧師に演説法を誨へ得べしと。

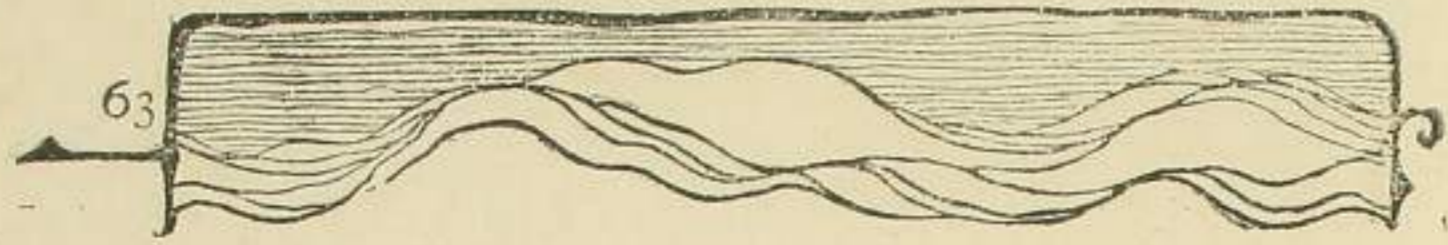
ファウスト

牧師自ら天性俳優たるならば寔に然り、
是また時としては世間に生起せざる事にも非ず。

ワグネル

嗚呼人斯く其博物館内(活世界な
らぬ書齋)に魅籠せられつ、
世間をば僅かに祝祭日に之を觀、
开も僅に望遠鏡もて、只遠くより望む而已にては、
如何でか能く演説もて之を縦横に導くを得んや。

ファウスト



若し己れに其心なくば、汝は此術を獵獲するを得じ、
是若し心裏より滔々と涌き出で、

本來固有なる快辭を以て、

聽衆の心を動かすに非れば、能はじ。

汝は永遠に坐して工夫し、頻に膠貼す！

他人の餘瀝殘香を以て一のスチウを煮製す、

汝は死灰堆裏より矮小の炭火を獲つ、

之を拾ひ出して頻りに吹き紅めんとす！

若し汝の趣味これに止らば、請ふ

唯只小兒や猿猴の驚歎を惹き起せ、

然し乍ら是若し汝の心より出ずんば、

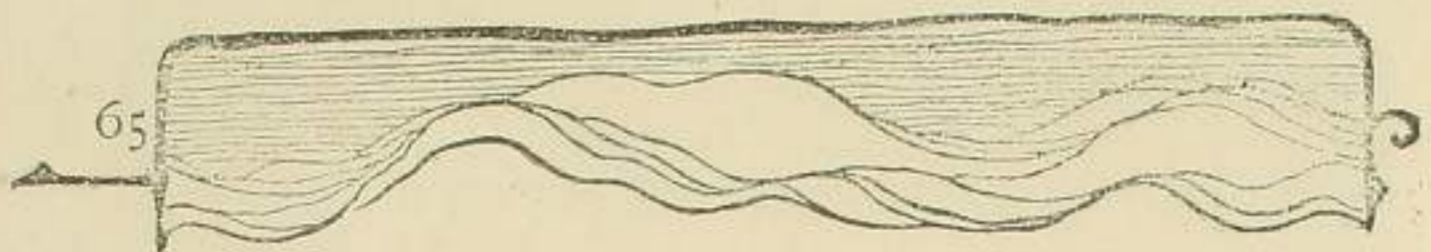
汝は決して心を心に感化する能はじ。



然^まは言へ、巧妙の演説法は辯士の幸運を來たす也、
生は尙遙か後^{しりへ}に在るを深く感ず。

ワグネル
ファウスト

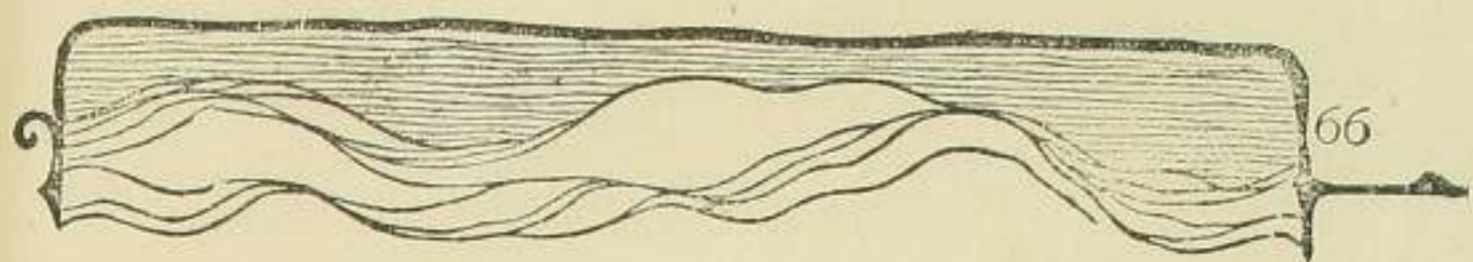
請ふ眞實の利得を希求せよ！
空くガラガラ鳴る愚物とは成る勿れ。
慧悟と健覺だに有らば、
術を待つ少なくして能く上達せん。
汝若し其言ふ所に眞面目且熱心ならば、
豈言語に窮し文字を搜すを要せんや。



然り、汝が演説は然^まかの歴^{きんがき}にして、
其中に汝は人間思想の屑^{くず}断^れ片^はを巧に綯^{より}交^ますれど、
开が活氣なくして不爽快なるや、恰も是れ霧風が
秋の野に枯葉の間を嘯く者に彷彿たる哉！

ワグネル

嗚呼天よ！『藝術は長く、
我等の生命は短かし』とかや、
我は吾が文學批評の業に孜々たるも、
屢々^{あまた}頭と胸とにつきて遲疑する所なきに非ず。
吾人が由て以て本源に溯るべき手段は、
之を獲ること嗚呼如何に難い哉！



而して吾人只半途に達したらん前に、
早くも既に惘然なる小鬼(即人)や死せざる可らず！

ファウスト

羊皮(書卷)是れ果して神聖なる靈泉にして、
开けが一飲能く永遠に渴をしづむ可き者なる乎、
蘇醒の功力たる、若し己が魂より混々と
湧き出るに非れば、汝これを得ざりつらん。

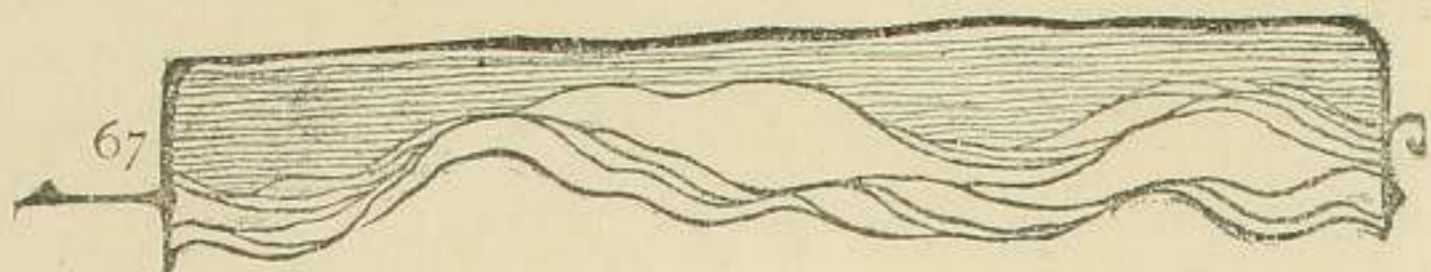
ワグネル

請ふ仁恕(ゆ)たまへ、然は云へ、一大満足と稱すべきは、
昔時の精神界に溯りて己が身を置きつ、

如何に先哲は吾人の前に考へしかと顧りみ、
又如何に吾人は遂に之を極て高く推擴めしかと見るなん
めり。

ファウスト

然り、星辰を摩するまでも高く推擴むる哉！
吾が友よ、既に往し昔の歲月は
七重(なな)の封印を有する書籍に彷彿たり。
汝が昔時の精神と稱する者は、
畢竟是れ諸子の精神のみ、
既往の歲月は纔かに反映して其中に存する也。
是故に开は屢々眞に慨歎すべき物のみ、



人は初めて一たび之を見るや逃げ走る。
 此は是れ一箇の腸桶のみ、重散容室のみ、
 善くとも英雄豪傑的時代演戯のみ。
 傀儡の口にも善く適ふが如き
 殊勝らしき格言のみなる哉！

ワグネル

然し乍ら此の世界——此の人類の心及び精神！
 此等の事こそは誰も少しは窺ひ知りたけれ。

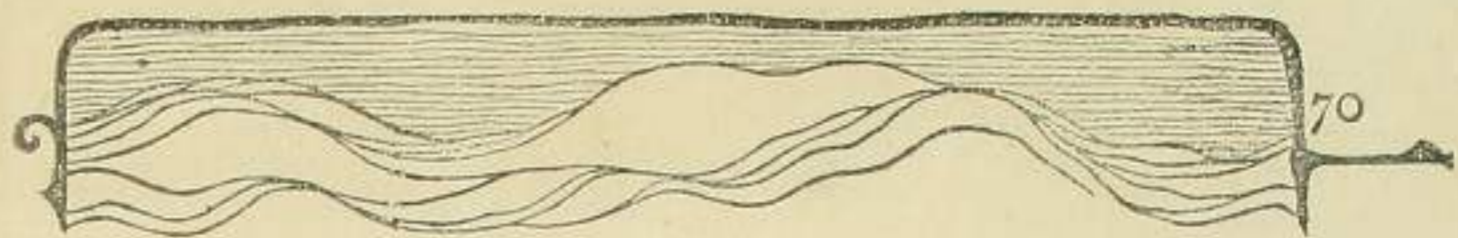
ファウスト

然り、世人が然か知ると稱する類の皮相のみ！

誰か斯の子を本當の名にて呼ぶを敢てせんや。
 夫の之を幾分か究め知れる僅少の人々、
 夫の甚だ愚かにも其滿腔の思を韜まらずして、
 己が所感、己が所見を群俗民衆に啓發せし者は、
 世人いつも之を十字架に懸け、又は焚き殺せり。——
 請ふ、友よ、今は夜深し、
 我々此度は話を茲に中絶ざる可らず。

ワグネル

生は尙悦んで長く興つゞけをりたらん、
 然せば斯く學者然として先生と語るを得てん。
 さり乍ら明日は復活祭の初なれば、



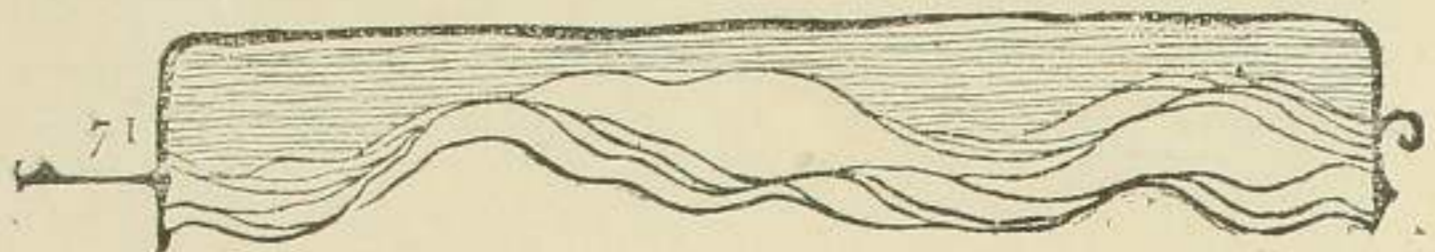
請ふ一二の質問を生に許したまへ。
 生は熱心を以て學問に身を委ね來りぬ、
 寔に生は識る多し然ども悉皆識り殫さんを願ふ耳。

(ワグネル下場)

ファウスト (獨語)

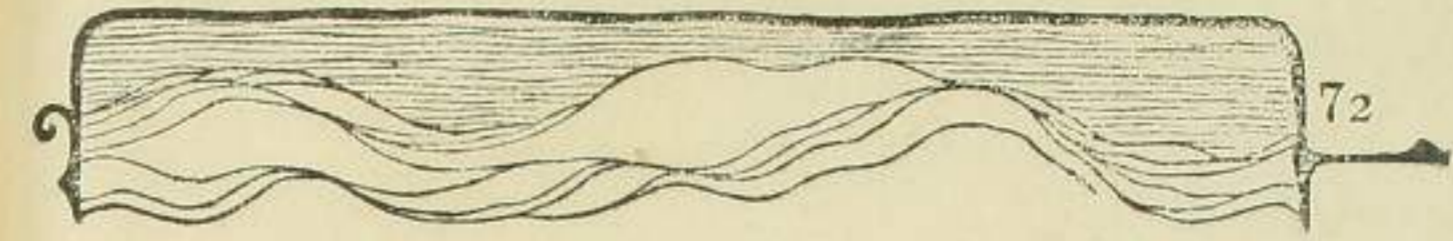
嗚呼斯る頭にこそ如何に獨り希望は消ぬぬ者なれ！
 渠や恆に乾燥無味なる些事長物に固着し、
 汲々たる手を以て珍寶を掘出さんとし、
 而して偶ま蚯蚓を看出すや、喜び躍る哉！

此の神靈の大環立裏に

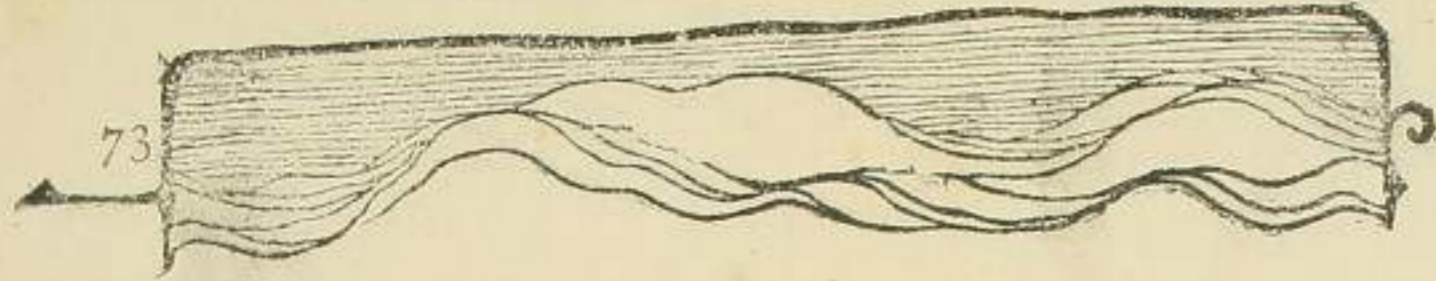


咄斯る人聲響くを敢てする乎。
 然は云へ、寔に我や此度は汝に感謝す、
 汝地の衆子(即)中にて最も癡駘なる者よ、
 汝は夫の吾が耳目を涙ぼさんとせる
 絶望の境界より我を救ひ出したたり。
 吁嗟該神靈餘りに傀偉巨大なりければ、
 我は正に侏儒と感ぜざるを得ざりき。

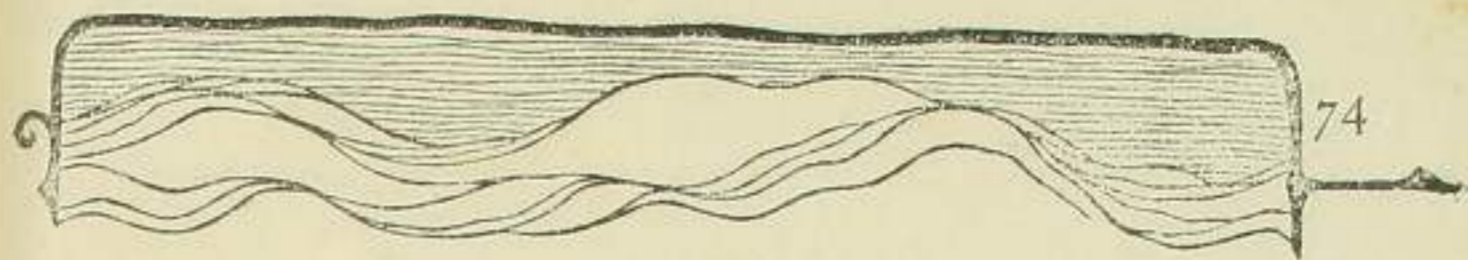
我や、天帝の眞影像なる者、
 既に永遠なる眞理の鏡に全く近しと思ひ、
 剩さへ天の光輝と明瑩とに浴し、
 且地人の俗臭を脱し了りぬ。



我やケルブよりも大なる者其自在なる力は
 既に天地の脈管を経て奔流す可く、
 縦横なる創造に神々の生活を味ひ樂む可く、
 極て多望に猛進せる者嗚呼我如何に罰せられたるぞよ。
 一遍の雷聲は忽ち我が勇氣を挫き了れる哉！
 「神靈よ、我は嗚呼がましくも敢て此身を汝と方たぐちべんとは爲せじ。」
 我若し汝を引き下だす力を有したりとも、
 汝を抑へ置く力は我に無し。
 彼かの汝が現前せる幸福なる瞬間に於てや、
 我は己が極めて小なるを極めて大なるを感ぜり。
 汝は情なくも我を驅りて、



復も不定なる人間の運命に還らしめき。
 誰か今より我を教ふ可き、我は何を去り何に就くべきか、
 我や彼かの刺衝に従ひて進むべき耶。
 嗚呼我々の行爲もまた我々の苦難と均しく、
 是れ我々が生活の進行を碍ぐる者なる哉。
 精神に感ずる最も殊勝なる物事にすらも、
 常に粗惡の外物は益ます附着し來り、
 吾人此の世界に於る普通の善を既に獲るや、
 更に勝まされる善をば譎詐と稱し迷想と號す。
 吾人に眞生命を與ふる勝妙殊絶なる感情は、
 地上の喧鬨裏に寒黙し了らんとす！



縦や少壯の空想嘗て大膽なる高飛を爲し、
希望満々として無窮の天地に膨脹したりとても、
福運また福運と光陰の灣に難破し了れる後、
今は早一箇の小室陋屋を以て足れりとす。

憂慮は齊しく心の奥底に巢ひ、

彼處に隠秘なる苦痛を働き出だし、

煩悶轉展して、快樂と安眠とを攪す也。

彼れ憂慮なる者は常に新き假面を以て自ら装ふ、

其現はるゝや家屋田園とし、妻子とし、

火とし、水とし、刃とし、毒藥として、交も來る。

汝は撃ちもせぬ打撃の前に戰慄す、

汝は絶て失はざらん物を惜み哀しむ。

我は神々に彷彿たらず、此事は極て深く感ぜらる。

我は蟲に彷彿たり、唯塵土を穿つ而已、

元來塵土を食ふて活くるが故に、

路行く人の脚は之を踏潰し且葬り了る也。

是は塵に非ずや、——此の高き壁が百段の書架もて我を繞り

圍める者、

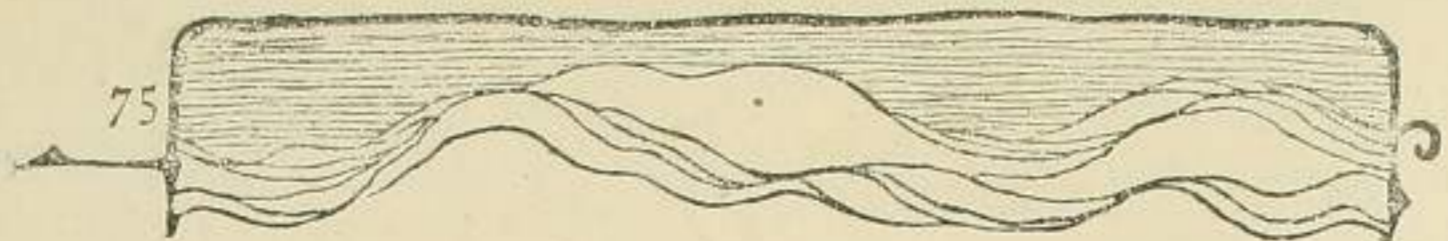
夫の千重の玩具もて此の蠹魚界に

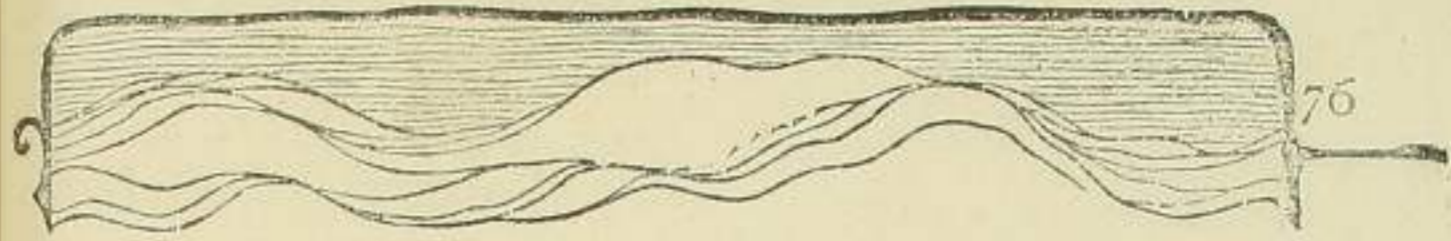
我を押籠たる舊衣は、是れ塵に非ずや、

此裏に我は其要する幫助を看出すべき耶、

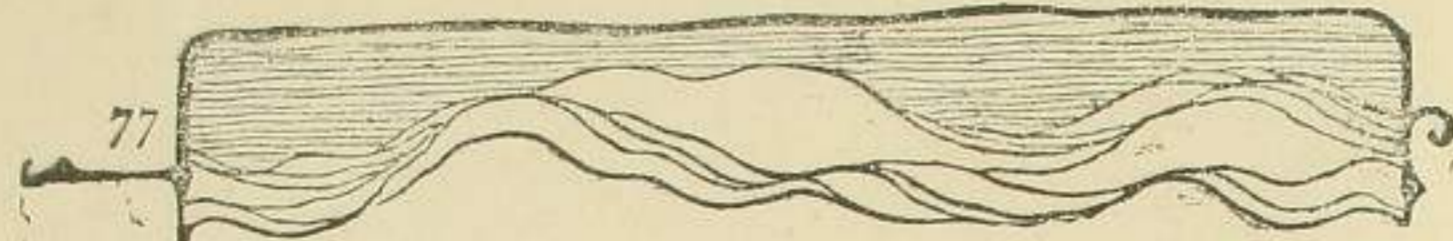
恐らく余は只百千の書籍中に斯く學ぶ可んか、——

人類は天下到る處求めて自ら苦しみ、





幸福者は此處彼處に僅か在る而已と。
 汝髑髏よ、其苦笑は何の意味ぞや。
 汝の腦も亦唯我が腦の如く嘗て惑ひつ、
 青天白日を求めて、遂に黄昏に陥いり、
 眞理を慕ひつゝも、悼しく彷徨ける歟。
 又汝等諸の機械よ、寔に汝等は
 車と齒輪と圓筒と環とを以て我を嘲る哉。
 我は戸の前に立てり、汝等は鍵たるべき者ぞ、
 汝等の鬚(鍵)は固より巧に造られたれど、
 何の門栓をも開ざるを奈何せんや。
 煌々たる白晝にも尙暗晦秘密にして、
 自然てふ女王は依然其面帕を撤せしめず、



彼女が汝の心に啓示せざらんとする事は、
 汝は槓杆にても螺旋にても彼女を強る能はじ。
 汝等古機械よ、我は汝等を用ひず、
 汝等は吾が父の用ひて以來茲に立てり。
 汝古き書卷よ、汝は燻ぼれり、
 此の朦朧たるランプが此書卓に煙れるや然か久しかり。
 我は吾が小資産を浪費したりたらんことは、
 小資産を重荷として茲に汗かくには遙か勝れり。
 汝が父祖より嗣ぎ獲たる物は、
 之を己が有と爲んために新たに贏け得よ。
 吾人の用ひざる物は却つて大なる重荷のみ。
 唯現在刻下の造り出せる物こそ現在刻下之を用ひ得べし



れ。

然し乍ら吾が目は如何なれば彼の處に擧り注ぐや。
彼處なる夫の小瓶は目の磁石なるか。

335

何が故に四邊は俄かに靄然と明るく成り來れる、
恰も夜間の森林内に月光の繞り照す如くなる耶。

我は汝を祝賀す、嗚呼汝稀有の玻璃壘よ、

汝を我は肅然として取り下し來る！

340

人間の智慧と學術を我は汝に於て崇む。

汝甘き麻睡液の精英なる者、

有ゆる大毒なる妙力の純粹なる者、

請ふ汝の主に汝の恩惠を垂れよ。

我汝を見るや、苦痛は減退す、

我汝を攫むや、煩悶は鎮靜し、

345

精神の潮流は段々と汐き來る哉。

漫々たる大洋に我が夢想は轉じ去れり、

鏡の如き海潮は吾が脚下にさらめき、

新らしき彼岸へ新らしき日は我を誘ふ也。

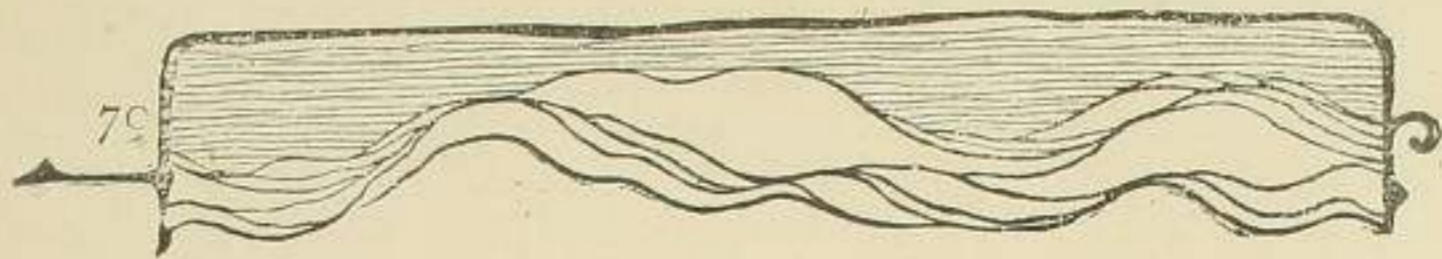
一輛の火輦茲に泛々として

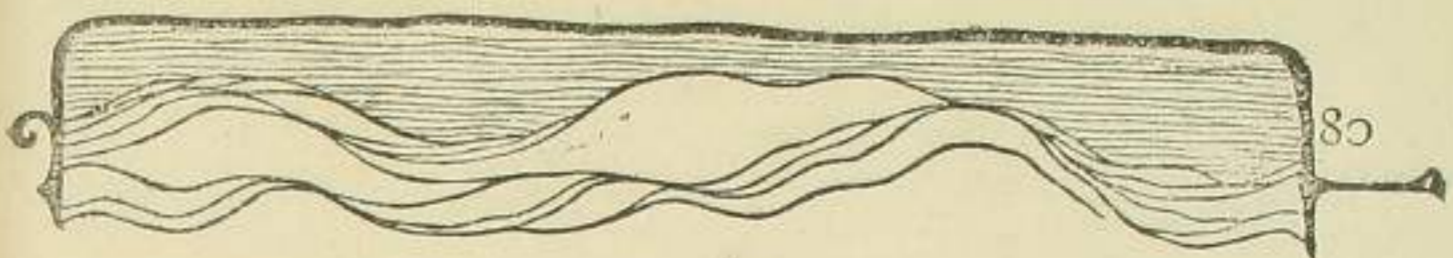
350

我に奔り臨む。我は自ら感ず、

純乎たる自在活動の新天地へと

新らしき道に忽ちエーテルを貫ぬき往かんと。





此の新生活、此の神妙なる大快樂！
只今までも蛆蟲たる我(原文)果して之を値するや。
然り、斷乎として汝の背を

斯世界の靄然たる太陽に向けよ。

其前を各人が偷足して通らんとする

夫の門を敢然として汝は打開けよ！

今こそは實行を以て左の眞理を明かにすべき時なれ、

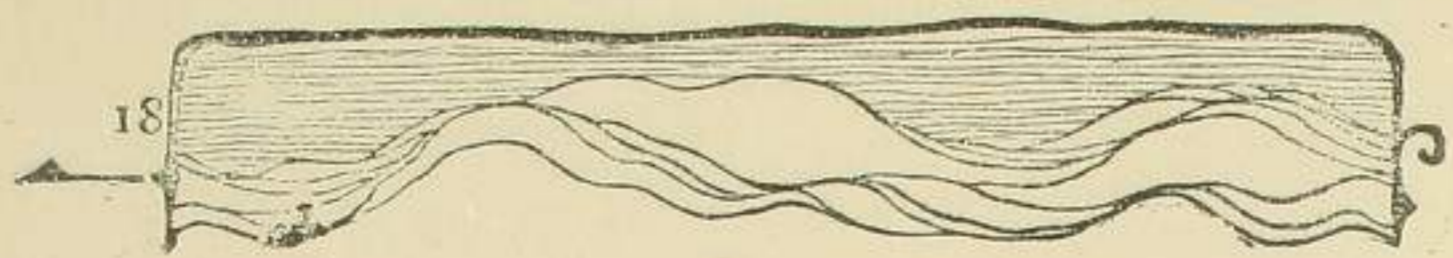
曰く、人の尊嚴は神の御稜威に負けずと、

想像なる者が妄感して自作の苦痛に悩むてふ

夫の暗黒なる深淵の前に汝は戰慄す可らず、

其狭き口の周圍に地獄の猛火焰々たる

夫の冥路に向ひてや勇往敢進す可し、



此の歩武をば毅然として果斷行決するを要す、
縦し寂滅界裏に飛込む危険あらばあれかし、

偕今汝清らかなる水晶の盃よ、下り來れ、

我が多年忘れて其中に棄おける

汝の古き箱より請ふ出で來れよ、

汝は父祖の酒宴に屢ば輝やけり、

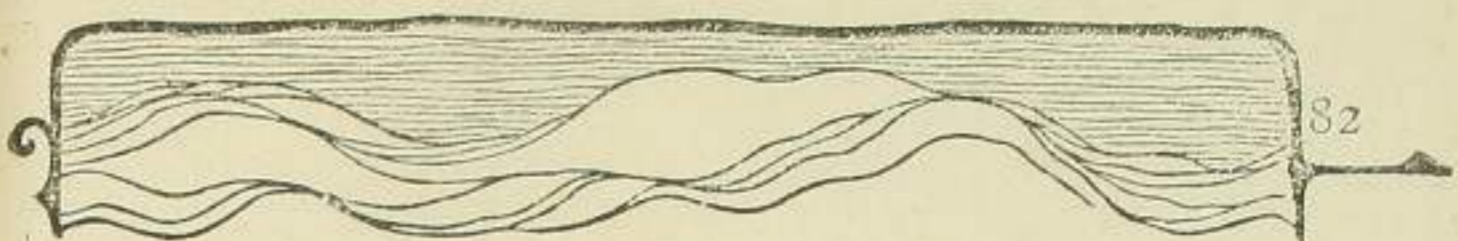
莊重眞面目なる賓客を幾度か樂ませり、

其時には皆獻酬に汝を彼此相廻しぬ、

开が上へ美術的に描き出せる幾多の繪模様は、

飲者これを韻文に解き明かしつ、

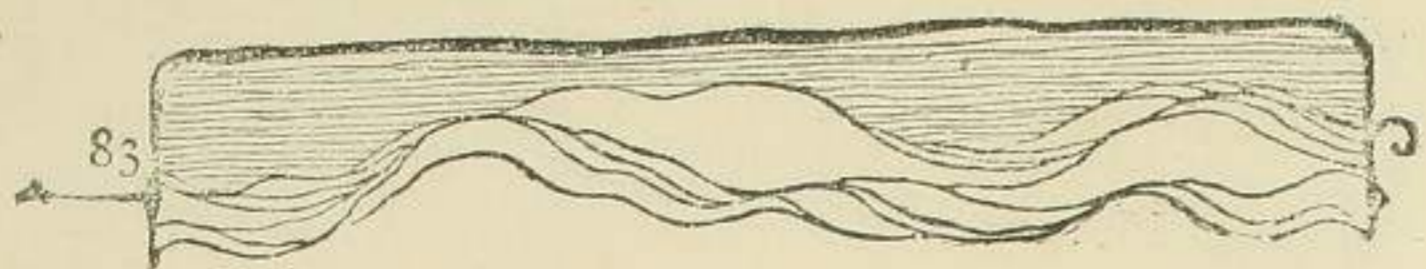
一息に其海を飲乾すを義務としぬるが、



我をして年少の時に於る幾夜の快樂を憶ひ起さしむる哉。
 今は我もはや汝を隣席の人へ回さじ、
 又我はもはや汝の美術に吾が才を顯はさじ。
 茲に一藥液あり、忽ち人をして麻醉せしむ、
 是は褐色の水を以て汝の海を満たす。
 之を我は敢て調製せり、之を我は甘じて選擇せり、
 此最後の一飲や、満腹の精神を以て、
 朝暾の將に出んとする者に祝賀の爵杯たれかし！

(彼れ杯を其口に當てんとす、—教會堂の鐘聲及び唱歌洋々として耳に滿ち來る)

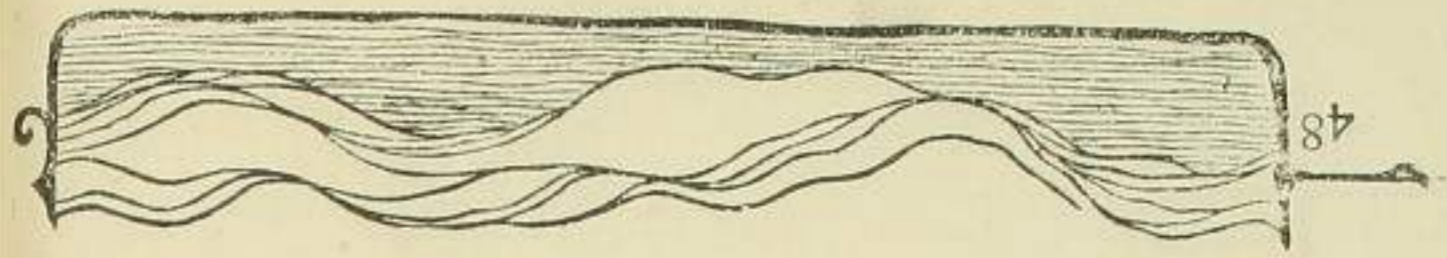
天使の合唱



基督は甦りたまへり！
 必死者(人)には歡喜あれよ、
 汝朽ち果つべき
 匍匐潜行する、遺傳の
 缺點に包圍せられたる者よ！

ファウスト

何たる嚙噬の歌聲、何たる深き海潮の音、
 此の杯を我が口より力強くも引き離すぞよ！
 汝其聲深く沈みたる鐘よ早くも既に
 復活祭の芽出度き初時を報ずるや。
 汝等唱歌班よ、汝等既に慰藉の歌を謠ふや、



此は是れ天使が最初歌ひて墳墓の暗夜を破り、
或る新約の保證を予へし者なりけらし！

信女の合唱

幾多の香料を以て
我々は彼を装へり、
我々信女どもは
彼を假殯す、
殯衣や捲布もて
我々は彼を裹あり。
嗚呼奇なる哉、來り看るに、
基督は最早此に在らず！

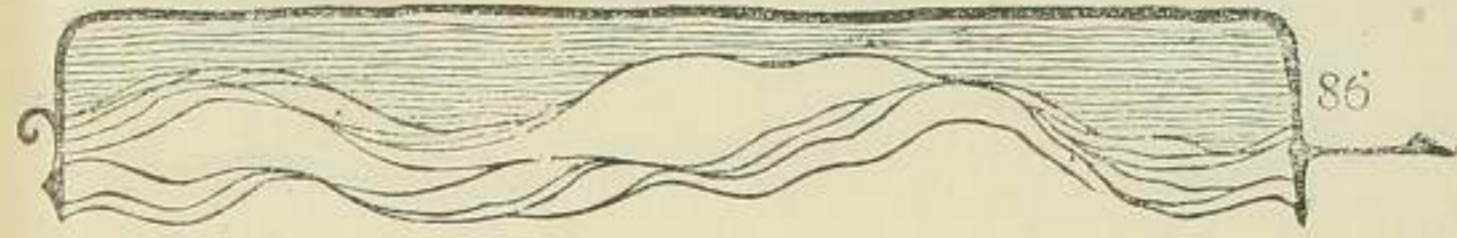


天使の合唱

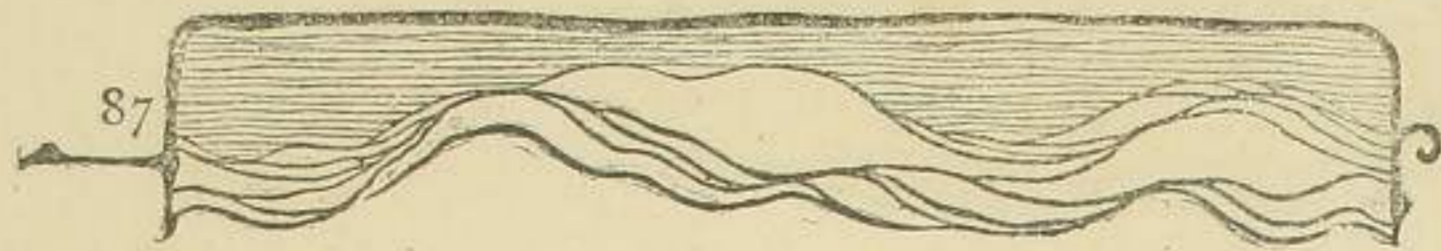
基督は甦りたまへり！
幸福なる哉彼れ大慈悲者、
彼は其身を苦しむる、
其心を健かに練る
大試煉を経たまへり。

ファウスト

如何なれば、汝等天上の妙音楽よ、
此に塵土に住ふ我を然か強く且快く誘ふぞや。
心氣柔婉なる人々の居る處にて寧ろ鳴れよ。



其使命をば我善く聞けど、信仰は我に缺けたり、
 奇蹟異能こそは寔に信仰の最寵兒なりけれ、
 此の有難き嘉音の由て鳴り出で來れる
 夫の高明界へは我敢て飛上らんとはせじ。
 然は云へ、此の音たる、幼稚より聽き慣れたれば、
 復も今や我を此世の生命裏へ呼もどさんとす、
 嘗て一度は天愛の神聖なる接吻
 安息日の静寂裏にて我に臨めり、
 當時鐘聲は妙義を帶て洋々と鳴わたり、
 天に禱る事は熱情熾んなる享樂なりき。
 一種の奇しく快き欽慕の情は
 我を驅て山林や原野を逍遙せしめぬ、

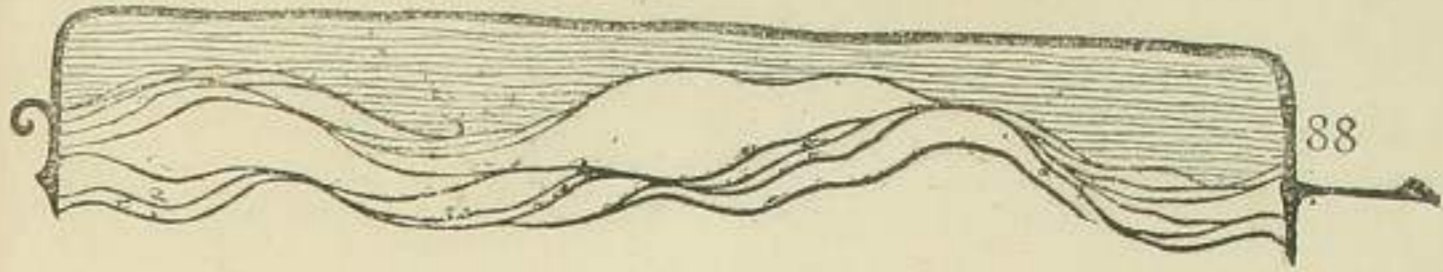


而して我は千行なる熱涙を浴びつ
 一新世界の現出し來るを覺わたりき。
 昔や此の唱歌は少壯の活潑なる遊戯を報じ、
 陽春に於る祝祭の自由不羈なる歡樂を來たしぬ。
 既往の回憶は今や小兒の感情を以て
 我を此の眞面目なる最後の着歩より引留む。
 汝等愉快なる天の讚美歌よ、鳴り行けよ！
 涙は滂沱たり、地は我を取もどせる哉！

弟子衆の合唱

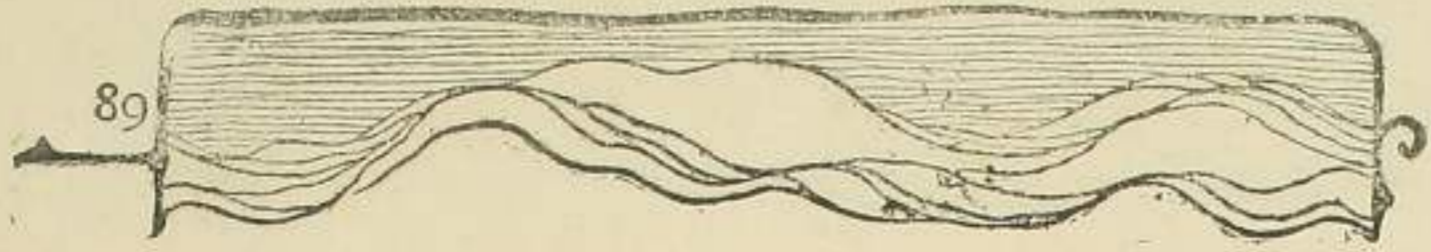
葬られ給へる者は

既に超脱し給へり、

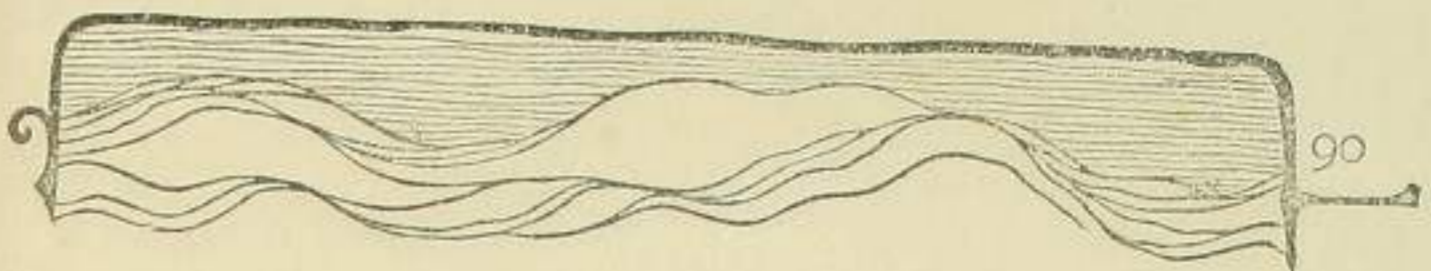


崇められて活き、
 高められて主たり、
 其神と成れるの福祉や
 萬物創造の樂に近し。
 吁嗟地の胸懷にて
 我等は茲に苦み居る。
 主は其弟子たる我等を
 此に焦れつ遣し給へり。
 嗚呼我等は嗟歎す、
 師よ、夫子の大幸運を。

天使の合唱



基督は甦りたまへり
 腐朽の懷裏よりして。
 汝も鏈鎖を打破りて
 欣然と出て來よ！
 盛んに彼を讚美しつと、
 愛徳を大いに顯はしつと、
 友愛を以て養なひつと、
 主を宣て旅しつと、
 快樂を約束しつと、
 師は汝に近し、
 主は尙此にいます！



第二場

城門前の光景

(各種の歩行者城門を出て来る)

職工數名

手前は何だつて彼方へ往んだ。

他の職工數名

己等は獵屋へ往くのだ。

甲の職工等

然し己等は水車場の方へ運動に出かけるよ。

一職工

己は河端館へ往くやうに御前達に勧めるよ。

乙の一職工

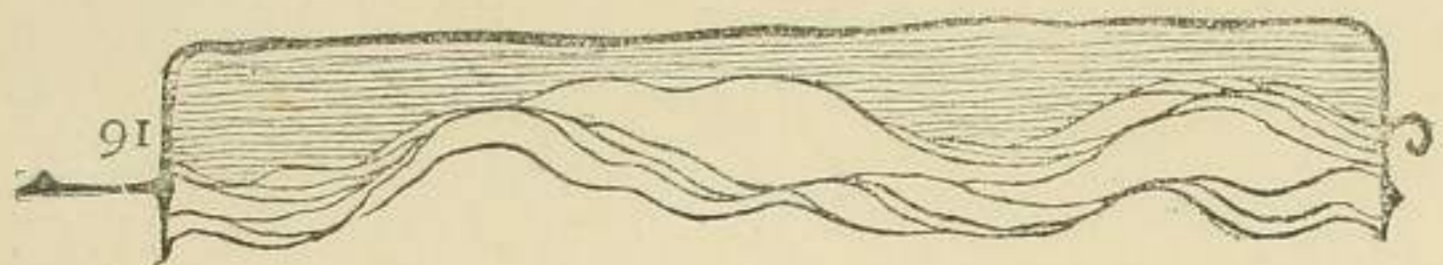
彼方へ往く途はチットも奇麗じや無いや。

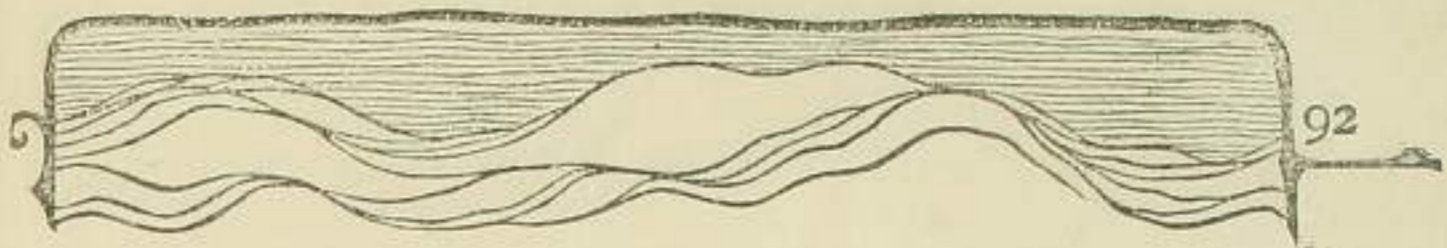
他の職工等

御前は如何する。

丙の一職工

己は諸他と一處に往くよ。





丁の一職工

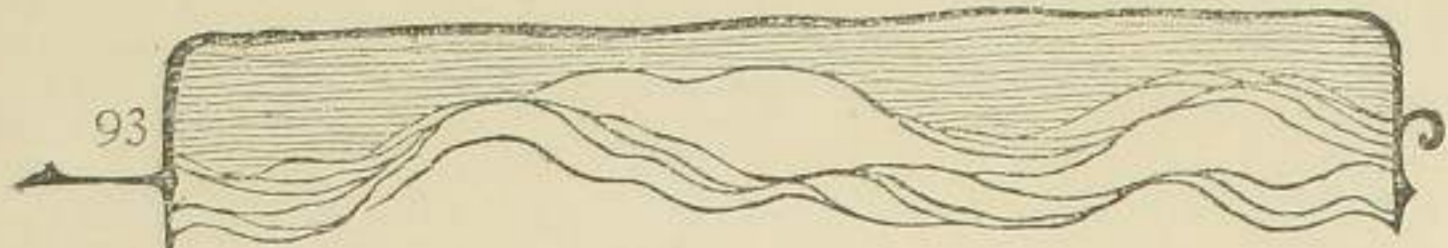
ブルグトルフへ来いよ、確に彼處では、
極奇麗な姉さんと、無類飛切のビールと
第一等の喧嘩にありつけるよ。

戊の一職工

此のナマイキ野郎貴様の體の皮は
今度で三度目に復打れたいとてウツツクか、
己様は眞平御免だ、彼處へ向ふとゾットする哇。

甲の下婢

否、否、私は町へ歸るわ。



乙の下婢

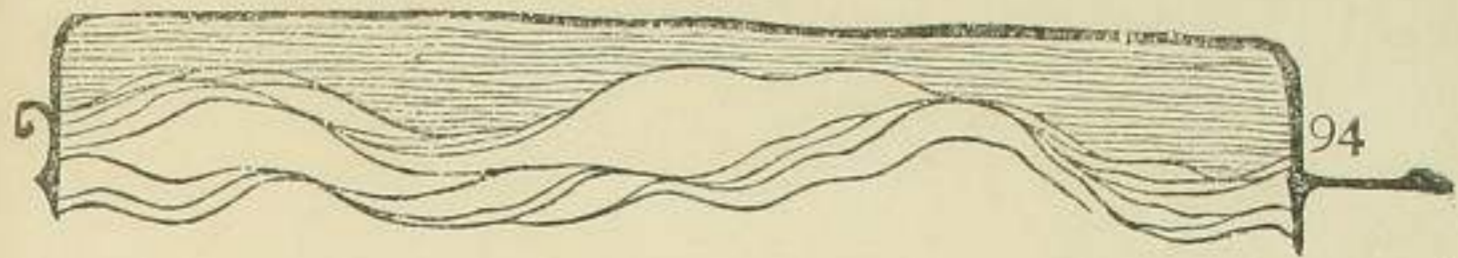
あの人はキット向ふの柳の樹の側に立てますよ

甲の下婢

そりや私には何の大幸福でも無いわ、
あの人はね前さんの方へ往くだらう、
只ね前さんとばかり芝生に踊るのさ、
お前さんの御樂みが私に何になるものかね！

乙の下婢

今日は彼の方はキット一人じや有りませんよ、
美髮さんが一處だと言ひましたよ。

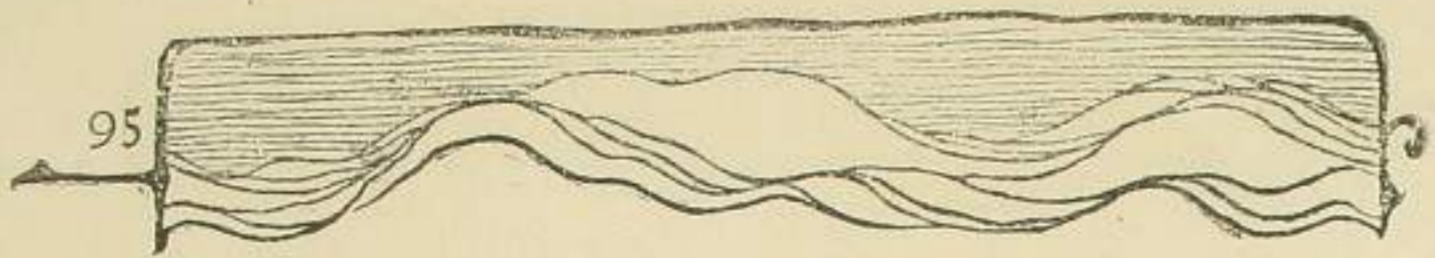


甲の學生

咄！何とあのオテンバ女どもは早く歩くだらう！
君來たまへ、我々はあれらに尾て往ねばならぬ。
強いビール、キツイ煙草、
美しい衣服着た女子、是は僕の大好物だ。

良家の娘

マア一寸と御覽なさい、彼の綺麗な書生さんをお！
本當に恥辱ですわ、
立派な御嬢さんたちと遊べるのに、
オサンドン娘の後を追かけるなんて！

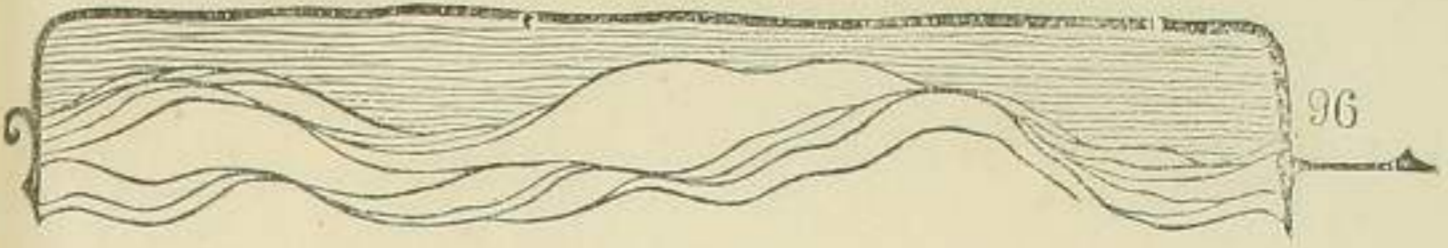


乙の學生(甲の學生に)

さう急ぎ給ふな、此にも後へ二人來たまよ、
そりや立派な服装してるぞ、
其一人は僕の近所の娘でね、
僕はあの女子が大へん好きさ。
彼等は羞しさうに歩いてゐるがね、
あれでも終にや我等を仲間に入れて呉るよ。

甲の學生

君！イケナイ、僕は窮屈が大嫌さ。
急ぎ給へ、肝心な野味を見失つてはならぬ。



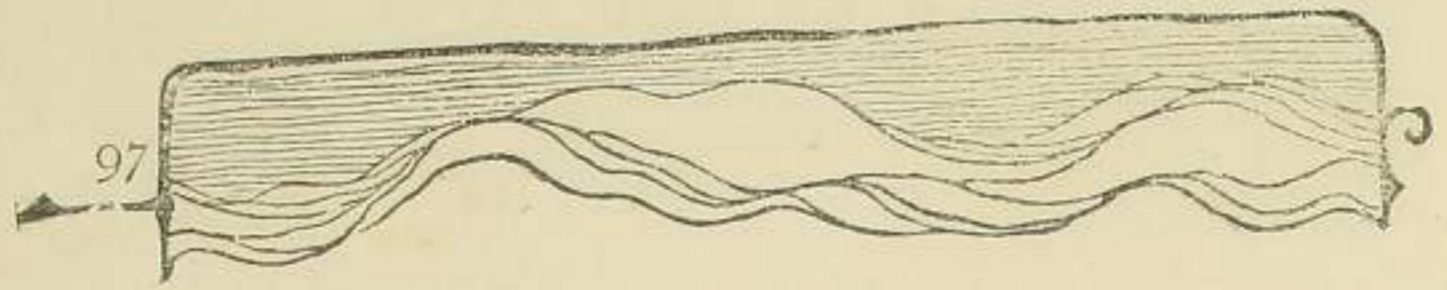
土曜日に掃箒を握る手は
日曜日に最も善く君を撫るよ。

市民

否な、彼は吾心に適はぬ、彼新市長は！
今彼は既に志を得たればとて、其傲慢は日に日に増長する
而已。

且又彼は本市の爲に何を致したる耶、
百事日に月に悪く成りゆくに非ずや、
我々は今までよりも多く服従せねばならぬ！
以前よりは幾倍の租税を納めさせらる！

乞食（歌ふて）



善い御紳士方や、美しい御婦人方、
着衣の華やかな顔臉の紅な檀那奥様、
萬望や此の乞食に目をつけられ、
わたくしの此の艱難を看て拯ひ給へや。
茲に私を徒勞に歌はせたもるなよ！
唯施こす人のみ其心喜び樂しむとかや。
萬の人が芽出度しと祝ふ日は、
是こそ我々乞食の收穫日なれ。

乙の市民

日曜日や祝祭日に於る面白き事としては、
戦争や戦争の風聞に若く者あらじ、

曰く、遠く下れる土耳其其邊にて
 「外國の」人民盛んに相戦ひをると、
 我々は窓に倚りて坐しつ、其杯を傾むけ、
 五彩燦爛たる遊船の河流を下るを眺め、
 然る後晩景には喜んで家路へ還りつ、
 太平を賀し、平和の時代を祝謝す。

515

丙の市民

兄弟よ、然り、余も亦然かあれかし。
 彼等「外國民」は縦肆に頭を割れよ、
 百事顛倒錯亂を極めよ、
 只我が家郷には舊態依然として、事なかれ。

510

老

婆

(良家の女子
 に向ひて)

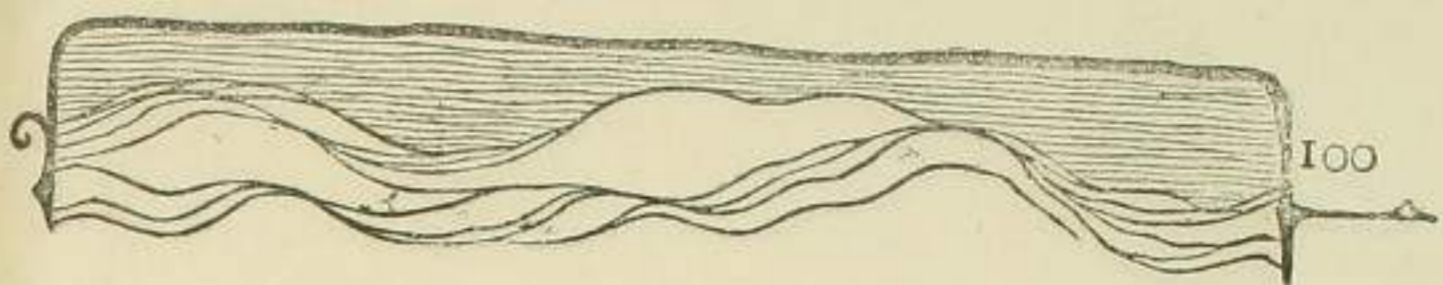
嗚呼、噫、何たる「好」服装ぞ、此の美しい若い「華顔」よ！
 誰か貴嬢に魂を奪はれぬ者あらうぞや、
 唯乞ふ然か傲り給ふな、宜し！黙らん、
 貴嬢が願ふ物は、老婆能く獲る方を知れり。

520

良家の女子

アガテ嬢、急がれよ、妾は慎みて、
 斯る妖婆と公然歩くを避くれど、
 實は聖アンデレ祭(十一月廿九日)の夜に顯然と、
 彼女は將來の戀人を妾に見せしめたりき。

525



他の一女子

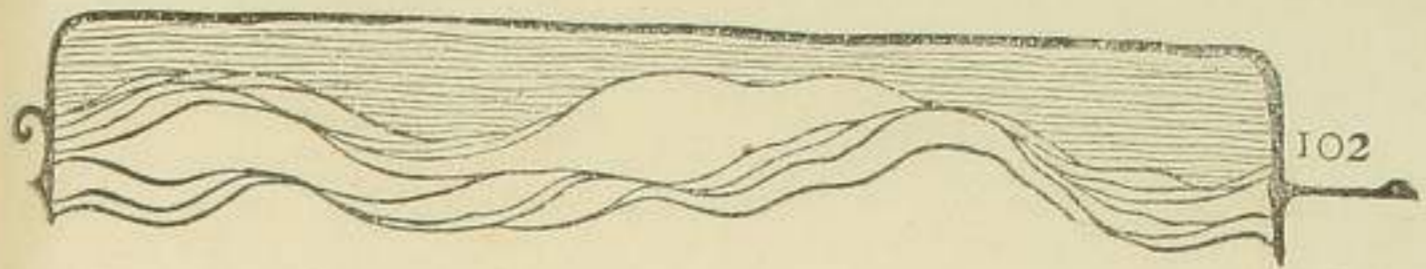
妾わらはにも彼女は之を水晶の占にて示せしが、
开そは軍人にして、許多の勇士と偕なりき。
妾わらはは身あた邊りを看みまはし、又また到いたる處ところ徧まく搜たせども、
一向其人わらはは妾わらはに來きり觸ふれぬぞ憂うれき。

軍人

高たかき牆か壁かと戊や樓ちもて
屹せき然ぜん聳そむ立たてる城しろ、
傲たかりて自みづから居ゐり、
他ひとを藐あ視まる女子むすめ、



是こゝは我われれ征よんで取とらん、
其そのの勞らうや極たぎめて大おほ膽たんに、
其その賞しょうや嗚な呼こ絶た大おほなる哉や！
喇叭らふの音ね鬨ことして
我われ等らを呼よび起たしむ、
或あるは快た樂らくの場ばへ走はり、
或あるは滅め亡つの地ちへ飛とぶ。
是こゝは烈れつ風ふう暴ぼう雨うぞよ！
是こゝは活かつ潑せつなる生せい活かつぞよ！
女むすめ子こも城しろ廓がくも
降くだらざる可べからず。
其その勞らうや極たぎめて大おほ膽たんに、



其賞や嗚呼盛なる哉！

兵士は頓て

滔々として進行す。

(ファウストとワグネル登場)

ファウスト

淑氣靄然たる春陽の生々する眼光に由て
河川及び溪流は既に氷雪の羈絆を脱せり、
平野には希望の好運緑鮮やかなる哉！
老たる冬は弱り衰るへつ、
荒き山嶽に退却し去りぬ。
彼處より彼は、逃去りながらも、只



薄弱なる霞の驟雨を

翠綠強増す野原に斑々と送る而已。

然は云へ、太陽は決して白き物を容さず、

到る處に働く者は建造發展の努力のみ、

萬物は生々の色彩を以て飛動す。

而して野に紅紫爛熳たる花を闕くや、

太陽は其代りに盛裝美服の男女を映出し來る。

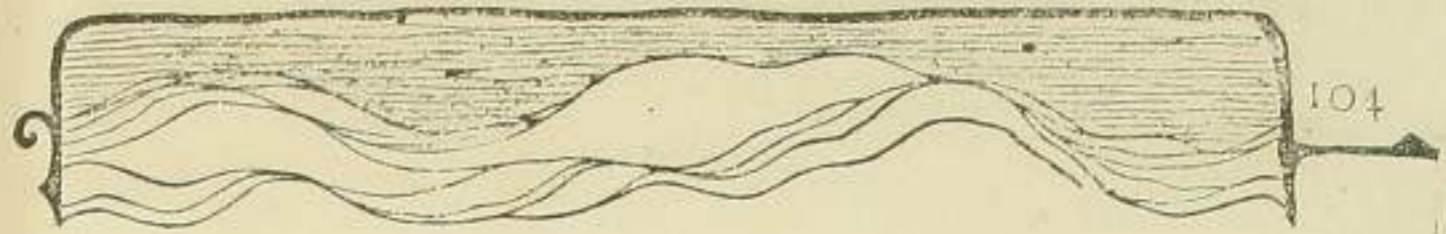
汝此高地より身を轉じて、

市府の方を顧りみよ。

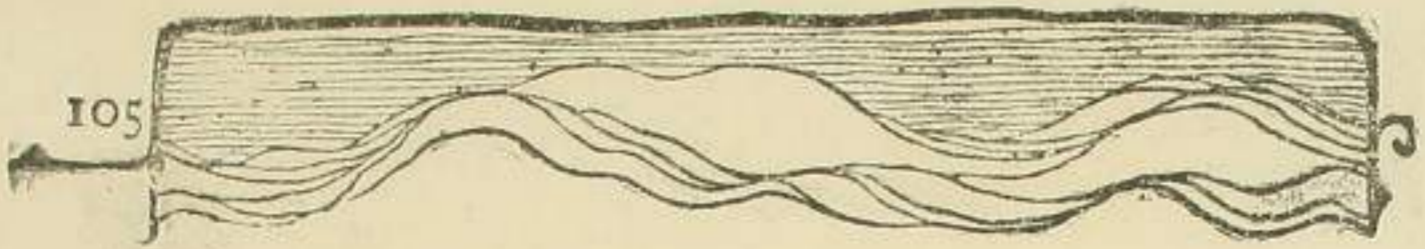
夫の低く暗き城門よりして

綺羅星の如く群衆は雜選し來る。

各々今日は欣然と喜んで日光に浴し、



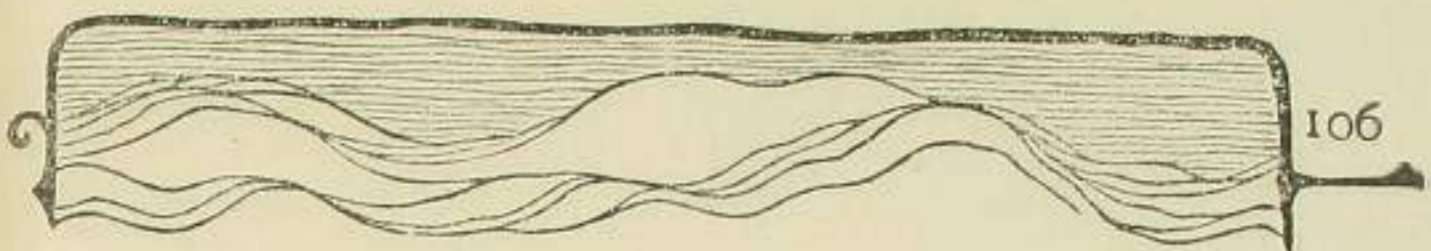
我が主の復活を祝ひ奉つる、
 而して彼等みづからも亦復活したるを感ず、
 低く陋しき家屋の濕氣臭き室内より、
 商業や工業の束縛裏より、
 破風や屋根の掩壓下より、
 狭くるしき陋街窮巷より、
 教會堂内の殊勝なる夜色裏より、
 皆悉く滔々として光明界に奔せ出し來る。
 看よ唯請ふ看よ如何に群衆は躍如として
 園圃に田野に遍く散點するぞよ！
 如何に河流は廣く長く一面に、
 斯くも夥だしき祝艇遊船を泛ぶるぞよ、



而して沈まんとするまで客を満載しつゝ、
 此の最後の舟は岸を離れ往く哉！
 彼方なる遠き山路よりすらも、
 五彩燦爛たる衣裳はきらめき來るよな。
 我は既に村人のさぞめく聲を聞く哇、
 此は人民の眞の天國ぞかし、
 大なるも小なるも皆満足して歡呼す、
 我も此にては人なり人たらんことを敢てす！

ワグネル

博士よ先生と散歩するは、
 名譽にして且利益なり、



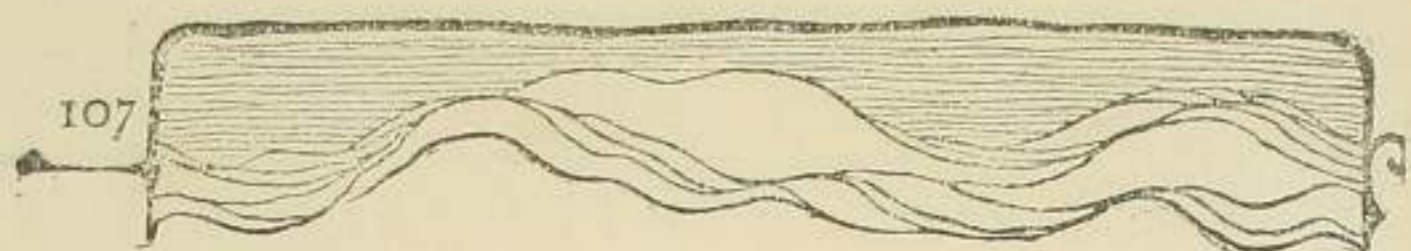
然り乍ら生單獨にては此へ箒を曳かじ、
 生は總て粗俗なる事の敵なれば也。
 此の胡弓、此叫呼、此玉突遊、
 是は全く生が嫌ふ喧囂にこそ、
 彼等は宛然惡魔に驅られたる者の如く狂しつ、
 之を歡樂と名け、之を歌謠と呼ぶなり。

605

農夫 (リンデン樹下に踊り且歌ふ)

牧羊兒は舞蹈に身を装ほふ、
 華やかなる胴衣、リボン、及び花冠もて、
 彼は嗚呼奇麗に服裝したる哉！
 リンデン樹の周圍に彼は早や歌ひ、

610

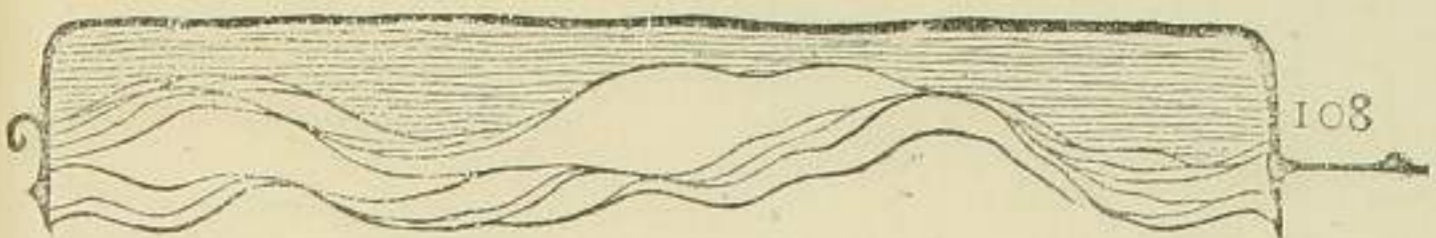


皆早や狂氣の如く踊り跳るぞよ。
 エツヘ！エツヘ！
 エツハイザ！ハイザ！ヘー！
 斯く胡弓は嗚り響く也、

615

彼は突如と列を脱け出づ、
 彼は一箇の女子を推し、
 臂もて之を衝けり、
 活潑なる娘は振り向きつ、
 云ふ、何たる癡呆ぞよ。
 エツヘ！エツヘ！
 エツハイザ！ハイザ！ヘー！

620



請ふ然か無禮なる勿れ。

頓て團列に飛びかへつ、

彼等は右に踊り、左に舞ひ、

すべての表衣はひらめけり。

皆赤くなり、皆熱くなり、

腕を腕に、喘ぎ休めり、

ユツへ！ユツへ！

ユツハイザ！ハイザ！へー！

臂を腰に、息ぞせわしき。

嗚呼然か狎々しくな爲そ！



幾多の人か其花嫁を

誑かしては棄去りしぞ！

とは云へ、忽ち復彼を傍へ賺し往きぬ。

リンデン樹蔭より忽ち遠く響く

ユツへ！ユツへ！

ユツハイザ！ハイザ！へー！

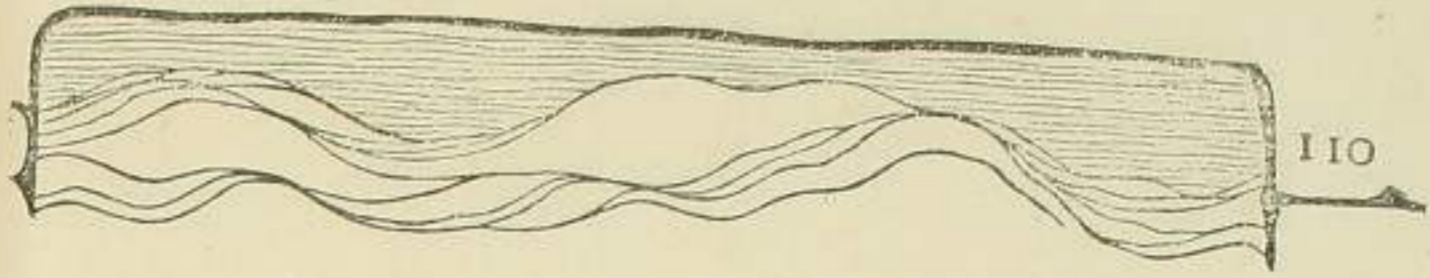
歡呼の聲や胡弓の音！

老農(フアウスト博士
に向ひて申す)

博士、こは先生忝けなし、

今日我々を藐視んぜずして、

此の人群の中に臨まれ、



大學者として茲に立ち給ふ。
 されば請ふ亦斯の極美なる酒杯を受たまへ、
 之に我々は新鮮なる酒を充たして候ふ。
 我は之を獻げて、公衆の前に祈る——
 曰く、是只先生の渴を鎮むる而已ならず、
 又开が保てる點滴の無央數は
 先生の寶壽に加へられよかし！

ファウスト

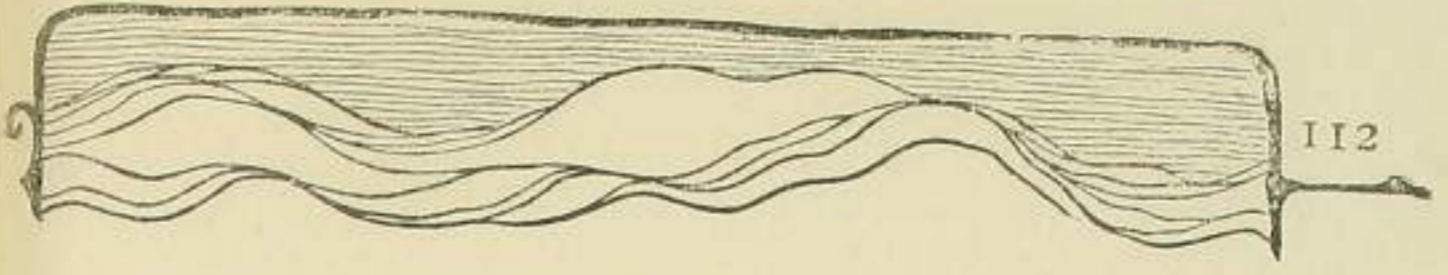
余は此の生氣勃々たる飲料を受け、
 諸君一同に健康と感謝とを報い呈す。

(人民團くなりて集り來る)

老農

眞に是は甚だ善き爲合なる哉、
 先生が此の喜ばしき日に出て來たまふとは！
 先生には嘗て惡疫の日に
 我等を深く慇れみ給へり！
 寔に茲には現に許多の人活きて居り、
 是等をば御父君嘗て遂に、——
 該傳染病の蔓延を防ぎし時、——
 熱病の猖獗裏より拉へ出し給へり。
 彼時には先生も、まだ弱冠の身を以て、
 有ゆる病家に進み入り給へり。





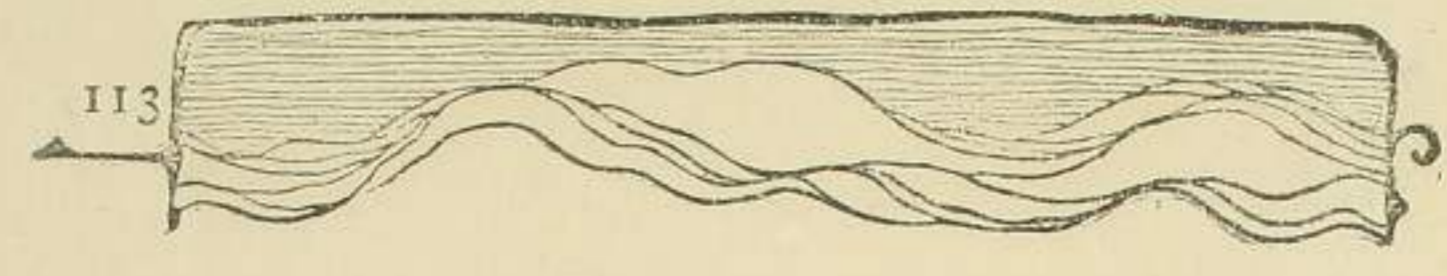
實に衆多の死骸は昇いだされき、
 先生には然し乍ら健かにて出でられ、
 幾多の苦しき試煉に堪へられたり、
 此救助者を天上なる救助者は助け給へる也。

一同

此の百煉の士に願くは健康あれ！
 猶幾久しく世を助け得させ給へ！

ファウスト

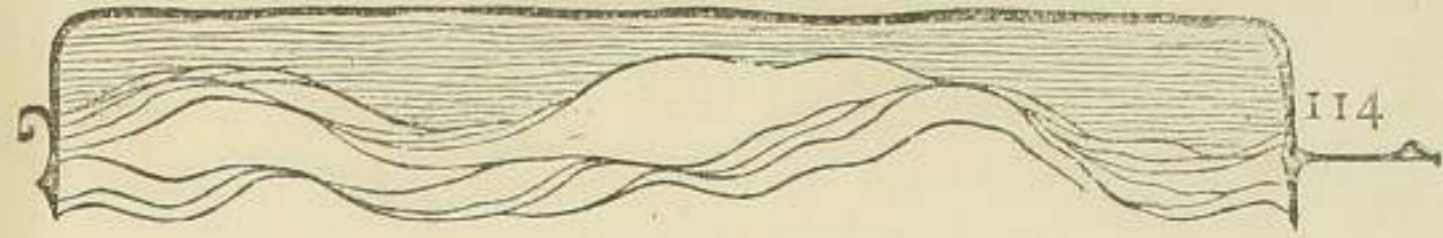
天に在す者の大御前に腰をかゝめよ、
 彼こそは救助ることを教へ、又能く救助を送り給ふなれ。



(斯てファウストはワグネルと偕に進み去る)

ワグネル

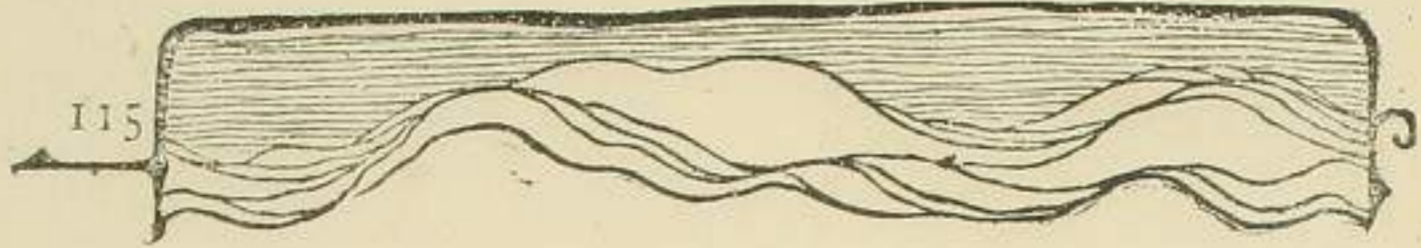
嗚呼偉丈夫よ、此群衆の尊崇を受けて、
 先生には如何なる大満足をか感ぜられたらん！
 嗚呼幸なる哉其天稟の才能裏より
 斯る鴻益を世に及ぼし得る者は！
 父は其子に先生を指ざし示し、
 各人は問ひ、奔り進み、近よれり、
 胡弓は止み、舞蹈は停めらる、何等の盛！
 先生行くや、彼等は兩列に立ち、
 帽子は高く天に飛ぶ、



今少しにて殆んど膝を屈めたらんこと、
恰も基督の遺肉たる聖麵包の通るが如けん。

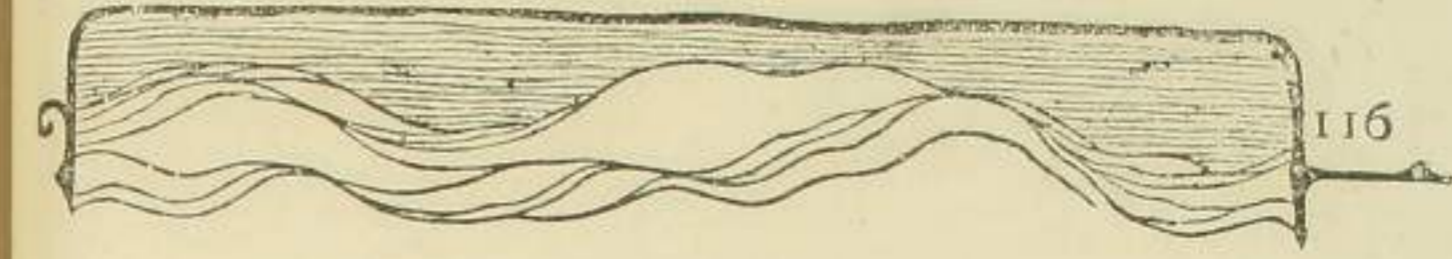
ファウスト

猶只數歩かなたなる石まで登れよ！
其處に我等は漫行の疲勞を休めん。
嘗て茲に我は屢ば獨り沈思して坐し、
祈禱と斷食を以て此身を苦しめたり。
希望には富み、信仰には堅くして、
涕淚と歎息と合掌とを以て、
只管該疫癘の撲滅を
天帝より強ひ求めんと計りぬ。



〔然るに〕今や此群衆の稱讃は嘲弄の如く聞ゆ。
嗚呼汝吾が心の奥底を讀み得んこともがな！
斯る名聲や、是れ父も子も

之を値する如何に少なき者なりしかと！
吾が父は陰鬱なる名譽家にてあり、
自然と开が神聖なる領分とにつきてや、
眞面目ながらも又自己流に、
奇々妙々なる勞苦もて考索し、
老練者流と相伴なひて、
黒く燻ぼれる練金窟に閉こもりつ、
數しらぬ處方を按じて、
種々の兩々相反尅する藥品を調和したり、



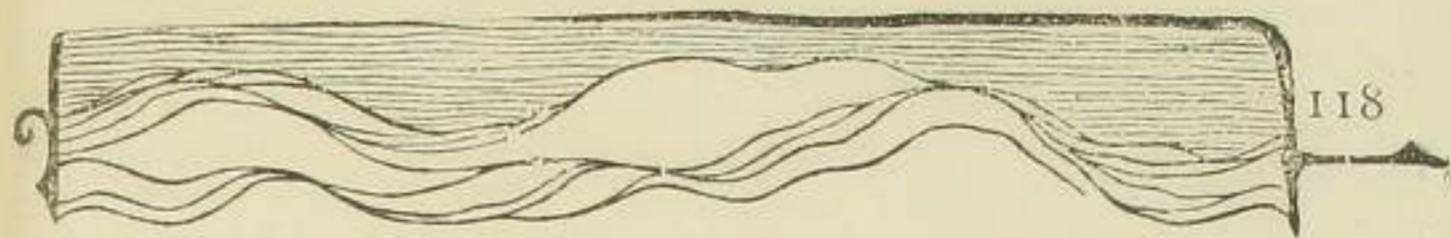
茲に丹砂てふ大膽なる求婚者は、
 微温湯浴裏に安質母尼と婚媾し、
 然る後夫妻両者は炎々たる武火もて責められつ、
 一の新婚室より他の新婚室へと逃込む也。
 是に於てか燦爛たる美色を帯びて、
 妙齡の女王は水晶宮裏に顯はれ出づ、
 是こそ萬能の妙薬なれ、患者は頓て死す、
 而して何人も『誰が愈しや』と問ふ者あらず、
 斯く我等は地獄然たる調劑を以て、
 此等山岡の中、此等溪谷の間に
 疫癘よりも尙遙に悪く暴まはりぬ。
 我は自ら毒薬を幾千の人に予へたる者とす、

彼等は亡び失せぬ、我は却て生存へつ、
 厚顔なる殺人者が譽らるゝを聞くとは、噫！

ワグネル

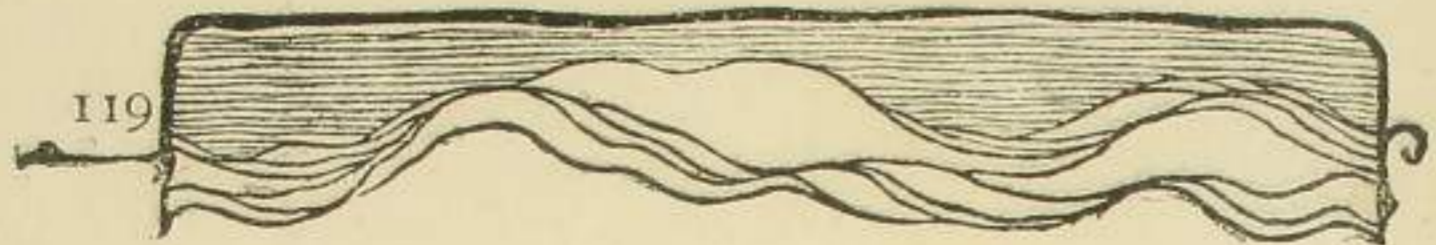
如何なれば先生は斯く自ら悶へ給ふや、
 勇敢なる士は十分其職を盡さん而已、
 即ち其己れに傳はれる藝術を磨き、
 慎重に小心翼々と之を施すべきに非ずや、
 先生若し弱冠にして父君を崇め給はど、
 亦悦んで父君より學び授かれなん、
 先生もし壯年にして其學術を舗張し給はど、
 其御子は亦一層高き目標に達せん耳。



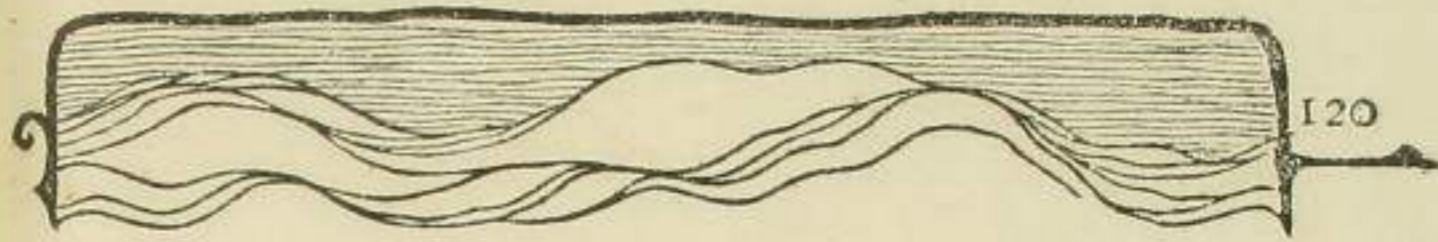


ファウスト

嗚呼幸ひなる哉謬妄の此の深海より
 超脱せんことを尙も望み得る者は！
 人は其知らざる物を用ひざる可らず、
 而して其知る物をば却つて之を用ひず。
 然は云へ、我等は芽出度き時の福恵を
 斯の如き暗淡たる思想もて傷ふ可らず。
 觀望せよ、如何に太陽の光輝中に
 翠綠圍める民家茅屋はきらめくぞよ！
 夕陽春つき且退くや、其日は暮る、
 頓て日輪は奔り去りて、彼方に新き生命を布く。



嗚呼永く長遠へに汝を追ひゆく可く、
 羽翼の我を地より高く擧ぐる者もがな！
 然らば、我は永久の夕照裏に於て
 靜寂なる世界を吾が脚下に看ん、
 有ゆる峰巒は燃たち、各箇の谷は靜まり、
 白銀の小川は黄金の河に流れ入らん。
 然らば荒き山も、其諸の深き壑も、
 神の如き我が步趨を遮ぎらじ、
 既に大海は温かに小波たつ幾多の灣をもて、
 吾が恍惚たる目の前に漫々たる哉！
 遂に流石の女神(神目)も沈み去るとぞ見ゆる、
 されど新しき刺激や醒め來りつ、



我は彼女(神)の窮なき光を飲まんとして奔り前(まへ)に、
看(み)よ前(まへ)には晝(ひる)煌々(くわんくわん)後(ご)には夜(よる)冥々(めいめい)、
上(うへ)には天(てん)蒼々(そうそう)下(した)には波(なみ)浪(なみ)滔々(たうたう)たる哉(や)！

「何(なに)たる」一大(いち)大(だい)美(び)夢(む)ぞ、而(しか)も早(はや)や既(すで)に彼女(神)の光(ひかり)榮(さか)は消(き)ぬ失(う)す、

嗚呼(ああ)哀(あは)い哉(や)、精(せい)神(しん)の翼(つばさ)はあれども、

肉(にく)體(たい)の翼(つばさ)は然(しか)か容(ゆる)易(やす)くは之(これ)に伴(とも)なはぬぞよ！

然(しか)はあれど、各(おの)人(ひと)生(な)れつ(つ)ける性(せい)とて、

物(もの)に感(かん)ずるや其(その)心(こころ)高(たか)く遠(とほ)く飛(と)ぶぞ嬉(うれ)しき！

例(たと)へば、我(われ)等(ら)の頭(あたま)上(うへ)に、空(そら)蒼(そう)に没(もく)して、

告(つ)天子(てん)子(し)その流(なが)麗(れい)なる歌(うた)をうたふ時(とき)には、――

松(まつ)の緑(ろく)おほへる嵯(さ)峨(が)たる山(やま)巔(たかね)に

巨(こ)鷲(じゆ)羽(つばさ)翼(つばさ)を伸(の)びて翱(あ)翔(せう)る時(とき)には、――

又(また)野(の)上(うへ)に湖(うみ)水(みづ)の上(うへ)に、家(いへ)路(ぢ)さして

鶴(つる)の飛(と)ゆく時(とき)には、「人(ひと)心(こころ)も亦(また)高(たか)飛(と)する者(もの)ぞかし」

ワグネル

生(なま)も自(みづか)ら屢(しばしば)ば奇(あ)妙(めう)なる考(こう)を起(おこ)せる時(とき)あれども、

「先(ま)生(せい)の如(ごと)き」斯(か)る刺(さ)激(げき)は未(な)だ感(かん)ぜず、

人(ひと)は森(もり)林(りん)や野(の)山(やま)には忽(たち)ち看(み)飽(あ)く者(もの)、

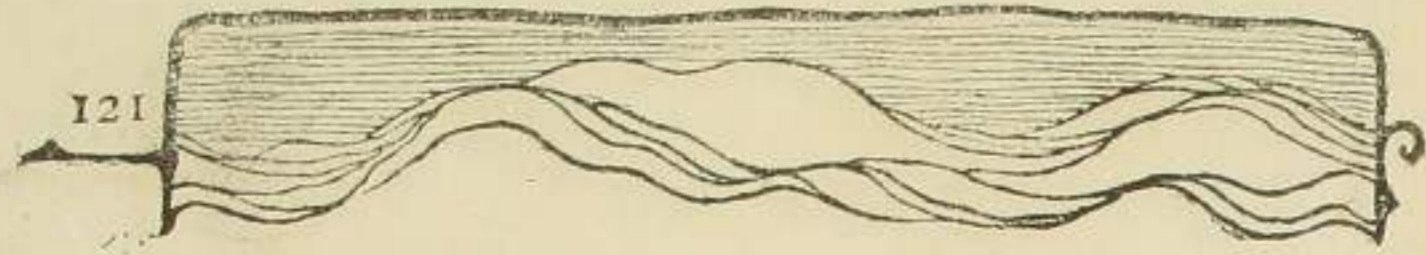
また生(なま)は鳥(とり)の翼(つばさ)をも絶(た)て羨(うらや)まじ、

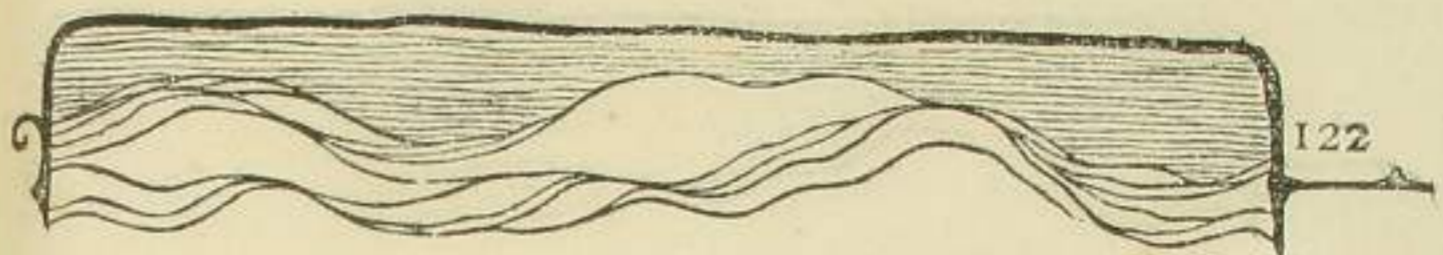
精(せい)神(しん)の快(た)樂(らく)は如(ごと)くに之(これ)と撰(せん)を異(こと)にし、

書(か)卷(まき)より書(か)卷(まき)紙(し)葉(は)より紙(し)葉(は)と我(われ)等(ら)を載(の)せ行(い)くぞよ！

是(こゝ)に於(お)て冬(ふゆ)の夜(よ)は快(た)く且(かつ)美(うつく)しはしく成(な)り、

一(い)種(しゆ)の幸(しあ)福(ふく)なる生(なま)命(めい)は靄(もや)然(ぜん)として四(よ)肢(し)五(ご)體(たい)を温(ぬ)たむ、





而して、嗚呼盛んなる哉、或る非凡の羊皮(書卷)を繙くや、
全天ことごとく我々(原文)の上に來り臨む也。

ファウスト

汝は只此一つの刺激を覺知する而已、

善し、今一つの他の刺激をば斷じて味はふ勿れ！

二箇の魂(たましひ)、吾が胸の中に宿れり、

而して其一は他の一と乖離せんと欲す、

甲は熾んなる愛欲裏に彷徨し、

戀々たる諸機關を以て世界に執着す、

乙は此世の塵霧上へ努めて超出し、

高遠なる祖空へ昇り達せんと欲す。



嗚呼若し空中に神靈ありて、

天地の間に縱横上下しつゝあらば、

願くは其黄金の大氣中より飛び下りて、

我を赫奕たる新生活裏へ導けよ！

然り、若し我に纔か一領の神通衣ありて、

我を遠き邦國へ泛べゆくべくんば、

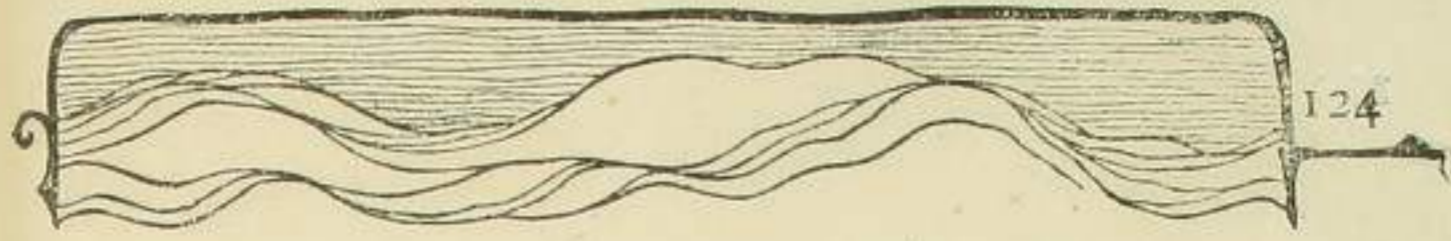
世の最も貴重なる衣服に易へても、

否な、袞龍の王衣に易へても我は之を賣らじ！

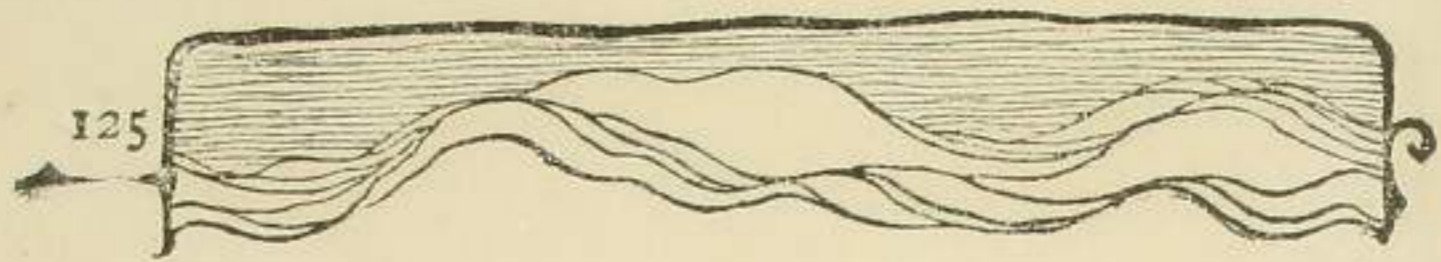
ワグネル

請ふ夫の善く知られたる徒衆(悪魔)を呼たまふな、

彼等は空中に群がりて徧く廣がり、



百千重の災難を人類の爲めに、
 地の四極より醸し出しつゝあり、
 北よりや其鋭き靈牙を咬ならしつ、
 矢鏃の如き舌を以て汝を襲ふ、
 東よりや百物を燥かして進み出て、
 颯々として汝の肺に逼迫し來る、
 南もし沙漠上より之を送らんには、
 火又火を續々と汝の頭額に積ん耳、
 斯く西も其雲霓を遣すや、始は善く物を活せども、
 「忽焉淋雨となりて」汝をも田野をも溺らさん、
 彼等は害惡に敏ければ、喜んで「命を」聽く、
 皆喜んで我等を欺かんとすれば、喜んで従がふ也。

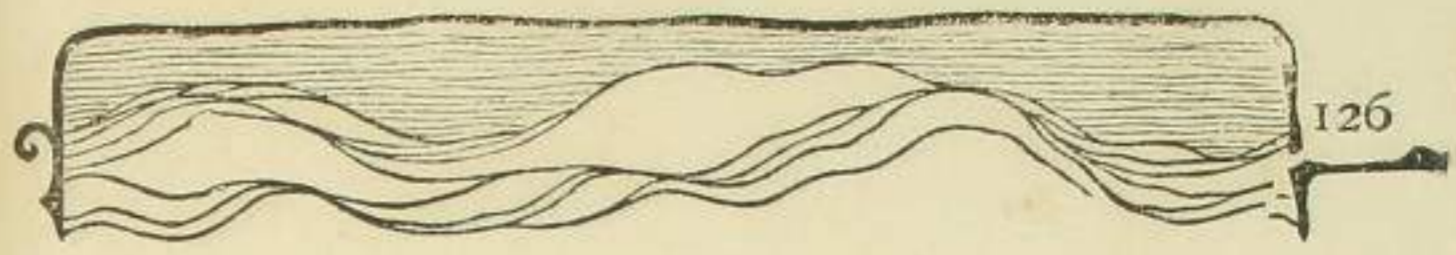


彼等は天より遣はされたる如く己れを處し、
 其進んで人を誑かさんとするや、天使の如く物言ふ、
 但し我等は歸らん！世界は既に薄暗し、
 空氣は冷かに、霧は降る！
 晩に及んで人は始めて家を貴とぶ——
 如何なれば先生は然か立ち驚きて眺め給ふや、
 何物此の黄昏裏に先生を執へ得たる乎。

ファウスト

汝は夫の黒き犬が麥圃を経て進み來るを見るか。

ワグネル



夙つとに久しく觀たるが、毫も重要なる者ありとは生なまに見えず。

ファウスト

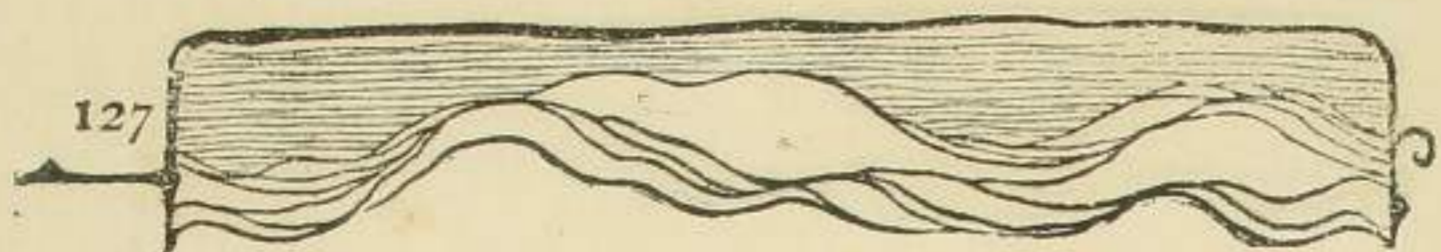
善く之を眺めよ！汝は夫の獸を何と見做すや。

ワグネル

一箇の龍犬りゆうけんと見做す、彼は己おのが流義りゅうぎに、其見失へる飼主かひぬしの踪跡しゆくせきを嗅ぎ廻る耳みみ。

ファウスト

汝は如何に彼が大きなる螺旋ねぢ圈状わがたに我等の周圍まわりを段々と近く巡り來るかを認かむるや。



我若し見誤らずば、一塊の火渦ひうずありて、彼が進み來る路の後に曳ひくぞよ。

ワグネル

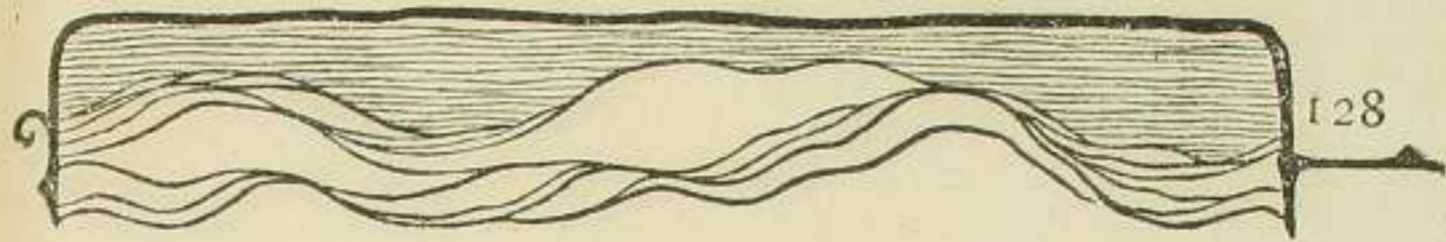
生は一頭の黒龍犬くろりゆうけんの外は何も見ず、是は恐らく先生せんせいに在て御目ごめの迷なるらん。

ファウスト

彼は魔術もて我等の脚のまはりに輕き畏おそれを後日の羈絆かいはんにとて繞めぐらす者と我には見ゆ。

ワグネル

生は彼が狐疑こぎ恐懼おそわれらを跳はまはるを見る、



蓋彼おのれの飼主ならで、二箇の新生面を看たれば也。

ファウスト

圓圈は狭まりつ、彼は早近し。

ワグネル

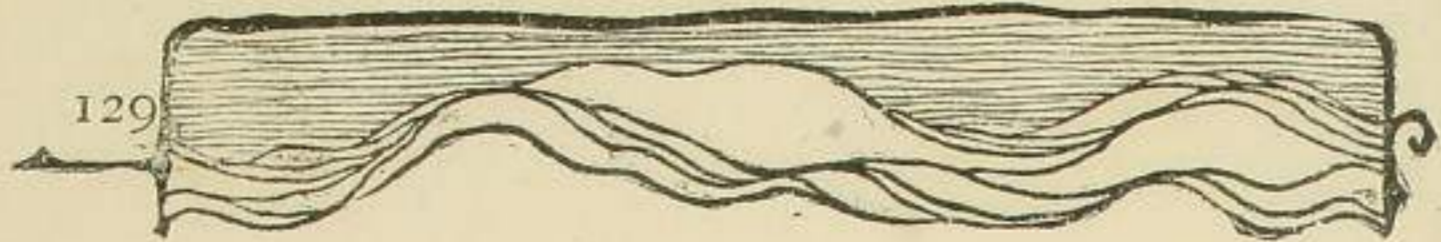
先生は犬を看たまふ而已、妖怪は茲に無し、

彼は吠ゆ、疑がふ、其腹もて匍匐す、

彼は尾をふる、——皆犬の習慣のみ。

ファウスト (犬)

汝も我等に伴なへ、——此に來れよ！



こは眞に龍犬、然たる滑稽の獸なる哉、

先生立どまり給へば、彼は待ちをる、

先生之に言ひたまへば、彼は先生に媚ぶ、

何物か失ひ給へ、然らば彼は开を持來らん、

先生の筈を取りに水にすらも跳り入らん、

ファウスト

汝の言實に當れり、我は毫も神靈の痕跡を見ず、

〔其爲す所は〕皆悉く訓練の結果なる而已。

ワグネル

犬や、其善く教育せられたる時には、



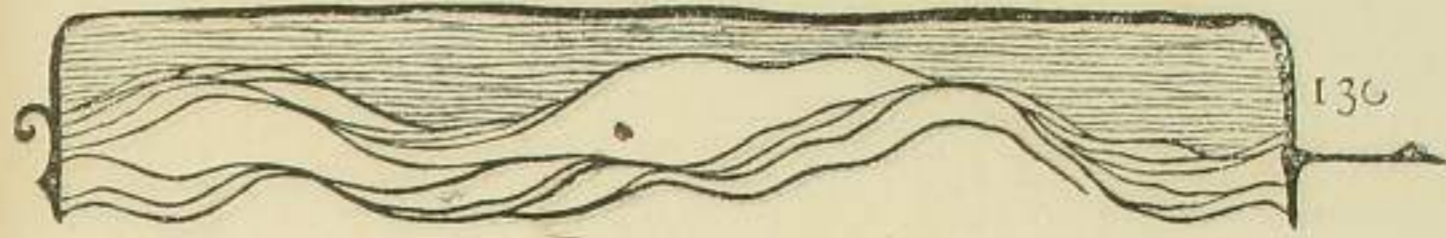
第三場

書齋の光景

(フアウスト例の形犬をつれて入り来る)

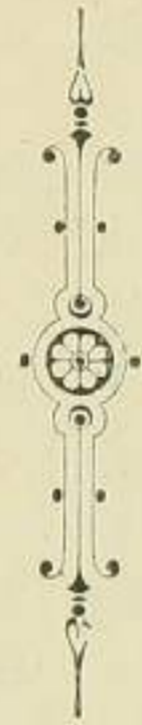
フアウスト

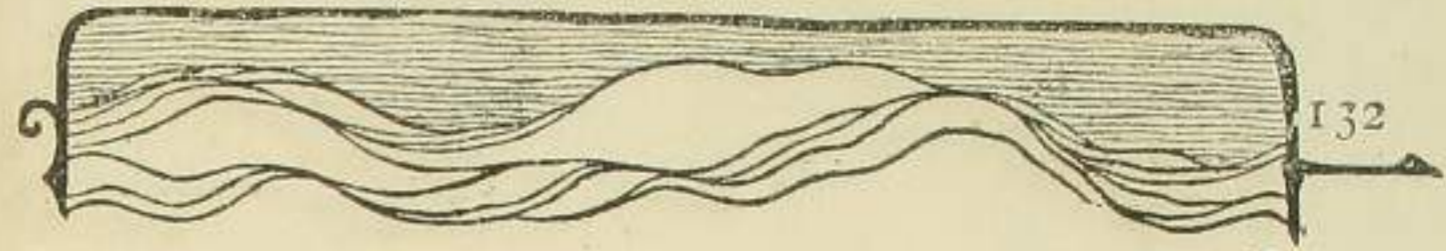
我は野山や草原を後に遺し來れるに、
早や深き暗夜は之を裏み畢んぬ、
茲に意味深き神聖なる威肅を懐いて
吾人の良き靈魂は目覺め來る哉。
今や有ゆる狂躁なる行爲とともに、



哲人すらも之を愛するを辭せず。
然り彼や眞に善く先生の愛顧を値す、
彼こそは群書生の絶好學生なるらめ、

(フアウストとソケネル城門に入り去る)

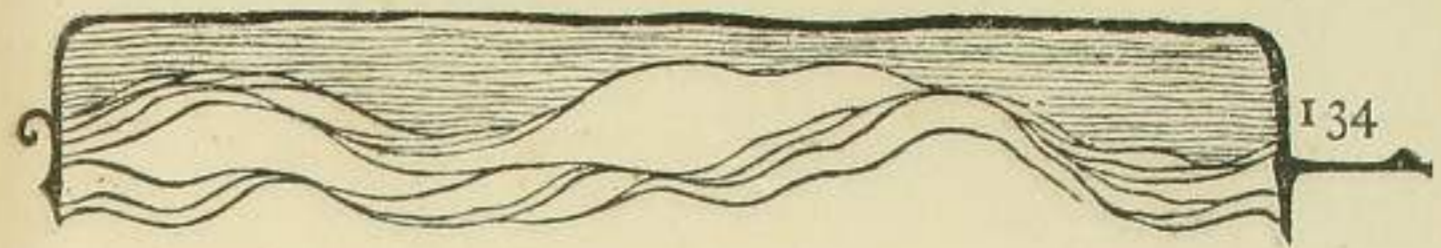




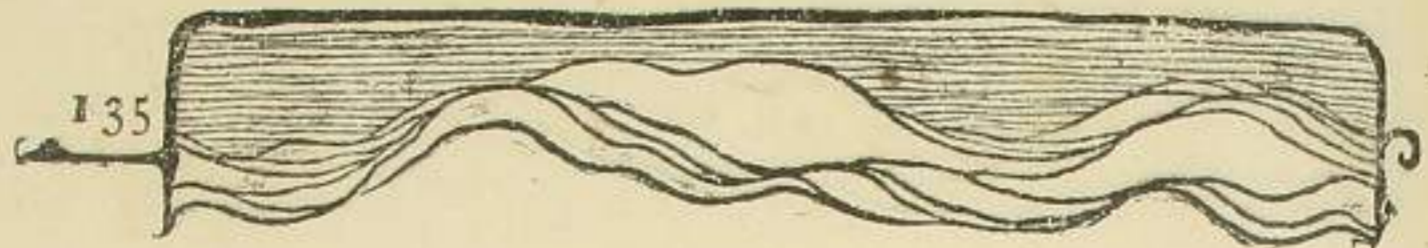
不謹慎なる欲望は睡り去りつ、
 茲に愛人心は興り來り、
 頓て愛神心は興り來る。
 靜かにせよ、龍犬よ、彼此奔り躁ぐ勿れ！
 如何なれば汝は戸闕を然か此に嗅ぐ耶、
 煖爐の後にいりて臥せよ、
 我は吾が最良の座蒲團を汝に與ふ、
 汝が郊外にて山路に「我々を迎へつ」、
 走り且つ跳りて我々を樂ませたる如く、
 然か今汝亦我より欺待を受けよ、
 歡迎さるゝ靜默なる珍客として、
 嗚呼我々の狭き室に在りて、



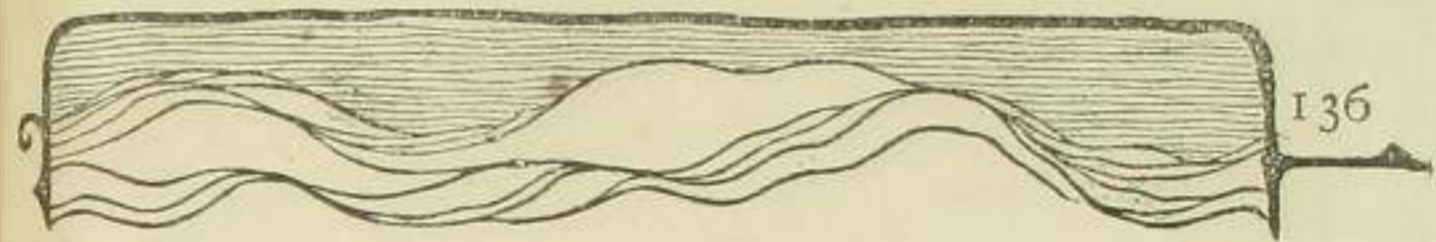
書樂友愛の光を以て燃る時は、
 茲に平和の光や、吾人の胸間に、——
 自覺自醒せる心裏に玲瓏と耀き出づ、
 理性は再び物言はじめ、
 希望は再び花咲き出づ。
 吾人は切に冀がふ生命の河流に、——
 嗚呼然り、生命の源泉に達せんことを、
 吠る勿れ、龍犬よ、今吾が全心を包める
 此の神聖嚴肅なる調子には
 汝の其獸聲は相適はず。
 我々は常に思ふらく、人々は
 其理會せざる物事を輕蔑し、



又凡そ善なる者及び美なる者は、
 往々難解なればとて之を罵詈すと。
 犬も亦、人の如く、言々之を吠んとする乎。
 然し乍ら、嗚呼情願こそ最強けれど、
 満足は最早吾胸臆裏より流れ出でずと感ず。
 然ながら何とて此流は然か速かに涸れて、
 我等ふたゝび早魑の中に横たはる耶。
 是は我極めて屢ば苦々しくも味はへり！
 然は云へ、此の缺乏は補充され得べけん、—
 我々は超情象外の物を尙ぶことを學ぶ、
 我等は切に天啓を冀がふに至る也。
 「此天啓たるや」其最も盛んに最も美はしく、



煌々と燃るは新約聖書の中に若く無し。
 我は今一たび誠實なる心意を以て、
 本文の妙義を究明すべく鼓舞せらるれば、
 神聖なる原文を翻譯して、
 我が深く愛する獨逸語と爲さざるを得ず。
 (彼れ一卷の書を開きて之を熟閱す)
 書して曰く、『元始に言あり』と、
 此に我は既に行き難む、誰か我を助け進ましむる者ぞ、
 我は言を然か大いに尊ぶこと能はず、
 若し神靈より正く教へ明らめたらんには、
 我は之を異様に翻譯せざる可らず、
 書して曰く、『元始に思想あり』と。



請ふ此の第一行を善く究めよ、

恐らくは汝の筆餘りに速く走らん！

萬有を活動せしめ且之を創造する者は是果して思想なる乎、

890

須らく斯く書すべけん『元始に大能あり』と。

但し我これを書きつゝある間にすらも、

既に何物か我を警むらく、汝此に安んじ止る可らずと、

神靈我を助けよ！忽ち我は示教を得、

我は安心して書す『元始に事業あり』と。

895

我若し汝と此室を分つ可んば、

龍犬よ、然らば其の吠るを止めよ、

然らば其吠ぶを止めよ、

斯る噪がしき伴侶をば

900

我は近くに容れしれく能はじ、

我等兩者の一は、汝か我か

此室を去らざる可らず、

我は遺憾ながらも賓權を剝ぐ、

戸は開きてあり、自由に奔り出づべし、

然し乍ら我は何たる奇怪の事を見るや、

905

是は自然の理に循て起り得る者なる耶、

是は幻影なるか、是は實際なるか、

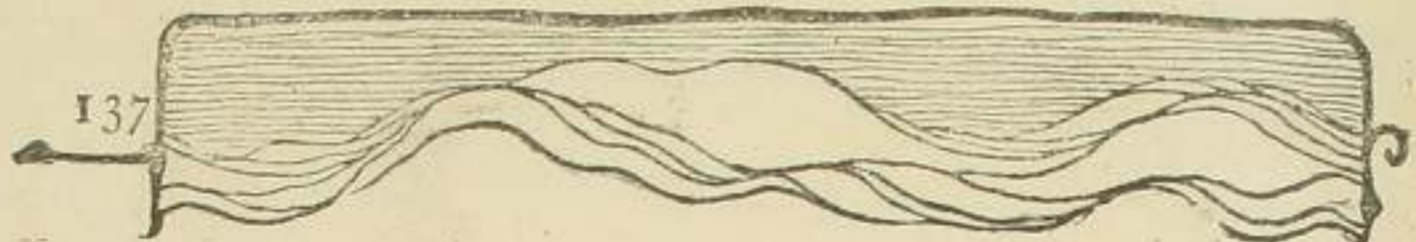
吾が龍犬は如何に丈長く巾濶く化れるぞよ！

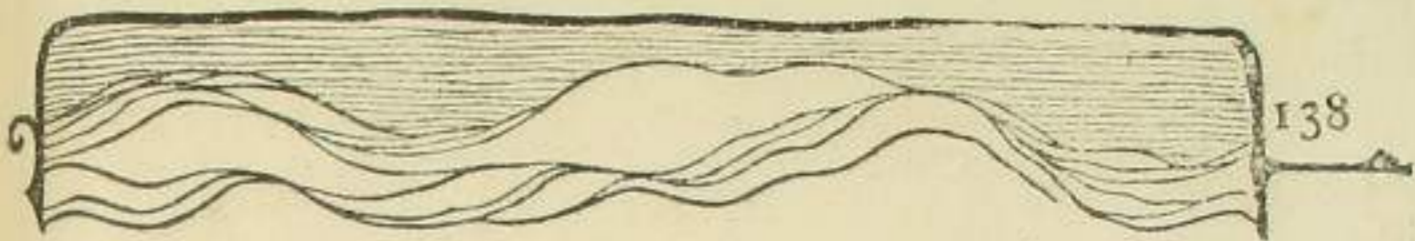
彼は怖ろしく膨脹し來る哉！

是は斷じて犬の形姿に非ず、

910

嗚呼何たる妖怪を我は家に携へしぞや、



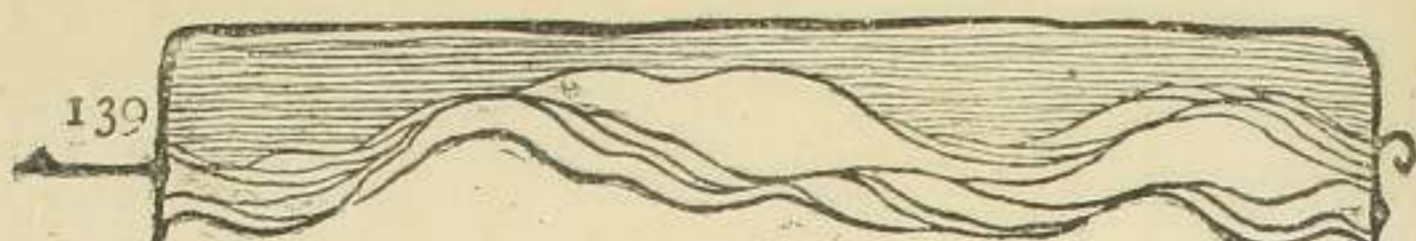


既に彼は河馬に鬚鬚たり、
 目は火の如く、齒は怖ろし、
 嗚呼汝の何物たるは我に詳かなり！
 斯る半ば地獄然たる徒輩には
 所羅門の鍵咒こそ功驗灼然なれ。

神

靈(廊下に歌ふて曰く)

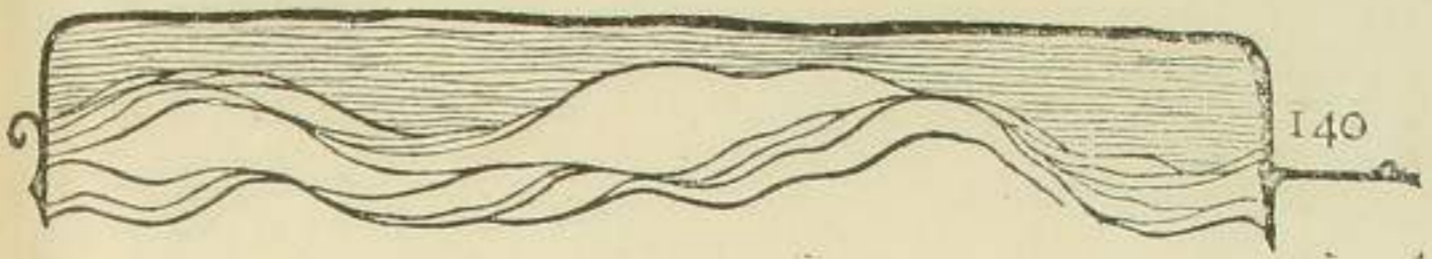
一箇室内に擄れたり！
 外に居れ、誰も彼に従ひ入る勿れ！
 狐狸の鐵機に陥れる如く、
 一箇の老猫魔は戦ひ慄のく、
 然し乍ら用心せよ！



彼方に翱翔れ、此方に翱翔れ
 上へ飛べ、下へ飛べ、
 然せば彼は脱すべけん、
 汝等かれを助け得ば、
 彼を棄措く勿れ！
 彼は我等すべてを樂ますべく
 嘗て盡せるや實に多かり。

ファウスト

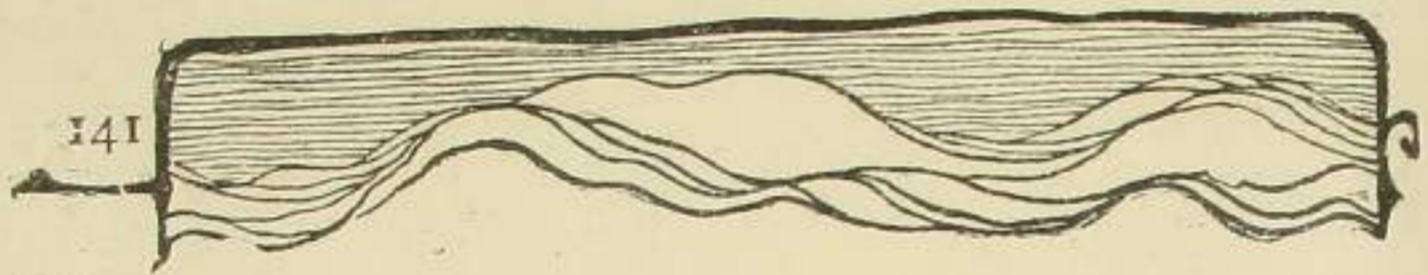
先づ此の獸を退治す可く、
 我は四大の咒文を用ひん、——
 サラマンダル(火神)燃ゆべし！



ウンデネ(水神)蜿蜒れ！
 シルフエ(風神)消うせよ！
 コボルド(地神)勞き疲れよ！

彼等を知らぬ者は、
 即ち此等の原素と
 之が力れよび特性、
 之を知らぬ者は
 到底主たる能はじ
 神靈の上には。

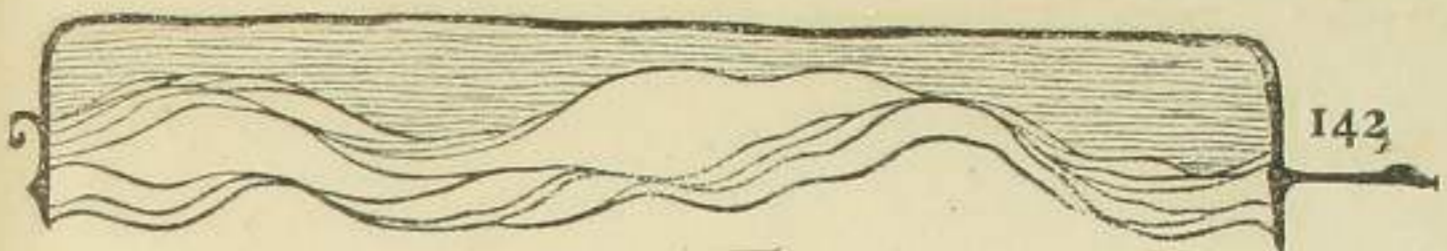
火焰の中に消ぬよ、



サラマングダル！
 滔々相逆捲きて流れ去れよ、
 ウンデネ！
 流星の美を以て耀き失せよ、
 シルフエ！
 家事に勞き弱れよ、
 コボルド！

〔天に憑る〕靈、出て退散せよ！

四大の孰れも
 此の獸に宿らず、
 彼は全く静に臥て、我を笑ひ嘲ける、



我は未だ彼を苦め得ざりき、
汝は我が更に幾層強く
汝を調伏するを聴くべし。

955

兄弟よ、汝は是れ

地獄の脱走者なる乎。

さらば請ふ此の符號を見よ、

之には皆屈伏す、

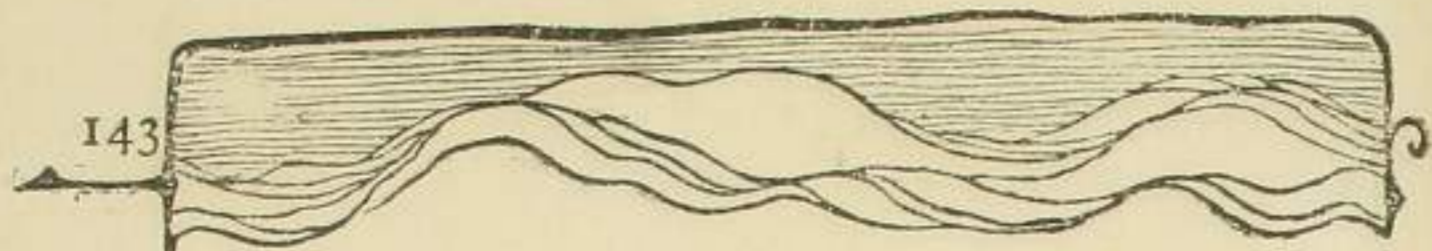
夫の黒き魔軍は、

960

既に彼は堅立る毛して膨れ來るぞよ、

兇惡なる者よ。

965



汝は彼を讀み得るか、

彼自然にして存在する者、

言語に超絶せる者、

満天に磅礴瀾漫する者、

惡逆の十字架に刺れし者を、

煖爐の後に咒ひこまれて、

彼は象の如く膨れつ、

全室に遍く充ちつ、

970

今や霧に溶け去らんとす、

天井にまで昇る勿れ！

主の脚下に來り臥せよ、

我は徒らに恫喝すと汝知る、



我は神聖なる火を以て汝を焚くぞよ！

待つ勿れ

三重に赤熱する光[の出る]を！

待つ勿れ

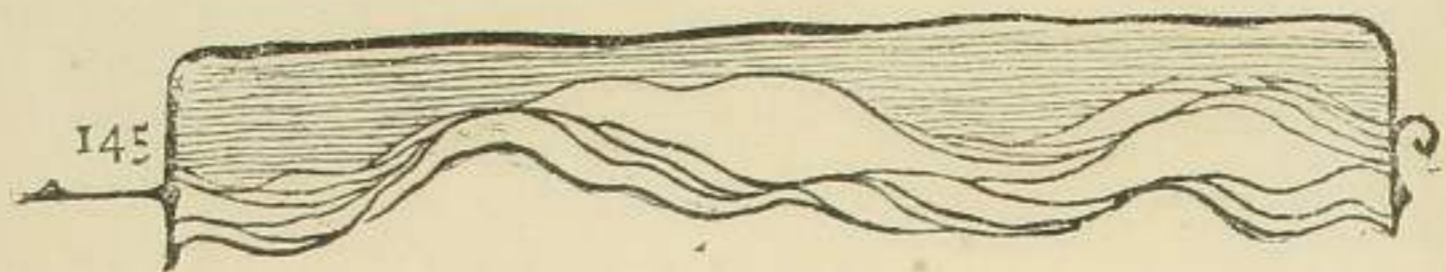
吾が法術中の最も強き者[の顯る]を！

(霧の散じつある間に、メフキストフェレスは行脚學生の如き服装して、燧燵の後より出て来る)

メフキストフェレス

此の喧嗽は何の爲ぞ、主は何を命ぜんとし給ふや。

ファウスト



されば是は龍犬の實體なるよな！

一箇の行脚學生？其状笑ふに堪たり。

メフキストフェレス

我は博學多識なる師に敬禮す、

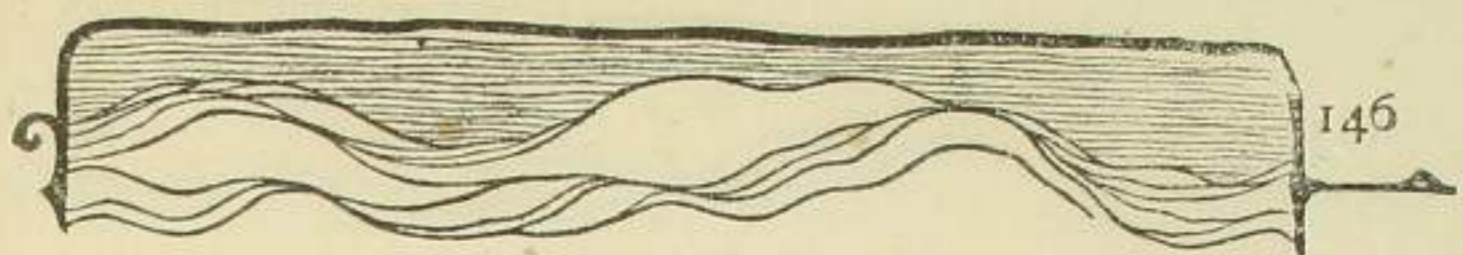
我は先生に痛く汗かゝされ膏とられたり。

ファウスト

汝は名を何といふや。

メフキストフェレス

此の間や君の如き人には小き事と我は思ふ、
君は夫の『言』を然か大いに輕んずる者、



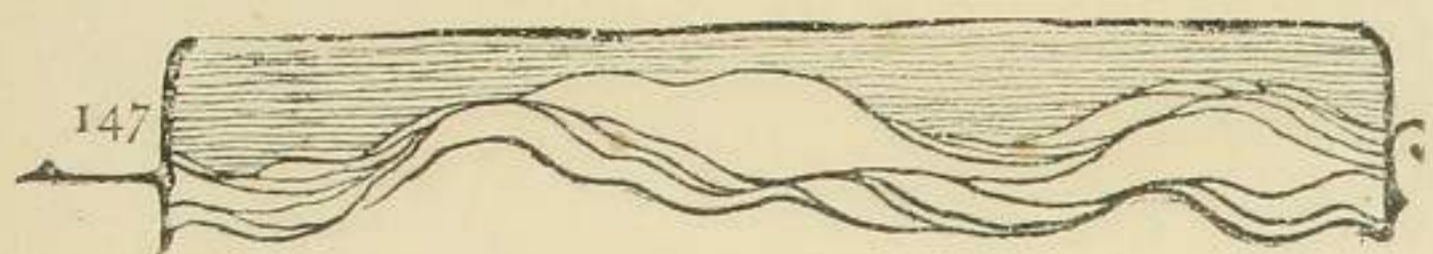
一切の外観を遠く離れて、
獨事物の實質をのみ維れ究る者ならずや。

ファウスト

汝等諸君の中に在てや、其性質は
通例其名より讀み解かれ得べく、
例へば蠅神、破壊者、欺瞞者等と君等と呼ぶや、
其性質は一目瞭然たる耳。——
宜し、然らば君は何物ぞや。

メフキストフェレス

我は夫の恒に惡を計りて、



而も恒に善を生ずる力の一部分なり。

ファウスト

此の謎語は果して何の意義ぞや。

メフキストフェレス

我は恒に諱否する靈なり！
而して其諱否するは宜なりとす、所以は如何ん、
凡そ生起する物象は皆悉く當に亡ぶべき者なれば也。
然れば何物も生起せざるを愈りとす。
斯るが故に、總て君等が罪と名くる者、
破壊と名る者、一言もて蔽へば、惡と名くる者、

是れ此の吾が本領にこそ！

ファウスト

汝は自ら一部分と稱す、而も吾前に立つや全體ならずや、

1005

メフキストフェレス

我は謙退して眞實を君に吐露せる而已。

縦し愚癡癡の小天地たる人類。

居常みづから一箇の全體と稱すとも、

我は部分の一部分のみ、元始には全體なりき、

我は暗黒の一部分たり、此の暗黒こそは光明を産る者なり

けれ、

1010

然るに傲慢不孝なる光明や、其母たる夜と
 之が當初の位を争ひ、之と空間を奪ひあふ！
 然ながら未だ志を得ず、开は、光明なる者は、
 如何に努むとも、幽閉られて有形の物體に着けば也。
 寔に光明は物體より流れ出で、物體を美はしくし、
 又物體の爲に其の進行を礙げらる、——
 故に我は信ず、彼は長くは續かじ、
 有形の物體と偕に地に落ち去らんと。

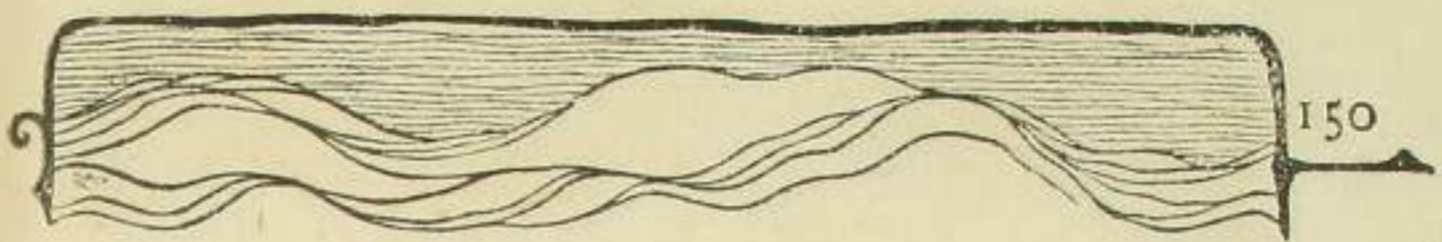
1015

ファウスト

今我は汝の殊勝なる計畫を察知す、

汝は大規模に何物をも毀つ能はず、

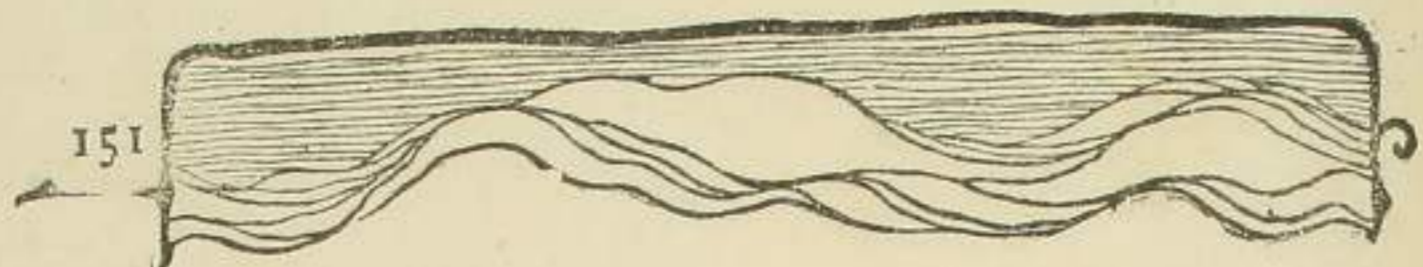
1020



小規模に今之を始めたる而已。

メフキストフェレス

而して又それにすら大なる功も未だ奏されず、
夫の虚無に對抗せしめられたる物、
夫の所謂有物即ち此の拙工世界たるや、
我既に孜孜として勞せる限りは、
海嘯や暴風や地震や噴火を以てしても、
之を破壊すること能はず、
竟には海も陸も泰然として安住す！
而て夫の詛はれたる器即ち獸群と人群には、
毫も之に害を加へ得ざるを奈何ともする無し。



其幾何を我は既に葬り了りたるぞよ！
然るに新らしき爽かなる血液は常に循環て已す。
斯く彼等駸々として前めば殆ど我を狂せしめんとす。
空氣にも水にも又地にも滔々として、
千萬の萌芽は發展し來る、
乾裏、濕裏、暖裏、寒裏、均く然る哉！
我若し火の己れに保留せられたる者なくば、
我は何も特殊なる物の示すべき無からん

ファウスト

斯く汝は彼の永遠無窮に活動する
健全なる能造力に對抗するに



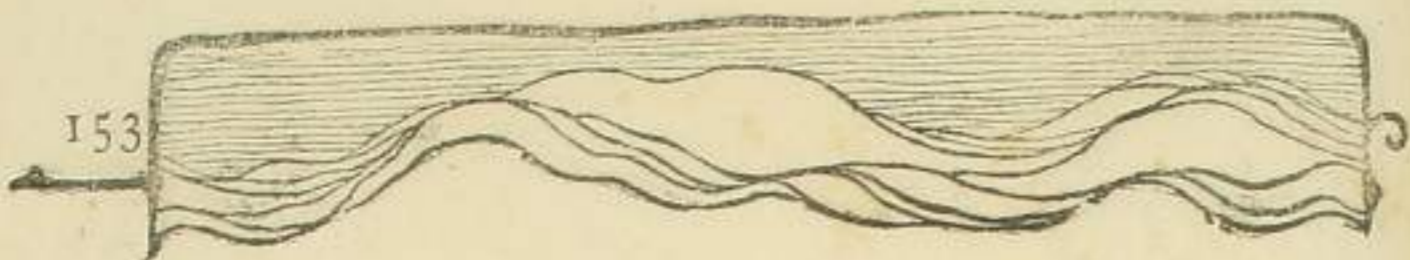
寒冷なる悪魔の拳を以てし、
 开を悪意もて徒らに握り堅むる而已。
 請ふ或る他の業を始むべく求めよ、
 嗚呼渾敦氏の奇怪兒よ！

メフキストフェレス

我々は此次に相會せん時を以て
 該件を實地に考究せん、
 今回は我幸ひに辭し去るを得べき乎。

ファウスト

知らず汝何とて开を我に乞ふやを。



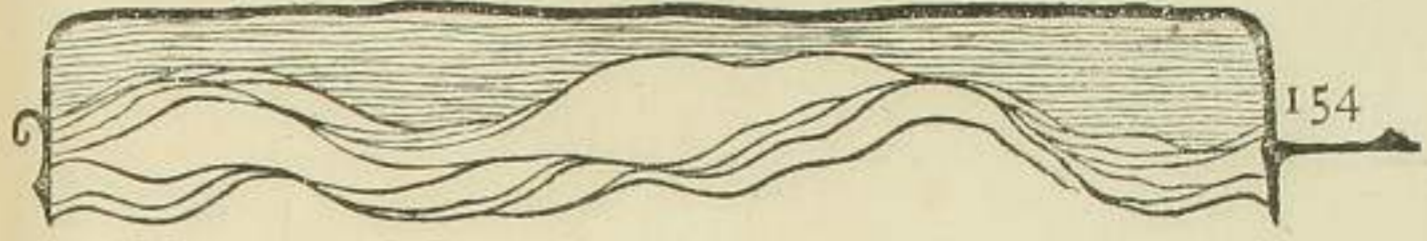
我は今汝と相識るに至りぬ、
 請ふ今よりは汝の欲する時に我を訪來れ。
 此に窓あり、彼處に戸あり、
 煙突も亦汝の爲に開けり。

メフキストフェレス

我は偏に告白す、我が歩み出ることは、
 輕微の障碍ありて我禁ぜらる、——
 开は君が戸闕の上に於る『妖術師の脚』是なり。

ファウスト

彼の六角星形なんぢを苦むる乎。



嗚呼、請ふ我に告よ、汝地獄の子よ、
是若し汝を禁ぜば、如何にして汝は此に入しや。
斯の如き魔鬼如何にして欺かれ得たる耶。

メフキストフェレス

之を詳かに看よ、是は善く描かれてあらず、
其の一角外そとに向へる者は、
君の見る如く、少しく開きて合はざる也。

ファウスト

偶然は嗚呼善く出来でしたり！
さらば汝は我の捕虜なる乎。



何たる偶然の大成功ぞよ！

メフキストフェレス

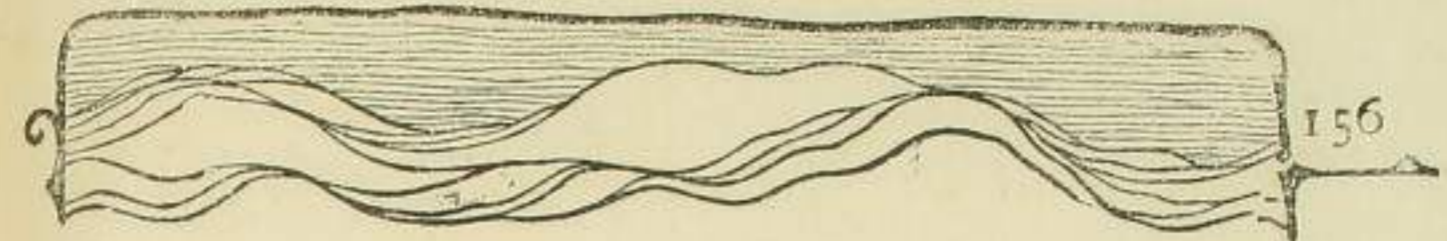
龍犬りゆうけんは其飛こむ時に、何をも認めざりき、
今は局面一變し了りぬ、
悪魔は此家を出る能はず。

ファウスト

但し何が故に汝窓よりは出でゆかざる耶。

メフキストフェレス

是は悪魔や幽霊の一法則なり、「云く」



彼等は其忍び入りたる處より復出ざる可らず。前者は我等に自由なれど、後者には我等奴隸のみ。

ファウスト

地獄其物もまた己れの律法を有する乎。

开は善し、然らば君等諸君とは

確實なる契約を締結しむぶことを得べけん歟。

メフキストフェレス

我等が約束せる所の者は君之を全く享樂し得可し、

其中微塵ちりだも君に向ひて切短きつぱられじ、

然し乍ら是は然か速かに結ばる可らず。



我等次回の面晤に悠々これを協定せん。

但今は最も切に祈る

此度は我を罷り還らしめ給へ。

ファウスト

然し乍ら尙暫らく留まり、

先づ我に面白き話を語れよ。

メフキストフェレス

今は我を放て、我は速かに還り來ん、

其時は君随意に問ふことを得べし。

ファウスト

我は汝を捕獲とらんとは自ら試みず、
汝却て自ら網の中に身を投ぜり、
悪魔を抑おさへたる者は之を確しかと抑へねけよ、
彼は然か速かには再び捕へられじ。

メフキストフェレス

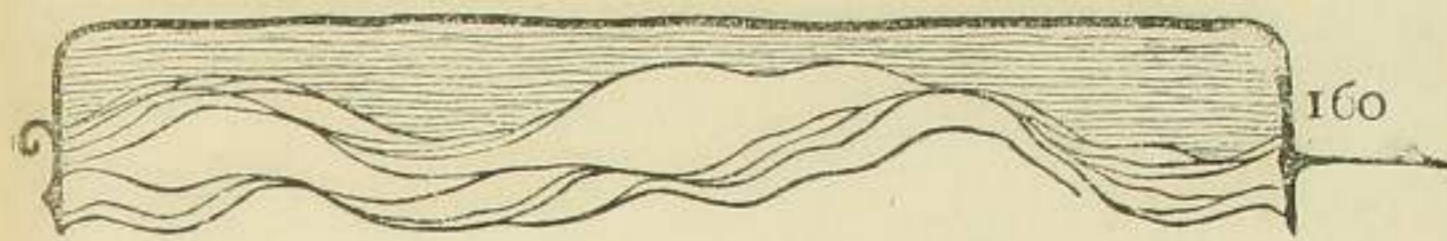
君これを欲さば、我も亦敢て辭せじ、
君の伴侶として茲に止らん耳、
但し左の條件を以てせん、曰く、君の閑をば
我れのれの藝術を以て善く消し去んと、

ファウスト

我は汝の自由に任す、我は悦んで視聽しんせん、
只其の藝術をして愉快なる者たらしめよ！

メフキストフェレス

友よ、君が其耳目の「快樂の」ために、
此の一時間を以て贏まさけ得る所は、
幾年間に得る者よりも却て勝まさらん。
甘口なる神靈が汝に歌ふ所の者、
彼等が齎らし來る美しくしき光景影像は、
一片の空虚なる魔術的幻象に非ず。
君が鼻も亦大いに悦ばさる可く、
而して君が口も爽やかにせらる可く、



頓て君が心情は恍焉惚焉たる可し。
 是は特に準備を要するに非ず、
 我々は俱に茲に在り、率始めよ！

1105

消ぬ散れよ、汝等

上なる黒雲よ！

快く耀く哉

緑色濃き

1110

靄然たる天空！

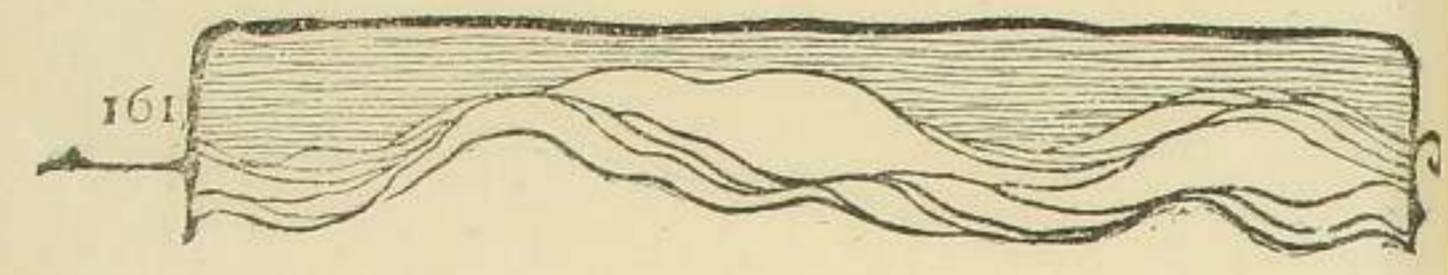
黒雲よ、

溶け去れ！

小星は燐々、

衆多の太陽は

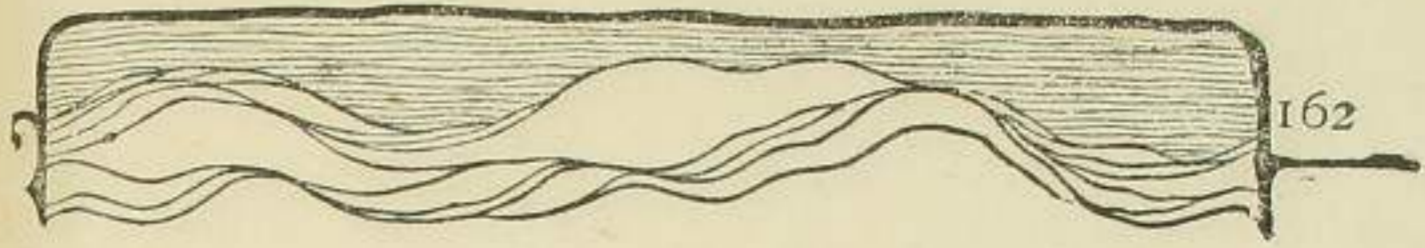
1115



温然茲に照す、
 天の子等の
 灼々たる靈光、
 搖曳俯垂し、
 翱翔して過ぎ、
 無限の渴仰
 遠く之を追ふ、
 其の羽衣や
 翩々靡きて
 野山を覆ひ、
 森林を覆ふ、
 开が綠陰には、

1120

1125



永日佳人才子
恍惚と相契る。

緑葉又緑葉、

扶蔬たる哉其蔓！

纍々たる葡萄、

混々として其汁

酒槽の中に注ぎ、

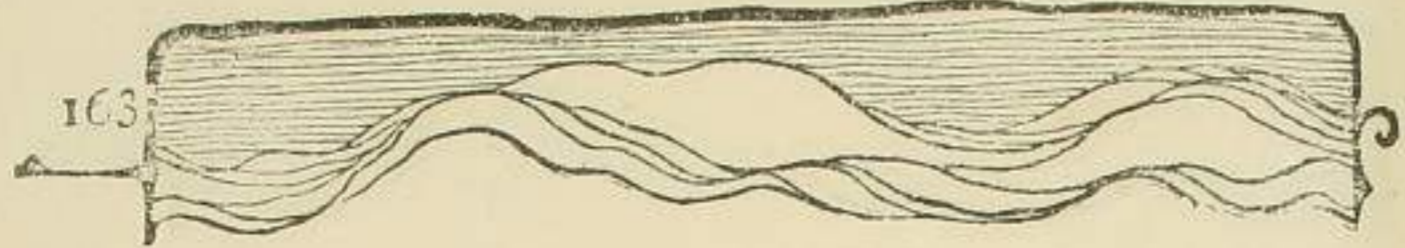
泡だつ葡萄酒の

河流や何ぞ滔々たる！

玲瓏たる珠玉を

燦爛と途に飛し、

高地を後るにしつゝ、



淙々として奔流し、

緑滴る岳を去て、

洋々たる大海に

快然として朝宗す。

而して鳥の群は

福祉を吸ひつ、

太陽に向て飛び、

玲瓏たる浮島に

面してぞ飛ぶ、

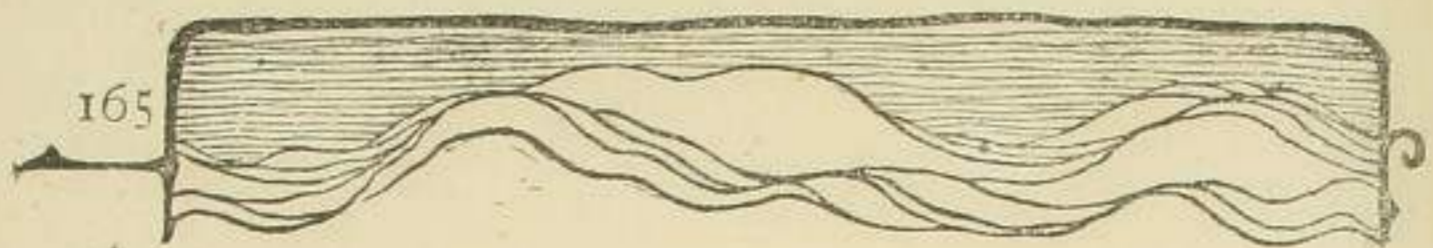
嗚呼此等の島嶼

浪に揺く眩耀い哉！

此に彼等が關々と



相轉るを我等聽く、
 野に原に翻々と
 舞踊るを我等觀る、
 皆悉く青空の下に
 徧く遠く散ばりつゝ、——
 或者は漂然と
 峯巒に攀登り。
 或者は泛然と
 海に遊び浮み、
 或者は翱翔りつ、
 皆舉て生命の源に、——
 皆愛流の混々たる



高き明星に向ひて、
 大祥福の域へと奔る哉。
 「何等圓滿の快樂境ぞよ！」

メフキストフェレス

彼は睡れり！善く行れる哉、汝等輕妙甘口なる僮魔よ
 汝等は眞に彼を歌ひ眠らせ了りぬ！
 此の歌樂の爲には我汝等に恩を擔ふ。
 (ストアに) 汝は惡魔を堅く抑へたくべき人には非ず！
 (惡魔の眷屬に) 愉快なる夢想幻影を以て彼を包めよ、
 彼を迷想の海に投げこめよ！
 但し此闕の靈符を解かんには、



我は或る鼠の齒を借らざる可らず。

我は長く咒文を唱ふるを要せず、

既に一疋茲に音す、速に吾言を聽つけん。

鼠とほつかに鼠の主たる者、

蠅と蛙と床蟲としんみ蚊の主たる者、

汝に命ず、敢然と出てよ、

此の戸闕を嚼れよ、

开が爲に彼は油もて闕に塗おけり。

嗚呼汝は既に躍りて出て來ぬ！

只請ふ直に其業にわき〔就け〕！我を苦むる點は、

闕峰の上にて全く前の方かたに位ぬす。



今一ひと嚙ぞ！然り、成れり！

いざ、ファウストよ、我等復會ふまで夢み行きね！

(メフキストフェレス頓て室を去りゆきぬ)

ファウスト (目覺て)

然らば余は復も迷ひ欺むかれし乎、

然か盛んなる神靈の勢は早や消えて跡なし、

〔餘す所は〕唯一場の夢夫の惡魔を幻出し來り、

且一頭のけい犬吾が手を逃れ去れりし而已なるか！

第四場

書齋の光景

(ファウスト及メフキストフェレス登場)

ファウスト

戸を叩くよな？ 御入りなされ！ 誰が復我を煩はさんとす
る乎。

メフキストフェレス

我なり。

ファウスト

御入りなされ。

メフキストフェレス

君は三度^{たび}开を言はざる可らず。

ファウスト

然らば御入りなされ。

メフキストフェレス

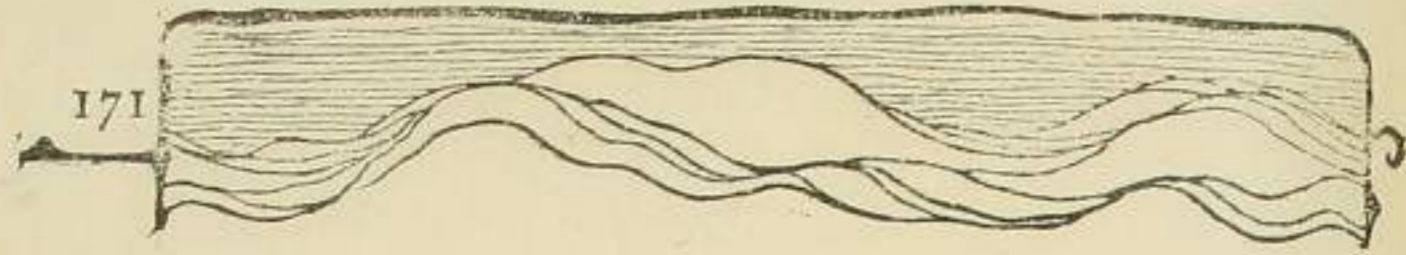
然か君は我を幸ひす、

我等二人は其氣善く合はんと我は信ず！

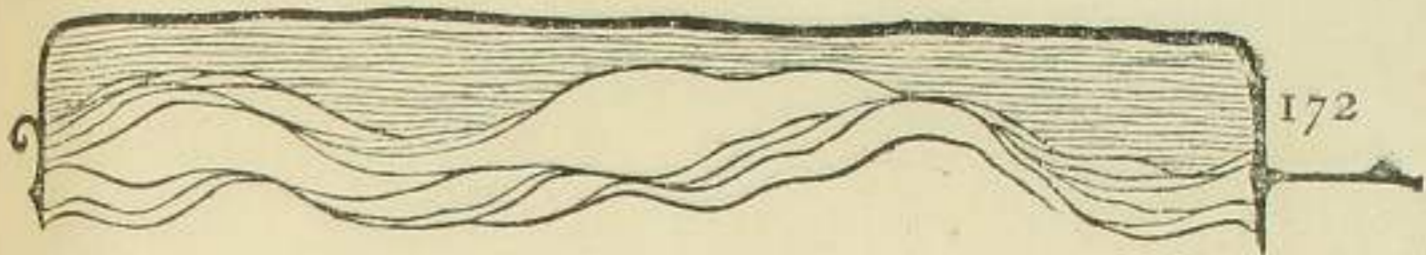


然れば「出て遊びて」君の氣鬱を散ずべく、
 我は貴公子の服装して此に在り、
 即ち金レースしたる絳衣あかじろぎを着、
 ゴリゴリする厚絹の小袍を纏ひ、
 鳥毛を帽子の上に挿し、
 長き尖れる劔を佩びたり、
 今簡短に、打つけに、君に勸む、
 君も亦速かに之と同じき服飾を爲せ、
 然らば君は此を脱して、自由自在に、
 人生は如何なる者かを味ひ得べけん！

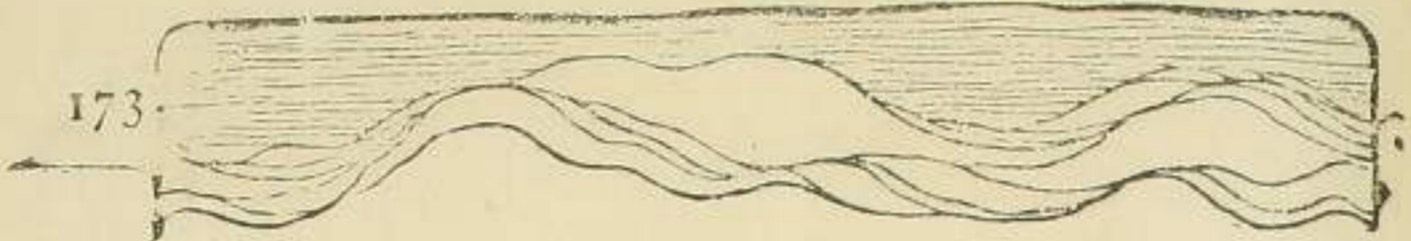
ファウスト



如何なる服装にても、依然として我は
 地上に於る生活の狹隘固陋なるを苦しまん耳、
 我や蝴蝶の如く遊び狂ふには餘りに老いたり、
 又木石の如く欲望なくて在んには尙餘りに若し、
 此の世界は畢竟何物をか我に與へ得んや、
 『汝節す可し！節せざる可らず！』とは、
 是れ終古永遠の歌にて有るを奈何せん、
 此の單調なる歌は古來各人の耳に響き、
 吾人の生涯、月として日として、
 毎時毎刻聲からして之を歌はざる無し、
 朝ごとに唯悚然として我は目醒め、
 斯の日を見ては幾ど苦き涙こぼして泣かんとす、



然り斯の日や其進路に於て、咄、
 吾が一つの欲望をも唯一つの欲望をも達へず、
 奇々怪々たる嘖語を陳らねて、
 各歡樂の嬉しき預想をすらも傷けつ、
 千差萬別なる人生の歪面苦笑を呈して、
 吾が活潑なる胸の得意なる想像を破壊す。
 而して夜の降り臨む時には、又我や
 煩悶懊惱して牀に横はらざるを得ず！
 此にも亦絶て安眠鼾睡は來らず、
 只凶荒なる怪夢我を襲はん而已！
 吾が胸に宿れる斯の神（心裏に）は、
 内に向ひてや吾が心の奥まで深く活動せしめ得れど、



彼や、吾が一切の能力の上に高く位るしつゝも、
 外に向ひては呼何物をも絶て動かす能はず！
 斯く存在は我には一の重荷のみ、
 死は却て望まる、生は嗟憎むべき哉！

メフキストフェレス

而も死として決して歡迎すべき客にも非じ、

ファウスト

嗚呼幸福なる哉、戦勝の光榮裏に於て、
 其額に血に染りたる月桂冠を環らす者は！
 「嗚呼幸福なる哉」餘りに迅く狂ひ踊れる後、

美女子の懷抱裏に倒れ死なん者は！
 嗚呼われ嚮に夫の大力なる神靈の前に、
 恍惚と喪神して斃れたらば善かりつらん！

1210

メフキストフェレス

併し乍ら誰か彼の夜に
 或る褐色の液を敢て飲まざりき！

ファウスト

探偵をやることは汝の樂と見ゆるぞよ。

メフキストフェレス

全知にては我あらざれど、覺知せらるゝ事も多し。

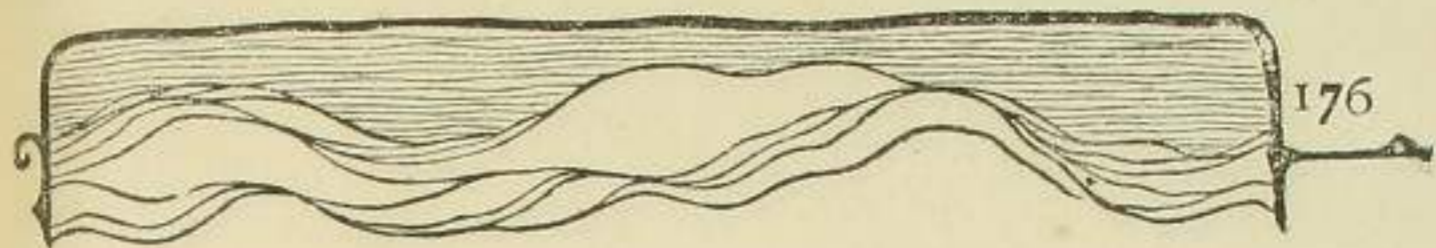
ファウスト

〔彼の時や〕一種の善く耳熟し快き音聲ありて、
 我を吾が腸も斷つべき群念より脱せしめ、
 幸福なる少時の餘韻を以て

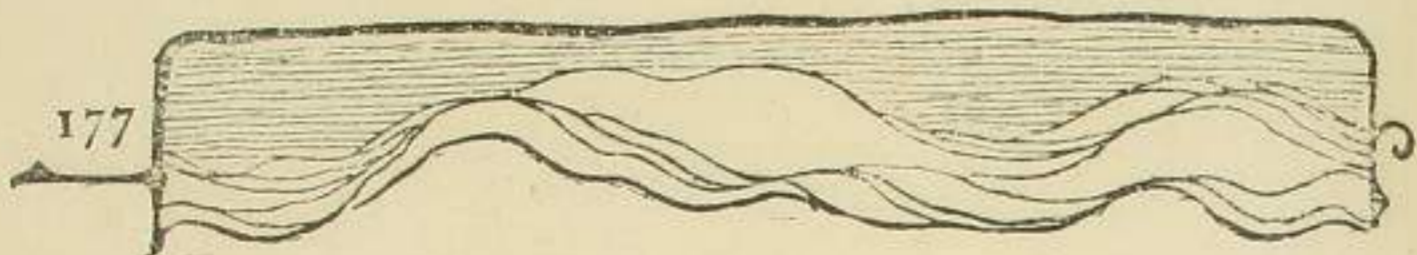
1245

小兒感情の尙残れる者を迷はしたりとせば、
 然らば〔今〕我は凡て誘惑事や美觀物を以て
 吾が靈魂を包圍籠蓋せんずる者を〔誣ひ〕、
 又あらゆる眩曜力若くは阿諛力を以て
 吾心を此黯澹たる憂窟に繋ぐ者を誣ふ！
 神魂が帯びて以て自ら己れを迷はす者たる

1250



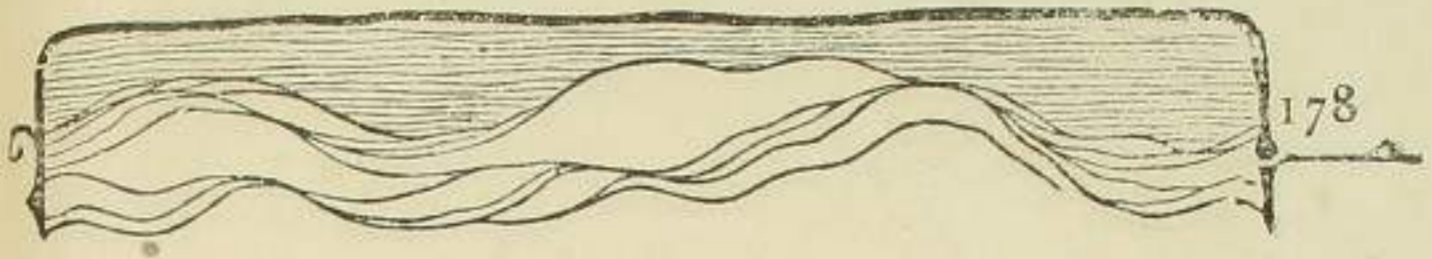
夫の高尙遠大なる觀念は直ちに詛はれよ！
 吾人の耳目を眩曜し視聽を壓倒する
 輝煌顯赫たる壯觀偉象悉く詛はれよ！
 夫の快夢裏に吾人を翻弄する東西、
 即ち光榮と名聲の不朽てふ迷想は詛はれよ！
 凡そ所有や財産として吾人に媚る物、
 即ち妻子や、奴隸や鋤犁てふ佳物は皆詛はれよ！
 福神や、諸の財寶を芳餌として
 吾人を大膽なる行爲に驅り勵す時は詛はれよ！
 又悠々たる佚樂を縱まゝに爲しめんとて、
 柔かに快き枕席を吾人に供ふる時は詛はれよ！
 咒詛は葡萄の芳液甘露に臨めかし！



呪詛は夫の至大なる戀愛の樂に降れかし！
 希望にも呪詛あれ！信仰にも呪詛あれ！
 第一番には先づ忍耐に呪詛あれかし！

神靈の合唱(目に見えずして歌ふ)

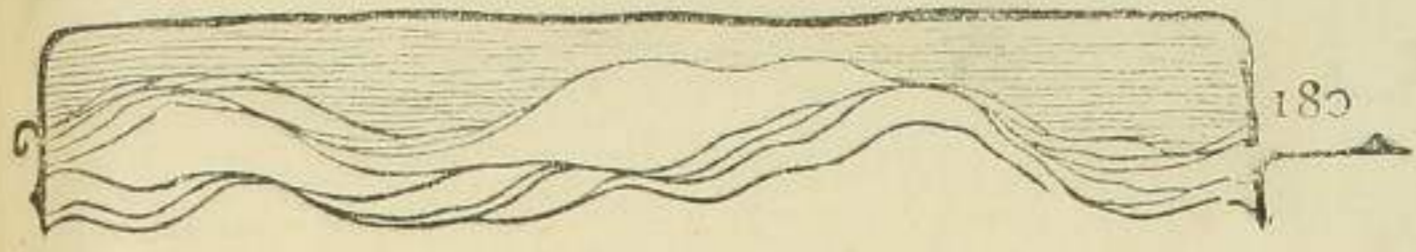
吁嗟禍なる哉、
 汝は之を毀てり！
 此美しき世界を
 鐵拳もて打毀てり！
 是は覆へる、是は潰ゆ！
 神人之を打摧さぬ！
 其の斷片を虛無界へ



我等は運び、
 美境の斯く破壊せるを
 我等は痛く吊らふ。
 汝、人間にねける
 非凡優秀なる者、
 一層華やかに
 復之を改造せよ、
 汝の胸裏に之を建造せよ！
 新生活の行徑を
 玲瓏たる耳目もて
 更に始め開けよ！
 而して新珍なる歌は



之に向ひて高く唱へられん！
 メフキストフェレス
 是は吾が眷屬中の
 小なる徒輩にこそ。
 聴よ、如何に快樂と活動とへ
 老猾にも勧誘するぞよ！
 耳目と命脈の塞がり滞ほる
 此寂寥たる洞窟を脱して、
 濶大なる世界に放浪せよと、
 彼等は汝に希望するぞよ！
 君の悲哀を弄ぶことを罷めよ！



开は猛鷲まうじゆの如く君が生命を嚙なくらふ。
 最も粗惡こご下劣なる交際すらも、
 君をして己おのれも亦他と同一おのれ人なりと感ぜしめん。
 然し乍こら是は君を群俗の中に
 突込まんと欲するの意ならず。
 我は決して高貴なる者に非ず、
 然れども君若し、我と結托して、
 其步履を世の中に運ばんには、
 我は悦んで君の意を迎へつ、
 立どころに君の家來けらいとならん。
 我は君の隨行者なり、
 我若し君の望がたに適あたはば、

我は君の從僕たり、君の奴隸たらん。

ファウスト

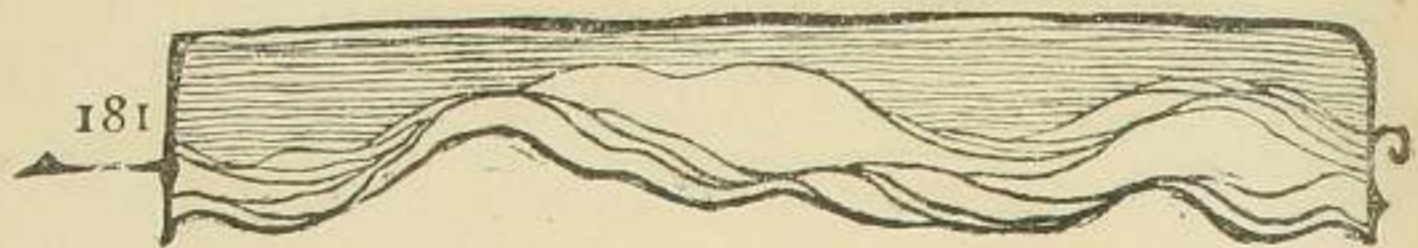
之が爲に、我は卿に何を盡くすべき耶、

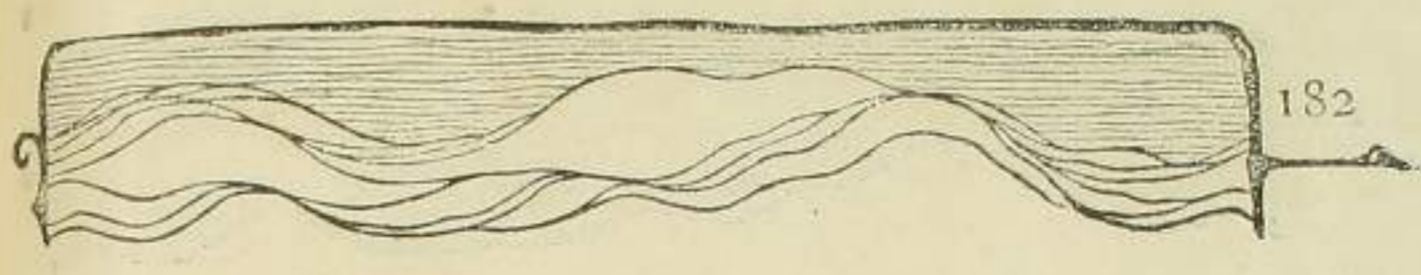
メフキスト フェレス

之を爲すには君なほ長き時間を有す。

ファウスト

否な、否な、惡魔は利己主義家なれば、
 何にまれ他を益する如き事をば、
 所謂る神の爲に、容易くは行なはじ。





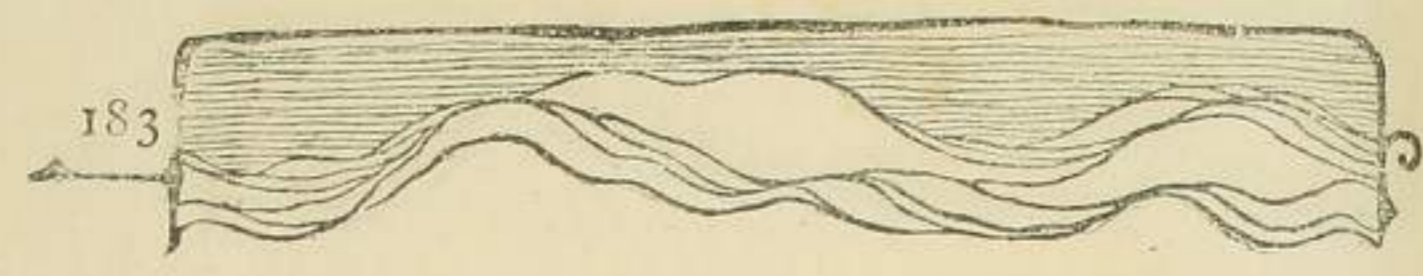
請ふ汝の條件を明らかに語れよ、
斯る從僕は危険を家へ持來さんとす。

メフキストフェレス

此の世にては我誓つて汝の從僕とならん、
汝の願使には善く順ひて、背かじ、休まじ、
我等彼の世にて再び俱に現はれん時は、
汝これと同じき役を我に盡すべし。

ファウスト

彼の世なる者は毫も我を畏縮せしめじ、
汝若し先づ此世界を撃碎きて微塵となさば、
又只他の世界之に代りて起り來らん而已。



此の世界よりしてこそ吾が歡樂毀れ、きれづ出
此太陽こそ吾黯澹たるを照し明らめたる者なれ、

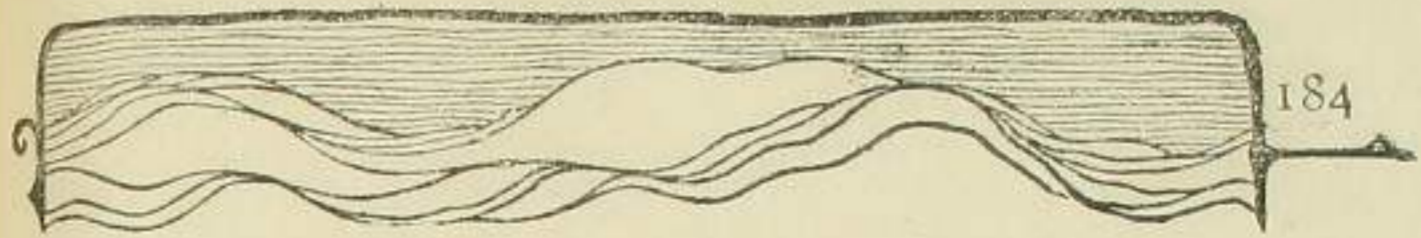
我若先づ此等二者と縁を絶つべくんば、
然らば、何事にまれ縦はしむに起らば起れよ！

我は本件につきてや此上何をも耳にせじ、

曰く、吾人は未來に於ても亦愛憎する所あるや否や、
又曰く、該界にも亦上下貴賤あるや否や、
并は全たく揣摩するの徒勞なるをこそ覺ゆれ！

メフキストフェレス

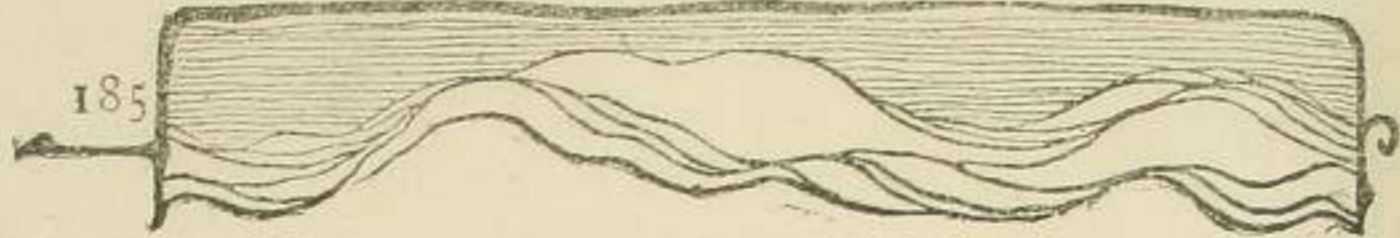
此の精神にて君は敢て世間に乘出し得べし、
請ふ契約を爲せ！然らば、君は日ならず、



大悦樂を懐いて我の妙術を觀るべし。
未だ何人も視ざりし所の物を我れ君に見せ與へん。

ファウスト

汝貧寒なる魔鬼、果して何をか與へんとする？
人の神魂、其高望を遠く馳らするに當りてや、
嘗て汝の如き妖魔の領會する所となりたらんや、
遮莫、汝が有する者も亦無きに非ず、「曰く」――
幾何食ふても飽かぬ食物、
水銀の如く、落つかずに手股より漏る黄金、
誰も勝たず、誰も負けぬ賭博の遊戯、
吾が懐に在りながらも、既に嬌眼もて、

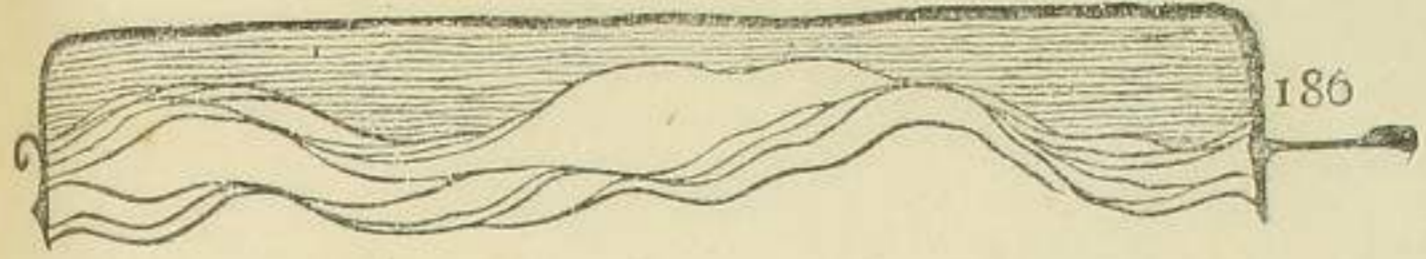


他の男と相契る浮氣の女子、
榮譽てふ秀美神妙なる樂にして、
忽ち流星の如く消え失せ了る者、是のみ、
請ふ我に示せよ、人の摘取ぬ前に早くも潰れ腐る果實、
日々に新き葉を出して永遠に彌青む樹を！

メフキストフェレス

斯る依托は我を懼れしむる者に非ず、
是の如き珍寶を我は供給し得べし。
然し乍ら、良友よ、時遂に至らば、
我等も安逸の佳物を賞味せん。

ファウスト



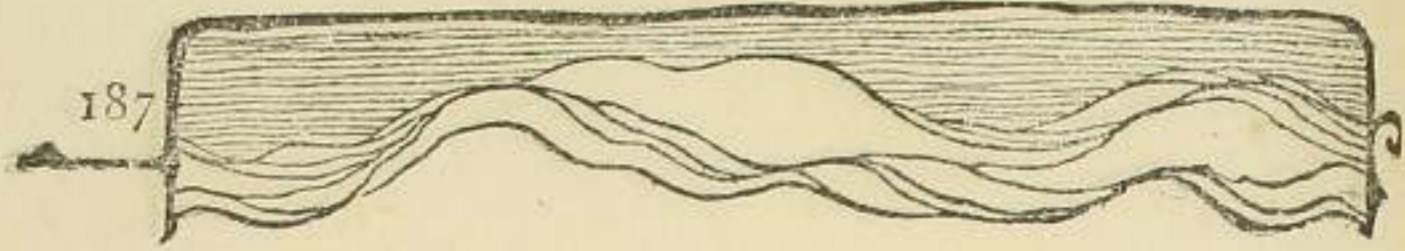
我若し安んじて閑逸の褥しじふに横はらば、
 吾が事既に茲に終れよかし！
 汝若し媚び諂ひつ我を誑かし得て、
 我みづから安居自得したらんには、
 汝若し快樂もて我を惑はし得たらんには、
 其日こそは我が爲に最後たれかし！
 此の賭物かひものを我は提供す！

メフキストフェレス

宜し！

ファウスト

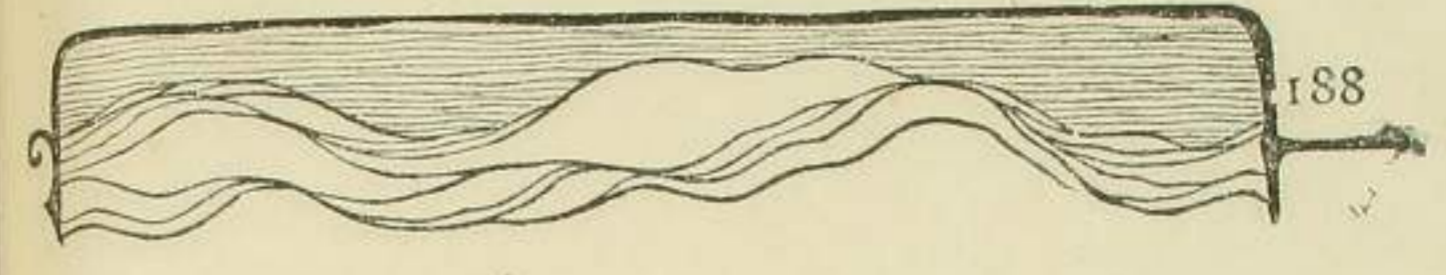
拍手！



我若し眼前の瞬間にむかひて、
 「暫く止まれ！汝は嗚呼美しい哉」と言はゞ、
 然らば汝は我を柙械かせの中に投ぜよ！
 然らば我は甘んじて倒れ了らん！
 然らば死を送る鐘をして鳴しめよ！
 然らば汝は我の奴隸たることを免ぜらる。
 時辰機は止りて可し、針は落ちて可し、
 吾が爲ためには時とき（陰光）は過ぎて復またあらざれ！

メフキストフェレス

請ふ善く考へよ、——我々は忘れじ。



然か記憶すべき權理を汝は十分に有す、
 吾が力を我は傲慢には量らざりき、
 我は斷言す、一舉一動我は奴隸なるのみ、
 汝の「奴隸」なるか、誰のなるかは、我問はじ！

フアウスト

1370

メフ # スト フェレス

我は今日直にも博士宴會にて、
 從僕として我の職務を盡さん。
 唯一事「敢て請ふ」！生死は不定なるが故に、
 願くは一二行の「證書」を我に予へよ。

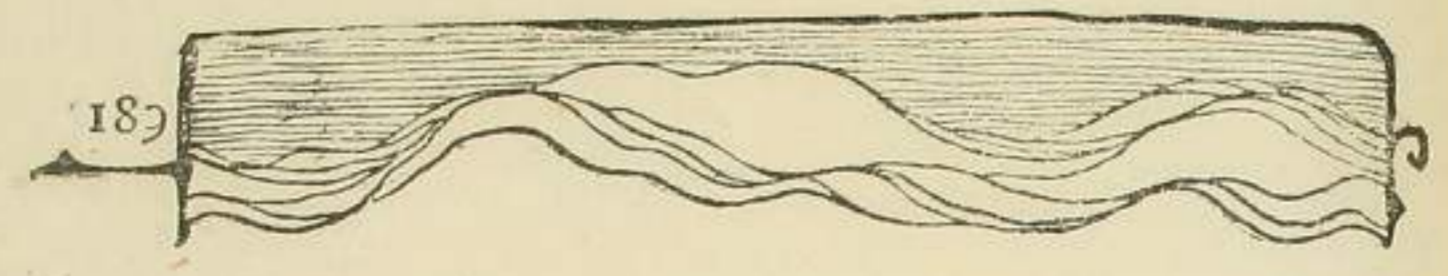
1375

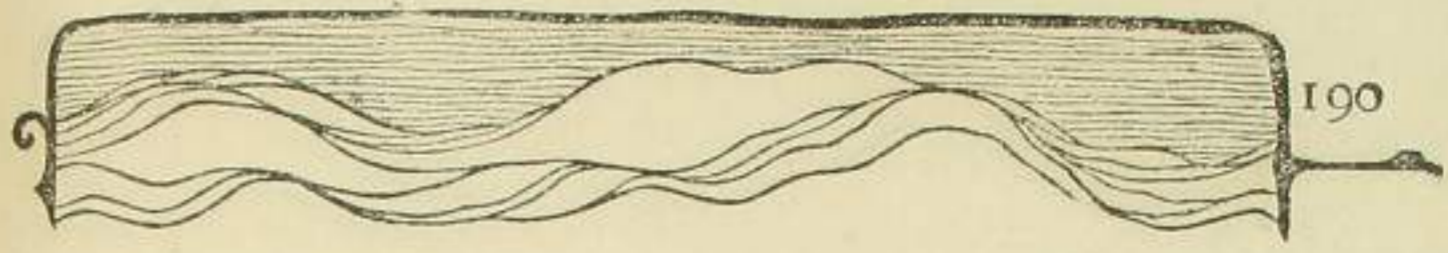
フアウスト

汝似而非學者よ、汝も亦書き物を要求する耶。
 汝は未だ人をも、人言をも嘗て知らざる乎。
 我が吐露したる言語は、若し永遠に、今後
 吾が將來の日子を支配す可んば、足れるならずや、
 世界は萬流滔々として進むに非ずや、
 然るを一斤の約束能く我を抑へねかんや、
 然は云へ、此の謬見は人心に根柢す。
 誰か肯て甘んじて自ら之を脱する者ぞ！
 幸福なる哉、其胸に眞理を清らかに懷きて、
 如何なる獻身犠牲をも悔ざらん者は！

1380

1385

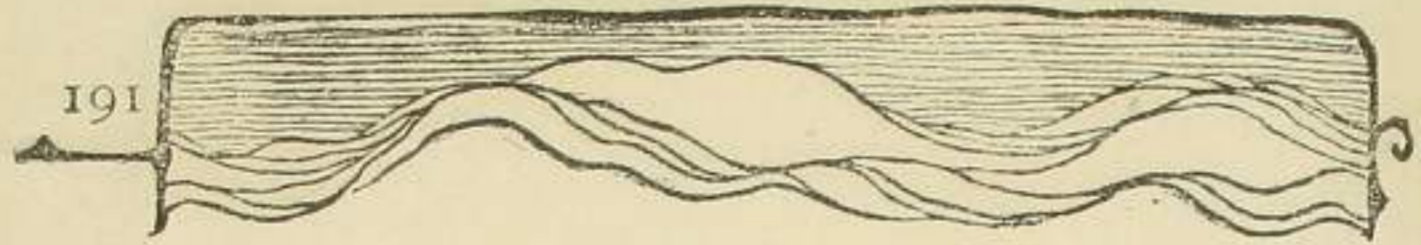




然し乍ら署名捺印せる一片の羊皮は、
只是れ幽霊のみ、其前に人々は皆畏縮す。
言語は筆端に於て既に死す、
獨り跋扈する者は封蠟のみ、韋草のみ！
悪鬼よ、汝は何を我より獲んと欲する乎、
銅か、大理石か、羊革か、紙か？
我は彫刀を以て、書くべきか、鑿鑿を以てか、筆を以てか？
我は一切の撰擇を全く汝に委す。

メフキストフェレス

何とて君は其能辯を、突如と、
然か熱烈の勢ひに鼓し來れる乎——



然ながら何にまれ一片の小紙葉、凡て可し！
君は一滴の血を以て自ら記名すべき而已。

ファウスト

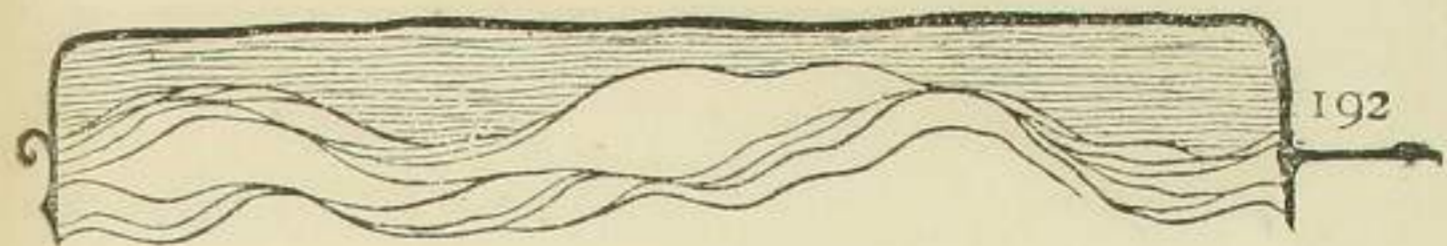
是若し汝に十分の満足を與ふべくんば、
此の茶番狂言を演出して可けん。

メフキストフェレス

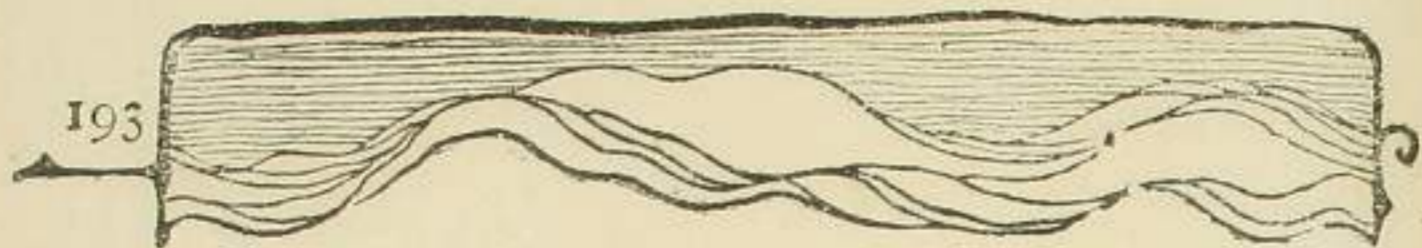
血は一種の全く特殊なる好液ぞよ！

ファウスト

我此の契約を破らんとは汝決して恐るゝ勿れ！



吾が心を盡して爲んと努むる所の者は、
 是れ正に我が茲に約束したる所にこそ。
 我は餘りに高く自ら居り自ら吹きたりき、
 然れども實は汝の位に我は相當する而已。
 夫の巨大なる神靈は我を侮蔑れり、
 自然は我の前に之が研究の門を鎖しぬ。
 思想の線は茲に切れ了り、
 我は一切の知識を厭惡す、
 いざ肉樂の深底に沈溺して、
 炎々たる情慾の火を鎮めなん！
 透視す可らざる魔術の秘幕裏に
 有ゆる秘技妙樂を演出し來れ！



我々は光陰の激湍中に飛こまばや！
 出來事の巨渦裏に躍り入らばや！
 爾時には苦痛と快樂、
 成功と失敗、走馬燈然と、
 其得べきだけ、交も來れよ！
 人は只熙々穰々ところを活動すべき者なれ！

メフキストフェレス

君が所爲には何等の限量も目標も置かれじ、——
 君若し到る處にて偷食せんと欲さば、
 快樂を其飛び去るに捕へんとせば、
 凡そ君を喜ばす事は善く君の望に叶へかし！

只請ふ速かに行れ、羞かしがる勿れ！

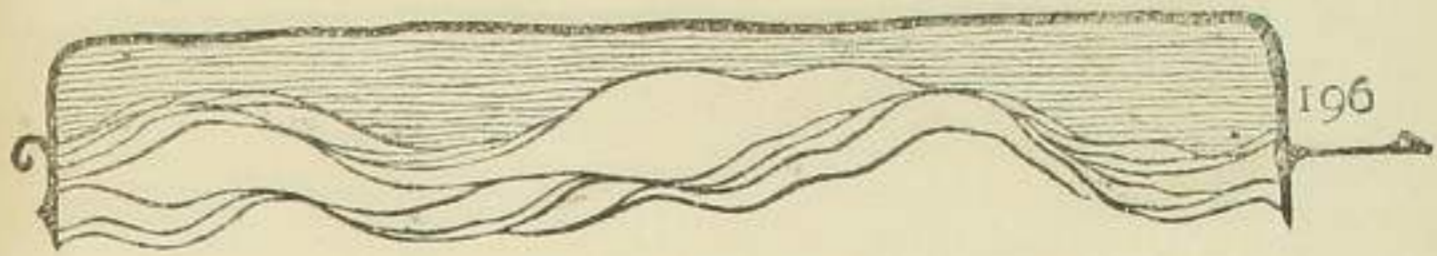
フアウスト

汝は聽つらん我は快樂を指して言へるに非ず、——
 我は此身を恍惚たる樂にも、苦痛極まる享樂にも、
 斷腸なる怨恨にも、鼓舞たる失敗にも、均く委す。
 吾が胸は、既に知識の渴望を醫されれば、
 今より後は何等の苦痛に罹るをも辭せじ、
 而して人類全體に天より配り與へらるべき物事は、
 我これを悉く吾が衷心に翫味し盡さんと欲す、——
 即ち吾精神を以て世の最も高き者及低き者を攫まん、
 之が諸の悲喜苦樂を夥しく吾胸に山積せん、

而して吾魂は彼等の魂にまで廣がりゆきつ、
 彼等の如く、我も終に亦破船し了らん而已！

メフキストフェレス

請ふ我を信ぜよ、我は幾百千年來、
 此〔宇宙天地てふ〕硬き食物を咀嚼せしが、
 人間には、襤褸より棺槨に至るまで、
 一人として此の舊醜〔宿〕を消化せしめ得る無し！
 我等の一〔が言ふ所〕を信ぜよ、此全乾坤は
 只一箇の天帝の爲にとて造らる！
 彼れ〔天帝〕は或る無窮の光輝中に住み、
 我々〔魔群〕をば暗黒裏に驅り去れり、



汝等「人類」は晝夜を本領とする而已、

ファウスト

然るも尙我は敢て爲さんとす、

メフキストフェレス

善い哉言や！

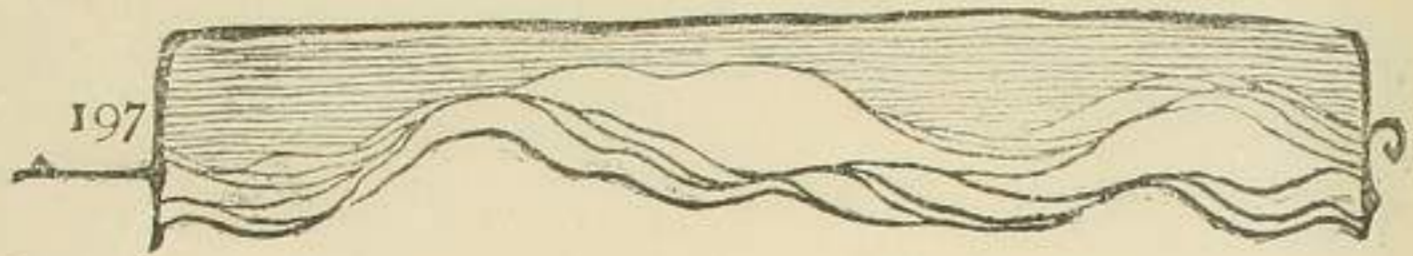
然は云へ、我は茲に一の懼るゝ所あるを奈何せん、

光陰は短かく、藝術は長し、

想ふに、君は心を虚しうして諫を容れん、

試に往て或る詩人を友に獲よ、

彼君をして思想を縦横せしめ、



諸の貴き美質を夥しく累々と

君が名譽の頭に積み重ねしめよ、——

「即ち兩々相反する者を一和せしめよ」

曰く、獅子の勇氣と牡鹿の疾速、

伊大利亞人の烈火然たる熱血と、

北方の深沈なる剛毅を「汝」に加へしめよ、

彼をして寛大と狡獪とを兼ぬべき

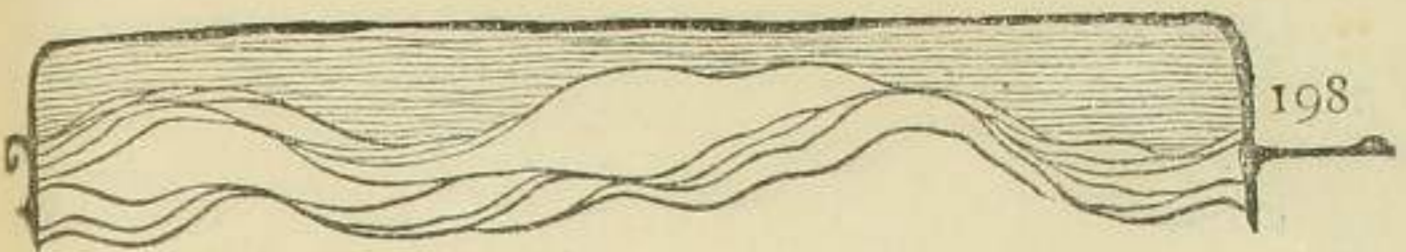
秘訣を汝に示さしめ、

又少壯の血氣熾盛なる身ながらに、

規矩を按じて節愛する方を汝に教へしめよ、

我自ら斯の如き君子を知らんこともがな！

之を小天地公とこそは名くべけれ、



嗚呼我や、若し吾が各能力の冀ふ
人間の冠冕を獲得する能はずば、
然る時は我果して何者たるぞや！

ファウスト

メフキストフェレス

汝は畢竟只汝のみ——汝の今在るが如き者のみ、
試みに百千萬の鬚毛ある鬚をかぶれ、
汝の足に四五尺も高き靴をはけよ、
然るも尚依然として汝は汝たる而已。

ファウスト

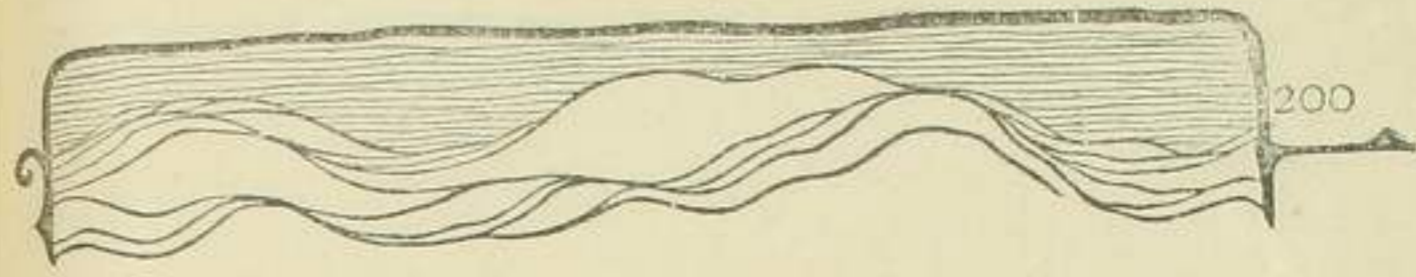


我は感ず、我は人心の有ゆる寶典を
吾が腦裏に空しく蒐集したりとし、
而して我は終に静坐默念するに、
心裏には毫も新たなる力の涌き出る無し。
我は秋毫も以前より身長高くはならず、
更に無窮無極の妙體には近よらざる也。

ファウスト

メフキストフェレス

吾が良き君よ、汝が事を観るや、
恰かも世人が事を観る如し、「平凡のみ！」



我々は开を今少し俗懶く行らざる可らず、
人生の歡樂未だ飛去らざる前に之を捕へなん。
吁嗟何ぞ妨んや、固より君は手もあり、足もあり、
頭も尻腹も亦君これを有す！

1480

頭も尻腹も亦君これを有す！

〔斯く肢體は多般なれども、然とて君(原文)が

1485

盛んに享樂む所は豈之が爲に君の有たるを滅ぜんや。

我若し六頭の馬を吾が廐に數へ得ば、

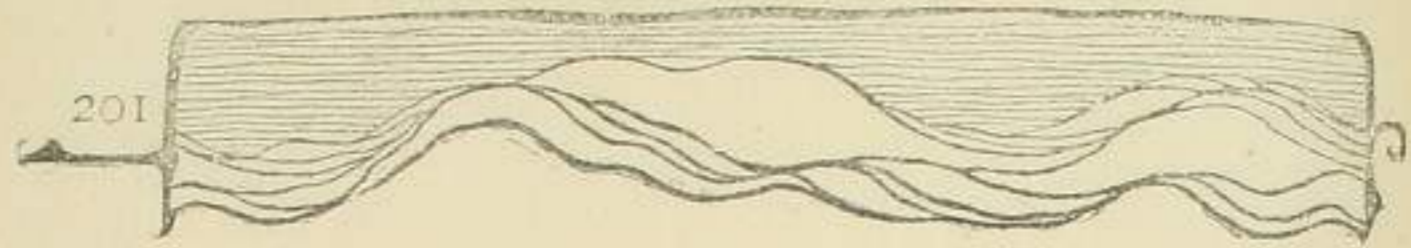
彼等が力は皆我のに非ざる乎？

我は縦横馳せ廻りつ、揚々得々たるや、

宛然我みづから二十四脛を有るが如けん。

1490

されば進んで行れ！諸の空想を脱却し、
相携へて直ちに世間へ飛こめよ！



我は君に白す、空想を逞しうする癡漢は、
恰かも悪魔に曳まはされつゝある牛馬の如し、
周邊には一面に緑なる草地牧場美しく横はるに、
己れは不毛磽确なる荒野に空く彷徨す也。

1495

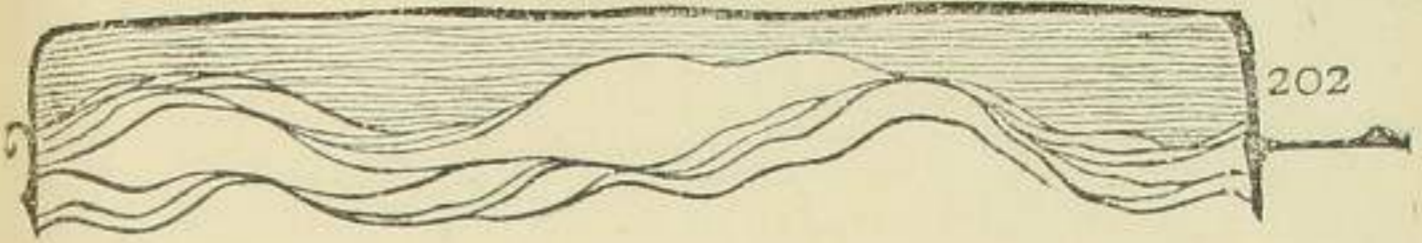
ファウスト

我等如何に之を始むべきや。

メフキストフェレス

直ちに出て往かん。

此は何たる苦難の場にて有るぞよ！
己が身と學生とを斯く兀々と倦退しむるは、



是れ何たる生活を行る者と稱すべきぞや？

請ふ之を隣公肚腹子に任せよ！

汝何を憂ならぬ空藁（かまわ）を打つに汲々と勞する耶、

汝が學び得たらん究竟の眞理は、

汝却つて之を書生に告るを敢てせざらん。

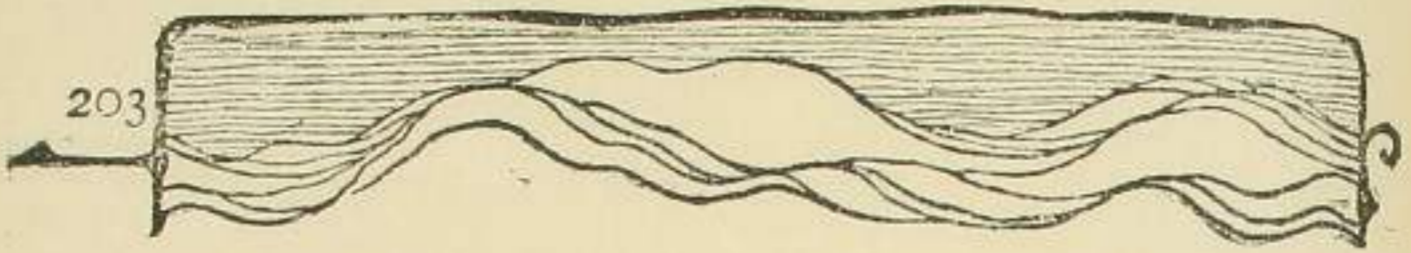
早や既に我は一書生の此に歩み來るを耳にす！

ファウスト

渠（かれ）に會ふは我今能はず好まず。

メフキストフェレス

彼の憐れなる少年は長く待をれり、



慰藉めずには歸り去らしむ可らず、

去來（い）君の長袍と帽子を我に借せよ、

此の假裝演劇は我の大好物にこそ、（彼變裝す）

今これを我が才智に一任せよ！

我は只十五分の短時間を要せん而已、

其間（ま）に君は斯愉快なる旅行に身を装ひ給へ、（下場）

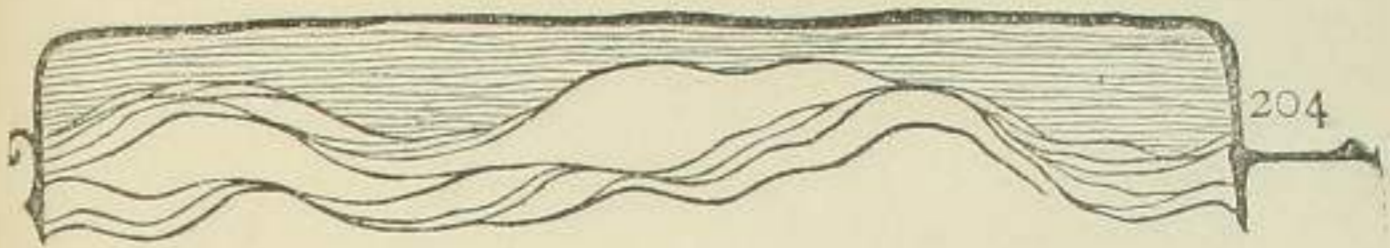
メフキストフェレス（ファウストの長袍を着て獨語すらく）

道理れよび知識てふ人類の最も尊き

絶妙の力を汝（ファウ）斯く輕蔑し去れよ！

只請ふ虚偽の靈に誑（たぶらか）らかされて、

迷想と魔業とに愈よ堅く執着せよ、



斯く我は既に汝を籠絡し畢んぬ！
 惡運は彼に一種の違々たる精神を與へたれば、
 飽までも不羈放縱にして、恒に駭々と猛進し、
 其太早急なる努力や、餘りに高飛して、
 遂に地上の快樂を悉く躍り越ゐ了れり！
 彼をば我は生活界の荒野を引まはし、
 索然無味なる虚樂境に彷徨せしめん、
 彼は遂に苦悶し、寒却し、顛仆せん而已！
 而して彼が飽く無き的情慾を翹るべく、
 佳肴美酒は彼が熱せる唇の前に泛々たらん、
 彼は清涼劑を徒らに空しく乞求めん耳！
 縱や彼れ「證書」などを以て「惡魔」に身を賣らずとも、

彼が如き「迂濶漢」は魔道に墮ちざるを得じ！

(二 學生登場)

(學生) 生は管地に始て來りて、日淺し、

而も誠の情充ち満ちて參れり、

是は全く萬人が恭敬を表して嘖々名へる

其の偉人と言ひ且之を識んが爲のみ。

(メフ) 子の禮に厚きや悦ぶに堪たり、

子は他の人々と毫も異らぬ一箇の人を茲に見るのみ、

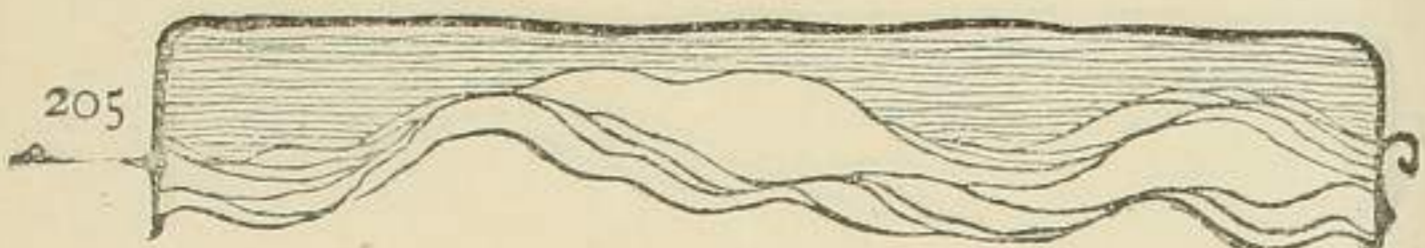
子は既に他處を尋ね見たりしや。

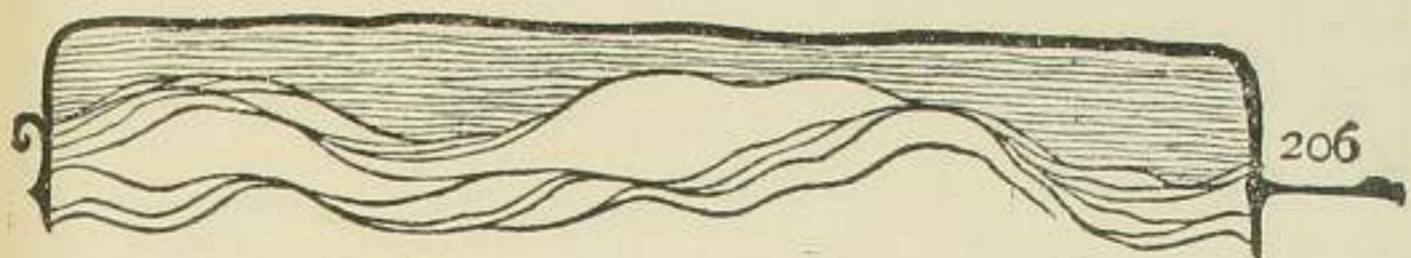
(學生) 先生に願ふ、幸ひに生を眷りみたまへ！

生は笑を負ひつゝ、全く大いなる勇氣と、

多少の金と新鮮なる血液を以て來れり。

生が母は生を遠く出すを好まざりき、





願くは茲にて真正なる知識を學び得んこともがな!

(メフ) 然らば子は善き處に來り中てたるなれ。

(學生) 憚らず申せば、實は既に復去りたくも有る哉!

此等の壁および此等の室は

決して生を喜ばしむる者にあらず。

是は全たく狭くるしき處にこそ!

絶て青き物を見ず、何の樹木にも出あはず、

而して講義室に於て椅子の上に坐す時は、

聽く事も、視る事も考る事も生を去んとす。

(メフ) 开は只習慣に本づく而已。

譬へば嬰兒も初は母の乳房に

甘んじて直には吸つかずと雖ども、

忽ち喜びつゝ、之を以て自ら養ふに至る。

斯の如く子も智慧の乳房に縋りつゝ、



日々に愈ふ之を嗜み吸ふに至らんとす。

(學生) 生は欣然と智慧の頭にすがらんとす、

但し先づ如何に之に達し得べきかを諭したまへ。

(メフ) 子更に歩を進むる前に請ふ解けよ、

何を子は自ら専門に撰びたりしやを。

(學生) 生は深く學びたる者とならんことを欲す、

凡そ天に在る所の諸の事物、

凡そ地に在る所の諸の事物、

即ち學術と自然とを悉く領會せんことを冀がふ。

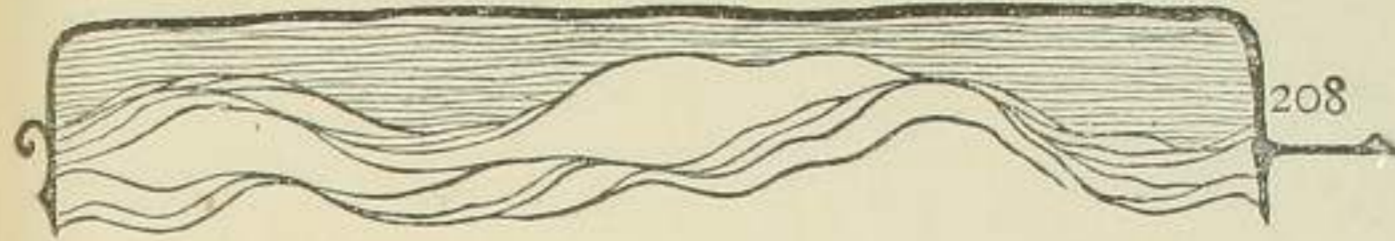
(メフ) 然らば子の「當地に來れる」如きは眞の見當を得たる者とす、

但し子は一に専らにして、氣を散さぬやう努めざる可らず。

(學生) 生は身神を盡くして之に當らんとす、

但愉快なる夏季休暇に際してや、

小許の自由と放浪とを獲るは、



眞に嬉しき事ならんとぞ思はる。

(メフ)

光陰を善く用ひよ、是は速かに謝し去る者ぞかし、

然し乍ら秩序は子に時間の節約を教へん、

親友よ、されば我は子に忠告す、

請ふ先づ論理學を以て始めよ。

然すれば子が精神は茲に練られんこと、

恰かも西班牙靴(刑具の名)裏に結び緊められたるが如ければ、

今より後「子の精神は」小心翼翼々として、

思想の途を匍匐し往くべく、

決して縦横十文字にフハフハと、

鬼火らしく彼方此方徘徊すまじ。

斯て人々は衆多の日を重ねて子に教ふるん、

飲食の如く自由に嘗て子が、

一氣に行りたりし所の事も、



一二三と唱へて行るを必要とすと！

寔に思想の織物たるや、

機織る人の巧を凝すが如し、

一たび蹈むや、百千の絲は動き出し、

梭は左右に矢の如く飛かへ、

紅紫絢爛たる絲は暗々裏に交錯し、

僅々たる一撃は千萬の結合を打出し來る。

然る時に哲學者は進み入りつ、

是は斯く有らざる可らずと子に示す也。

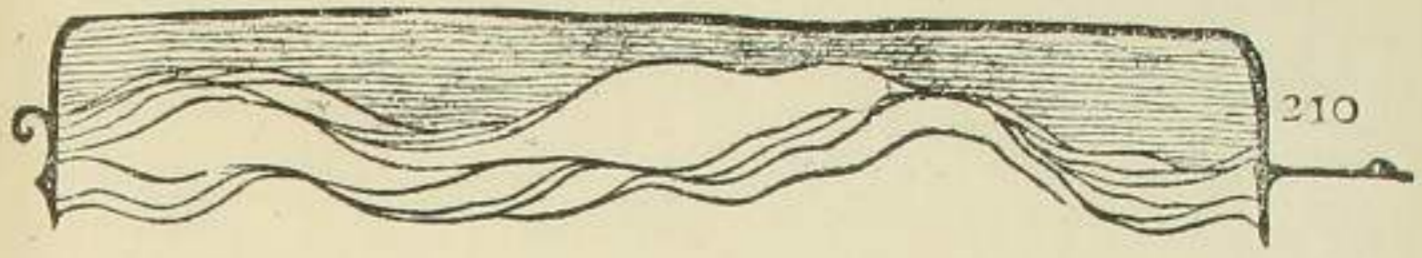
第一然らんには、第二も然らざる可らず、

さらば第三も第四も亦然るべし。

而して第一第二然らざらんには、

第三第四も亦斷じて然らじ。

此は是れ萬國の學生輩が均く珍重する所なれど、



新機軸を織り出す者彼等の中に興らざるを奈何ともする無し。

凡そ人は活物生類を究知し描寫せんと欲するや、先之が精靈神魂を其中より逐ひ出し了り、斯て其死せる四肢五體を手に操るを常とす、

吁嗟哀哉虚靈なる聯環は茲に闕く！

此の聯環を化學は自然の作用と名け、以て自ら嘲けり、竟に其所以を知らず！

(學生) 先生の言葉を十分領會する能はず。

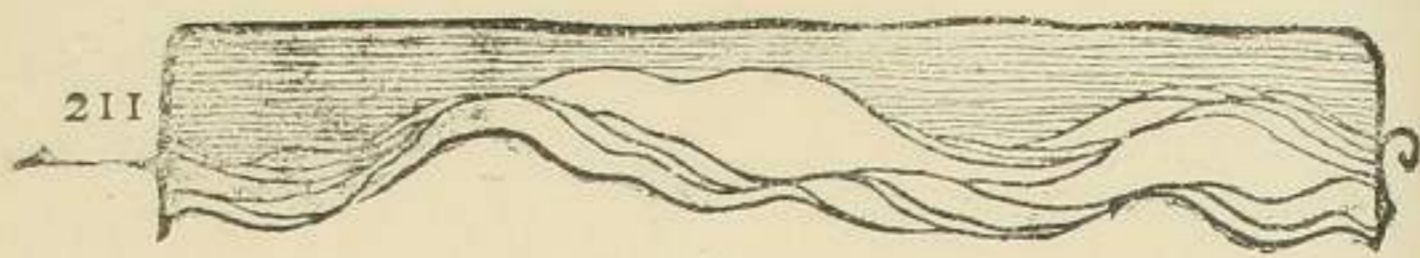
(メフ) 子が蒙は遠からずして啓かれん、——

子若し一切を還源約歸することを習ひ、之を適當に分類することを知らば「疑團頓に氷解せん」。

(學生) 此等すべての諭示に由て生は自ら其愚かなるを感ずる、

恰かも生が頭腦裏に水車の轉ずるが如し。

(メフ) 次に諸の他の事物よりも前に先づ



子は形而上の哲學に身を委ねざるべからず、

茲に子は人類の頭腦に當嵌らぬ事柄を

遠く深く學び究むべく、注意せよ、

凡そ腦裏に入る物および腦裏に入らぬ物、

共に立派なる言語文字ありて之を糊塗すべし。

但し第一に先づ少なくとも此の半年は

飽までも一定の秩序を堅く守れよ！

子は毎日「受業のために」五時間を有す、

時辰儀の鳴ると共に「教室」内に入て在れよ、

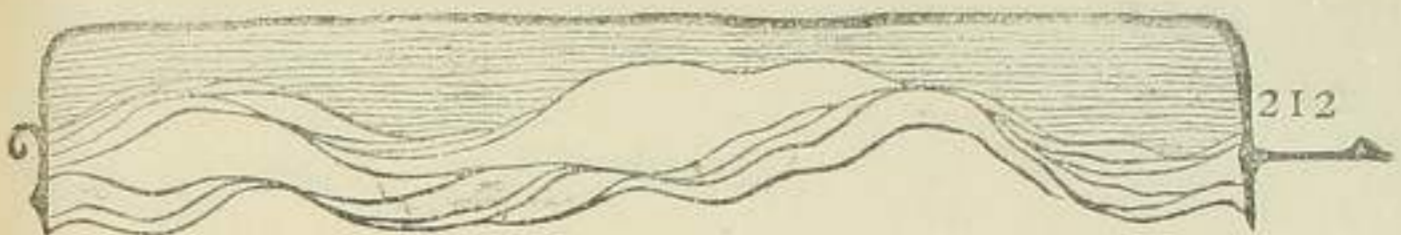
子は段節を善く學びおぼえて、

預じめ善く自から準備せよ、

然らば子は爾後一層善く認むるを得ん、

彼教授は只教科書中に在る事を講演する而已と！

但し筆記には尙孜孜として努むること、



恰も聖靈が汝に口授する者の如くせよ！

(學生) 是は先生再び生に宣のたまふに及ばじ！

筆記する事は如何に有益あるかと生は思ふ、

并もは墨もて紙の上に留とどめたる物は、

人これを安心して家に持ち還るを得れば也。

(メフ) 然し乍ら一箇ひとつの専門學科を擇べよ。

(學生) 法律學には生は甘んじて就く能はず。

(メフ) 我は子を之が爲に痛くは咎めじ、

我は此の學の如何なる者なるかを知る、

法律や權利の物たるや遺傳すること、

恰かも惡疾の永代相傳はるが如し、

旅より旅へと自ら播ひらがり、

處より處へと徐ろに波及す。

道理は墮落して非理と化まり、惡惠は鼠疫ペストと化まれり！



子は孫なれば、嗚呼禍なる哉(祖父の法律を戴)！

我々と偕ともに生れたる權理に至りては、

吁嗟哀い哉、之を何と絶て問ふ者なし！

(學生) 生が厭嫌は先生の教に由て更に強うせらる。

先生が誨へたまはん人は幸福なる哉！

生は殆んど今神學を學ばんと欲す。

(メフ) 我は子を誤まり導くを好まず。

されど、夫かの學に至りては、

邪逕よこしま、岐路を避くること甚だ難し、

神學の中には頗る大なる潛毒の存するありて、

之を藥くすりと看別みわけること殆んど能はず、

茲にても亦只一人の言を聽くを最も佳しとす、

師の言を以て金科玉條とせよ、

之を究むるに、——子は只言語文字(の末)に拘着せよ！



然らば子は安全なる門を通りて、

正確てふ神の殿堂に達することを得べし。

(學生) 併し乍ら言語文字には何等かの觀念なくんば非ず。

(メフ) 甚だ善し！唯餘りに鋭く自ら心思を勞す可らず、

恰かも眞正なる觀念の闕如する處に於てや、

〔之が代理たるべき〕一種の空虚なる言語早くも救すくい援に出で來る也！

言語は以て闕かふに甚だ妙とす、

言語は以て學系を作るに妙あり、

言語は空しく信仰するに最も妙ならん、

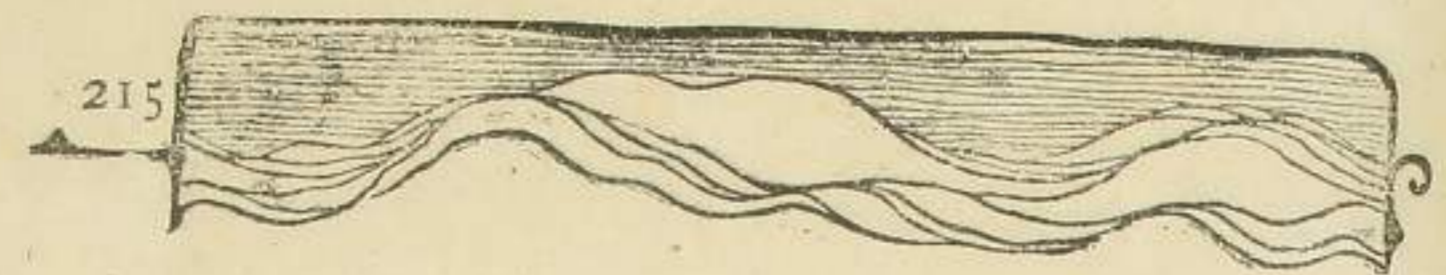
言語は一點一劃も竊まれて失ふ恐なけん。

(學生) 仁恕ゆるしたまへ、既に種々の問を以て先生を執へおけり、

然れども尙今一つ先生を煩らはさればならず。

醫學に就きても幸ひに先生は

亦剛勁なる一言を小生に垂れたまはずや。



三年の學期は之に取つて甚だ短かし、
而して南無三寶其領分は極めて濶し！

若し好指標をだに賜はらんには、
摸索たぐりして進むこと幾層容易なるらん。

(メフ、口中) 我は此の乾燥なる學者口調に今は飽果ほつ、

再び露骨に惡魔を演ぜざる可らず、

(別語) 醫學の精神は領會するに容易し、――

先づ大天地と小天地とを學び究めつ、

然る後終つひには天帝の御意のまにまに

自然の步履に一切を放任するに在る而已！

子は學藝の園に遠く奔り廻るは徒勞のみ、

吾人は各々只其學び得るだけ學ぶ而已、

然しながら眼前の瞬間に善く乗ずる、

是れ即ち俊傑のみ！



子の容貌は頗る美しく、
 勇氣にも亦乏しからじ、
 子若し只己れの力にだに信頼せば、
 他の人々は亦子に信頼せん耳！
 特別にも婦人社会を左右せんことを學べよ、
 彼等が恒に口にする『嗟、哀し』や『嗟、苦し』は、
 如何に百重千重なりとは云へ、
 皆悉く只一點より醫愈され得ん。
 子若し半ば禮儀正しく行なはば、
 遂には彼等を盡く左右することを得べし。
 一の學位先づ彼等をして信任せしめざる可らず、
 曰く、子が醫術は衆多の醫術に冠たる者なりと。
 然る時は自由に子は彼等が身體の「有ゆる部分を悉く摸り得ん、
 之を爲んために他の人は多年辛苦するぞ愚なる。」



請ふ織手の脈を善く押ふることを會得せよ、
 而して火の如き流眄を以て彼等を偷視し、
 其細き腰の邊を自由に摩さずりて、視よ、
 彼等が下紐は堅く緊られたるや否やと。
 (學生) 开は面白し！其「何處」や「何故」も亦知るべき耳。
 (メフ) 親愛なる友よ、一切の理論は皆老て鬢白し、
 只生命の黄金樹こそ獨り綠なるなれ。
 (學生) 生は先生に誓て申す、是は生には夢の如し。
 生や、他日再び先生を妨げて、
 先生の智慧の底を叩くことを得べきや。
 (メフ) 余が能する限りは、悦んで應へん。
 (學生) 生は實に「空く」還り去る能はず、
 生は尙先生の前に一冊の書畫帖を差出さざるを得ず、
 願くは先生の「惠の」徴證たる此一筆を吝み給ふ勿れ。



(メフ) 甚だ佳し! (吾は何ぞ)

(學生ヲ讀ム) 『致爾似神能別善惡』
(斯しんで之を閉めて離り退ぞく)

(メフ) 此の古き諺と吾從姉妹たる例の蛇とに汝從がへよ、

汝は神に似たる者ながら必ず遂に困頓せん爾。

1716

(フアウスト登場)

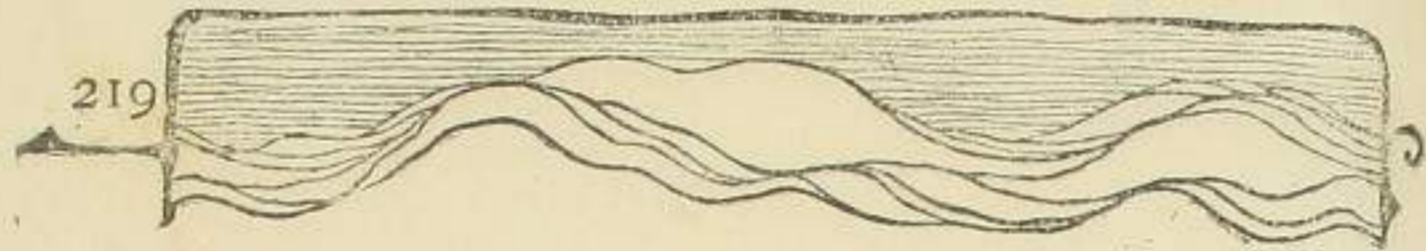
フアウスト

今何方へ往くべきか。

メフキストフェレス

何方へなりとも君の欲する處へ。

1715



我々は小世界を見、然る後大世界を見ん、
何たる歡樂を以て、何たる利益を以て、
君は必ず其の行徑を踊り過ぐべきぞよ!

フアウスト

但し我は長き髻あるにも拘はらず、
流麗なる坐作進退に乏し。

此の企畫は我に成功覺束なし、

我は決して世間に順應する能はざりき。

人々の前に出てや、我は己の甚だ小なるを感ず、

我は永く何時までも羞かしく思はざるを得じ!

1720

メフキストフェレス



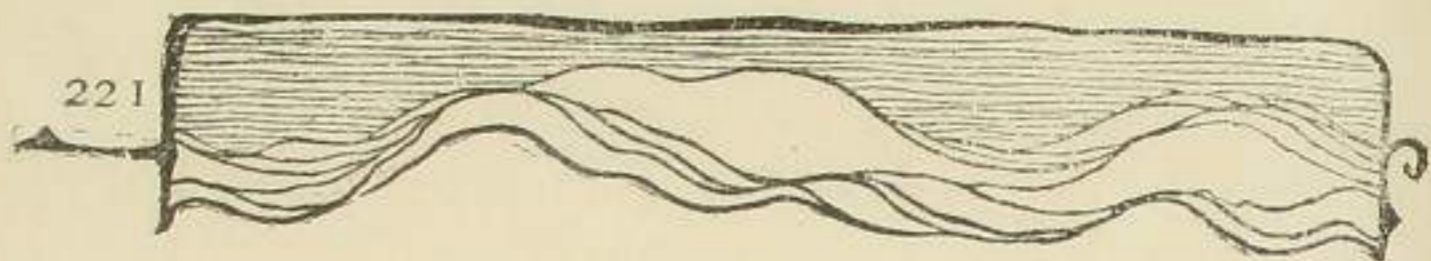
吾が良友よ、并は皆頓て消え失せなん、
君は自恃大膽なるや否や、忽ち世を度るの方を知らん。

ファウスト

我々は然らば如何様にして家を出づべき乎、
何處に汝は馬と僕と車とを有するや。

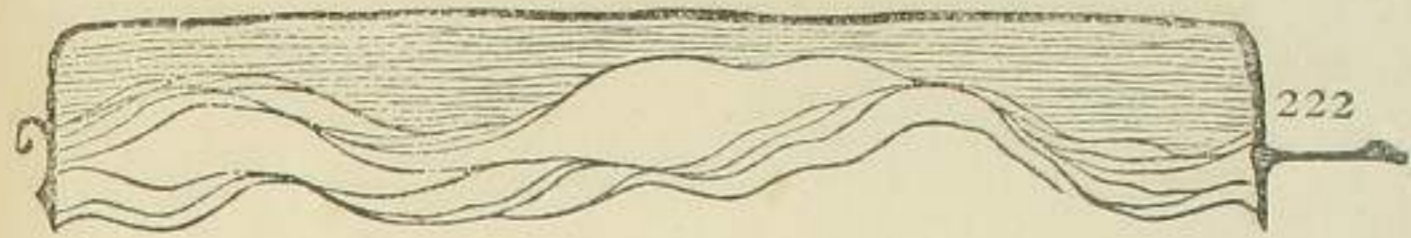
メフキストフェレス

我々は唯此の袍衣を打ひるげん耳、
然すれば是は空を經て我々を運ばん。
此の大膽なる遊行に於てや、
君只何等の大きな包をも携ふ可らず。



我が喚び起さん一陣の熱風は
速かに此の地上より我々を泛べ去らん。
我等若し軽くば迅く昇り行かれん、
我は君が此の新行徑を祝賀す。





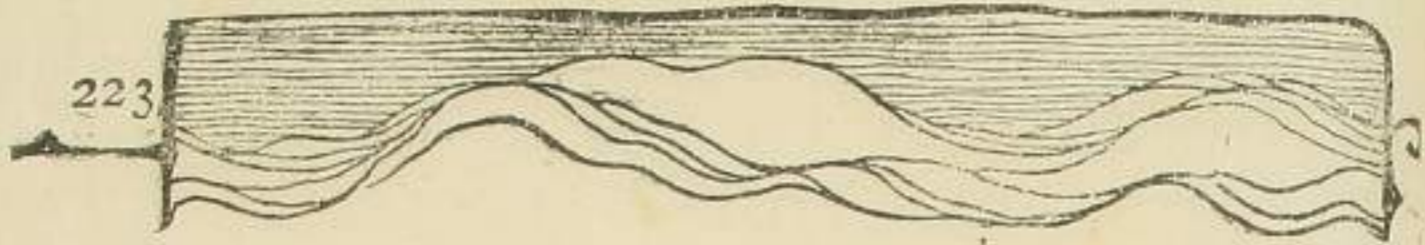
第五場

ライプチヒ
市に於ける アッエルバホ酒窟の景

醉漢の會飲

(フロシ) 誰も飲んか? 誰も笑はんか?
 僕は君等に苦笑することを教へて遣るぞ!
 君等は實に今日は濡藁の如くだ
 其癖いつても善くハシヤイで燃る奴さ!
 (ブランデル) それは君の所以だ君は何も爲ぬ、
 馬鹿な真似も、亂暴な真似もせぬからだ。

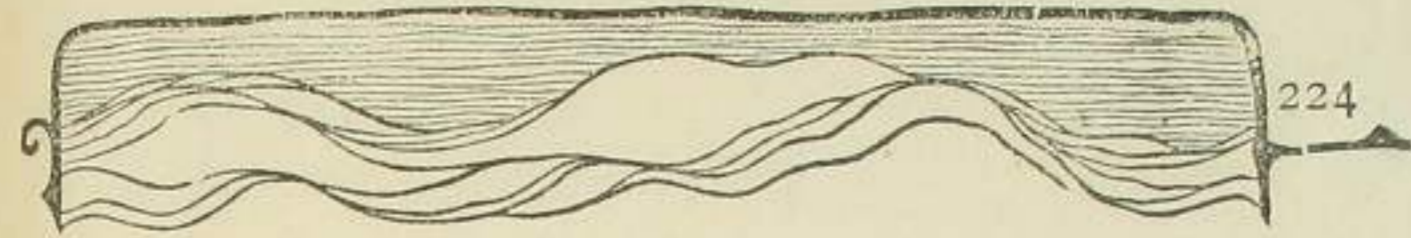
1735



(フロシ) 一杯の酒を飲ませかけて日(ヒ) そら兩方をやるぞ!
 (ブランデル) 二重の豚野老! 1740
 (フロシ) 君はそれを望んだのだ、つよや 咄(つよや)く譯(わけ)は無いや。
 (ジibel) 誰でも喧嘩する奴は戸の外へ逐だせ!
 胸膈を啓いて齊唱を歌へよ、飲めよ、叫べよ!
 率、ホラ、ホラ、ホー!
 (アルトマイエル) 吁嗟禍や! 大敗亡!
 綿を茲へ! 此癡漢は余の耳を破裂させる哇。
 (ジibel) 天井が歌に應へて響く時には、
 人は始めて善く男聲の根強きを感じずる。
 (フロシ) 本當だ! 何でも悪く思ふ奴は逐ばらへ!
 アイ! タラ ララ ダ!

1745

1750



(アルトマイエル) アー! タラ ララ ダ!

(フロシ) 咽喉は調子づいたぞ、行れ!

(ふ歌) 『親愛なる聖羅馬帝國は

如何ぞ今尙瓦解せざる乎。』

(ブランデル) 醜穢なる歌よ! 噫、政治詩よ!

嘔吐を催ほす俗歌よ! 朝ごとに天帝に感謝せよ、

君等が羅馬帝國の爲に苦慮するに及ばぬことを!

余は皇帝にも又は宰相にも非ぬことを、

少なくとも眞箇の利得とこそは見做せ。

併し乍ら我等にも亦首長あらねばならぬ、

我等も一種の法皇を選擧すべし。

諸君は知る、如何なる資格か

能く之が撰擇を決し、且其人を高むべきかを、

(フロシ歌) 『高く飛で翔あがれ、鶯姫よ、

吾が戀女子を千萬回祝せよ』

(ジibel) 戀女子を祝する不可! 开は余が聴かぬ!

(フロシ) 戀女子を祝せよ、接吻せよ、君は敢て妨げじ。

(又歌ひ) 『局鎖を開おけよ! 夜は暗くして静けし、

局鎖を開けよ! 情郎は目醒て寐ず、

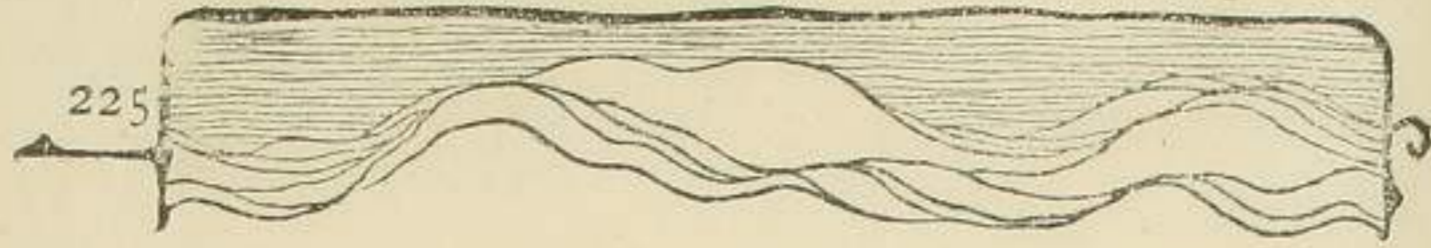
局鎖を閉せよ! 夜は方に明なんとす。』

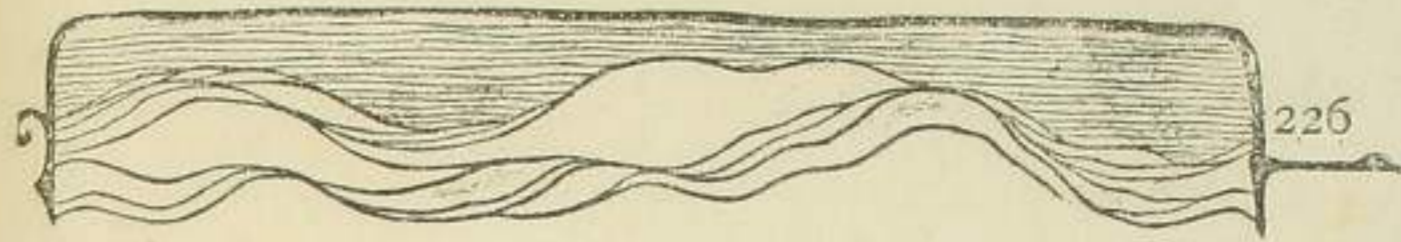
(ジibel) 善し、歌へ、只請ふ歌へ、彼女を譽よ、崇めよ!

余は我の時の來るを待つて笑ふべし。

彼女は我を操れり、汝をも亦然かせん。

情郎としては、コボルト(怪地)彼女に授けられよ!





彼は或る四辻にて彼女と戯むれん、—— 1771

或は一老牡山羊、ブロック山に於る魔舞よりの還るを、
驅歩して其請安靜を彼女に叫びかけん。

眞箇の血肉を有する快男兒は

彼の賣嬌婦には餘りに善さ過ぎたり！

我は彼女の窓を打破る事より外には、

彼女を祝すべき何の挨拶も有るを知らぬ！

1780

(ブランデル) 東西！東西！僕の言ふ所に従へよ！

諸君僕は中々の粹人であると認識たまへ。

今此には戀風をひいた人々多く坐しをる、

而して僕は、それぞれ諸君の品秩に應じて、

何か一同の利益に、安慰の好調を之に施さねばならぬ。

1785



注意を與へよ！謹聽せよ！極めて新奇の歌ぞ！
而て君等は其疊唱句を勢よく共に歌ひ給へ！

(彼歌ふ) 『一疋の鼠害藏の巢に住めり、——

頻りに脂肪とバタとを食ふや、 1790

其肚腹は便々と太り脹れつ、

ルーテル博士の腹の如くなりぬ。

炊婦これに毒を與へたれば、

彼が天地狭まりて苦むや、

恰も其胸を戀に焼るゝ如かりき。』 1795

(合唱皆叫) 『恰も其胸を戀に焼るゝ如かりき。』

(ブランデル) 『彼は走回れり、彼は驅出せり、

有ゆる水溜に渴をうるほし、



家を盡く引嚙り引搔きたれど、

1806

何物も彼が狂苦を救はざこそ！

吁嗟百千度悶へ躍りつ、

忽ち該脆き獸は弱り果るや、

(合唱) 『恰も其胸を戀に焼るゝ如かりき。』

(フランデル) 『白晝に於て夫の鼠は、

1805

苦痛に堪で、厨に飛こみつ、

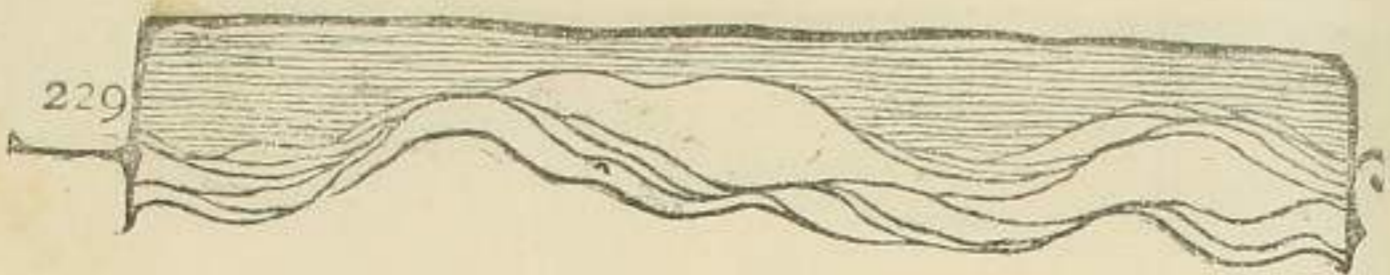
爐上に落て、七顛八倒し、

片息にして横たはりぬ、

茲に毒殺者は笑ふて曰ふ、

ハ、彼は九死一生なる、

1810



恰も其胸を戀に焼るゝ如かりき。』

(合唱) 『恰も其胸を戀に焼るゝ如かりき。』

(ジibel) 如何に没趣味なる俗物等は楽しんでをるぞや！

此等鼠輩の爲に毒藥を散布することは、

正に是れ此の我の當然なる職任ぢや、

(フランデル) 彼等は甚だ善く君の御機嫌にかなつたか

な！

(アルトマイエル) 此の便々たる腹かゝへた禿頭め！

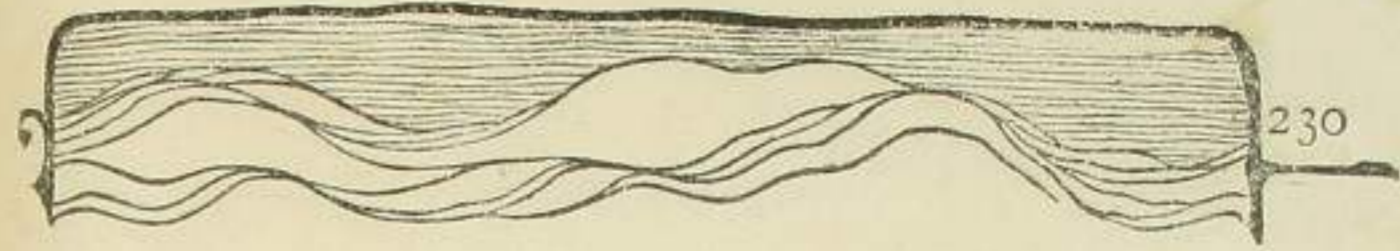
鼠の夫の不幸は彼奴の鋭氣を挫き去つた哇、

彼は夫の脹れ死んだ鼠に

己れの最も適切なる肖像を見るのだ。

1820

(ラアウストとメフ井ストフエレス登場)



メフネストフェレス (フアフストに
向ひふ日ふに)

我は今何物よりも先づ
酒飲仲間の中に君を攜へざる可らず、
然らば君は生活の如何に容易く度らるゝかを見ん。
群民には日々此は祭日にこそあなれ。
少量の才を懐き而も多分の愉快を感じつ、
彼等は各々世間の狭き環旋舞蹈に回轉すること、
恰かも猫の其尾を弄ぶが如き耳。
彼等は、頭痛を患へざるならば、
又窟主にして貸售する間は、
陶然と楽しんで、憂の何物たるを知らず。



フランデル

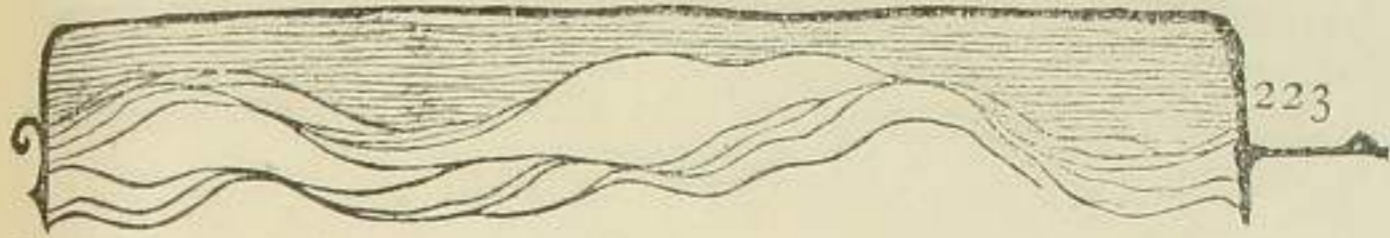
彼等は只今旅路から来たのだ、
彼等の奇妙なる服装でわかるよ、
彼等はまだ一時間と此地にをらぬ。

フロシ

本當だ、君は中つた、此ライプチヒ市を僕は讚るよ、
是は小巴里で、其人民は中々開けてゐる。

ジーベル

此等の旅人を君は何とみとめる。



フロシ

棄^す措^て僕^に行^きせ給^へ、一杯の酒を以て、
 僕は、恰かも小兒の齒を抜くが如く、
 此の人々の秘密を甘く探り出してやらう。
 彼等の身分は貴族と見ゆる、
 彼等は傲慢で、而もまた不平の色がある。

フランデル

放下師眩法師の如き野師だ、僕は一杯賭けるよ。

アルトマイエル

恐らくは、――

フロシ

注目せよ、僕は彼等を燻すぞ！

メフキストフェレス(フアウストに低語す)

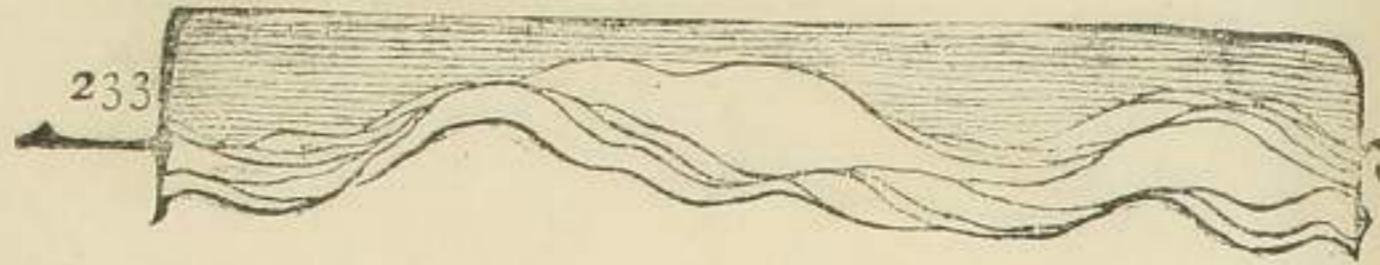
此等の小人ばらは、縦や悪魔之が襟を攫むとも、
 決して悪魔を嗅ぎ出し得ざる可し。

フアウスト

諸君肅んで挨拶を申し上ぐ。

ジーベル

答禮に――多謝多謝！



(メフキストフエレスを側面より見て低聲に曰ふ)
何？ 彼奴は片脚跛行するよな、

メフキストフエレス

我々二人は君等の仲間に入るを許さるゝや？

美酒佳肴は茲には迎も獲られねど、

佳會良伴は大いに我々を楽しませすべし。

アルトマイエル

君は甚だ口の奢つた人と見ゆる哇。

フロシ

君は随分遅くりッパホ町から出かけられたるらし。
君は只々今しがたハンス君(實は疑漢の紳士)と晚餐を喫て來れた乎？

メフキストフエレス

今日は我々かの人を通り過したり、

彼の人とは此前(の)時會談面晤したるが、

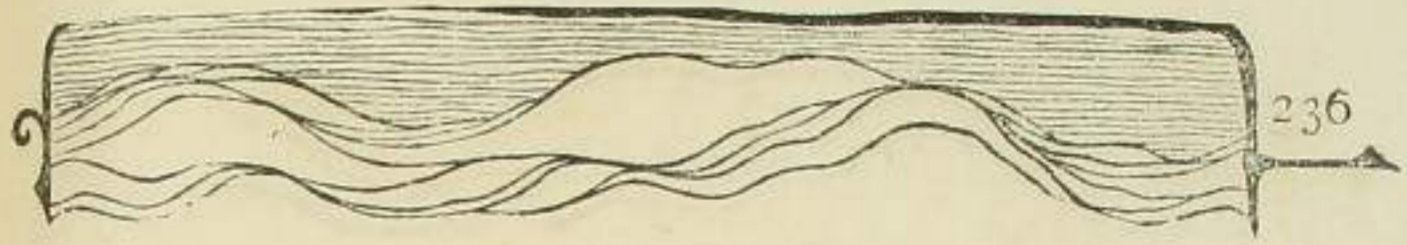
彼其從兄弟等(即ち)諸君の事に關て多く言ふ所あり、

各方(おのづか)に宜く申さんことを呉々も我々に囑めり、

(斯く言ひてフロシに向ひて腰を屈む)

アルトマイエル(低聲に言ふ)

君一本參た！ 食ない奴じや。



ジーベル

狡猾なる人物よ！

フロシ

只待たまへよ、僕は直に彼を執攫へてやるぞ！

メフ#ストフェレス

若し余誤らずんば我等二人は聴けり

老練なる音聲の疊句を歌ふを。

寔に歌謠は必ず此にては優秀に

斯の穹形天井より反響し來るならん。

フロシ

君は明白に是れ素人音楽家ならん。

メフ#ストフェレス

オ！否な！腕は鈍けれど、只嗜好強きのみ。

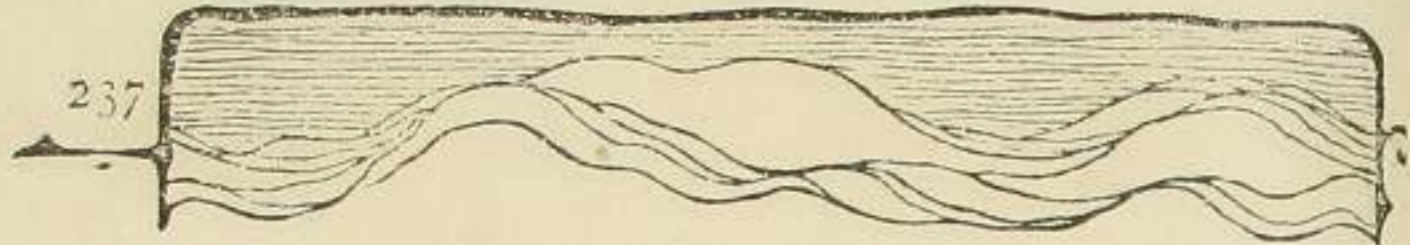
アルトマイエル

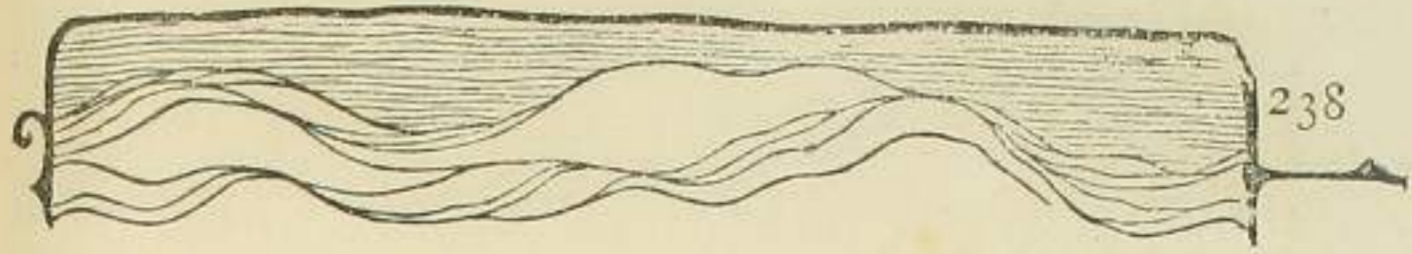
請ふ我々に一篇の歌を聴かせ給へ。

メフ#ストフェレス

君等欲するならば、何程にても〔歌はん〕

ジーベル





只請ふ一篇の斬新なる者を〔歌はれよ〕

メフ#ストフェレス

我等は只今イスバニアより還り來れり、
夫の酒と歌との豊富なる美國より歸れり。
〔歌ふて〕『嘗て一人の王あり、

一疋の大いなる蚤を有り—』

フロシ

聽けよ、一疋の蚤！諸君は然か聽とりしか、
蚤は余には好箇の珍客ぞよ。

メフ#ストフェレス〔歌ふ〕



『嘗て一人の王あり

一疋の大いなる蚤を有り、

之を王は痛く鍾愛する、

宛然己れの實子の如かり、

王は其御用裁縫師を喚び、

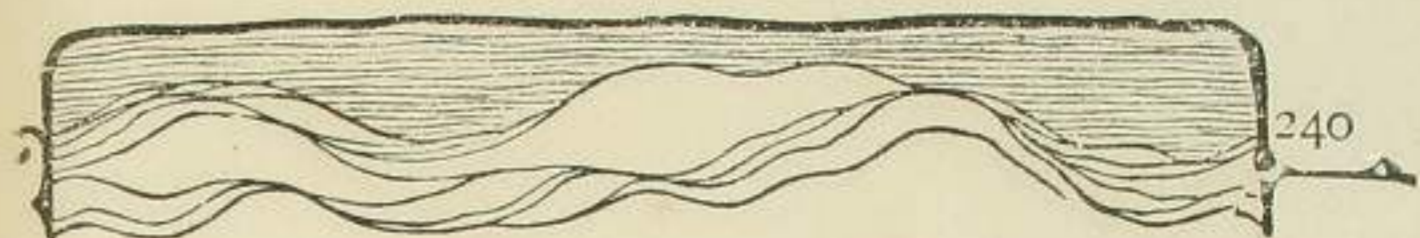
裁縫師頓て到るや、曰く

此少年の爲に袍の寸尺を量れ、

又彼が爲に褲裳の長を量れ。』

フランデル（まぜか）

請ふ裁縫師に命ずるを必ず忘れ給ふな
曰く、最精密に寸尺ゆきたけを量れと、



又曰く、首は彼に貴重なる者なれば、
开をかけて、襖裳に皺を生ぜざれと。

1885

メフキストフェレス (歌くひ)

天鵞絨と絹もて

彼は今装はれつ、

其の袍にはリボンをつけ、

胸には亦十字架をかけ、

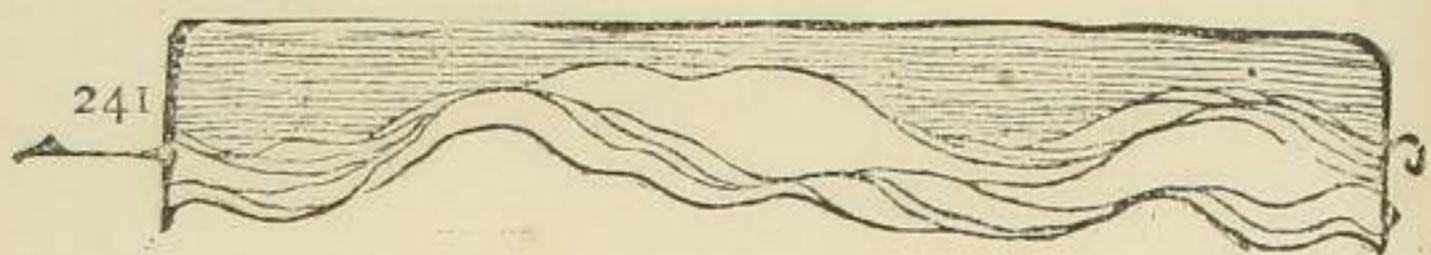
一躍して大宰相となり、

忽ち大勳章を耀やかしぬ、

頓て其兄弟もまた皆

官廷に入て嬖人權臣と成れり。

1890



滿朝の大官及び貴女は
甚だ之が爲に惱まざる、

1895

王妃と宮女とは皆俱に、

整れ又囁れつゝも、

敢て之を拈る無く、

又これを搔き拂ふ無し！

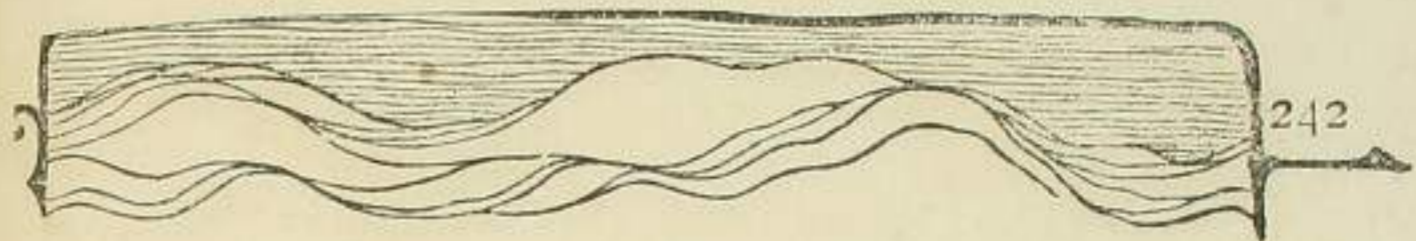
我々は能く、其整すや否や、

1900

これを拈り、之を潰す也。』

(合唱) 『我々は能く、其整すや否や、

これを拈り、之を潰す也。』



フロシ

妙！妙！是は甚だ美はし！

ジーベル

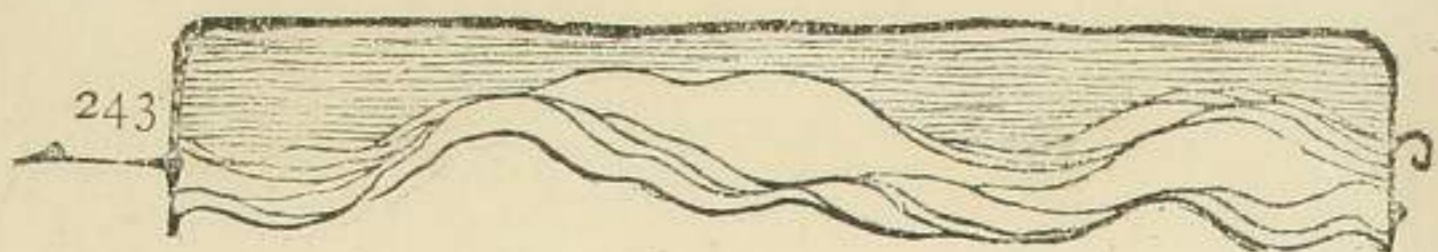
有ゆる蚤は皆斯る刑に遭へかし！

ブランデル

指を尖らして、之を拈り潰せ。

アルトマイエル

自由萬歳！葡萄酒萬歳！



メフキストフェレス

只君等の酒にして若し今少し良好らんには、
余も自由を高く榮すべく喜んで一杯を飲んものを。

ジーベル

我等は其言葉を再び聴くを許さぬぞ！

メフキストフェレス

僕は主人が苦情を鳴らさんを恐る、
然らざれば此等の珍客に好飲料を
我々の酒害の裏より獻呈馳走せんものを

ジーベル

直ちに行り給へ、其咎は僕が引受ける。

フロシ

美酒一杯をふるまひ給へ、我々直に君を稱讚する。
只請ふ餘りに少量なる標本を與へ給ふな、
如何といふに、僕若し鑑定すべくあるならば、
それを口に十分入れて見るを必要とする。

1915

アルトマイエル(低聲に言ふ)

彼等は、余の察せる如く、萊因地方より來たのだ。

メフキストフェレス

請ふ錐を執り來れ。

1920

ブランデル

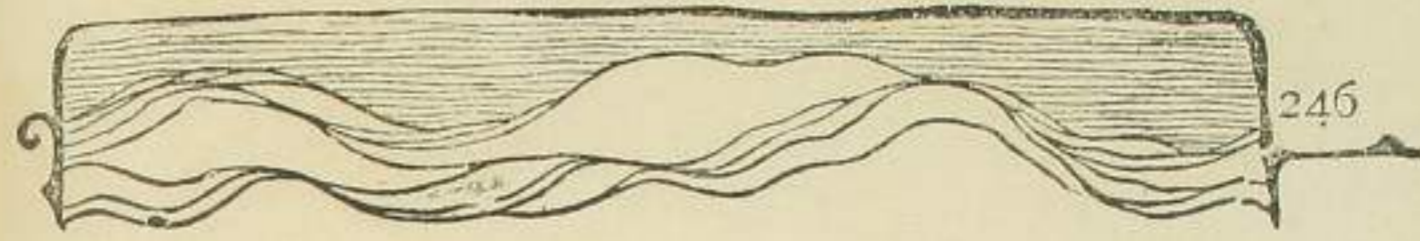
开を以て何を爲んとする乎、

君は未だ樽を門口かどぐちに持ち來らぬに非ずや、

アルトマイエル

後方うしろに主人は一箇の小道具箱を置けり。

メフキストフェレス(錐を執り、而してフロシに言ふ)



今請ふ君何を味はんと欲するか言はれよ、

フロシ

开は何たる意味ぞ、君は然か幾種をも有する乎、

メフ井ストフェレス

僕は君等れのくが自由に擇ぶに任す、

アルトマイエル(フロシに向ひて)

アハ、君は早くも既に舌鼓を鳴らし始むるか！

フロシ

善し、僕若し揀ぶべくば、萊因葡萄酒をもらはう、



祖國こそ最も佳美なる賜物を與ふるなれ、

メフ井ストフェレス(フロシが坐せる處の卓隅に一箇の孔をもみながら)

請ふ小許の封蠟を獲きたれ、直ちに栓を造くるべく、

アルトマイエル

嗚呼是は幻法師の爲ぞよ！

メフ井ストフェレス(アラフテルに向ひて)

而して君は？

アラフテル

僕はシャンパン葡萄酒を願ふ——

而して开は至極輝やいて泡だつのにして呉たまへ！

(メフキストフエレスは錐をもむ然る間に一入蠟栓を造りて其既に成れる孔に填め塞ぐ)

吾人は外國の物を必ず排斥する能はない、
奈何せん佳物は往々吾人を遠く離れて横たはる。
眞箇の獨逸男兒は佛蘭士人を容ることは能はぬ、
けれども佛蘭士の葡萄酒は喜んで飲むぞへ。

1935

ジーベル (メフキストフエレスが己の座に近づくを見て)

僕は憚らずに申すが、酸葡萄酒は好ない、
何卒本當に甘いの一杯を僕にふるまひ給へ。

メフキストフエレス (権らみ)

1940

君の爲には直ちにトケー葡萄酒涌いづべし。

アルトマイエル

否な、兩君よ、僕の顔を善く視たまへ、
僕は視ぬいた、君は我等を弄ぶのぢや、

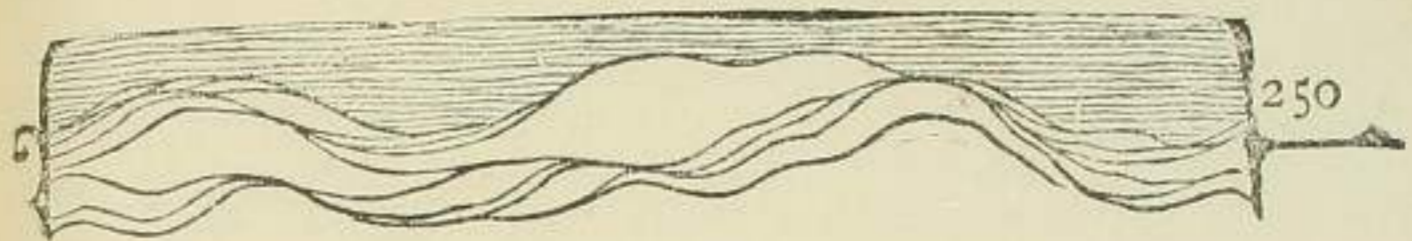
メフキストフエレス

噫々、斯る貴賓に對してや、开は
餘りに大膽なる業なんめり！

(アルトマイエルに) 早速！只請ふ迅速に言出られよ、
何の酒を以て君にまゐらすべき乎。

1945

アルトマイエル



何なりとも、——只長く請はせ待たさるなよ！

メフキストフェレス

(孔盡く鑽れ且栓せられて後メフキストフ
エレス奇妙なる姿勢して咒文を唱て曰く)

葡萄は葡萄樹これを生じ、

角は牡山羊これを戴だく！

葡萄酒は液汁のみ、蔓は木のみ、

木卓も亦能く酒を出し得べし、

深邃の眼を以て自然を洞見せよ！

茲に一種の奇蹟あり、只管信ぜよ、

(衆に向いて) いざ蠟栓を抜きて、樂み飲めよ！

一同 (栓を抜きて杯につぎて曰く)



嗚呼美なる泉よ、何ぞ沛然たる！

メフキストフェレス

只請ふ一滴も覆さざるべく慎しめよ！

一同 (類りに飲み
歌ひて曰く)

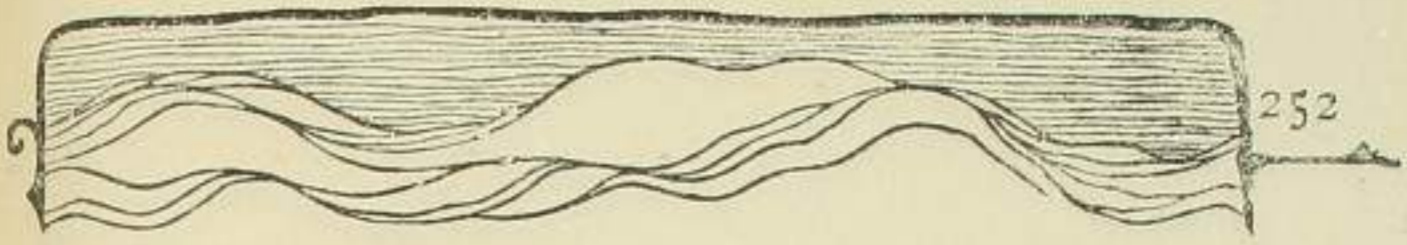
我等は宛然五百の豚のごと、

寔に全く食人蠻なる哉！

メフキストフェレス

此の民は自ら恣にす、觀よ、如何に彼等得々たるぞよ！

ファウスト



余は今辭し去らんことを願はしけれ。

メフキストフェレス

唯先づ注意を與へよ、彼等の獸性は
熾盛^{さかん}を極めて顯はれ來らんとす。

ジーベル(不注意に飲みけるに、酒牀上にこぼれて忽ち火となりければ言ふ)

助けてくれ、火事だ！助けてくれ、地獄^{じごく}が燃ゆる！

メフキストフェレス(火焔に向ひて言ふ)

静まれよ、友善原素よ、

(一座に向ひて)此の度は只煉獄^{れんごく}の火の一滴のみ。



ジーベル

是は何たるべき、待てよ、君は罰が重いぞ！

君は未だ我々の何者たるを知らぬと見ゆる。

フロシ

其の惡戯を二度と再び我等に試むるなよ！

アルトマイエル

我々全く穩やかに彼を去らしむる方善^{かた}らんと思ふ。

ジーベル

何？君、彼奴^{かやつ}何たる大膽、



茲に敢て其幻術を行なはんとする耶、

メフ井ストフェレス

静まれ、老酒樽めら！

ジーベル

此の箒柄野老！

貴様はオマケに亦我々を侮辱しやうとする乎。

ブランデル

チヨット待て、鐵拳を雨ふらせよ！

アルトマイエル(一箇の栓を卓隅より拔くや、火彼に飛かゝる)

あゝ熱い！熱い！

ジーベル

こいつは魔法だ！

ヤツツケロ！渠奴は斬殺無構だ

(皆ナイフ抜つれて、メフ井ストフェレスに切つてかゝる。)

メフ井ストフェレス(嚴然とし)

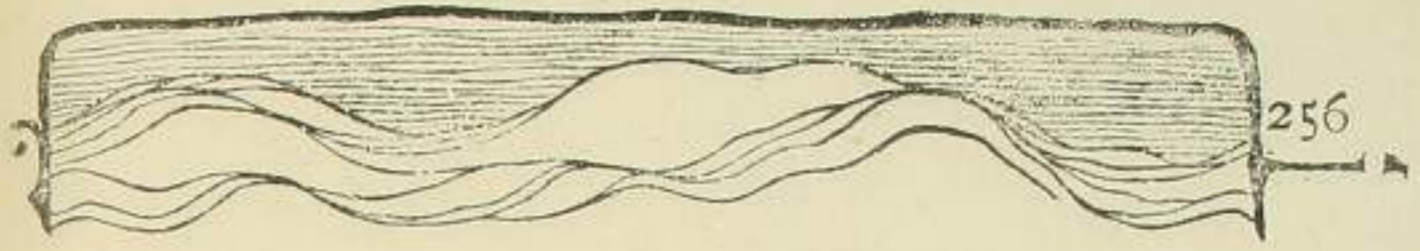
虚幻なる形状及び言語あらはれて、

方處を一變し、耳目を迷はせよ

汝等近く此に在れ、遠く彼處に在れ！

(彼等騒ぎ立ちて、互に相怪み見る。)





アルトマイエル

此は何處ぞ、嗚呼何等の美しい國よ！

フロシ

幾多の葡萄園よな！我が視る所錯はざる乎。

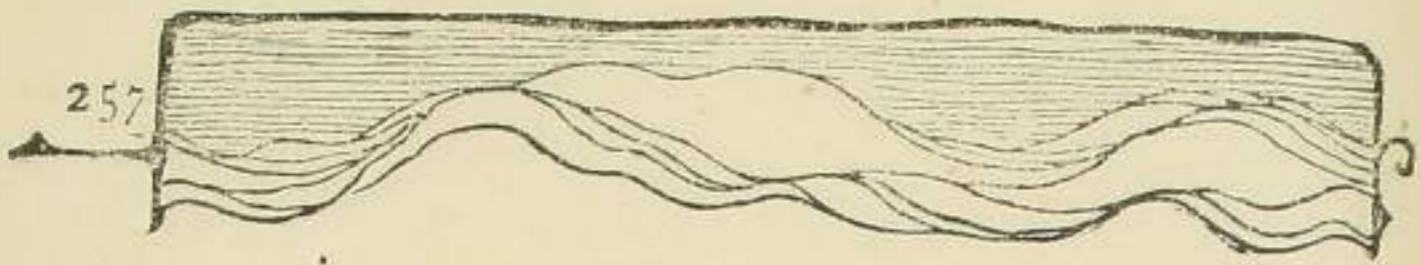
ジーベル

而して業々たる葡萄も直ぐ手近に！

ブランデル

茲に、此の翠緑なる枝葉の下に、

嗚呼視よ、何たる樹幹！嗚呼視よ、何たる葡萄！



(アランテル斯く言ひて、ジーベルの鼻を扭むや、他の人々亦相互に同様の事を爲し、遂に皆ナイフを振あぐ)

メフ井ストフェレス (前の如く嚴然と)

迷妄よ、彼等の目より其覆巾を脱れ！

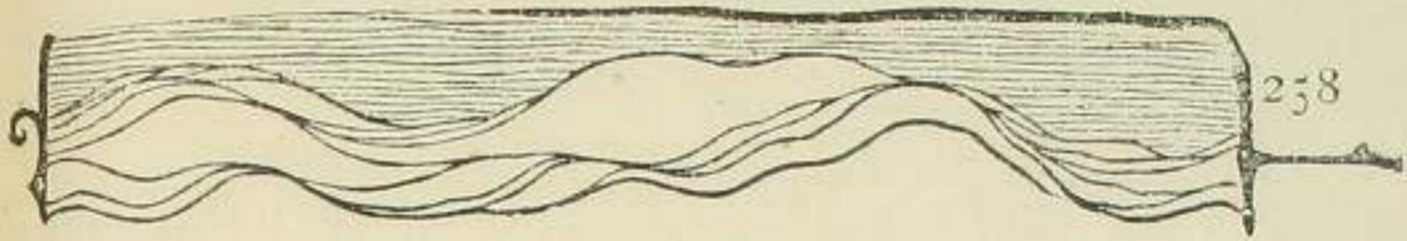
而して醉漢汝等は如何に悪魔が戯るかを見よ！

(メフ井ストフェレスは頓てファウストと偕に消え去り、醉漢は漸やく互ひに相わかる)

ジーベル

何事を見たるか？

アルトマイエル



嗚呼何如に？

フロシ

开は君の鼻なりし乎。

ブランドル(ジールに)

而て君の鼻を余は手に扭めるや。

アルトマイエル

嗚呼五體に痛く響く打撃であつた哇！

椅子を貸して呉れ給へ、僕は倒れる。

フロシ



否、何事出来したのか解らぬ、一體何だつたらう！

ジール

渠奴は何處にをる、余若し彼を探し出さば

必らず彼を活しては還らさぬ！

アルトマイエル

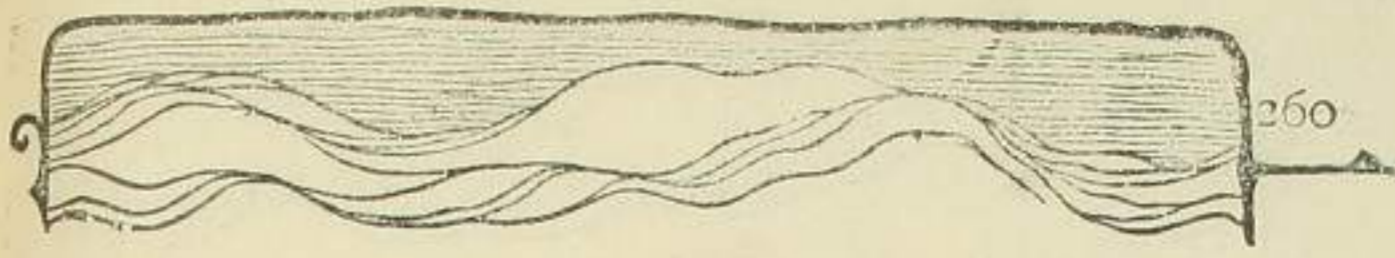
僕は彼が此の酒窟の門口より

一箇の檜に乗つて出て行くを見た、

僕は脚が鉛の如く重くなつた哇、

(卓に身を)噫残念！夫の酒尙も涌き出でん事もがな！

ジール



徹頭徹尾欺妄のみ、誘詐のみ、外觀のみ！

フロシ

然し我には葡萄酒を飲みてある如く思はれたり。

ブランデル

但し夫の曇々たる葡萄は如何せしや。

アルトマイエル

何の奇蹟も信ぜじとは今復誰か能く言んや。



第六場

妖婆の製薬爐

(低き爐中に一箇の大釜火上に掛り、其釜より立ち昇る蒸氣中には種々雑多の形象現はる、——一疋の牝猿は釜の側に座し、且其沸こほれぬやうに氣をつけ、一疋の牡猿は其子猿等とともに近く坐しつ、自ら煖たむ、——壁および天井は奇々妙々なる幾多の妖婆用器具を以て飾りつけらる)

(ファウスト及メフ井ストフェレス登場)

(ファウ) 此の狂愚なる妖術魔法は我これを嫌惡す、

我は此の狂亂なる混沌窟裏にありて
若かへらざる可らずと汝主張する乎！



我は一老婆より勸告を求めればあらぬかよ。
 夫の醜穢なる煮烹物は我が身體より
 三十年の星霜を除き去らんとする乎。
 汝若し更に善き工夫を知らぬならば、吁我は禍ふる哉！
 希望は既に我に消失をはんぬ。
 自然の天または人中の穎才も未だ
 何等の良薬をも發明せざる乎。

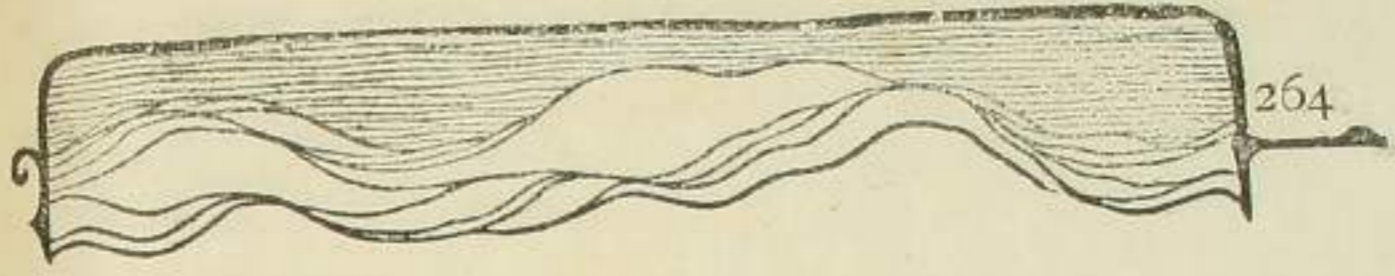
(メフ) 吾が友よ、君は今復も智く物言いだせり、
 君を若がへらすには亦天然の一方方法ある也、
 但し开は或る他の書中に記述せられたり、
 而して之が奇妙なる一章を成す者にこそ！
 (フアウ) 我は之を知んことを欲す。

(メフ) 善し、此方法は、之を獲るに、
 金銀も醫師も魔術も全く要ぬ者ぞ！



直ちに出で往きて、彼の田野に身を寄せよ、
 耕へし釋ぎることを始めよ、
 汝と汝の耳目を制限して
 一箇の全く狹隘なる範圍に止めよ、
 淡泊極まる食物を以て汝の身を養なへ、
 牛と偕に全たく牛の如く生活せよ、
 又其稼穡地に自ら配糞するを卑しとせされ。
 是は八十歳にて尙自ら若がへるべき
 最良の方法なりと請ふ信ぜよ！

(フアウ) 我は之に慣れず、我は自ら屈して、
 手に鋤犁を握るを屑しとせず、
 夫の狹隘ふる生活は全く我に適はず。
 (メフ) 然らば妖婆に頼まざる可らず。
 (フアウ) 何ぞ斯く一に夫の老婆を説くや！



汝は手づから其飲料を醸す能はざるや。
(メフ) 开は蓋し絶好なる消閑事業あるらん!

我は其間に寧ろ一千の橋を築造せん哉。
管に藝術と學識とを要する而已ならず、
此の煉藥事業には亦忍耐あらざる可らず。

恬靜ふる靈幾年となく着々之に従事す、
長歲月獨り能く斯の妙劑をして神効あらしむ。

且又此の醸造物に入るべき物は、
悉皆全く稀世の珍品なるぞかし!

惡魔これを彼女に教へたるは然り、
されど惡魔は自ら之を製する能はず。

(時は彼の國を見つけてファウストに言ふ)
視たまへ、何たる可憐の族類ぞよ!
彼は婢(北)かり、此は僕(奴)なり、



(誰様と)奥様(様)は宅に居らぬと見えるな?
(猿猴) 宴飲にとて、
家を出づ、
煙突を經つ。

(メフ) 彼女は如何ほど長く出遊ぶが常なる?

(猿猴) 我々が手掌を纒に煖むるだけ長く。

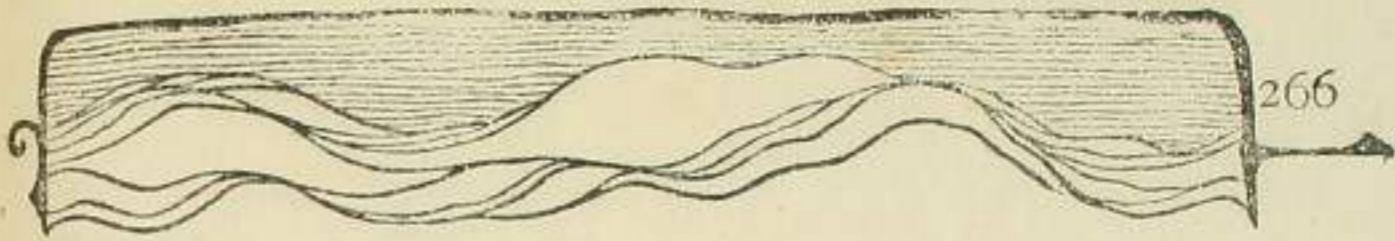
(メフ) 君は夫の可憐なる動物を如何んか視る?

(ファウ) 我は未だ斯の如き疑駭ふる者を他に見ず!

(メフ) 否な、彼が如き言語こそ、
是れ正に我が最も悦ぶ者なれ!

(猿猴) 詛はれたる傀儡兒よ、請ふ我に告ふ、
汝等は其粥(釜)の中に何を攪廻しをるや。

(猿猴) 我々は乞食の薄汁を賣てをり。
(メフ) 然らば汝等は大衆を「客」に獲ん。



(牝猿 近よりてメフ) 唯請ふ骰子を投ぜよ!

而して我を速に富しめよ!

我をして必ず勝しめよ!

寔に世は安排悪るし、

我若し金もちてあらば、

我は亦智慧も有なん!

(メフ) 此の猿は富穢に加入ることなだに得たらば、

如何に自ら幸運なる者と喜び想ふならん!

(然る間は少衆等一箇の火球を争をびるたりしが、今之を前へめし行く)

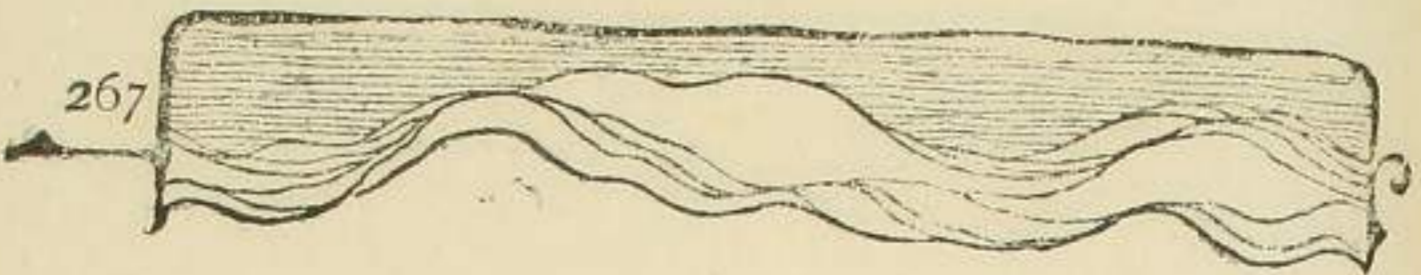
(牡猿) 世界は斯くこそあれ、

一たびは昇り、一たびは降り、

恒に轉びて止まざる哉!

其鳴るや玻璃の如し、

其脆き豈之に劣らんや!



何ぞ其れ速かに碎くるや!

其内や空洞にして虚し、

此に开は甚だ輝く、

此に开は殊に愈よ赫灼!

我は今颯然として活くり!

吾が愛する兒よ、

汝の遊戯をやめよ!

汝も亦死なざる可らず!

皆噫土塊よりぞ成れる、

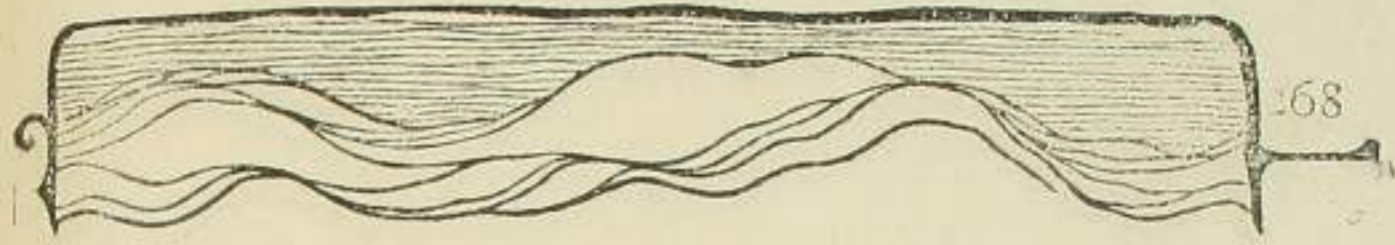
瓦礫焉ぞ衆々たらざらん!

(メフ) 此の節は何たるべき?

(牡猿 おれを執) 汝若し盜賊にて有るならば、

我は直ちに汝を知り得ん。

(前は牝猿の所へ走り行き、蛇籠をして其處を覗かしめて曰く)



此飾を覗き見よ、

汝その盜賊を知りつ、

而も之を名ふを敢てせざるか？

(メフ、火の傍へ池) 而て此の鍋は？

〔叱咄兩猿〕 此の蒙昧なる痴漢よ、

此の鍋を知らぬ者は

彼の釜をも亦知らぬ！

(メフ) 無禮なる獸よ！

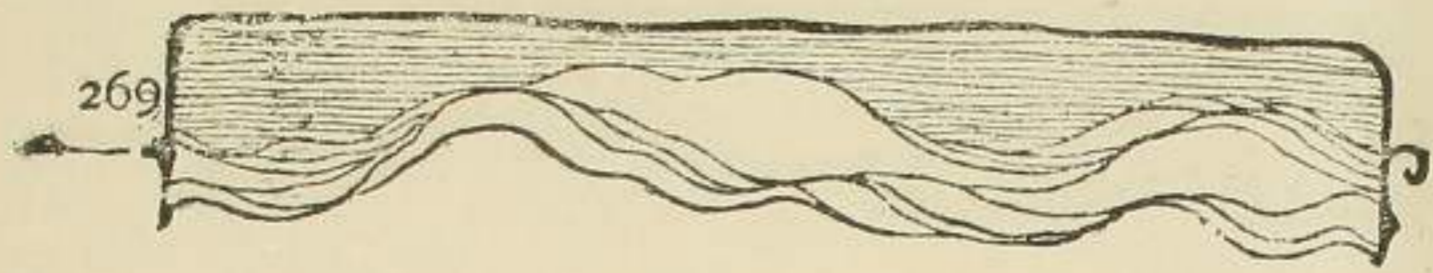
(牡猿) 請ふ茲に拂塵子を執れ、

而して此長椅子に坐れ、

(メフキストフエレスを強て坐せしむ)

(フアウ) 此間始終或る鏡の前に立ち、或は之に近より或は之

嗚呼此の變然として吾が目に見映ずる者は何ぞや。



何たる天女なす美形此の魔鏡裏に現はれたるぞよ！

オー戀愛の神よ、汝の羽翼の至迅き者を

請ふ我に貸して、我を彼女の園に導びけ！

嗚呼我若し此の處に止まらぬらば、――

即ち我敢て此鏡に進み近づく時には、

宛然霧の中に於る如く只矚矚と彼女を見得る而已！

或る女子の極めて美しくしき姿形にこそ！

嗚呼此女子果して斯も美しくしきを得べき乎。

夫の茲に横臥せる身體に我は果して

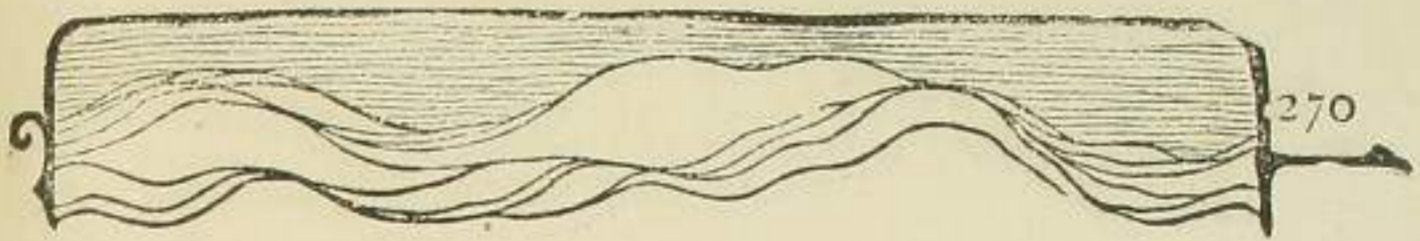
天上に於る衆美の精神神髓を觀るなるか？

斯の如き絶美實際地上に在り得べき乎！

(メフ) 寔に神若し先づ六日骨折り身を苦しめつ、

終に至りて自ら絶妙と叫び得たらんには、

必ず何等か美なる物世界に出て來ずてやは有るべき！



此度は君其美人を十分に眺めたまへ、
我は斯の如き寶を君の爲に捜し出すを得ん。
彼の女を花嫁として家に攜ふるの
好運命を有する者は嗚呼幸福なる哉！

(「アラスト」は何れを眺む、メフキストフエレスは其長椅子に延びて坐し、掃塵子を
弄び尙物言ひ續くも)

此に我は玉座の上に王の如く坐す、
笏は我茲に握る、缺く者は唯冠のみ！

(猿猴 今まで相互に種々奇怪なる動作を爲しぬたりしが、茲は一)
驚呼もてメフキストフエレスに持來る) 嗚呼何ぞ堂々たる！

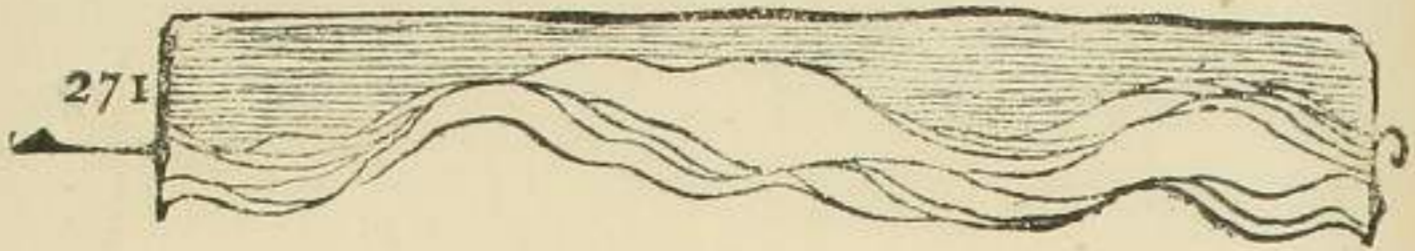
汗と血とを以て

此の冠に塗れよかし！

(彼等其冠を相く弄びて之を二片に割り、而して之を持ちて跳ねまはる)

今既に成れり！

我等は言ひ且見る、



我等は騒ぎ且韻す！

(「アラウ、鐘に向) 嗚呼禍ふる哉我や！全く狂す、

(「メフ、猿猴を
指して) 今我や自ら殆んど目昏まんとす。

(猿猴) 我等もし幸ひあらんには、

事若し善く整はんには、
是は即ち思想なりけらし。

(「アラウ、前の如く鐘
に向りて) 吾が胸は「此幻影」に焦れ始む、

いざ疾速に去り往かん。

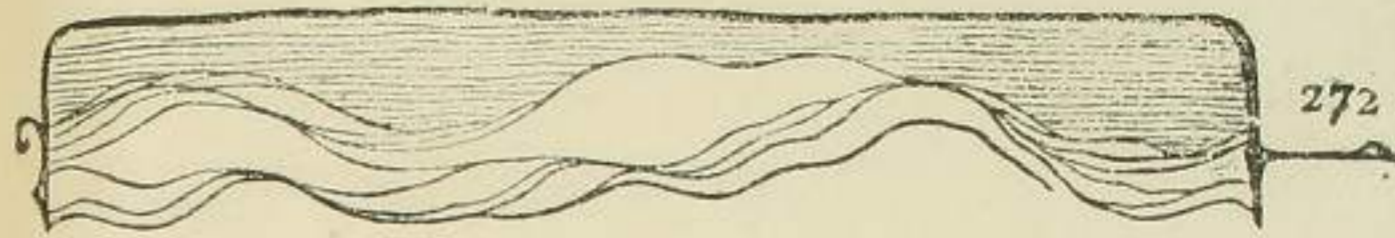
(「メフ、前の如き
姿勢にて) 今少なくとも人は認めざる可らず、

詩人も亦時に眞摯なる有りと。

(大釜は靴履之が注意を惹きたれば沸き溢れ始むるや、大火焰起り來りて、掃塵と煙
突を廻のぼる、妖婆乃ち怖ろしき呼聲を揚げつ、其猛火の中を這り來る)

(妖婆) オウ！ オウ！ オウ！ オウ！

天罰の中れる獸！ 詛はれたる牝豚よ！



汝大釜を等閑にし、主婦を焼くや！
誰はれたる畜生よ！

(フアラストとメフキスト) 此なるは何物ぞ、

此なる汝等は誰ぞ、

何を斯く汝等は欲するぞ、

誰が偷び入るや、

烈火の辣痛、

汝等を骨まで焼けよ！

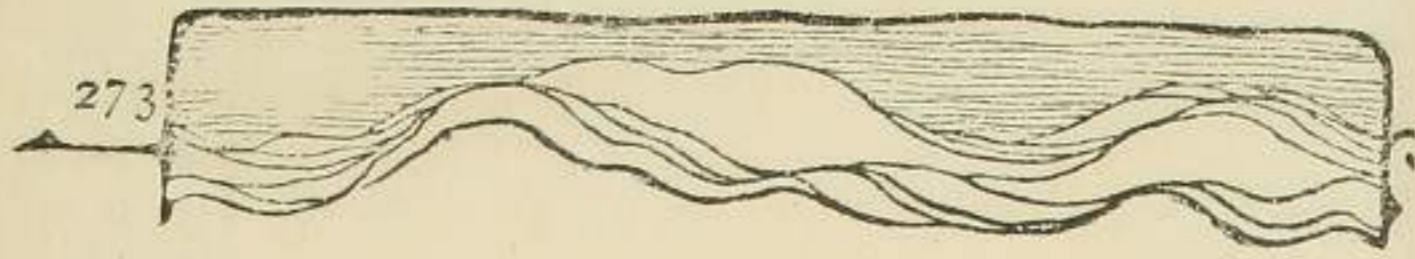
(彼は池すくし桶杓を例の大釜の中に入れ込みて火焔をフアラストとメフキストフエ
レフと撥弄とに瀝さかく、——猛烈は叫ぶ)

(メフ、世手に持てる掃壺子を振はせし、) 兩に分よ、兩に分よ！

茲に粥あり、覆れよ！

茲に玻璃あり、碎けよ！

皆只是れ惡戯のみ、



汝驢婦よ、是は拍子を

汝の歌に取る而已！

(妖婆怒り且懼れて後しさりしければ)

汝我を識る乎、汝骸骨よ、鬼婆々々よ！

汝は汝の主たり君たる者を識る乎？

汝と汝の怪猿を我が撃ち、

我が碎くを何物か我に禁せんや。

汝は紅袍に向ひて最早尊敬を呈せざる乎。

汝は此の雄雞の尾羽を得識ざるか。

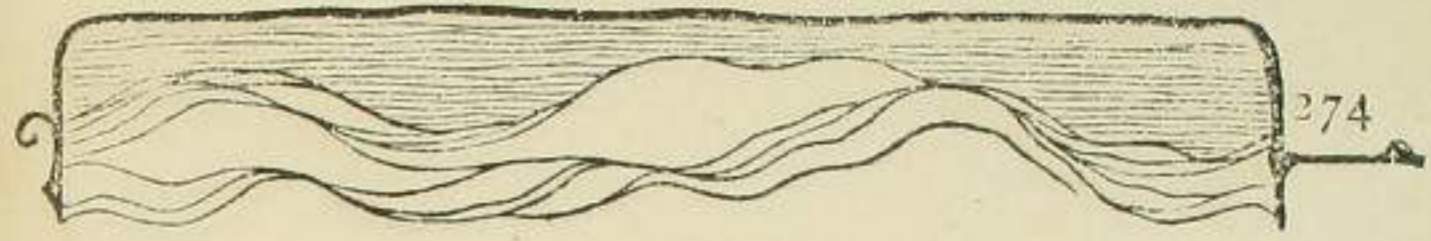
我此の顔をかくしたりしや。

我は何とか自ら名を要する乎。

(妖婆) あゝ主よ、此の粗暴なる挨拶を恕したまへ！

但し我は毫も馬脚を認めざるを奈何せん。

然らば主の御供たる兩鴉は何處に在るや。



(メフ) 此度は我なんぢを見のがす、
蓋われら相見ざること

既に甚だ久しければ也。

寧に夫の全世界を紙る文化は

早や悪魔にも亦及びぬ、――

北方の蠻習は今や復見る可らず、――

即ち角や尾や爪は何處に之を觀んや。

馬脚に至りてや、我これ無きを得ざれども、

开は人々の中に我の不利を招かんとす、

故に我は、世上幾多の青年の如く、

多年來既に偽脛を用ひたる。

(妖婆曰く) 我は殆んど思慮も理性も失はんとす、

青年魔王を再び茲に見るが嬉しさ。

(メフ) 老婆よ、願くは其の名を用ふる勿れ！



(妖婆) 何故ぞ！ 此は何の煩悩を主に爲せしや。

(メフ) 此の名は假作なる小説として既に書かるゝ久し、

然れども其が爲に人間は毫しも改善はならず、

夫の一悪魔は脱したれど、群悪魔は依然として遺留れり！

汝我を毀様と呼び、事可らん、

我は貴冑たること、他の貴冑に譲らじ、

汝は吾が高貴の血統なるを疑がはざらん、

視よや、是は我が帶る紋章にこそ！

(後節く言ひて、眞妻の姿を爲す)

(妖婆曰く) ハー、ハー！ 开は主の本色ののみ！

主は昔より常に然る如く、何たる狡兒ぞよ！

(メフ、トアリス) 友よ！ 請ふ之を善く學び曉れよ、

此は是れ妖婆を御する術なるぞかし。

(妖婆) 君等よ、何を欲するか今請ふ宣まへ、



(メフ) 夫の善く知られたる汁液一杯を満酌せよ!

但し我は其最も古き者を瓶に乞はればならぬ。

此の液汁は年々その力を倍する者ぞかし!

(妖婆) 拜承りぬ! 幸ひ此に一瓶あり、

是より妾も時々みづから口を潤ほす、

且これ亦早や少しも臭からず、

妾は悦んで一杯を君に獻ぜん。

(妖婆) 然し乍ら斯人準備なしに飲むならば、

主の善く知らるゝ如く一時間と活きなる能はじ。

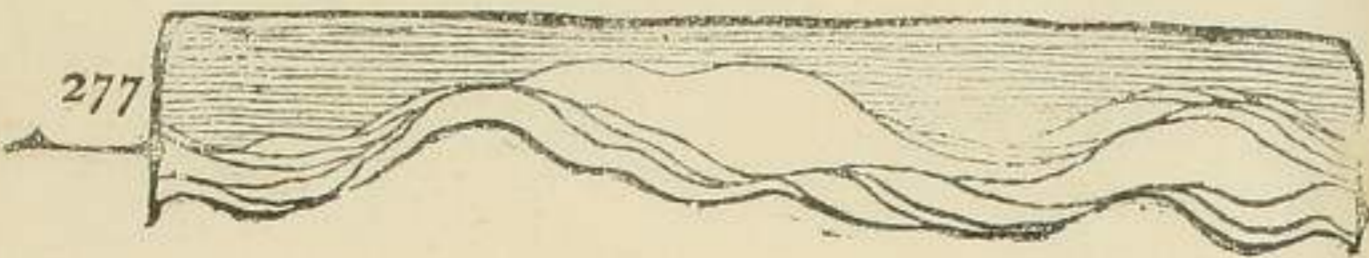
(メフ) 彼は余が良友なれば、必ず其體に適はん、

我は卿が製藥室内に於る至美なる物をも彼に啗まじ。

汝の罔線を割け、汝の咒文を唱へよ!

而して彼に滿ち湛へたる一杯を與へやれ!

(妖婆は奇異なる姿勢を以て一盤の罔線を割き、而して其の中に何か不可思議なる物



を穿る。然る間に保は響き、大釜は沸りて、香葉を煮す。既に妖婆は一本香葉を持ち來り、
例の腹等を其罔線内に置き、之を机と爲し、又之は炬火を給らし、留てフアウスト
を晒ねきて近づくかしむ。

(フアウスト) 否な、請ふ我に告よ、是は何たる意味ぞ!

此の愚かなる器具、此の狂亂なる姿態、

此の最も思はしき虚偽は、

皆是れ我が知れる所、十分憎める所なるぞよ!

(メフ) オ、滑稽ぞよ、是は只笑を催ほすべき茶番のみ、

唯請ふ然か嚴しき人たる勿れ!

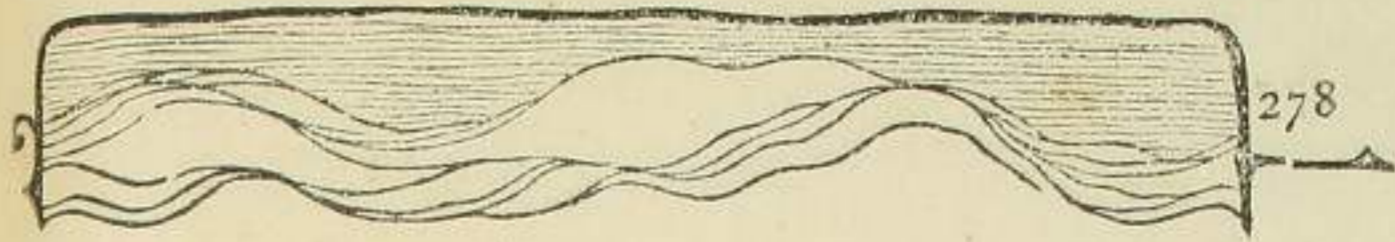
彼女は醫師として一種の幻術を行ふをこそ要すれ、

然すれば、夫の藥液汝に善く奏功んとぞ、

(フアウストを強ひて罔線内に入らしむ)

(妖婆) 大いには語勢を強めて、
文中の文を唱へらく。

汝須らく知るべし!



一を以て十を爲せ、

而して二を飛べ、

而して三を均しうせよ、

然らば汝は富まん。

四を切棄てよ！

五と六とを以て

(斯くなん妖婆は言ふ)

七と八とを爲せ。

斯く事は成りぬ！

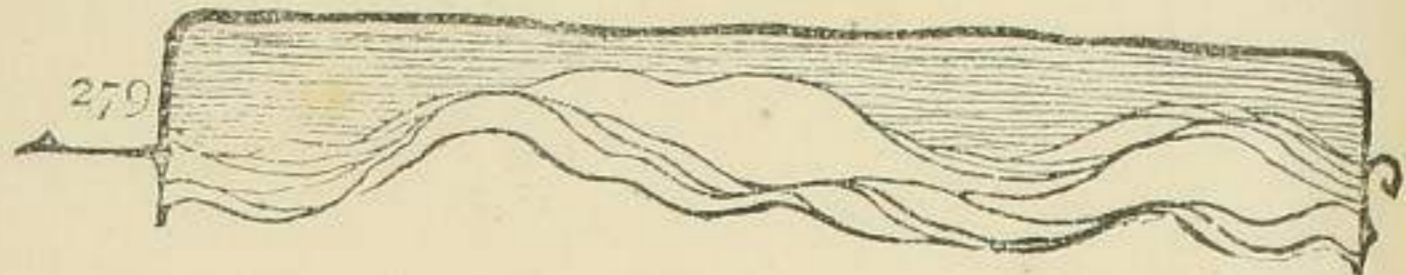
而して九は一にこそ、

而して十は零のみ。

是は魔法の「ワン」なるぞかし！

(フアウ) 老婆は熱病に浮されたる如く物言ふと見ゆ！

(タフ) 此「讀誦」は未だ終らざる哉し、



我は善く知るが、此書は全篇悉皆斯の如く響くのみ、

我は之「が研究」に許多の時間を費やせり、

如何とふれば、全然たる自家撞着的言説は

愚者にも智者にも均く不可思議なれば也。

吾が友よ、此の術は古くして又新らし。

朝四暮三的の詭辯を以て、

眞理を蔽ひ譎諍を播むることは、

古來常に滔々として風をふせり。

人々は斯く喋々子弟を教へて、復咎むる者ふし、

然り、誰か敢て進んで痴愚者と論争せんや。

人類は平生盲信す、凡そ言語名辭の在る處には、

之に伴なふ思想觀念も亦必ず其處に存すと！

(妖婆「讀誦」を續) 嗚呼學術の

高大なる力は



2235

萬目に隠れて見えず！

而して思想せざる者には

却つて顯はれ來る哉、

彼は索めずに之を得ん。

(ファウ) 彼女は何たる譚話を我々の前に宣たつるぞよ！

吾が頭腦は殆んど破裂するに垂んとす！

我は十萬の愚者が聲を揃へて

一齊に物言ふを聴くと思ふ。

2240

(メフ、妖婆に) 足れり、足れり、嗚呼絶好法術師よ、

汝の飲料を此へ持ち來れ、而して

此の爵に早く邊まで満たせよ、

蓋此の飲料は此の吾が友に害をかさじ、

彼は最高級の人にて有り、

其既に飲めること一にして足らず。

2245

(譯で妖婆種上の儀式もて其飲料を一個の杯に移す、而してファウが其杯を口に挿ゆんとするや、聲が揃ふ)

(妖婆) 只請ふ速かに飲め、速くせよ、

是は忽ちに汝の心を喜ばしめなん。

子は悪魔と爾汝の間にて在りながら、

此の火焰の前に恐れ慄のかんとするや？

2250

(妖婆四圍を眺る、—ファウが夢み出づ)

(メフ) 去來急ぎ去れよ！汝は休む可らず。

(妖婆) 願はくは此一小飲善く君を益せんことを。

(メフ、妖婆に) 而して我若し汝を悦ばすべく何事をか爲し得ば、

2255

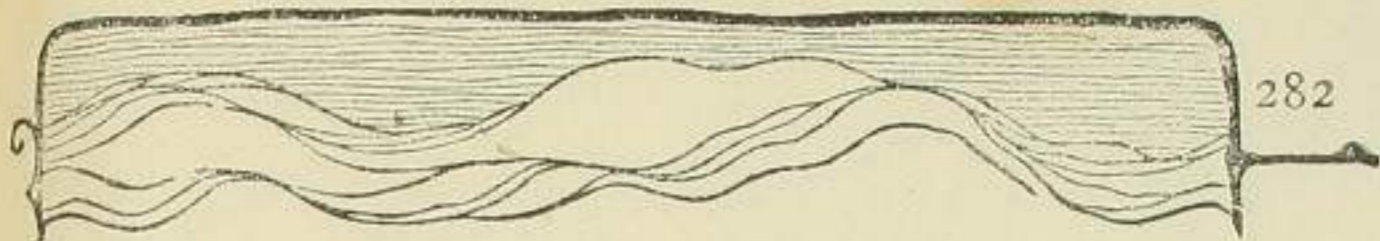
請ふソルブルギスの夜に开を我に語れよ。

(妖婆) 茲に一篇の歌あり、君若し時々之を歌はば、

开が特殊の功力を君は必ず認むるを得ん。

(メフ、ファウに) 只請ふ速かに來れ、我の導くに任せよ！





君は是非とも汗かゝずんば有る可らず、
 是は藥力をして「身體」の内外に染透らしめん爲のみ。
 然る後は貴人的遊惰を尙とぶ方法を我は君に教へん、
 而して君は眞心より恍惚たる歡樂を懐きつ、
 如何にキウロドが彼方此方躍り飛ぶかを忽ちに見ん。
 (ファウ) 只請ふ今一たび鏡を雲時覗くを我に得せしめよ、
 彼の女子の形は嗚呼如何に美極まれるぞよ！
 (メフ) 否な否な、婦女子中の冠冕たる者を
 汝は今速かに眼前にて看ることを得ん。
 (旁語) 此の飲料を一たび身體に容れ持ちてや、
 忽ち汝は國色ヘレナを各箇の女子に視ん。

第七場

市街の景

(ファウスト及びマーガレット嬢登場)

ファウスト (マーガレット嬢の通るに言ふ)

美しくしき嬢子よ、願はくは敢て

此手を貸して卿を家路へ伴なひ送らん歟、

マーガレット嬢

わらはは嬢子に非ず、又美しくしくも無し、
 護り送られずとも、家へ還ることを得、

(其執られたる手を振り離して舞臺を去る)



ファウスト

嗚呼天よ、此兒何ぞ美しくしき乎！

斯る美形は我未だ嘗て見ず。

彼女や、然か淑徳に富み、貞潔に厚く、――

而も又併せて稍愛嬌に乏しきが如し。

其唇の朱紅、其臉の曙光、

我は世界の在らん限り之を忘れじ！

如何に彼女は其嬌眼を下へ向けしや、

こは吾が心に深く銘刻せられたり、

如何に彼女は言寡なく無情かりしか、

是は寔に絶代の快心消魂事ぞよ！

(メフキストフェレス登場)

ファウスト

請ふ聽けよ、汝は我[が爲]に彼の女子を獲ざる可らず。

メフキストフェレス

さらば孰を？

ファウスト

只今此を過ぎゆける女子を。

メフキストフェレス

彼の女とな？ 彼は其告解師(懺悔を)の所より、

有ゆる罪を悉く解き赦されて還り來れるにこそ。

我は懺悔の椅子の側にひたと匍行よりぬるに、

是は全たく罪なき物にてあり、
 毫も告解(懺悔)の席へ往くを要せざりき。
 斯の如き清潔兒をば我奈何ともする能はず！

ファウスト

然は云へ、彼は十四歳を早や超えたるらし。

メフキストフェレス

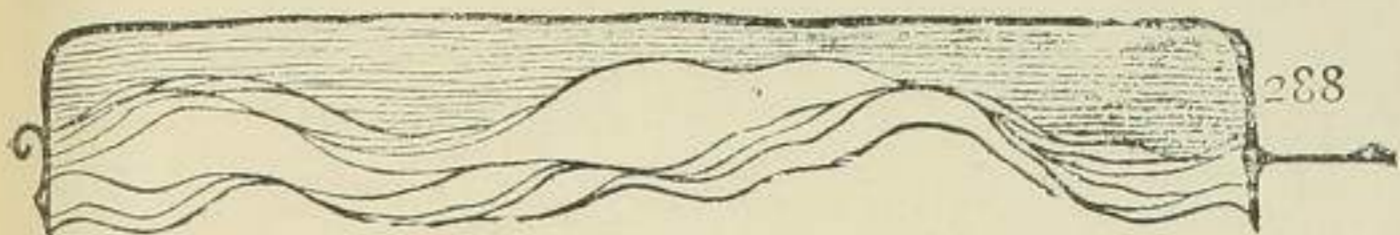
君は遊治郎ハンス、リーデルヒの如く物言ふ、
 彼は有ゆる美しき花を己れに獲んと冀がひ、
 且みづから思ふらく、何等の名譽も
 何等の恩惠も摘取れ得ざる者あらずと、
 但し是は必ずしも旨く行かざるを奈何せん、

ファウスト

吾が道德先生よ、休めよ！休めよ！
 倫理法を以て吾が耳を喧すしうする勿れ！
 我は簡短に斯く汝に向ひて斷言す、
 夫の可憐斷腸なる小囊にして、
 若し今夜わが懷抱裏に止まらずば、
 夜半に至りて我等は破約絶交せん而已！

メフキストフェレス

請ふ先づ成敗の數を考へ見よ！
 唯好機會を探り出さんにも、



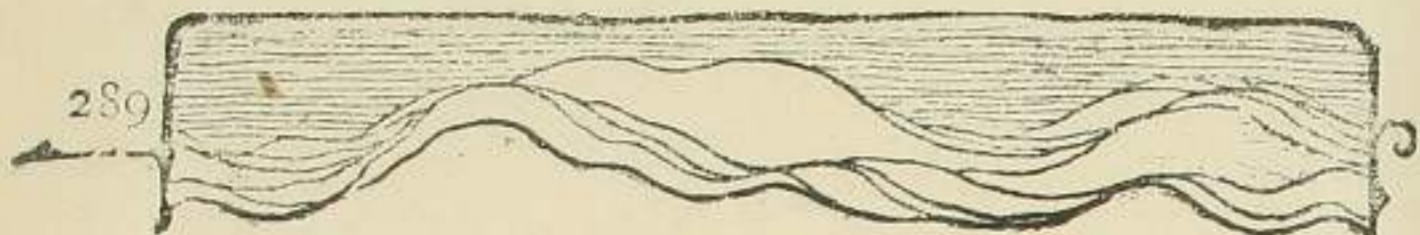
我は尙少なくとも二週日を要せん。

ファウスト

我たゞ若し七時間の猶豫を有したらんには、
斯る小天女を誘ひ説くに、
豈惡魔の助力を頼まんや。

メフキストフェレス

君は早や殆んど佛蘭士人の如く喋々物言ふ、
されど請ふ氣をいらだて給ふなよ、
斯く直ちに享樂は果して何の益ぞ！
其の快樂は畢竟然か大いならず、
却つて君先づ百方擲擄し、



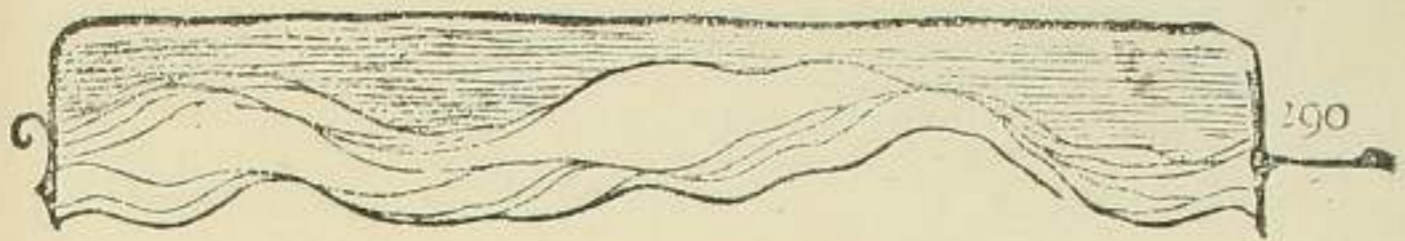
有りと有ゆる痴態を演じつゝ、
該小傀儡を捏まはし、塑ねること、
幾多の伊大利亞物語に於る如くするこそ樂しけれ。

ファウスト

其手段を藉らずとも、我には大慾熾んなるぞよ！

メフキストフェレス

今は嘲弄や笑談を罷めなん。
我は唯一たび永遠に斷言す、
夫の美女子に向ひては急ぐ可らず、
突撃を以ては決して占領せられじ、
我々は計略に依頼せざる可らず。



ファウスト

該天女の寶物を何か少許すこし我に獲來れよ、
請ふ我を彼女の寢所へ竊かに導びけ、
彼女の胸邊むねのあたりより一片の襟捲えりまきにても獲て來れ、
吾が鍾愛する兒の結脚紐むすびひもにても持ち參れよ、

メフ*ストフェレス

君をして我が如何に君の疼愛を満足せしむ可く、
孜孜として努め慮かるを認めしめん爲に、
いざ我等は一瞬時をも空く過さじ、
今日我は君を彼女の室へ携へゆかん、



ファウスト

彼女を見るを得べきか、手に入るゝを得べき乎。

メフ*ストフェレス

否な！

彼女は隣家の婦人許かたがは往きて遊ばん、
然る間に君は突と往きつ、只全く獨占ひとりじめにて、
將來に於る合歡の樂を酬たはなには想望しつ、
彼女の氛圍氣中に飽までも優遊棲遑するを得てん、

ファウスト

我等彼處へ行き得るか。



メフキストフェレス

尙餘りに早し。

ファウスト

彼に與ふべき贈物を我が爲に覓めよ！
(場下)

メフキストフェレス (獨語)

早くも贈物する！ 开は盛なり、彼や成功せん。

我は衆多の美はしき處を識り、

又古く埋まれる衆多の寶物を識る、

少しく探し見ずば叶ふまじ！
(場下)



第八場

奇麗なる一小室

(マーガレット其束髪を編みて結ひつゝあり)

マーガレット

今日の紳士は誰なりしか、若し知られだにせば、

わらはは物を與ふるを辭せじ、

彼は必らず眞箇に勇壯の人なるらし、

而して高貴の家より出て來れる者と見ゆ。

是は彼人の額に我讀み得たり、

然らざれば斯く大膽にては非ざらん。
(場下)





(メフキストフェレス及ファウスト登場)

メフキストフェレス

入り給へ！全く静かに！只請ふ入り給へ！

ファウスト (暫時沈黙の後)

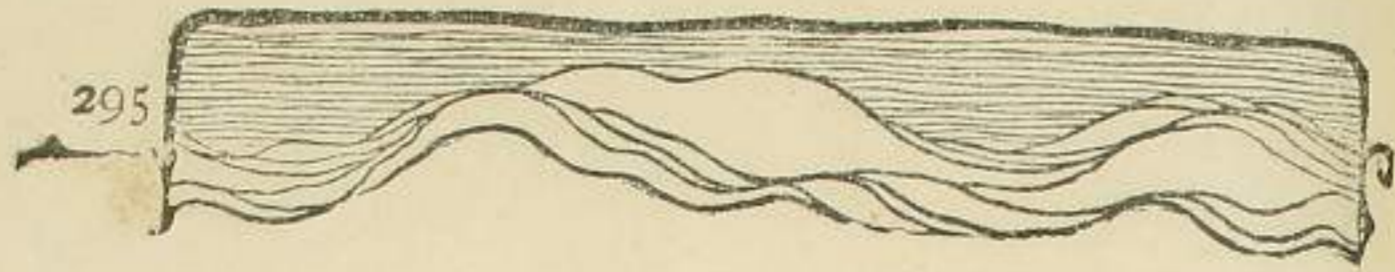
君に願ふ、我を此に獨り在らしめよ！

メフキストフェレス (周圍を注視し)

一切の女子皆斯く奇麗にして居るには非ず。(下場)

ファウスト (見まはし)

嗚呼汝此の神聖なる處を單ふ



愉快なる黄昏よ、善くこそ來れり！

嗚呼愉快なる戀愛の苦痛よ、吾心を執へよ、

汝こそ焦れつゝ希望の露に命を繋ぐなれ！

何たる奥ゆかしき静寂の光景、何たる秩序

及び平和の感、周圍一面に磅礴するぞよ！

此の貧境に嗚呼何等の豊富！

此の陋窟に嗚呼何等の多福！

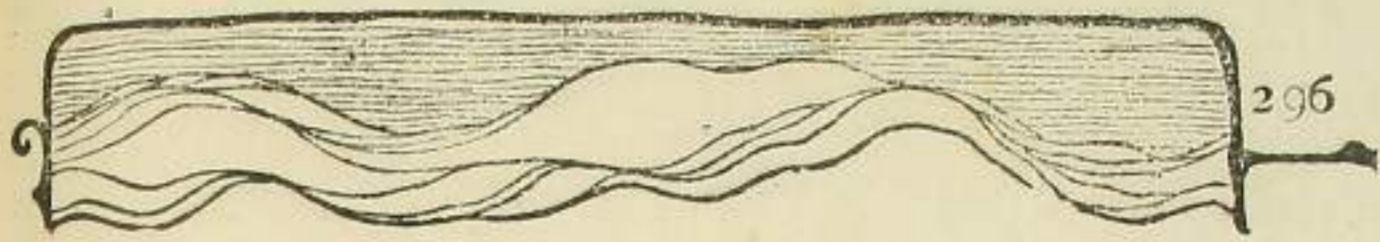
(寢床の傍なる革布團附の安腕椅子に身を投じ乍ら言ふ)

請ふ我を容れよ、汝今まで幾代々の人々を、

喜樂にも悲傷にも腕を開けて迎へ容たる者よ！

嗚呼如何に屢々此の家父の玉座に

一群の小兒は既に纏ひ着けるぞよ！



恐らくは、其基督復活祭の賜物を有難く思ひて、
 此なる吾が鍾愛者(娘)も、小兒の丸くフトレル類して、
 恭しく其祖父の乾萎たる手に接吻せしならん。
 嗚呼處女よ！卿が知足ねよび秩序の精神は
 如何に我まはりに嘯ふくかを我は感賞す、
 此の精神や慈母の如く日々に汝を教訓すと見ゆ、
 汝に命じて恒に白布を清らかに食卓に覆しめ、
 又地牀の砂を汝の脚下に愈よ新らしく鳴らしむる哉！
 嗚呼可憐なる手よ、何ぞ其れ神仙の如きや！
 此の草舎茅屋も汝が爲に一種の天國となれり。
 而して此には——(彼れ蚊帳の一端を
まくり見て曰ふ) 嗚呼何たる恍惚の快感
 吾身に染み亘るぞよ！



茲にこそ我は幾時間も飽ず、に還まり得べけれ、
 嗚呼自然よ、天よ、爾は輕妙なる夢想裏に、
 善くも此の生得の天女を造り出せる哉！
 此に斯の兒は、温かき生命もて
 其柔らかき胸を滿たし横たはりぬ、
 而して此には神聖なる清けき機もて
 神妙なる形像は織り出され來りき。

嗚呼汝(ファウスト)よ！何物が汝を此へ誘ひしや。
 如何に我は心裏に自ら振動せらるゝを感ずるぞよ！
 汝は茲に何を求むる？汝が心何とて然か苦しきや。

噫憫然なるフアウストよ、我は最早汝を認識めず。

茲には一種の魔氣ありて我を包む哉。

此の魔氣や我を驅て斯く直ちに享樂んと欲せしめき、

而して我今は戀愛の快夢裏に自ら鎔んかと思ふ。

嗚呼我等は有ゆる風氣の戲弄者なる乎。

5390

彼女若し今此の瞬間に茲へ入り來らば、

如何に汝は其暴行の爲に赤面せんか。

此の大ハンス(漢)は呼嗟如何に其れ小なるべきぞ！

恥いりて彼女の脚下に叩頭せん而已！

メキフストフェレス(入り來)

迅く(出て來よ)！彼女が下手に還り來れるを我見る。

2398

フアウスト

去れ、去れ！我は決して歸りゆかじ！

メフ井ストフェレス

茲に一箇の玉手匣あり、頗る重し、

我これを餘處に贏け獲たり。

只請ふ之を此の戸棚の中に遺せ！

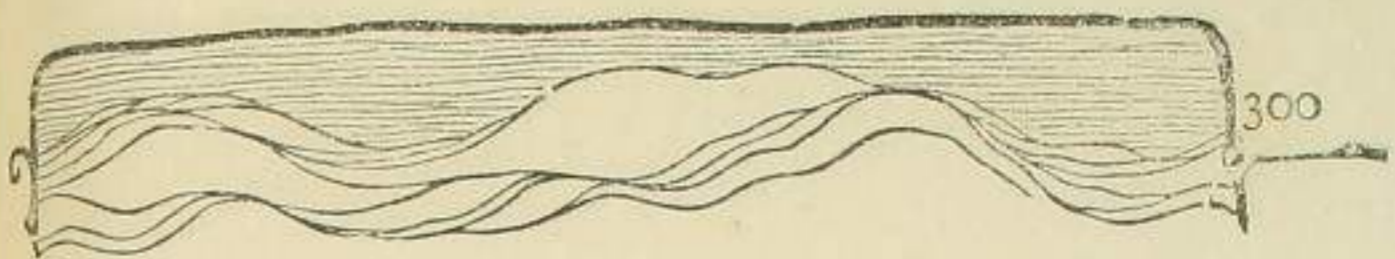
我は君に誓つて申す、是は彼女の耳目を攪さん、

2400

其匣の中に我は聊か物を容れおけり、

是は又或る他の者を贏け獲せしめなん。

寔に小兒は小兒のみ演戲は演戲のみ(好結果何ぞ復疑ん！)



我は其可否を知らず果して然か爲べきや。

ファウスト

メフキストフェレス

君は敢て开を問ふや？

恐らく君は此寶玉を自ら領有せんと欲すらん。

然らば我は君の淫情につきて勸告す、

請ふ此の愛す可き美しき日時を之に費す勿れ、

又我をしても此上奔走の勞に服するを免れしめ給へ。

我は君が貪婪剛慾ならざらんことを信ず、

我は(感ひて)頭を搔き手を揉むなり。――

(彼其小宮を戸欄に置き再び鎖をゆるす)



いざ出て去らん！ 迅くせよ！

庶幾くは彼の可憐なる少女

君が心の情願と志望とに轉じ従がはん。

然るに君は忙然として茲に目を瞠ること、

宛然大學の講義室に入らんとするが如く、

恰かも形而下學および形而上學が

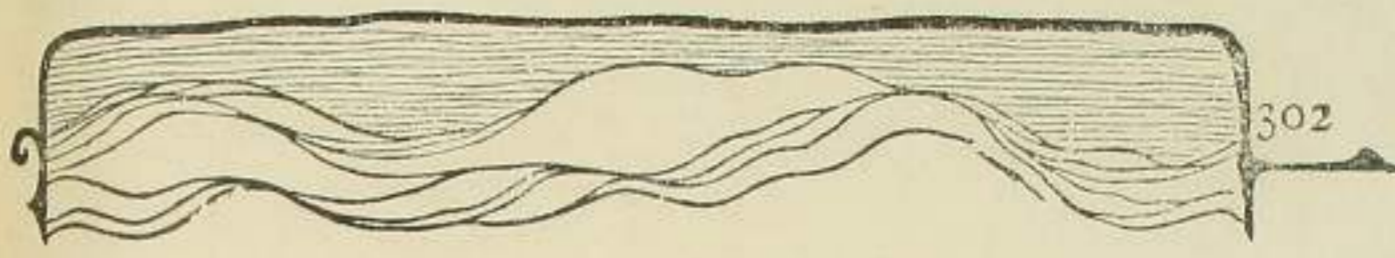
斑白の身を以て君の前に儼然と立てるが如し！

唯請ふ出て去れよ！

マーガレット (燈火を携へて入り來りて曰く)

嗚呼蒸暑し息苦し！

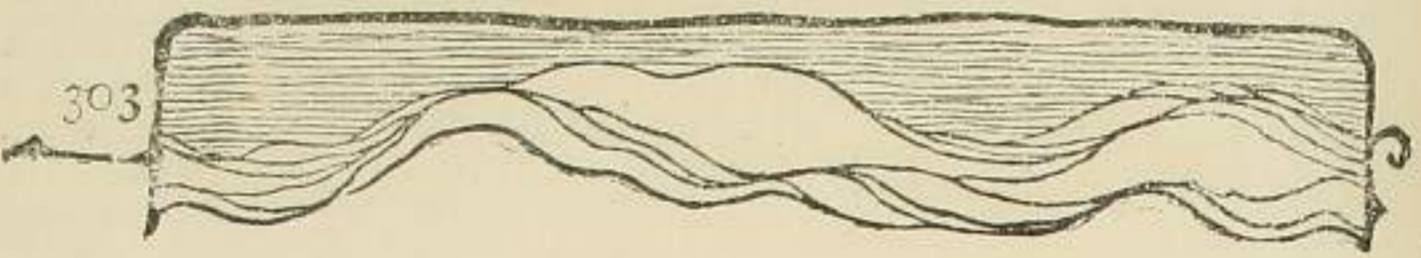
(斯く言ひて窓を啓くや又言ふ)



然し乍ら戶外は然か甚だしく暑くもあらず。——
何故か知らねど、何となく氣味わるし！
母早く宅へ歸り來まさば善からんに、——
わらは體軀一面に水かけられし如く感ず、——
嗚呼愚蒙なる臆病の女ぞよ！

(彼れ衣服を着かへふがら歌うたひ始む)

昔しツール(俱盧洲)に一人の王あり、
墓に入るまで全たく忠實なりき、
其の寵姫死に臨みて、
黄金の杯を王に獻げたり、
是より貴き物は王に無りき、



酒宴ごとに王は之を飲ほせり、
王の之より飲むごとに、
其目は一面に涙ぐめり。

斯て王は將に崩せんとするや、
國中の市府を盡とく數ふ、
王は其世嗣に何をも吝まざりしが、
此の杯ばかりは然らざりき！

王やがて盛大なる御宴を張り、
諸將を己が周圍に會し、
海に面する城に於て、

祖宗傳來の高堂に置酒す。

2440

茲に夫の老強飲家は立ちて、
最後なる生命の光焰を飲みつ、
其の神聖視せる杯をば、
俯瞰する奔流の中に投こみぬ！

王は、其杯が落て水飲みつ、

2445

海に深く沈みゆくを認むるや、

其目頼に光を失なひつ、

復一滴も絶て飲ざりき！

(彼女は戸棚を開き、其衣服を片附けんとして、例の寶玉篋を看一看す、

曰く

此の美しき小匣は如何にして此へは入り來しぞ、

2450

わらはは戸棚を全く確と鎖しわさぬるを！

是は真に怪し！中には果して何が收めあるにや、

恐らくは或る人これを質料として持ち來り、

母これを預りて金をや貸したるならん歎、

彼處には紐にて一箇の鍵掛れり

わらはは是を開けて見たく思ふ哉！

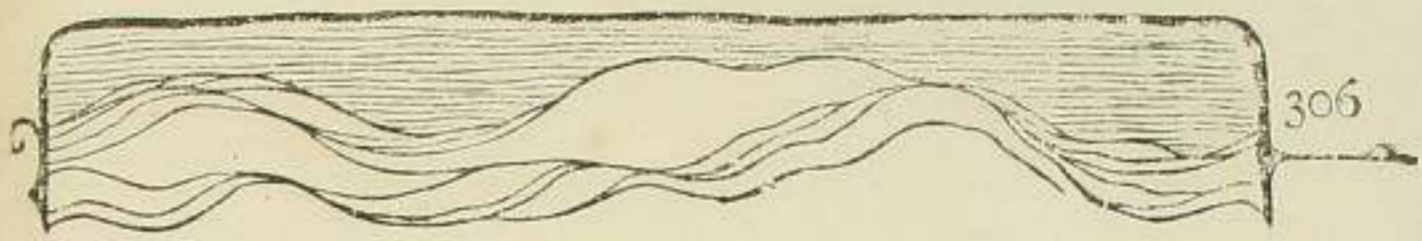
2455

(啓き見) 嗚呼天帝！こは抑も何物ぞ！唯一瞥！

斯る物はわらはが生涯に未だ嘗て見ず、

嗚呼一組の金銀寶石！貴婦人衆と雖も、

之を以て飾らば、最も高貴なる佳會へも出べけん、



此の鎖くさりやわらはの身につきては如何に似合はん、
此等絶好の裝飾品は果して誰の有ものならん乎。

2461

(彼女は之を以て自ら粧ひつゝ、姿見鏡の前へ進み行く)

此の耳輪みみわのみにても我の所有もつものたらば如何に嬉しからん！

人は之を着けなば忽ち全く別人と見ゆなん、

年少者よ、美豈うつくしなんぢの大いなる助たらんや、

美なる事は或は是れ眞に美にして佳よき者なんめり、

2465

然れども人々は之を打棄て顧みざらん、

縦たや譽ほむとも、并は半ば憐憫あはれみよりする事ぞかし、

實は皆黄金の方かたへ奔り、

黄金の方かたに附くのみ、

黄金獨り萬能！我々貧乏人は噫あ、噫あ！

2470



第九場

散步

(ラアウズト物思はしげに彼處此處歩みつゝあり、然る處へメフキ
ストフェレス入り来る)

(メフ) 世間の有ゆる大失戀を指して！地獄の猛火を指し

て「誓つて言ふ」！

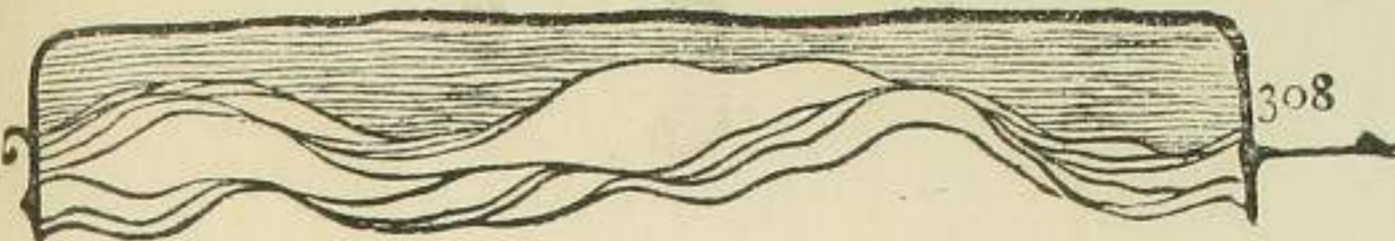
願はくは我が指て以て詛うらひ得べく是等(戀)よりも幾層

悪き物知らんこともがな！

(ラアウ) 如何せしや？何物が汝を然か甚だしく苦しむる

耶？

斯の如き顔は我生涯に未だ曾て見ざりし。



(メフ) 我は、若し己れ自から悪魔にてだにあらざば、

此身を悪魔に交して永く淪びなんものを！

(ファウ) 汝の頭には何か所を失なへる物あるや、

癡狂者の如く狂ふは汝に善く適ふぞよ。

(メフ) 只請ふ考へ見たまへ、小マーガレットの爲に

求め獲たる夫の寶玉を一牧師奪ひ取りしと！

彼女の母は此物を一たび見るを得るや、

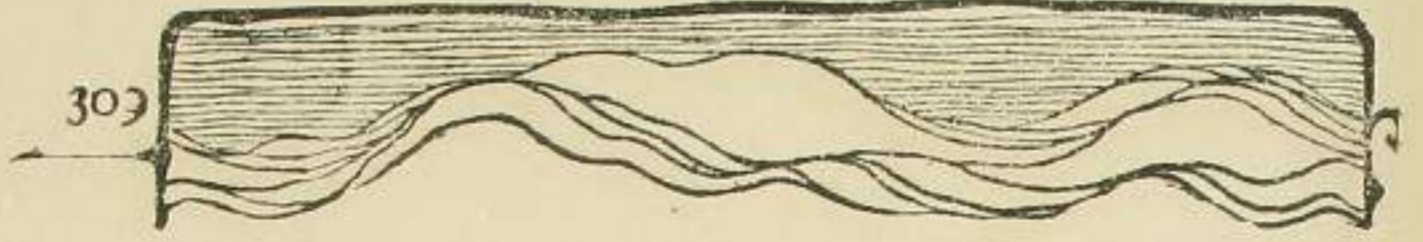
忽ち竊かに悚然と懼れ始めたり。

夫の婦人は眞に微妙なる嗅覺を有す、

居常その祈禱書中に就て嗅ぎ、

すべての物品を香嗅に由て鑑別す、

其物は聖潔なるや、將穢俗なるやと、



此の寶玉については彼女嗅ぎて思ふらく、

其中には多分の福惠存する者にあらずと、

彼女叫びて曰く、吾兒よ、不正の利得は

靈魂を籠絡し、其血液を銷耗す、――

いざ我等これを聖母(マリ)の前に獻げん、

聖母は必ず天上のマナ(食露)を以て報いたまはん！

マーガレット嬢は之を聽きて「口をまげたり、――

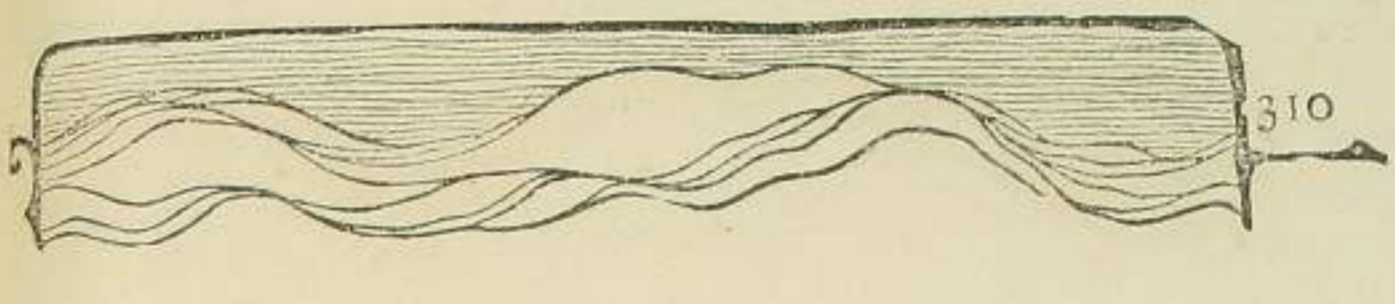
思ふらく、是は寄贈馬の類のみ、

之を茲へ斯く巧みに持來れる者は、

必ず「富裕の人なるべければ」悪人たる可らずと、

母は一箇の牧師を呼び來らしめけるに、

牧師の老猾なる、早くも其滑稽を看て取るや、



直ちに奇貨措くべしと痛く喜びぬ。

彼乃ち曰く、『是は誠に宜きを得たる者にこそ、

凡そ己れに克つ者こそ真に勝を得たる者なれ！

教會は強く健やかなる良胃を具ふ、

幾多の邦土を既に食らへり。

然るも尙絶て飽くことを覺ぬず、

親愛なる善女よ、只教會に納めよ、教會獨り

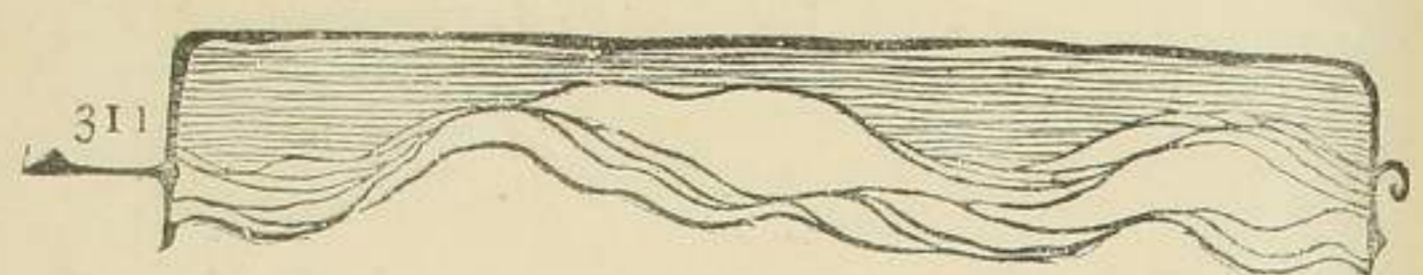
能く不義の實、不正の利を消化し得る也。』

(ファウ) 并は徧く世に行なはるゝ習慣のみ、

猶太人も王侯も亦これを能くす！

(メフ) 斯て彼は珠も鐘鎖も耳環も何もかも、

宛然蘭茸にても有る者の如く、衣囊に突込み了りぬ！



彼が一言の謝辭をも發せざること

恰かも一袋の胡桃子にても貰ひ行くが如し。

〔牧師は彼等婦人に天上の報を十分に約せり、

而して彼等は之が爲に甚だ徳を建てき。

(ラファウ) 而してマーガレットは

(メフ)

今や快々として坐しをり、

空しく忙然として、全く爲す所を知らず、

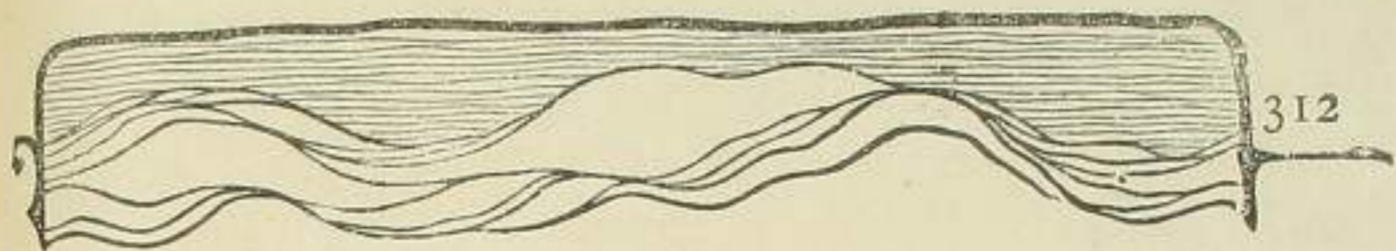
晝となく夜となく夫の寶玉の事を思ひつゞけ、

其之を彼に齎せる人の事を猶深く思ひをる。

(ファウ) 該鍾愛者の憂愁は余を悲しましむ、

請ふ汝彼女の爲更に新奇の寶玉を速に獲來れ！

最初のは然か多大なる者には非ざりき。



(メフ) 寔に然り！君子の目には全く見戯なりし爾！

(ファウ) 吾が意に應じて、百方施設せよ、

彼女の隣人に汝の腕を揮へ！

只請ふ薄粥の如き悪魔たらざれ！

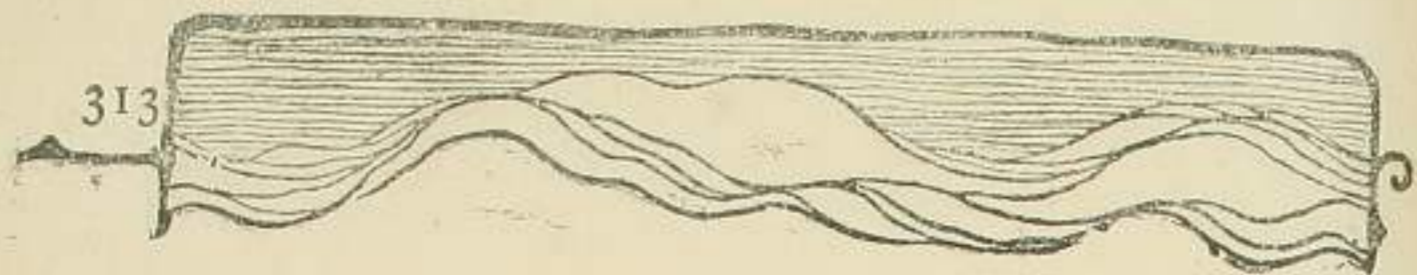
更に新たなる寶玉を探し出し來れ。

(メフ) 畏まりぬ、仁慈なる君よ、謹て命を奉ず。(ト下場)

(獨語) 斯の如く戀にあこがれたる愚物こそは、

其愛する女に消閑の遊戯を與へんとならば、

日月星辰を悉く空に吹飛すを辭せざる可けん(下場)



第十場

隣家の光景

マルタ一人登場

(マルタ) 天帝わらはが親愛なる夫を宥したまへ、

彼は妾を遇する宜しからざりき。

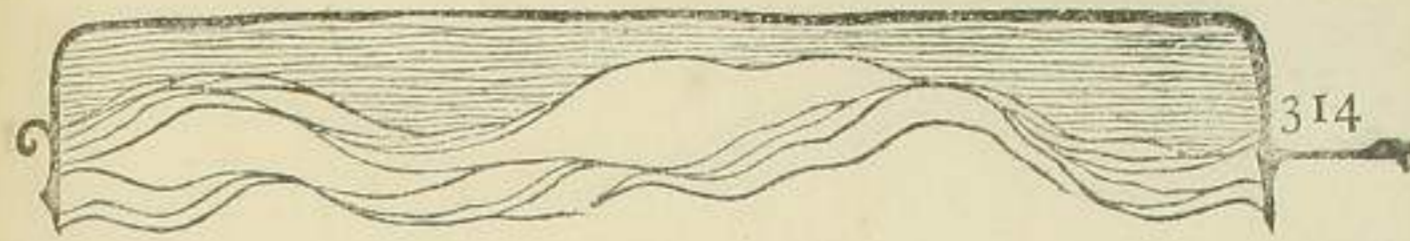
どは彼一直線に世間へ飛こみつ、

妾を只ひとり藁の上に遺しねきぬ。

然し乍ら妾は實に彼に負かざりき、

否な、天帝知しめず妾は眞心より彼を愛せり。(泣)

恐らく彼は既に全く死せしならん、噫痛ましい哉！



嗚呼只一片の死亡證書をだに獲てしがな！

(マーガレット来る)

(マーガ) マルタ夫人！

(マルタ)

マーガレット！何如なされしや？

(マーガ) わらはが膝は殆んど慄き折れなんとす！

そは妾ふたたび戸棚の中に彼が如き

一箇の寶匣を看出せしが、黒檀にて造られ、

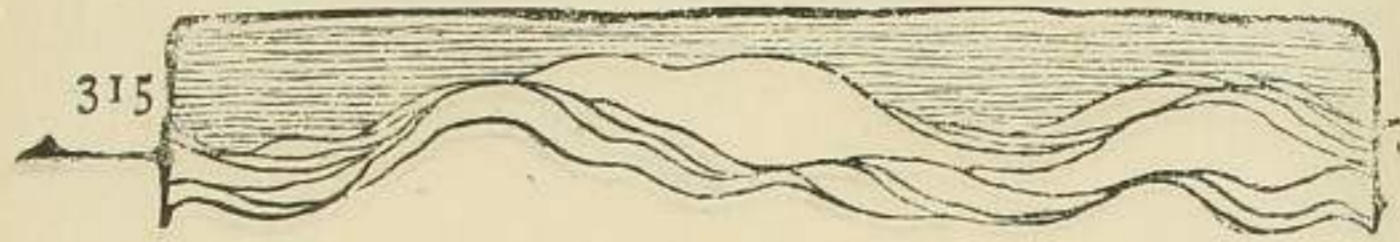
其内容は飽までも光輝燦爛として、

前者よりは遙かに幾層倍貴とくぞ覺ゆる。

(マルタ) 令嬢は开を母君に告ぐ可らず、

復も直ちに之を告解僧に送らん。

(マーガ) 嗚呼只見られよ、只一目御覽せられよ！



(マルタに之を着けて) オー多福なる嬢子よ！

(マーガ) 嗚呼哀しい哉市街にては帶られず、

又教會堂裏にても之を着ては看らるゝを敢てせじ！

(マルタ) 只請ふ屢々わらはの處へ越されよ、

而して此の寶玉を竊かに茲に着用されよ、

斯くて鏡の前を小一時間あるかれよ、

庶幾くは我々之に由て聊か自ら樂むを得ん。

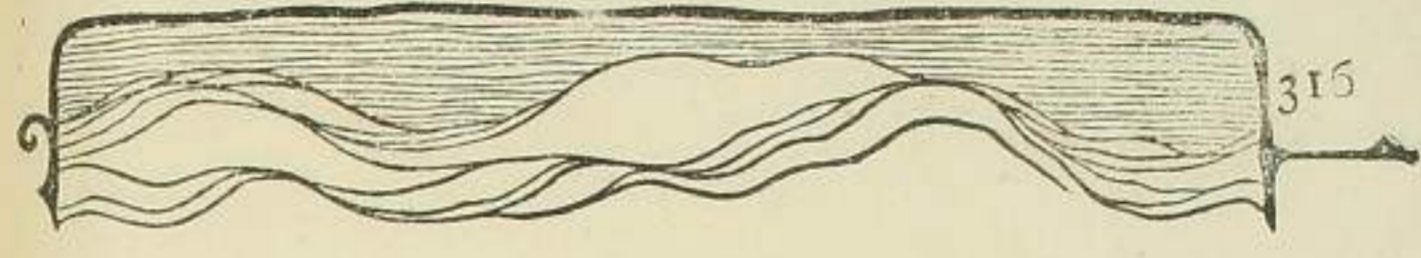
然る後遂には好機會いたらん、祭日きたらん、

其時には我々段々と之を人々に見せん、

先づ鏈鎖を着け、次には眞珠を耳にかけなん、

母君は之を見じ、我々は亦彼女を欺き得ん。

(マーガ) 果して誰が此等二箇の匣を齎したらん、



何か是には善らぬ事の有りもやせん歎！(戸を叩く)
南無三寶！是は果して妾の母なる乎？

2560

(マルタ 驚きして) 是は一箇の見識ぬ紳士ぞよ、御入なされ！
(メフホストフェレス入り来る)

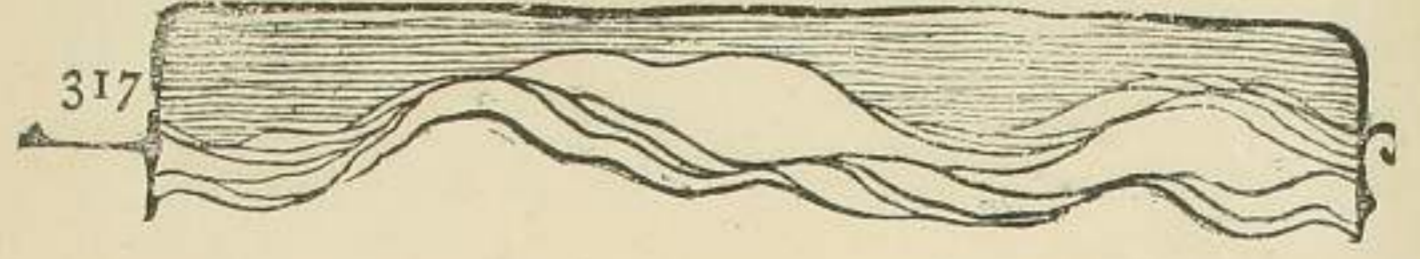
(メフ) 唐突に茲へ推参したる無禮の罪は、
御婦人方に宥恕を願がはねばならぬ、――

(マーガレットの前に恭しく後退りして曰く)

マルタ、シウエルトライン夫人を尋ぬるにこそ。
2565

(マルタ) 开はわらははに侍る、――君には何の諭さるゝ事ある乎。

(低聲にてマルタに言ふ) 我今足下を識れり、余には是にて足れり、
足下は今一貴女の訪問に接しをらる。



請ふ余が犯せし唐突の無禮を宥されよ、
午後に至りて更に復訪ひ来るべし。
2570

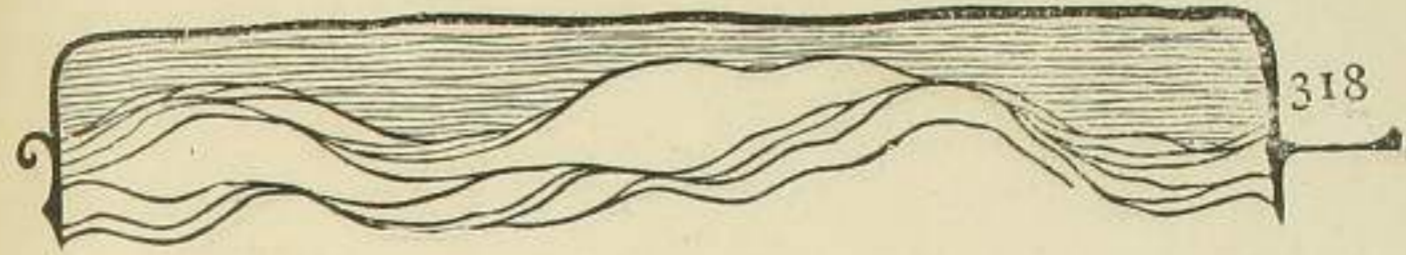
(マルタ 驚き高めて) 娘子よ！世の中に奇なる事も有れば有る者よ！

此の紳士は御身を貴婦人と認められたるぞよ。
(マーガ) わらはは只一箇の貧女子のみ、

嗚呼天よ、紳士は全く餘りに御言葉厚し、
寶石も珠玉も實は妾のにては非ず。
2575

(メフ) 否、开は單に寶玉の然らしむる而已に非ず。
令嬢は、一種の麗質なよび靈慧なる眼光を有り、

我若し留まるを得ば、如何ばかり嬉しからん！
(マルタ) 彼の君は何を齎らせし乎、甚だ知りたくこそあな



れ。

(メフ) 何か芽出度き音耗を有したらば善からん、

我は望む、足下が余をして此の報知を悔ざらしめんを！

即ち卿が夫君は死ねり、卿に告別の辭を傳へしむ。

(マルタ) 死ねりとな？ 嗟夫の忠實なる心情！ 何等の不幸！

わらはの夫は死ねり、嗚呼わらはも失なん！

(マーガ) 嗚呼親愛なる姉君よ、絶望な爲たまひを！

(メフ) 今請ふ其の傷心なる話を聽かれよ！

(マーガ) されば妾は生涯決して契らじ、

斯る死別は必ず妾を悲死せしめん。

(メフ) 樂あれば苦、苦あれば樂あらざるを得ず。

(マルタ) 請ふ渠が生命の終焉を物語りたまへ！

2580

2585

2590



(メフ) 彼はバドアに葬むられ、

聖アントニウスの傍に埋められ、

聖別せられたる一好地位にて、

涼しく安らかなる牀に永眠す。

(マルタ) 君は其外何も妾にとて持來られざる乎。

(メフ) 否な、一箇の願望の重大なる者を持ち來れり、

曰く、卿をして彼が追福の爲に三千の彌撒を唱へしめ

よと也！

其外には吾が衣囊は空にして一物も無し。

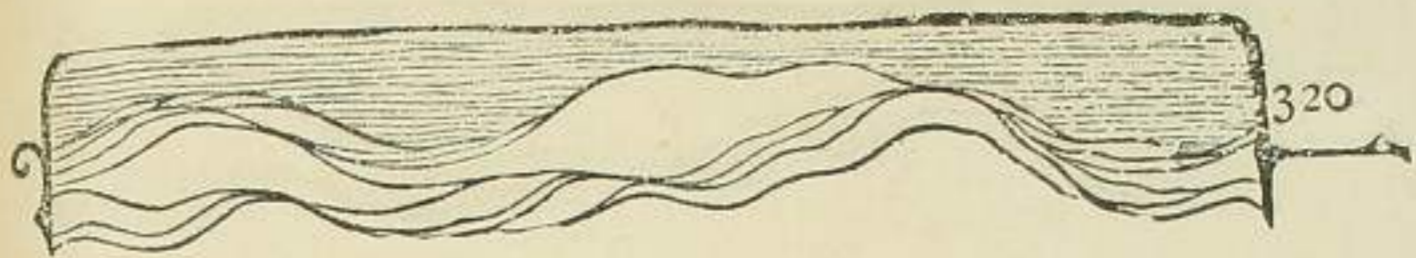
(マルタ) 何とな！ 一箇の貨幣も、一顆の寶玉も無かりしや、

夫の各職工が紀念の徴として必ず、

其の衣囊の底に深く藏め、

2595

2600



餓ゆとも、乞食すとも遺し置くべき金すらも無きか！

(メフ) 令聞よ、余は甚だ氣の毒に感ず、

然れども彼は其金を眞に浪費はせざりき、

彼は亦其の罪咎を痛く悔いたり、

然り、而して又其逆運をば別けて哀きたり。

(マーガ) 嗚呼人々は然か不幸なる者ならんとは、噫！

わらはは必ず彼の人の爲に百千度回向をなさばや、

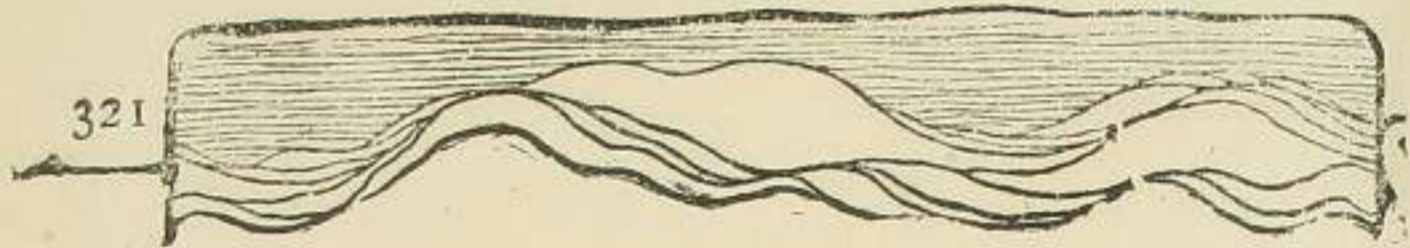
(メフ) 嗚呼殊勝や、卿は直ちに結婚することを値ひす、

卿は實に愛すべき好女子なる哉！

(マーガ) 嗚呼否な！今は尙未だ可らず、

(メフ) 若し夫ならずば、假りに情郎たらしめよ、

斯る可愛き者を抱くことこそ



最大なる天上の賜物と申すべけれ！

(マーガ) 开は此の國の習俗にあらざるを奈何せん。

(メフ) 習俗にもせよ、習俗にあらぬにもせよ、开は亦行なは
る。

(マルタ) 然し妾に該話を語れよ！

(メフ)

我は彼が死牀の側に立てり、

其牀や糞にて成れる者よりは稍善かり、

半ば腐りたる藁にてありき、然ど彼は基督教徒らしく

死せり、

而るも猶己が幾倍重き負債を借方に有するを看出し

ぬ。

彼や叫んで曰く、『如何に我は深く自ら悔い恨まねばな

らぬぞよ！

吾が職業と吾が妻とを然か打棄つるとは！
嗟呼、而して此の回憶は我を死せしめんとす。
願はくは彼女せめて只この世にてだも我を赦さんこ
とを！

(マルタ 言よ) 良き人よ！妾は夙に既に赦せり、

(メフ) 「又曰く」然ながら天知る、彼女は我よりも罪深し」

(マルタ) 开は彼僞れり！何とな！墓の端邊に在て僞はる
とは、噫！

(メフ) 我もし只半ばだも斯る事件を判別し得べくば、

彼は確に末期の氣息もて虚言つける而已！

彼言く、「我は消閑の欠伸だもする暇なかりき、

2630

先小兒等を擧ぐべく、次には彼等の爲にパンを獲べく、

又最廣義に於けるパンの爲に働らくべく有りき、

而して一度も吾が分を安んじては食ひ得ざりき」

(マルタ) 彼は妾が一切の忠貞を、一切の熱愛を忘れしか、

夜となく晝となく致せる妾の苦勞を忘れしか！

2635

(メフ) 然らず、彼は卿を眞心より思ひをりぬ。

彼曰く、「我がマルタより出でゆける時に、

我は妻のため子等の爲に熱心に禱れり、

當時天も亦我々に恩寵を垂れ給ひければ、

我等の船は一隻の土耳其船を捕獲せしが、

是は大サルタン(古帝)の寶を戴てありき、

2640

頓て勇敢なる行爲には其自身の賞きたりぬ、

而して我は亦其當然なるが如く、

吾が十分なる之れの配當を受けたり。」

(マルタ) 嗚呼如何に、嗚呼何處に？—彼は多分^{おほかた}开を埋めね

きしならん。

2645

(メフ) 今既に四風これを何處へ飛せしや誰か知らん！

彼ナポリ府に羈旅の身として歩みをれる時、

年若き一美人かれを拾ひ取りて己が夫となしぬ、

彼女愛と忠とを以て大いに彼に盡くしたれば、

彼は其芽出度き終焉まで之を忘れざりき、

2650

(マルタ) 嗚呼薄情漢！其兒女のパンを竊める賊よ！

一切の憂苦も、一切の缺乏も、尙未だ

彼が穢醜なる淫行を妨ぐる能はざりし歟！

(メフ) 然り、視たまへ、彼はそれが爲に今は死せり。

余今若し卿の地位に在らば、

2655

我は一年間貞潔の喪に服せん、

而して其間に一箇の新しき戀人を捜さなん。

(マルタ) 吁嗟神よ！妾が第一の夫の如き人を

第二の夫として此世に看出すことは如何に難い哉！

2660

彼が如き可憐なる愚物は殆ど他に在らざりき、

只彼は餘りに世間を彷徨あるくを好める而已、

餘りに外國の婦人や外國の酒や、

又夫の最も詛ふべき博奕を好める而已。

(メフ) 善し、善し！彼若し十分伶俐にして、

2665

己れの方に於ても然か殆んど同く大なる



放任を以て卿を鑒視したらんには、風波毫もたゞざり
つらん。

我は卿に誓ふ、請ふ此の條件を以て、

我は卿と指環を交換さばや！

(マルタ) 嗚呼、郎君何ぞ戯むるゝことを好みたまふ耶！

(メフ、弱く) 我は早く此を立ち去らん哉！

彼女は悪魔其物の語をも信ぜんと欲す！

(マリガレツ) 卿が心裏果して何如ん。

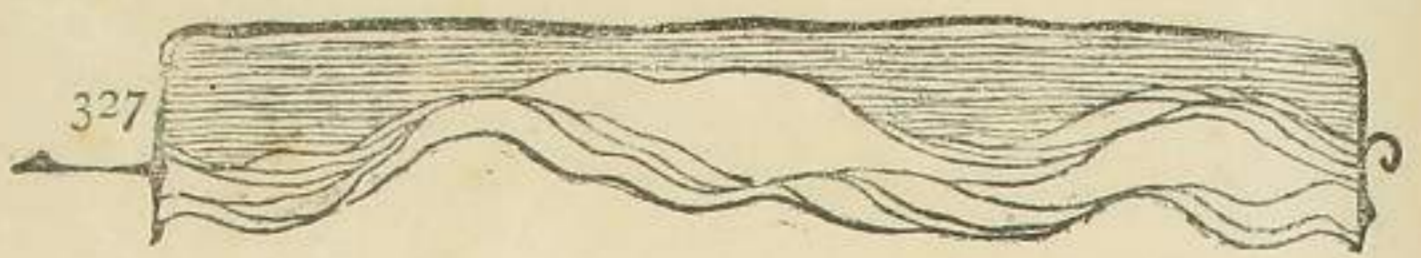
(マリガ) 紳士の其御言葉は何の意味ぞや。

(メフ、低聲) 汝無邪氣なる罪なき好小兒よ！

(發聲) 兩御婦人よ、請平安！

マリガ) 請平安！

請平安！



(マルタ) 告たまへ！尚請ふ早く妾に！

何處に、何時、如何に吾が寶(天)は

死し且葬むられしか、其證人を得まほし。

我は初より秩序の友にてありき、

彼が死の週報上にて「世人に讀まれんことを欲す。

(メフ) 善し、好令聞よ、二箇の證人あれば、

必ず事の眞實は明らかにせらる。

我は尙一人の絶好伴侶を有す、

夫の人を我は法官の前に立たしめん。

我は彼を伴なひ來べし。

(マルタ)

善し、請ふ然か爲したまはれ。

(メフ) 而して此淑女も亦此に臨まれてあるべき耶。

彼は一箇の勇敢き青年ぞ！遠く旅せり
婦人衆には特に敬禮と愛嬌を呈す。

2685

(マーガ) 妾は其紳士の前にては羞て赤くならん、
(メフ) 地上に於る孰の王の前にては卿は羞るを須ひじ。
(マルタ) さらば此家の裏なる庭園の中に、
我々は今晚其紳士の來臨を待つべし。

2690



第十一場

市街の光景

ファウスト及びメフキストフェレス登場

(ファウ) 事何如ん、進行しつゝあるや、速かに成るべき乎。

(メフ) 嗚呼盛なる哉！君は頻りに焦れつゝある歟！

暫時の中に可憐のマーガレットは君の手に入らん。

今晚彼女は隣家マルタの所にて君に見えん。

彼女(マルタ)は媒合の術、桂安の技を演ずべく、

2695

特に選揀れたる導慾の器のみ！

(ファウ) 开は善し！

(メフ) 然し乍ら我々に向ひても亦一事の要求らるゝ者あり、

(ファウ) 一の勞はまた他の勞を値ひす、宜なる哉！

(メフ) 我々は有効なる一證言を提供せざる可らず、

曰く、彼女の所天の硬ばり伸びたる四肢は

バドアに於ける墓地に横たはり安んずと。

(ファウ) 甚だ智し!!! 我々は先づ旅行をなさねばならぬとなし、

(メフ) 嗚呼神聖なる哉、愚直の徳よ！ 开は爲すの必要なし、

餘り善くは知らずとも、唯請ふ立證せよ！

(ファウ) 彼若し更に善き工夫あらずば、此の經畫は破れん而已。

(メフ) 嗚呼神聖なる人よ!! 是はしたり！

君が虚妄の證言を立つるは、

君の生涯に今が初なる乎、

君は天帝、世界、及び其中に動く所の物に關きて、—— 2710

人類及び凡て彼が頭と心に働く者に關きて、

即ち思想と感情とにつきてや、鐵面皮と大膽とを以て

斷然と各箇の定義を下だしたるに非ずや？

然るに君若し深く内に自ら省りみなば、

君は必ず速かに告白せざるを得じ、此等の事に就て知れる位は、

シウエルトライン氏の死に就きても亦同く知れる也

(ファウ) 汝は依然欺瞞家のみ、詭辯家のみ！
 (メフ) 然り、人若し稍深く知悉せずば、然か皮相の觀を爲さ

ん。

蓋明日、君も自稱君子然として、

憐れむべきマーガレットを籠絡し、

而して滿腹の愛情を彼女に誓はんとするに非ずや。

(ファウ) 而して开は眞必よりする爾。

(メフ)

善し、美なり！

然らば其時君が語らん、永遠渝らぬ忠と愛、

唯一萬能なる戀情とやら、

是れ亦果して君の衷心より出る耶？

(ファウ) 請ふ之を措け、开は衷心より出てなん。

我若し焦れ、而して此感情、此熱情の爲に、

恰當なる名を探し求めて、何をも看出さずば、

然らば張目飛耳、徧く宇宙を馳せまはれよ、

至高尙なる語を悉く攫み取れ、

而して此の、吾が以て燃えをる熱情をば、

無極無窮永遠なる者と名づけよ！

是れ豈惡魔の瞞着戲ならんや。

(メフ) 然るも尙吾が言へる所は、是にして違はず。

(ファウ) 請ふ聽けよ、此一言に注意せよ——願くは吾が肺を

勞せざれ——

凡そ是ならんと欲する者は、

唯一片の舌だに強からば、必ず之を獲ん耳。

但し來れよ！我は喋々辯舌を弄ぶに倦めり、
されば汝は是ならざる可らず、我は屏息するの外なけ
ん。



第十二場

庭園の景色

マーガレットはファウストの腕に倚れて喃喃と且歩
み且語る、——マルタはキメキストフェレスと彼處此
處散歩す。

マーガレット

紳士は唯わらはの愚蒙を憫れみ容したまふ而已と妾は善
く感ず、

君には斯く自から枉げ自ら屈して、却て妾を羞しめ給ふぞ

よ、
 旅行家と云ふ者は、寛容の徳に富めるよりして、
 如何なる待遇にも満足するに慣れてある而已、
 妾は極めて善く知る、迎も斯る大経験家をば
 妾の貧寒なる談話は悦ばすこと能はずと。

2745

ファウスト

卿が美しくしき一目、卿が芳ばしき一言こそは、
 此の世の有りと有らゆる智慧よりも却て嬉しけれ。(彼女の手
に接吻す)

マーガレット

嗚呼御口を穢したまふなよ！君には能くも之に接吻し得

たまふ、

此の手は甚だ見苦しく、甚だ粗さを奈何せんや。
 何たる一切の家事を妾は既に手づから爲すを要したりし

ぞよ！

2750

わらはの母君は極めて厳しき者にて侍り。(過ぎ
行く)

マルタ(メフキストフ
エレスに言ふ)

而して、吾が君よ、君には斯く恒に旅したまふ乎。

メフキストフェレス

嗚呼商賣と職務とに驅られて茲に至る哉！
 如何に大なる苦痛を懐いて我々は幾多の地を去るぞよ！

而して其處には一たびも留まる能はざるぞ遺憾なる！

2755

マルタ

斯く自由自在に世界をぐるぐる股にかくることは、
血氣熾んなる年齢にては、善くも參らん、
然し乍ら悪き日の遂に環り來り、
而して果は老獨身者として獨り墓にはいるは、
是れ未だ誰も愉快なる事とは認めざりき。

2760

メフネストフェレス

我は悚然として斯る前途をば望むなり。

マルタ

然らば、貴重なる身を有てる君よ、早く自ら省りみたまへ。(行過)

マーガレット

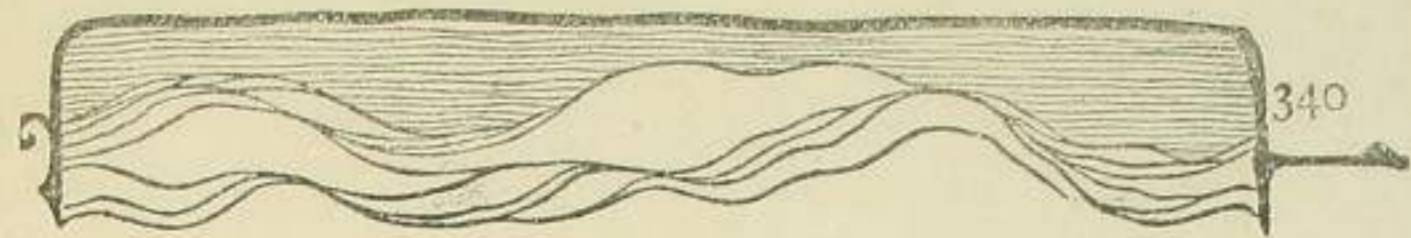
否な、「目に遠ざかれる者は、心にも亦日々に疎くなる」とかや、
禮讓と親切とは君に取りてや容易き事なるらん、
唯恐る君には到る處に衆多の女子を友とせられん、
而して彼等は皆わらはよりも勝れて伶俐からん！

2765

ファウスト

嗚呼天女よ、請ふ信ぜよ、人が「伶俐」と名くる者は、
屢々單に空虚の謂のみ、固陋の謂のみ。

マーガレット



如何なればにや。

ファウスト

嗚呼素樸の徳、無辜の美は絶て自ら知らず、
絶て其己が神聖なる價值を認めぬ者なる哉！
夫の仁慈にして廣く施こす天の
無上なる賜物、柔和、謙讓は——

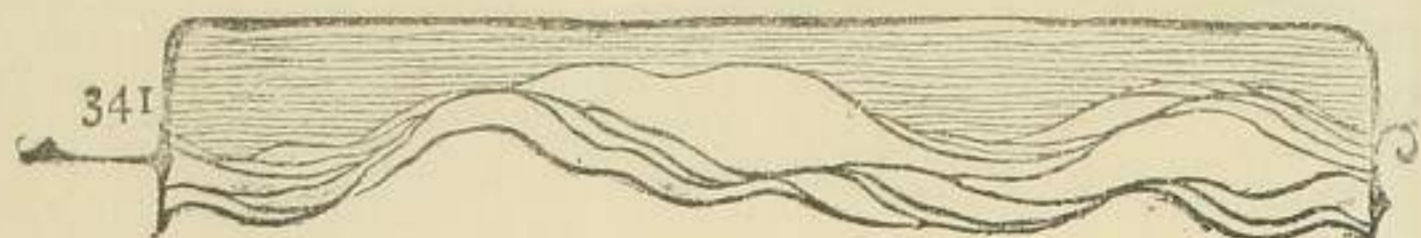
2770

マーガレット

君は唯一小瞬間わらはを思ひ給はん而已、
わらはこそは時永く君を思はざるを得ざらん。

ファウスト

2775



卿は屢々唯獨なること有る耶！

マーガレット

然り、妾が家庭は唯小さき者のみ、
而も亦多分の注意と用心を要す。

わらはの家には下婢なし、妾手づから炊ぎ、掃き、編み、
手づから縫ひ、朝蚤く晩遅く奔走せざるを得ず。

2780

わらはが母は萬づの事に
極めて嚴密に侍り！

然は申せ、母は正に然か甚だしく儉約にするを要するに非
ず、

わらはが家こそ他よりは遙かに贅澤をなし得たるなれ、

わらはの父は餘り見すばらしからぬ財産を遺しぬ、
 一小家屋と一小庭園とを城壁の邊に遺せり。
 然りながら妾は今や頗る穩かなる月日を有す、
 わらはの兄は軍人にして、
 わらはの妹は既に死ねり。
 妾は該の小兒と可愛き苦勞を一方ならず致しぬ、
 されど妾は今一度すべての苦勞を甘んじ受んと欲す、
 夫の小兒は眞に妾には可愛き者にて侍り。

2790

ファウスト

「其小兒は若し卿に似たらんには亦是れ天女なりけらし。

マーガレット

妾は彼女を育て彼女は妾を深く慕へり
 彼女は妾の父が歿後に生れたり、

2795

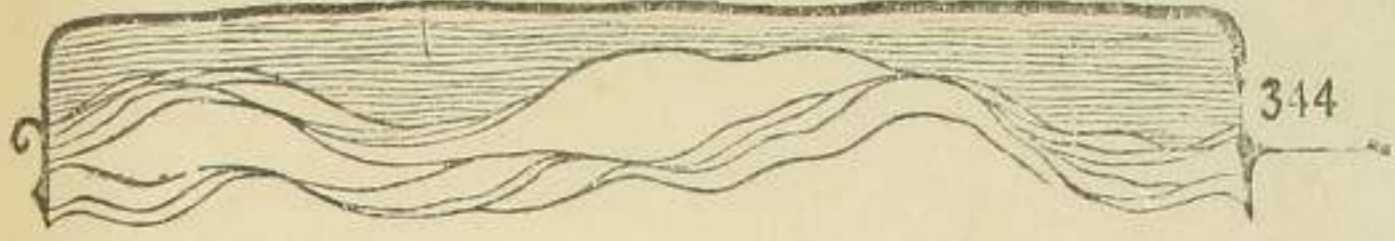
また母をば我々は既に亡き者とあきらめき、
 寔に母は當時悲むべき有様にて臥せりしが、
 甚だ遅くも遂に漸々と本復し來りぬ。

されば夫の憐れなる緑子を乳養せんことは、
 當時母に於ては全く思ひも寄らざりき、

2800

斯れば全く牛の乳と水とを以て妾ひとりにて、
 之を育てたりしかば頓て妾の兒となりぬ。
 わらはの腕に抱かれわらはの膝に乗りて、
 彼は笑ひ馴染み跳ね躍りつ、大きく成り行きぬ。

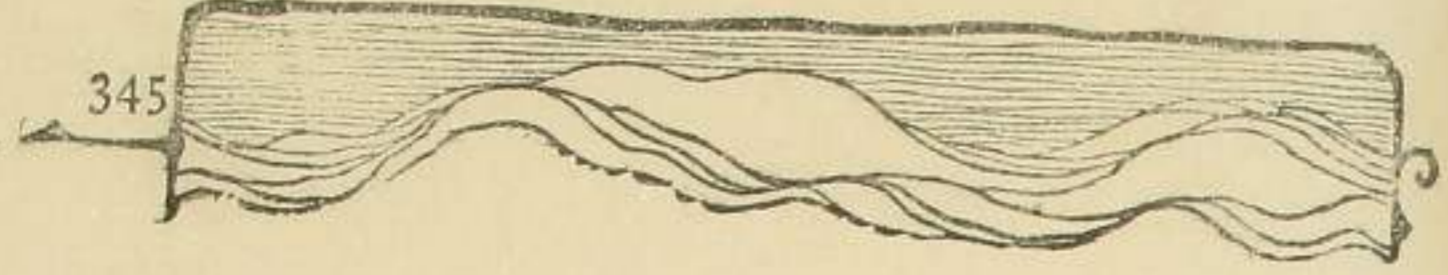
ファウスト



最も清き福祉をこそ卿は其時味はひたるなれ！

マーガレット

然は云へ、亦確かに全く幾多の苦き時もありき。
小兒の搖籃は、夜分にねいてや、常に
わらはの寢臺の側に据おかれたれば、
彼が僅かに動くや、妾は目覺きたりぬ、
時としては乳を與へ、時としては抱き取らねばならず、
時として、彼が啼やまぬ時は、寢牀より興きつ、
寢室の中を彼方此方あやしつゝ、歩まねばならず、
而して夜明くるや蚤く既に洗盤に向ひて立ち、
然る後朝市に往き、歸りては、爐に注意す、



而して遂に終極なく今日の如く明日も亦然りき。
吾が君よ、斯くては何時も元氣善からんこと難き者ぞかし、
但その代り食物は旨く休息は快くぞ感ぜらるゝ、
(過ぎ)

マルタ

然り、我々婦人社會こそ開が禍を蒙むるなれ、
—
寔に頑硬なる老獨身者は感化するに難い哉！

メフキストフェレス

我を教化して良好なる人物とする事は、
卿が如き貞女の手腕に待つある而已。

マルタ

請ふ明白ちやうびやく地に言たまへ、吾が君よ、君は未だ何をも看出みりしや、

君が心緒は未だ何處いづこにても誰にも纏綿ちんめんせざりし耶。

メファストフェレス

「并は何たる人生の福ぞ！ 諺に云く吾が家の煖き爐と貞良なる妻とは、其價值あたいひ黄金眞珠と相若あひしくと。」

マルタ

否なとよ君は絶たえて愉快の情を動かしたること有らざるや
と妾めかけは問ふ耳。

メファストフェレス

到る處にて人々皆齊しく我を親切に厚遇したりと知る。

マルタ

妾めかけが言んと欲するは是なり、君は絶たえて誠心まごころより眞面目に言ひ寄りたること無きや？

メファストフェレス

婦人方かたに向ひては決して戲言を弄ぶを敢てすべからず。

マルタ

吁嗟、君は竟つひに妾めかけの言葉を領會りやうかいらぬ！

メファストフェレス

开は氣の毒にこそ！

然し乍ら我は「只一つ」領會る——卿は甚だ親切なりと(往き)

2830

ファウスト

嗚呼小天女よ、卿は庭園に我が入り來りし時、
直ちに我を「再び彼人と」認めたりしや。

マーガレット

君は見たまはざりしか、妾は目を下に向けてありき。

ファウスト

而して卿は曩に我が卿の嬌顔を冒せし罪を、——
近頃卿が教會堂裏より出て來れる時に我が加へたる、

2835

夫の無禮なる行爲が宜しく受くべき罰を赦し給ふや、

マーガレット

妾は狼狽ぬ斯る出來事わらには今まで絶て無かりき、
何人も妾の身につきて惡き事を説く能はず。

わらは思ひけらく、吾が態度に彼人は

何か處女らしからぬ淫奔なるらしき處を認めたる乎と。

2840

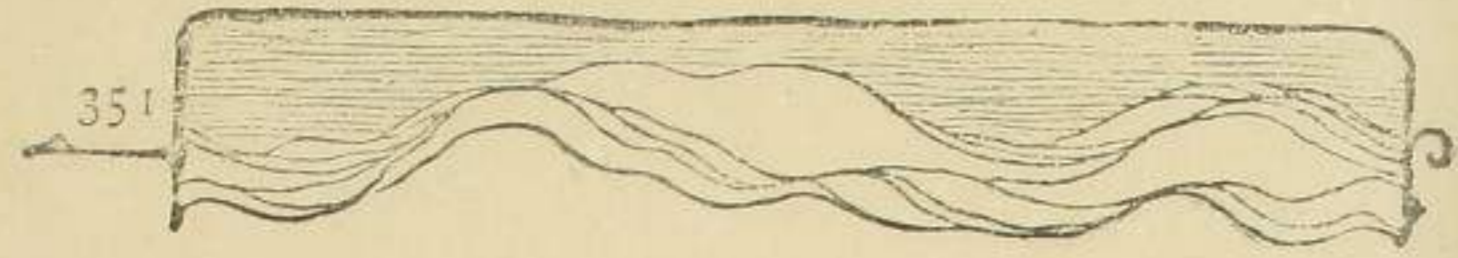
又思ひけらく、此の女子こそ直ちに興し易すけれといふ
意念夫の紳士の胸中に遽かに浮びたるらしと。

然し乍ら妾は告白す！妾自らは知らねど、

何か君が爲に辯護する者忽ち此に「吾が胸に」興り始めぬ！

然し云へ、實に妾は己れが更に強く君を怒る能はずとて、

2845



何を脚は低語するや。

マーガレット(半ば發聲して)

彼は妾を愛する——愛せぬ。

(彼女その葉を一つ一つ摘み取り乍ら口の中に何か低語す)

ファウスト

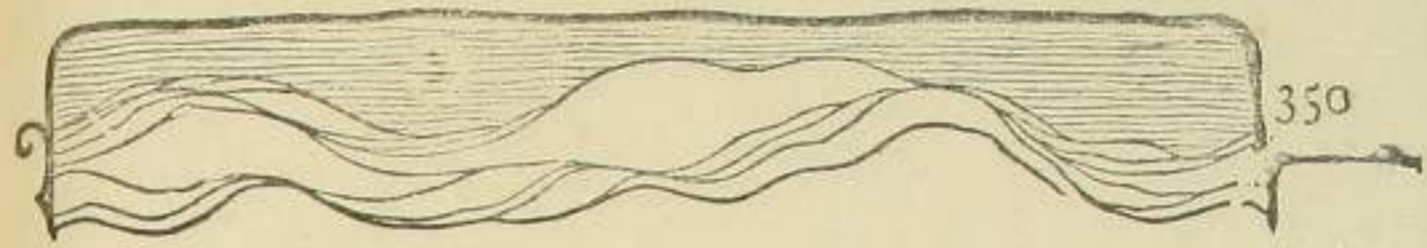
マーガレット

先へ行たまへ、君は妾を笑はん。

如何にして。

ファウスト

否、是は唯一片の戯のみ。



深く自ら此の吾が身を怒りてありき。

ファウスト

嗚呼可憐なる女子よ！

マーガレット

暫らく待たまへ！

(彼女頓て或る花卉を摘み其葉を一つ宛もぎ落としつゝあり)

ファウスト

开は何ぞや、花束なるや。

マーガレット

ファウスト

嗚呼愉快なる天女の相よ！

マーガレット(語を續けて曰ふ)

妾わらわを愛する——愛せぬ——愛する——愛せぬ——

(最後の葉をば愉快げなる喜を以て摘み取りつ、言ふ)

彼は妾を愛する！

ファウスト

然り、愛兒よ！此花の言辭ことばをして

汝の爲には天の默示たらしめよ。彼は眞に汝を愛す！

卿は夫の託宣に言へる所を領會うけとるか、曰く彼は汝を愛すと！

(ファウスト彼女の両手を握る)

マーガレット

妾わらわは身み中ちゆう戦たたかふ。

ファウスト

戦たたかふ勿れ！請ふ此の目をして、

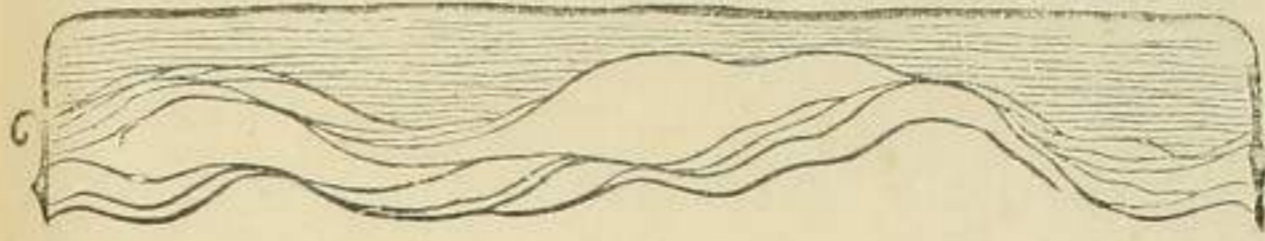
請ふ此の握手をして、黙々の裏うらに

夫の口言ふ能はざる者を卿きみに告しめよ！

全く一身を委まかせ、而して恍惚なる快樂を感ずる、

此の快樂や永遠無窮ならざる可らず、

永遠無窮！然り、其終そのはりは絶望ならざる可らず！



否な終なし、断じて終ある可らず！

(マーガレットは彼れの手を握り緊め、其身を脱して奔り去る、
フアウストは暫く忙然として立ち頓て彼女のおとを追ひ往く、)

マルタ (進み出て)

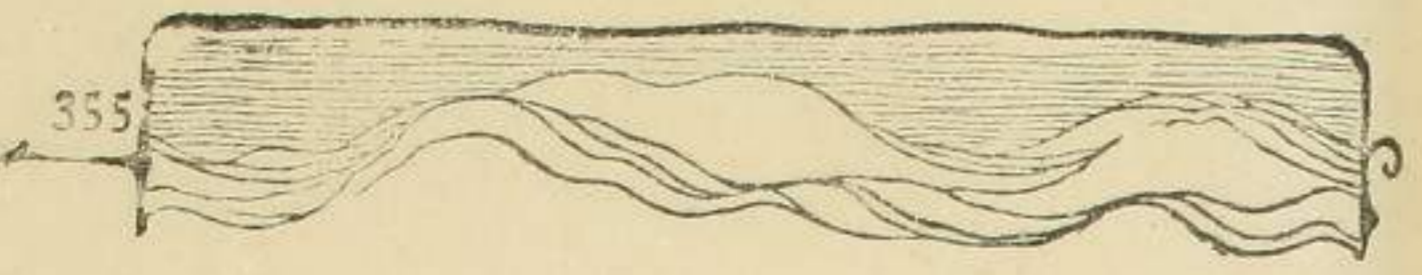
夜は更けんとす。

メフ井ストフェレス

然り、我等去らねばならぬ。

マルタ

わらはは君に一層長く此に留まらんことを請ひたし、



然れども此は誠に「口の」悪き處に侍り、

宛然何人も何事をも爲す可く、

何事をも考ふべき者無きが如く、

只隣人の一舉一動を偵がふを維れ務む、

而して人は、如何に身を處すとも、必ず評に上る也、

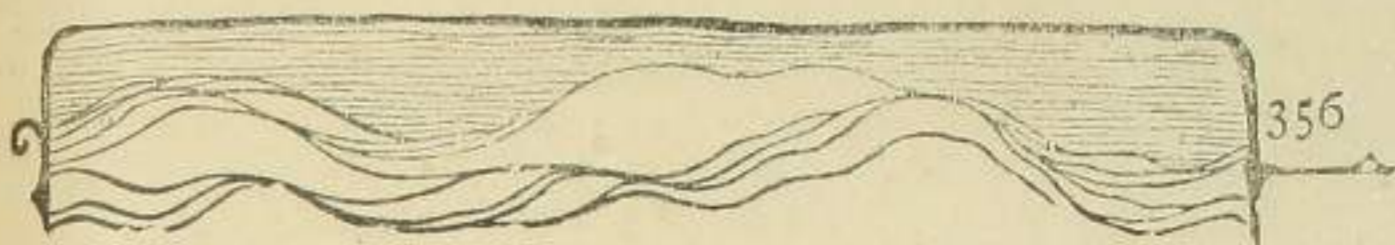
但し彼の年少なる一對は何處ぞ、

メフ井ストフェレス

彼方なる歩道を飛のぼれり、

嗚呼花に狂ふ蛺蝶よ！

マルタ



彼は彼女を戀ふと見ゆ。

メフ # ストフェレス

而して彼女は彼を慕ふと見ゆ、是れ世の常のみ！

2870



第十三場

一小園亭の景

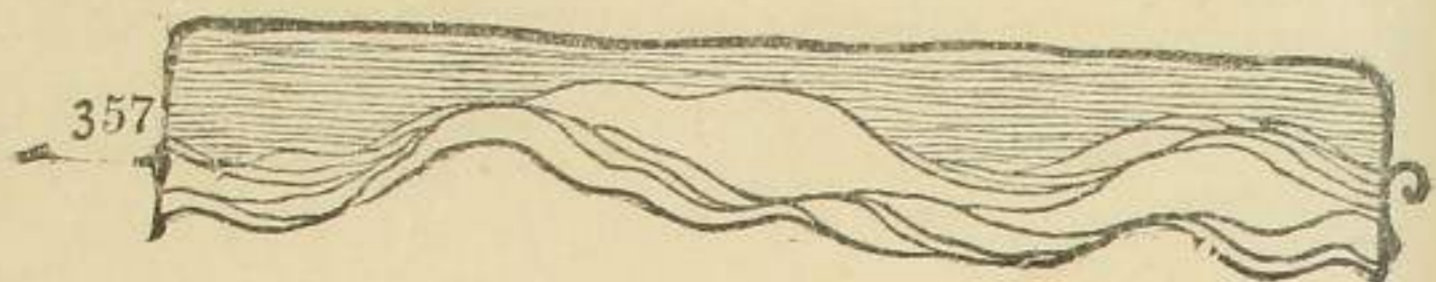
マーガレットかけこみ、戸のうしろに身を潜め、其一指の尖端を唇に當て、わかれめ 小き裂隙より覗きつゝあり、

マーガレット

彼來れり！

ファウスト (入りつ)

嗚呼狡兒よ、然か我をぢらすか！





遂に卿を捕へたるぞ！(彼女に接吻す)

マーガレット(彼に抱き附きて)

至嬉しき郎君よ！妾は誠心より君を慕ふ！

(メフキストフェレス來りて戸を叩く)

ファウスト(踏んだんだ)

其處なるは誰ぞ？

メフキストフェレス

友ぞよ！

ファウスト

歌ぞよ！

今は相別るべき時ぞよ。

メフキストフェレス

マルタ(進みつゝ)

然り、吾君よ！早や晩し。

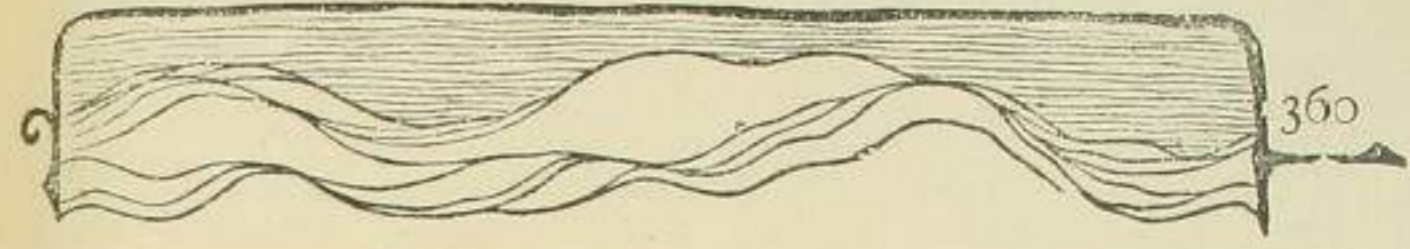
ファウスト(マーガレットに向ひて)

我れ卿を送ることを得べき乎。

マーガレット

母わらはを何せん——請平安！





ファウスト

然らば我は去らねば成らぬか。

請平安!

マルタ

請安臥!

マーガレット

近期再會!

(ファウストとメフホストフエレス下場)

嗚呼晏天! 如斯人は

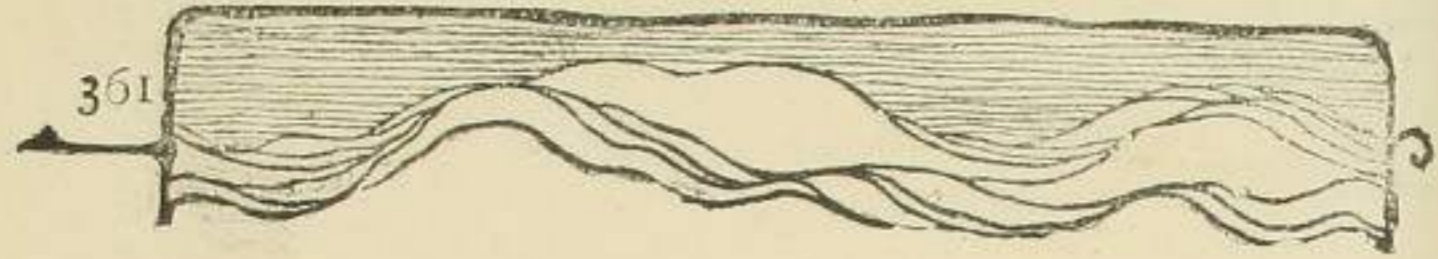
何ぞ一切に萬事に通達し得ざらんや。

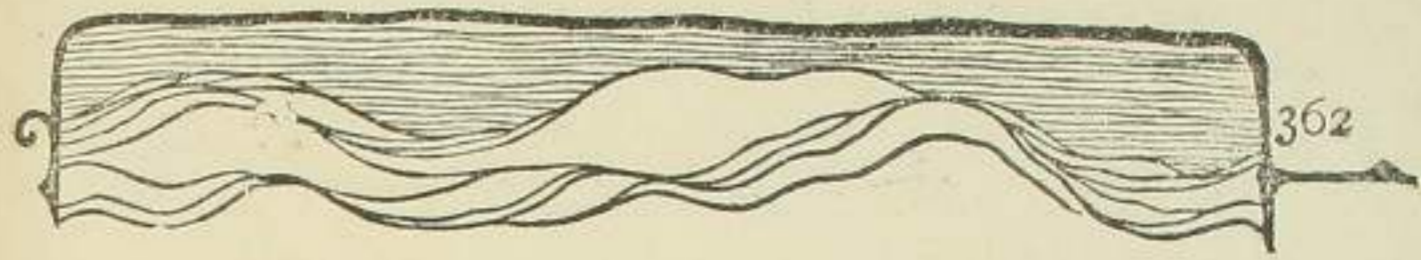
妾は只彼人の前に愧ぢて立てる而已。

而して彼が語れる一切の事には只「然」と應へたり。

而も我は憫れむべき無知無識の小兒なる乎哉!

知らず彼人は吾が身に何をか看出せる。





第十四場

森林及洞窟の景

ファウスト單獨登場

(ファウ) 嗚呼高尚なる神靈よ！爾は我に予へたり。

爾は凡て我が請へる物を我に予へたり、寔に爾は

我に向ひて徒らに爾の顔を烈火の中に現はさざりき。

爾は此の絶大なる自然界を吾が王國にとて我に予へ、

又これを感じすべく、享樂すべき力を我に予へたり。

爾は只驚歎一遍なる寒冷の觀望を自然に向ひて我に

許すのみに非ず、

2895



又我をして彼自然てふ者の胸懷に深く看入ること、

恰かも一親友の胸懷に看入るが如くするを得せしむ。

爾は又群生の千差萬別なる行列を吾前に通らしめ、

我を教へて寂寞たる森林の中にも、又

空と水の中にも吾が兄弟を認めしむ。

而して狂風暴雨が森林の間に咆哮し鳴り響く時は、

巨松老杉倒るゝに垂なんとしつ、隣枝公や

隣幹公を打折りて地に顛仆せしめ、

其仆聲轟然として山崗之に響應す。

然る後我を安全なる洞窟に導びきつ、

我に示すに我自身を以てするや、吾が胸臆の

深秘なる妙義釋然として顯はれ來る。

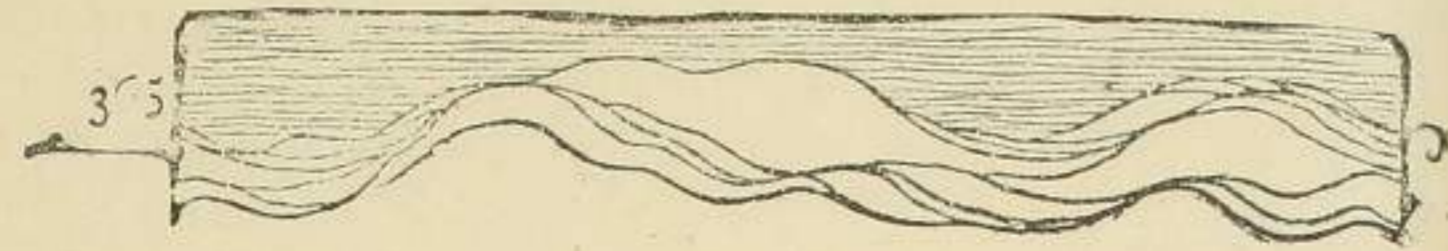
2895

2900



斯^かくて吾が目の前に玲瓏たる月輪昇りつ、
 温然として柔らかに照すや、斷崖絶壁の間より、
 露けき森の中より、前代の銀白なる幻影妖形
 髣髴として吾前に浮み出ると怪しまれ、
 眞面目なる觀想の餘りに嚴格過る快樂をぞ和らぐる。
 2905

嗚呼、人間には何も完全なる事物ある無しとは、
 我今悟りぬ、神靈よ爾は此の大悅樂と併せて、——
 此の我を愈よ神々の境に近づかしむる大悅樂と併せて、
 我に夫の伴侶(メフを指す)を與へたり、彼や冷淡薄情にして、
 且傲慢無禮なれ共、我は早や彼なくしては在る能はず、
 哀い哉、彼こそは我を我自己の目にすら卑しからしめ、
 2910



又僅々一言息を以て爾の賜餐を皆無に化し去るなれ！
 彼は吾が胸の裏に一道の猛火を
 夫の美形に向けて熾んに焚つくれば、
 我は熱情の態より享樂の域によろけけ入り、
 享樂の中に在てすらも尙熱情に戀々たる哉。
 2915

(メフ井ストフェルス登場)

(メフ) 君は今早や此の孤立生活に厭きざりし乎、
 如何にして开は然か長く君を歡ばしめ得るか？
 人一たび之を試むるは、甚だ善し、
 然れども其後は復何か新き物に轉ぜよ！
 (ファウ) 汝斯く我を其幸福の日に惱まさんよりは、
 願はくは汝他に爲すべき事更に有れかし！
 2920



如何なる新活力を我に生じたるかを汝知るや？
然り、汝若し之を付度し得たらんには、
吾が幸福を妨げんとするに於て汝こそ十分悪魔なれ！

(メフ) 何たる方外超地の殊勝なる福樂ぞよ！

夜中繁き露を浴びて山巔に横臥し、

天と地とを恍惚として觀念し、

揚々として己れを神明の域に高め、

空想に驅られて地球の髓にまで穿ち入り、

六日の化工を悉とく〔狭き〕胸の中に感了し、

傲然たる力を以て、何か誰にも知れぬ物を享樂たのしみみ、

恍惚たる愛樂を頓て一切に洋溢せしめ、

地に屬する汝の粗質全く没却すとは「噫何等の福祥！」



然しかは言へ、此の高尙なる觀念は其何なにに

(或る身振して曰ふ) 我は言ふを敢てせねど——終らんとす！

(ファウ) 何等の醜陋！

(メフ) 君は开を〔聽くを〕悦よろこばじ

君は今夫の醜陋しうろうなど云ふ叮嚀ていれいなる語を用ふる權利あり、

〔斯かる言語は〕貞潔なる心すらも猶之れ無くては在る能

はねど、

貞潔なる耳みみの前には人これを發するを忌まん。

之を要するに、我は君に向ひて明言す、——

我は臨機應變に君が自ら欺くの快樂を〔君に〕禁ぜじ、

但し斯かの如き行爲は君これを長く保つ能はず、



汝は早や既に再び過般になり來りぬ、
 然れば是若し長く續かんには、必らず君は
 狂愚か心痛か、將た悚懼に驅り入れられなん、
 是は足れり！君の最愛者は獨り坐しをり、
 悄然として百事を憂はしみ、心を惱ます、
 君が面影は須臾も彼女の心裏を去らず、
 彼の女子は非常に君を可愛く思ひをる、――
 初は君の愛慾滔々として氾濫せる、
 恰かも雪の溶けて小川の溢るゝが如し、
 君は彼女に其の心の底まで之を浴せかけながら、
 今君の小川は早や再び涸る！
 我は思ふ森林の中に空く王たらんよりは、



夫の多恨多情なる小鬢を憐れみて、
 之が深厚なる熱愛を遂げしむるこそ、
 君が如き堂々たる男子の宜しく爲すべき者なりけれ。
 彼女は光陰の長きをかこちて「待わびつ」、
 窓に立ちては、年古りたる彼の城壁の上に、
 虚空を泛び走る雲を眺め羨やむ耳。
 『嗚呼、われ小鳥ならば、嬉しからん』とは、
 晝は終日、夜は半宵かの女が口吟む歌ぞよ、
 時としては快活なれど、大概は悲哀に沈み、
 時としては全く其の涙を泣き涸らすあり、
 然る後復も心穩やかなる如く見ゆれど、
 四六時中戀にあこがれざるは無し。

(ファウ) 蛇よ！蛇よ！

(メフ語) 宜し！願くは汝を擄にし得まほし！

(ファウ) 墮落漢！此より立ち去れよ！

而して請ふ彼の美女が名を言ふ勿れ！

彼女の芳ばしき體を占有せんとの情願を

請ふ再び吾が此の半ば狂せる耳目の前へ持ち出す勿
れ！

2995

(メフ) 然らば如何すべき、彼女は君遠く飛び去りぬと思ふ、

而して君も亦既に中半「不熱心」なるに非らずや。

(ファウ) 我は彼女に近し、縦また如何に遠ざかるとも、

我は決して彼女を忘れじ、決して「愛情を」失はじ、

然り、彼女は吾が有のみ、我は、彼女の朱唇の觸るゝ者は、

3000

聖體(神聖式)と雖も、尙これを妬まんと欲す！

(メフ) 極めて善し、吾友よ！我が屢々妬めるは

夫の薔薇花間に狂ひ戯る君等雙蝶にこそ！

(ファウ) 咄去れよ、汝忘八よ！

(メフ) 佳し！君は罵る、我は笑はざるを得ず。

青年男女を造りた「まひし天帝は、嗚呼智なる哉！」

3005

初より其最大貴重なる業の精神を領得し、

剩さへ合歡の機會を自ら作り設け給へり。

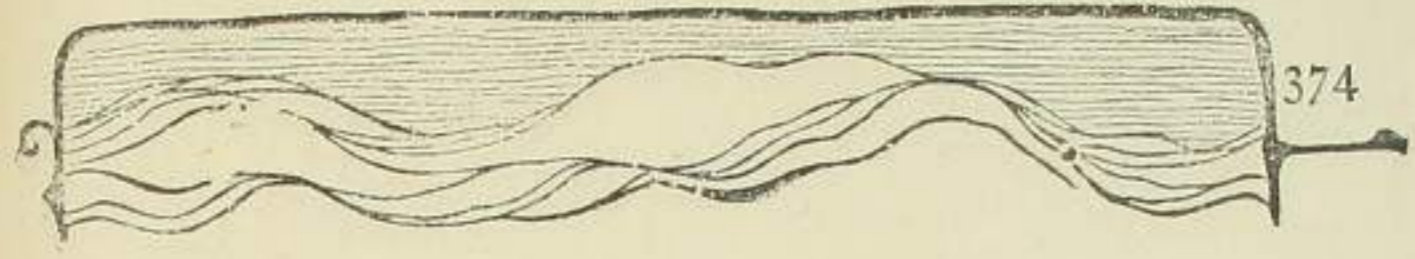
只請ふ往けよ！是は實に大苦痛事ぞよ(反語)！

君は一箇の可愛き女子の聞へ行くを要す、

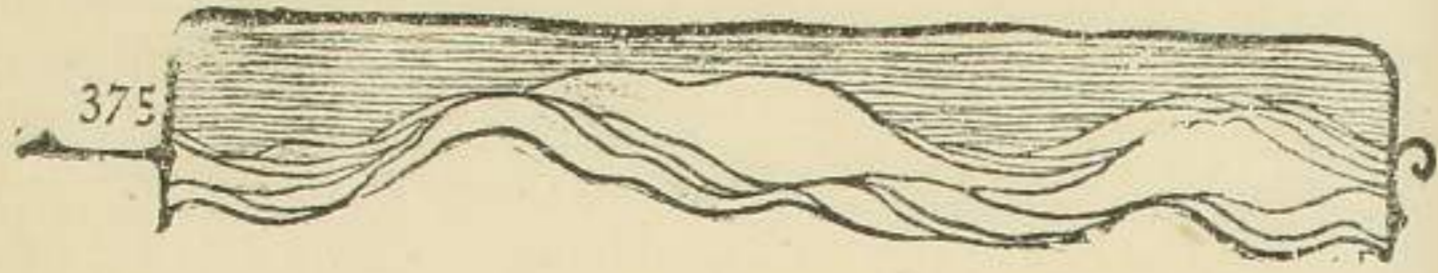
恐らくは頸斬らるべき刑場へ行くには非じ。

3010

(ファウ) 彼女の柔腕裏に抱かるゝ絶大の快樂も畢竟何物



ぞよ！
 縦や彼女の躍れる胸に我温まりつゝあるとも、
 我は四六時中彼女の奇禍を吊はてやは居らるべき！
 我は流浪者に非ずや、定まれる家なき者、
 何の目的も無く流蕩あるく人非人に非ずや、
 恰かも瀧の如く岩より岩へと奔騰し、
 滔々として萬仞の谷へと真逆に落るのみ！
 其傍らに彼女は幼稚なる鈍き耳目もて、
 アルプス山の狭き野に一小蝸廬を守れり、
 开が家事の初経験は只悉とく
 夫の小天地内にや限られん。
 嗚呼我や、天に憎まるゝ者、



我みづから彼の岩石を攫みて投ちらし、
 之を微塵に打摧けるにて、
 既に破壊の功は十分ならずや！
 尙また彼女と其平和とを覆へさねばならぬ乎！
 吁嗟地獄よ！汝は此犠牲を享ずては止まざるか！
 悪魔よ！我を助けて此心痛の時間を短く切つめよ！
 起らねばならぬ事は、請ふ速かに起らしめよ！
 彼女の運命をして我の頭上に崩れ落ちしめよ！
 彼女をして我と偕に倒れ亡びしめよ！
 (メフ) 如何にや、復沸騰するや、復熱するや！
 請ふ入りて彼女を慰藉めよ、汝愚物よ！
 君が如き狭き頭は、何等の出口をも看出さざるや、

乍ち自ら萬事休むと想像し來らんとす。
 只勇往邁進する人こそ萬歳なれ！
 君も併し乍ら亦他には頗る惡魔化しをれり
 絶望落膽せる惡魔ほど見苦しき者は、
 世界廣しと雖も我絶て之を看出さぬぞよ。



第十五場

マーガレットの室景の

マーガレット獨り紡糸車いとりぐるまに向ひて坐し、歌ふて曰ふ、

3040

吾が平和は逝けり、

吾が心は苦しい哉！

絶て復平和を看出さず、

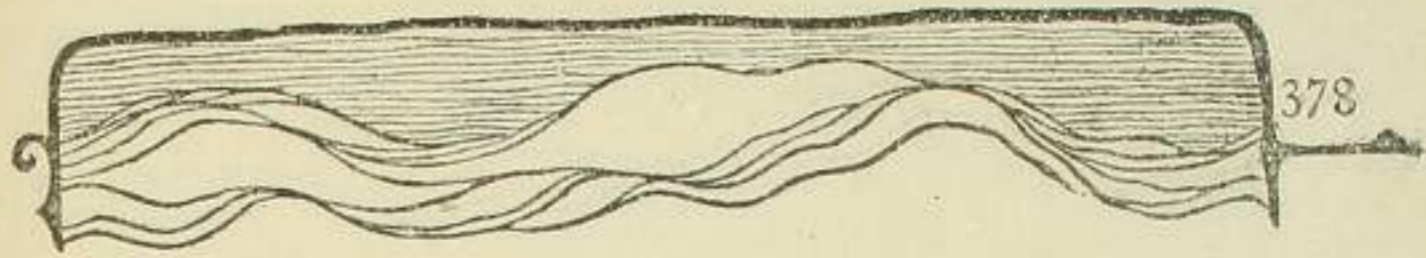
嗚呼竟に之を看出さぬ哉！

彼の君の在さぬ處は、

我には只慕ならん而已！

3045





全世界悉く舉りて
我には膽の如く苦い哉！

吾が弱く愚かなる頭は
餘りに働きて狂へり、

吾が弱く暗き耳目は、

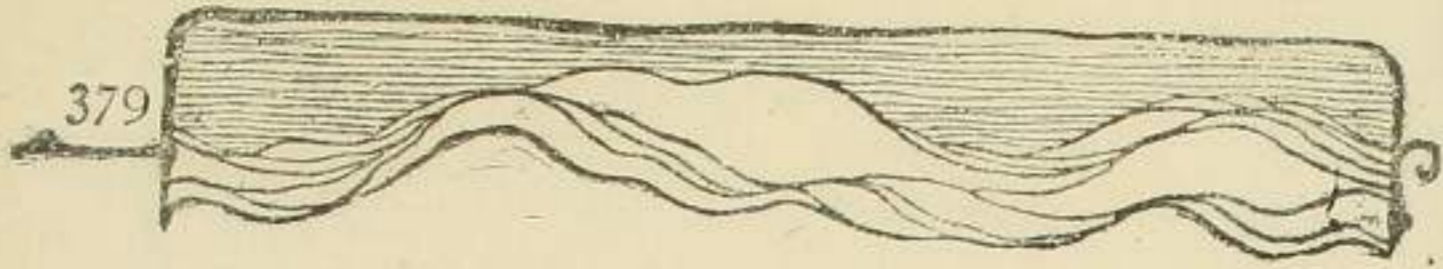
吾が爲に嗚呼碎けぬる哉！

吾が平和は逝けり、

吾が心は苦しい哉！

絶て復平和を看出さず、

嗚呼竟に之を看出さぬ哉！



唯かの君を見んとて我は
窓よりぞ只管ながむる、
唯かの君に遇はんとて我は
家よりぞ屢々出てゆく、

かの君が氣高き步履、

かの君が貴とげなる姿形、

かの君が口唇に湛へし微笑、

かの君が視る目の力強さ、



かの君が談話の
喃々たる魔流、

かの君が力こめたる握手、
嗚呼嬉しや彼の君が接吻！

吾が平和は逝けり、

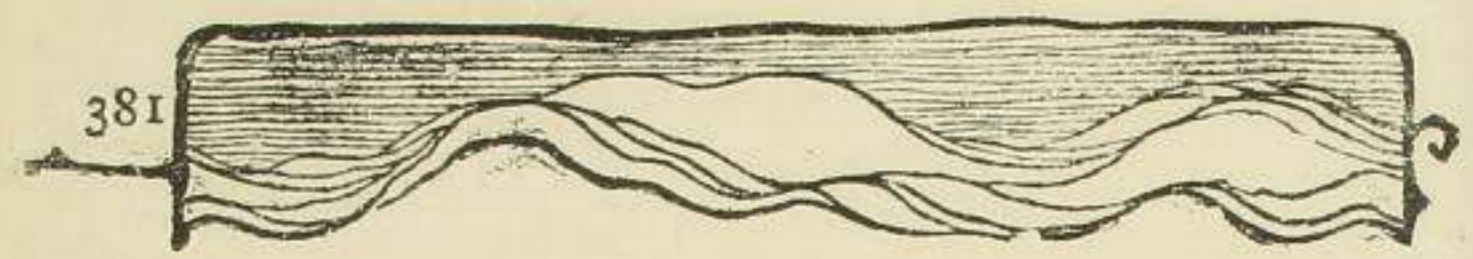
吾が心は苦しい哉！

絶て復平和を看出さず、

嗚呼竟に之を看出さぬ哉

吾が胸は彼に近づかんと

頻りに焦れ悶ふ！



嗚呼彼の君にすがりて、
永く離れざらんこともがな！

嗚呼かの君に接吻せん、

我が心の満足するまで！

願はくは彼の君が

接吻の下に死なばや！



第十六場

マルダ家の庭園

マーガレット及ファウスト登場

(マーガ) ハインリヒ殿、請ふ妾に約せられよ!

(ファウ) 何なりとも我が爲し得る所は!

(マーガ) さらば請ふ言たまへ、君は宗教を如何に思ふや、

君は誠に善良の好紳士にてをはずれども、

妾は信ず宗教は餘り重んじ給はずと。

(ファウ) 愛兒よ、之を棄れさね! 卿は我が卿に忠良なるを感ずるならん、

我は其愛する者の爲には吾が身命を捐てんと欲す、
我は何人よりも其觀念と信仰とを奪ふを肯てせじ。

(マーガ) 开は宜しからず、我々は亦之を信ぜずば有る可らず。

(ファウ) 果して信ぜねばならぬか?

(マーガ) 嗚呼妾幾分か君を動かすを得たらんには善からん者を!

君には亦かの聖奠を貴とばれぬと見ゆ!

(ファウ) 我は之を貴とぶなり。

(マーガ) 然は云へ、之を與かり受んとは爲たまはぬ、
彌撒にも告解(悔)にも君は久しく往かれぬ、

君は天帝を信じたまふ耶?

(ラァウ) 吾が鍾愛物よ！誰か敢て言ふを得ん

我は天帝を信ずとは！

司祭または賢哲に之を問ひ見よ、

然らば其答は唯是れ曖昧にして、

全く問ふ人を愚弄する者の如く見ゆなん。

(マーガ) 然らば信じ給はぬか？

(ラァウ) 吾が言ふ所を誤解せざれ、汝天女よ！

誰か能く彼(帝)を名ふを敢てせん、

誰か能く明言せん

我は彼を信ずと！

誰か彼の存在を感ずる者にして、

自ら言ふことを敢てせん——

我は彼の存在を信ぜずと！

夫の一切を包籠したまふ者、

夫の一切を支持したまふ者、

彼は卿をも我をも、又自身をも、

包括し且維持し給はずや。

天は蒼々として上に覆はざるや？

地は牢々として下に載ざるや？

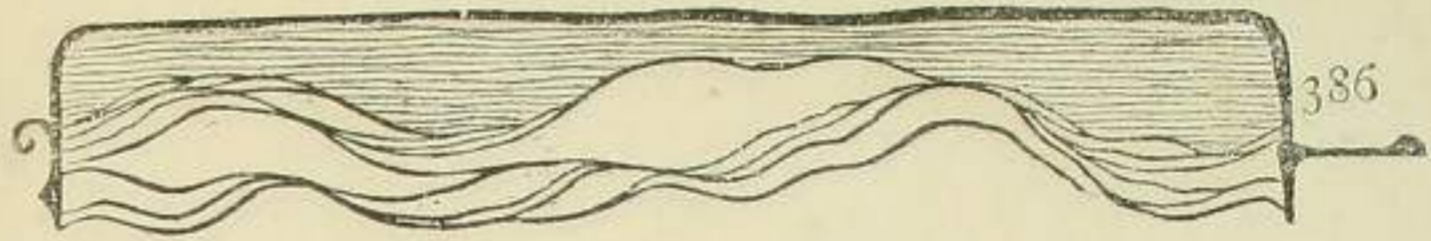
又永遠無窮の星辰は

灼々として耀き昇らずや。

我は卿と目と目相見るに非ずや、

卿が頭と心とに向ひてや、

諸の自然力駸々として逼迫し、



見ぬみ見ぬみ卿が身邊に、

永遠の秘運を織り成すに非ずや、

如何に大なりとも、卿が心に此力を満たせよ、

而して卿その心に幸福極まれるならば、

其時は、何となりとも、卿が欲する如く、之を名けよ、

即ち之を福祉とも心情とも戀愛とも神とも名けよ！

我は之に命ずべき何の名をも有せず、

唯然か感ず[◎]と言はん而已、唯所感のみ！

名は是れ音なり、煙なり、

天の光輝を曇らすにこそ！

(マীগ) 开は皆眞に美にして且善し、

殆んど其と同じき事を牧師もまた説く、



只少しく異なれる言語を以てする而已、

(ファウ) 果して然る哉、天下到る處、

一切の人心滔々相率ゐて、

各々その國語にて之を説く也、

何ぞ我も亦わが言語にて之を説く可らざらんや？

(マীগ) 然か聴く時は道理あるが如くも見ぬなん、

然れども其につきては何か面白からぬ者あるらし、

然れば君には基督教を奉じたまはぬと見ゆ、

(ファウ) 嗚呼親愛なる女兒よ、止みね！

(マীগ) 君が友とする所を見ては、

既に久しく妾は悲しみ來りぬ！

(ファウ) 如何なれば然るや？



(マーガ) 君が伴なふ彼の人は、

3140

心の奥底より妾これを忌み嫌ふ、
わらはが今までの生涯中、

彼の人の兇悪なる面相ほど

心に苦痛を與へし者は何もあらず、

(ファウ) 親愛なる雛傭僮よ！彼を怖るゝ勿れ！

3145

(マーガ) 彼れの容顔は妾の血を沸かすを奈何せんや、

他には妾すべての人に慇懃なり、

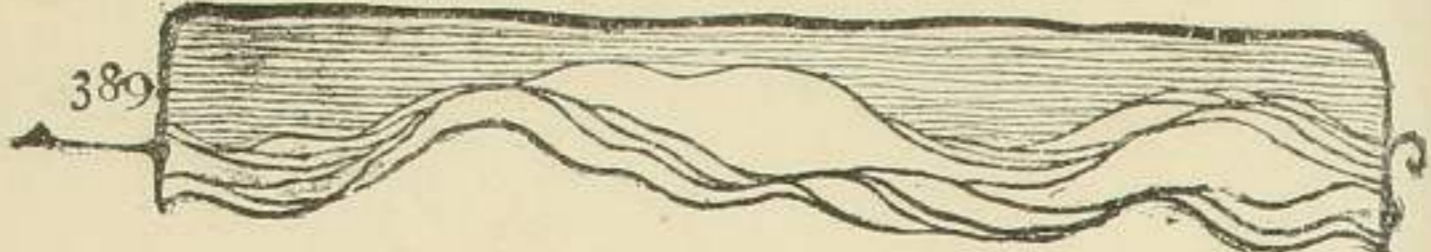
然ど如何に妾君を見るを嬉しく思ふとも、

彼の人にむかひては竊かに悚懼を懐く、

而して彼を一箇の悪漢と見做す耳！

妾若し渠を誣ひたらば、天帝よ之を赦し給へ！

3150



(ファウ) 斯の如き怪鳥もまた世に在らざるを得ず、

(マーガ) わらはは彼が如き人と共に決して居る能はず！

彼一たび戸内に入り来るや、

必らず冷笑の様子にて見まはし、

且其状憤然たる者あり、

3155

渠は何事にも同情又は興味を有せずと見ゆ、

渠が前額には特書して曰く、

彼は何人をも愛する能はずと、

妾は君の手に依かゝりてや、甚だ幸福に侍り、

極めて柔軟に温かくこそ感ずれ、

3160

而して彼の人の容顔を見るや、妾の心は閉づ！

(ファウ) 嗚呼卿、疑心暗鬼を生じつゝある天女よ！

(マーガ) 其感情わらはを壓する極めて強ければ、

彼人纒かに我等の所へ來りだにするや、

妾は君をさへ最早愛せざる者の如く感ず。

且又かの人側に居る時は、妾は決して神に禱る能はざりき、

而して其事は妾の心に食ひ入るや深し、

ハインリヒ殿よ、君に取りても亦必ず然るならん。

(フアウ) 开は卿彼と生來氣が合はぬ者なる耳。

(マーガ) 今わらは去らねばならね。

(フアウ)

嗚呼我は一小時間だも、

卿が懷に安んじ温たまる能はざる乎、

胸と胸、心と心、暫く相接するを得ざる乎！

(マーガ) 嗚呼わらは唯獨り寐たらば嬉しからん！

今夜わらは君が爲に肯て鎖を開れかん、

然し妾が母は甚だ目ざとし、

若し我々母に看つけられたらんには、

妾は即座に忽ち死せん而已！

(フアウ) 开は毫も困難事にあらず、天女よ！

茲に一小藥瓶あり！僅かに之が三滴は、

彼女の飲物の中にありてや、

熟睡を以て快よく彼女の身體を包まん。

(マーガ) 君の爲とし云へば妾何事をか爲ざらんや、

是れ望むらくは母に害を及ぼさざるべき乎。

(フアウ) 最愛者よ！然らずば、卿に开を我勸むべけんや。

(マーガ) 嗚呼至良人よ、妾きみに見ゆだにせば、
識ず何物か妾を驅て君が御意に順はしめんとす、
わらは既に君が爲めに盡せる甚だ多ければ、
今は殆んど妾の爲すべき事は何も遺れる無し(下)

(メフ) 我は委く詳らかに聞きとりぬ、

(メフ) あゝ小猿め、去たる乎。

(ファウ) 復も探偵を行れる耶。

(メフ) 我は委く詳らかに聞きとりぬ、

博士却つて自から問答を教へられたるぞよ!

是れ必らず君を大いに裨益するならんと信ず、

但し男子舊例の如く敬虔禮讓なるや否やは、

女子等甚だ之れに關心留意する者ぞかし、

彼等思へらく、彼(子)此に屈せば、生涯唯々諾々たらんと。 3195

(ファウ) 吁嗟怪物よ、汝は透視せずや、

如何に此の忠貞なる可憐の女子や、

其信仰は堅固にして、唯此信仰

全く獨り彼女を幸福ならしむる者なるが、

今其の最も愛する男子を破戒の淪亡者と

見做ねばならぬかとて、聖淨の苦勞を躬らす也!

(メフ) 汝靈慾的兼肉慾的なる、求婚者よ!

一小女子鼻糜に由て汝を導びきつゝあり。

(ファウ) 汝汚穢と猛火との夫婦間に於ける生損者よ!

(メフ) 而して彼女は人相を如何に善く見ることよ!

吾が面前に在てや、彼女は己も何か知らぬ異様の感を

懐く、

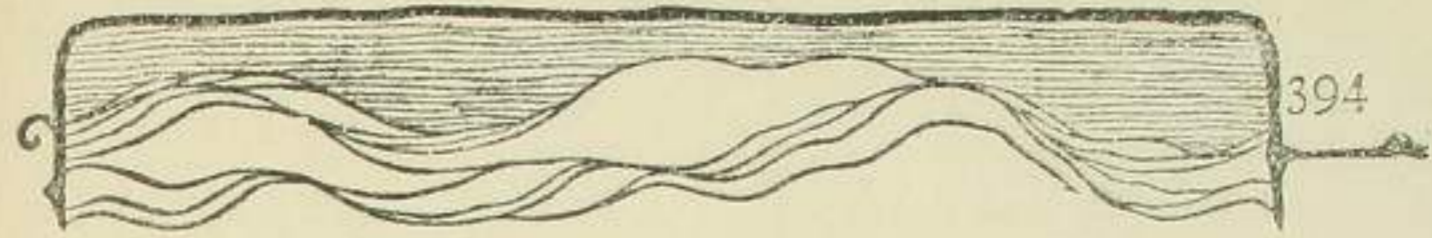
吾が此の小假面は其隠秘なる意味を彼女に看破らる、
彼女は我が必ず確かに某鬼子なりと感ず、
恐らく我は悪魔なりと眞に感ぜん歟。
されば今夜は御愉快！

3210

(ファウ)

开が汝に何ぞ關せんや。

(メフ) 否とよ、我も亦それに吾が悦樂を有せん。



第十七場

噴井の傍にて

マーガレット及リスベツ各々深瓶を携へて登場

(リスベツ) パルバラ嬢の事は何も聞かれぬや？

(マーガ) 一言も聞かず。兒は全く稀にしか人中に出でず。

(リスベツ) 實に、シビラ女开を今日兒に告ぐ！

パルバラ嬢は遂に愚なる事をなしぬ、

3215

开は彼女が威ばる所よりぞ！

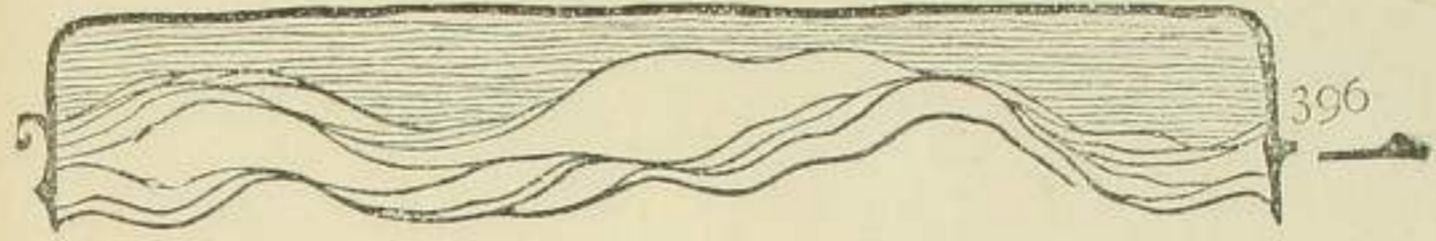
(マーガ)

开は如何なれば？

(リスベツ)

鼻つまみぞ！





彼女今食ひ飲みする時は、二人にて食飲するとぞ！

(マーガ) 噫！

(リスベツ) されば彼女には終に天罰報い來ぬ。

如何に久しく彼女は該青年に食つきをりしぞ！

今日は散歩にとて出で、

明日は田舎へ又は舞踏場へと往く、

實に彼女は到る處第一たらんと期し、

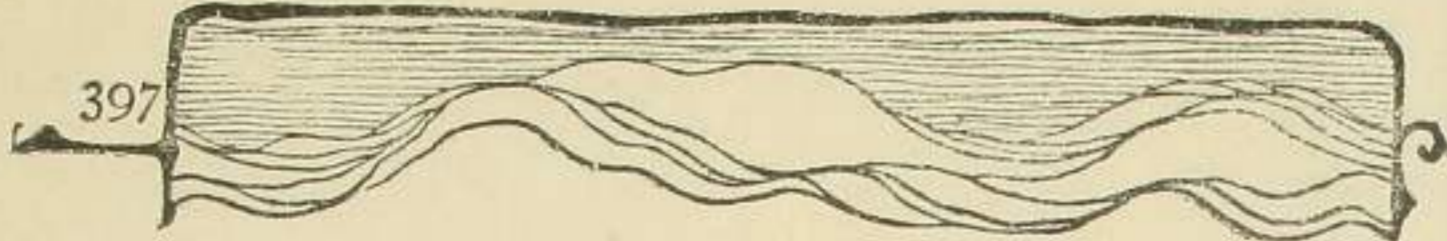
彼は菓子と酒とを以て彼女に媚びぬ、—

彼女は己れの美を太く誇れるが、

而も亦極めて陋しく、彼人より

許多の贈物を取るを恥とせざりき。

さればにや情思纏綿として深く結ばれ、



遂に亦處女花は散り了りぬ！

(マーガ) 嗚呼哀れなる者よ！

(リスベツ)

尙これを憫れまるゝ乎！

我等れの、紡車に向ひて居り、

母刀自夜々われらを離し出さぬ間に、

彼女は其戀人の側に恍惚として立ち、

或は戸口なる椅子の上或は暗き蔭道の中に、

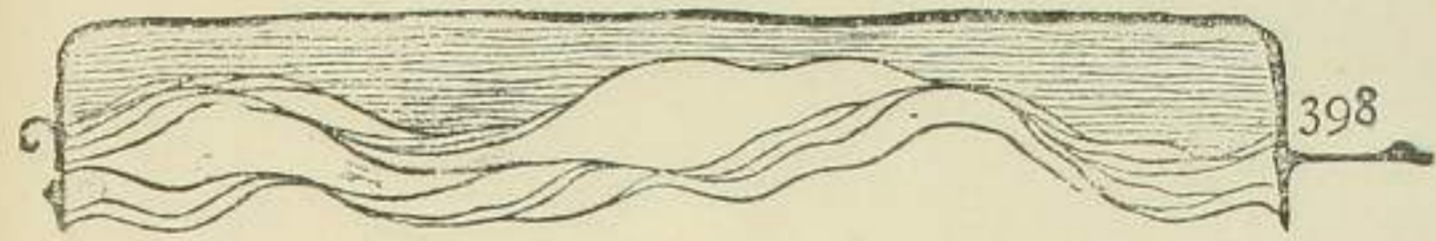
彼等は相携へて、時間の短かきを眩てり。

されば今彼女は悄然と頸垂つ、

罪人の白衣にて懺悔をなすこそ自業自得なれ！

(マーガ) 彼必ずバルバラ嬢を妻に娶らん。

リスベツ) 否、彼は然る愚人ならじ！彼が如き快青年は



他處へまた縦横自在に飛び行くべけん、
然のみならず、彼は逃たりとぞ！

3240

(マーガ)

开は情なし！

(リスベツ) 彼女は縦や彼を贏得とも、开は善く參らじ！

少年等は彼女の花冠を引裂かん、

又我々〔少女〕は刻める稿を戸口に撒かん。(場下)

(マーガ、音家の方へ) 我や嚮には、或る女子が身を誤れる時に

は、

如何に勇敢に喋々罵しるを得たるぞよ！

3245

如何に我や、他の〔女子〕の罪を〔攻る〕爲には、

此口猶十分なる言辭を吐くに足ざるを〔覺む〕しぞよ！

开は如何に黒く我に見ゆしか、而るを我は又更に之を

黒くせり、

如何に黒くしても开は我に十分とは猶見ゆざりけり、

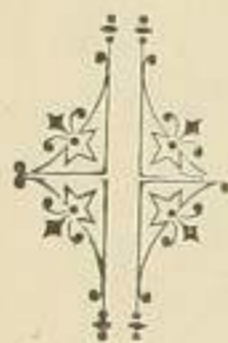
而して我は自家を祝慶し、太く己の潔淨を誇りぬ。 3250

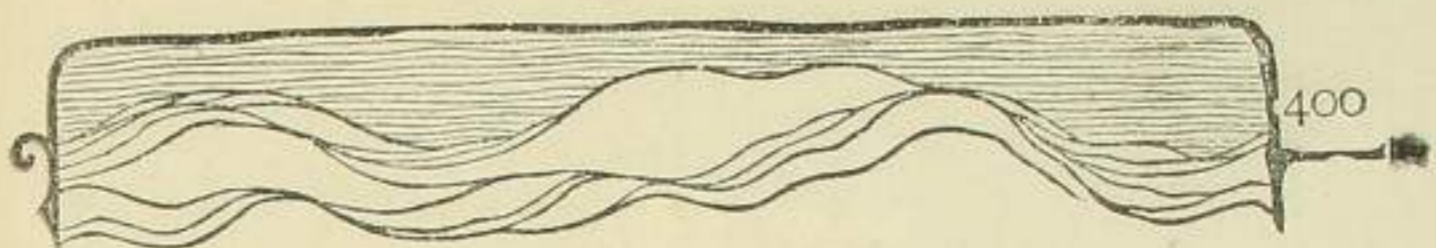
然るに計らざりき今や此身自から罪其物ならんとは！

然は云へ、——夫の凡て兒を此罪に陥れたる物は、

嗚呼天よ、如何に快よかりしぞよ！噫如何に嬉しかり

しぞよ！





第十八場

城墻内の景

牆壁の凹龕裏に悲痛の姿せる聖母の祈念像安置
せられ、其前に二三の花瓶を列す。

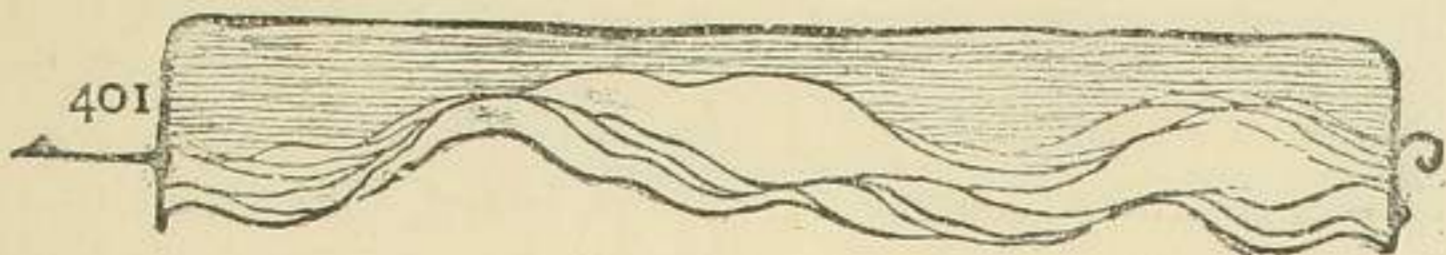
(マーガ、瓶に新しき花を挿しつゝい) 嗚呼悲痛に充てる聖母よ!

爾の慈悲深き御顔を垂れて、

わらはが此の困苦を憫れみ給へ!

鋭き刃を御胸に、

百千の苦痛をば帯びつ、



爾の大御子の釘死を仰ぎ給ふ。

爾は大御父を瞻奉つり、

長大息をば揚げつゝも、

彼と爾との悲痛の爲に禱り給ふ。

誰か能く感じて知らん、

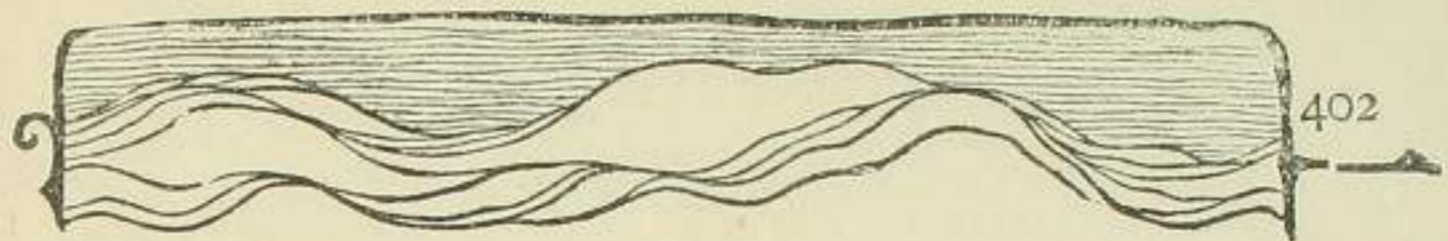
嗚呼如何に烈しい哉、

吾が骨髓に於ける其苦痛は!

如何なれば吾が弱き心怖れ慄くか、

吾心如何なれば震ひ、如何なれば思ひ、わづらふか、

爾知り給ふ、嗟爾獨り知り給ふ!



何處にまれ我が往く處にて、
 何たる悲哀嗟何たる悲哀何たる痛恨、
 茲に吾が此胸の中にわだかまるぞよ！
 我は孤立のみ、殆ど絶て伴ふ者なし、
 嗟我は泣く、嗟我は泣く、嗟我は泣く、
 腸は吾が心の中に斷つ乎哉！

吾が窓に於ける盆栽をば、
 涙もて我は濕ほしぬ、噫！
 今朝はやく君が爲にと
 これらの花を我手折ける時。



朝日は早く空に昇りつ、
 吾が室を朗然に照らす、
 嗚呼我や萬感胸に塞がりつ、
 寐牀の中に早や興てぞ歎く。
 助をたべ！兒の恥辱と死を救ひ給へ！
 嗚呼悲痛に充てる聖母よ！
 爾の慈悲深き御顔を垂れて、
 わらはが此の困苦を憫れみ給へ！



第十九場

マーガレット家の前るな街衢

マーガレットの兄なる兵士バレンチン登場

(バレン) 嗚呼我や嘗て酒筵に坐せる時、

如何に稠人廣座の中に鼻高かりしぞ！

無禮講とて各々自慢話は随意のみ、

朋輩等は吾が前に喋々と得意げに、

己が花たる女子をなごを代かるく、讚ほあげつ、

卓上に臂を威つばり突き乍ら、

満々たる大杯に之が稱讚を洗ひ流しぬ、

我は例の如く泰然として坐し、

此等すべての自慢を悉く聴き了るや、

莞爾として吾が髭鬚くちひげを拈りつ、

満酌せる大杯を悠然と手に捧げつ、

言けらく、『皆各自それぞれの流義にて孰いれか善らざらん！

然しかはあれども、全國中にねいて、果して

吾が親愛なるマーガレットに比すべき者あるか、

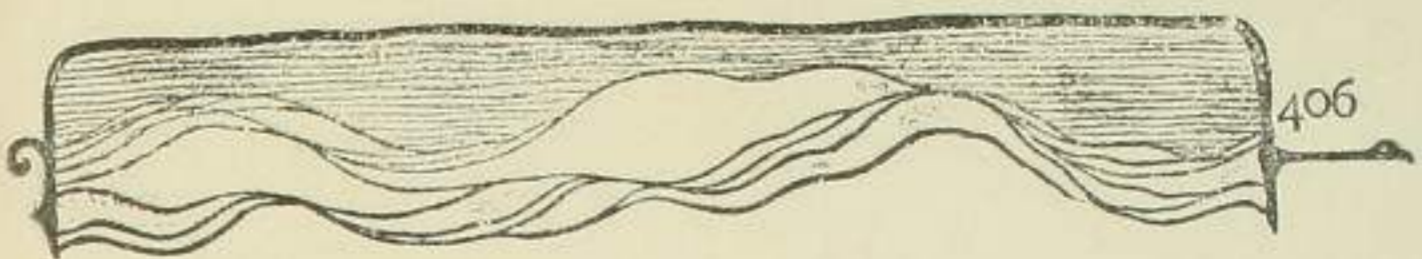
果して吾が妹と共に水鏡に臨み得る者あるか？

『然り！然り！カチン！カチン！』ガラス玻璃の音は卓めを廻り

ぬ、

或者は叫ぶらく、『渠かれが言ふ所は虚ならず、

彼女は眞に全女姓中の最も美しき花ぞかし！』



斯くて一切の自慢家は口を噤み坐しぬ。

3305

然るに今や、噫！髪を掻きむしらんとす、

石垣に頭を打つけて「腦漿を叩き出さん」哉！

有ゆる悪漢兇徒、或は嘲弄の辭を吐き、

或は鼻梁を反して、我を冷笑せんとす！

我は力なき借財家の如くにして潜み坐し、

3310

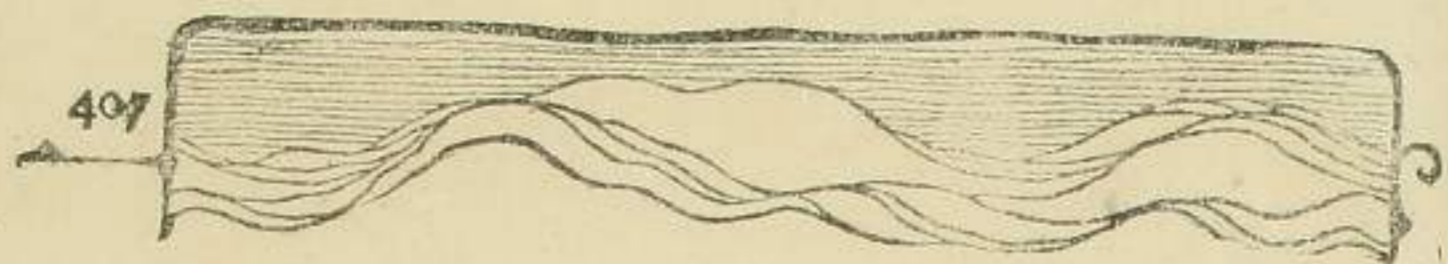
偶發の一小語にすらも冷汗かゝんとす！

我は固より彼等を悉く打懲し得たれども、

猶彼等を虚言家と呼ぶを得ぬぞ口惜しき！

(耳を歎) 何が此に進み來るや、何が狐鼠々々通り過るや、

3315



我若し看誤らずば、彼等二人そこに在り、

彼若し其ならば、直ちに引ッ執へて呉れん、

彼は斷じて此の處を活きては去らじ。

(ラァウストとメフオストフェレス登場)

(ラァウ) 如何に彼方なる教會の窓よりして、

常燈明の光輝は熒めき上るぞよ、

而して左右は暗く愈よ暗く曇りゆきつ、

3320

遂に黒闇は我々の周邊を全く闔る哉！

斯く吾が胸の裏も暗夜とこそ見ゆれ、

(メフ) 我は物竊まんとする牡猫の如しとや言はん、

時に或は火の梯子を馳のぼり、

又時に或は牆壁に沿ふて偷び走る、

3325



猶我は之が爲に徳行家たるを失なはじ、

即ち唯少しく盗心あり、唯少しく淫心ある而已、

斯く我は夫の勝妙なるワルブルギスの夜が

來らんとして既に四肢五體に響くを感ず、

明後日の夜は再び巡り來らんとす、

其時こそ人は一夜を守り明すの徒勞ならざるを知らぬ、

(ラウ) 我かしこにて昔後に燐めくを見るは、是れ

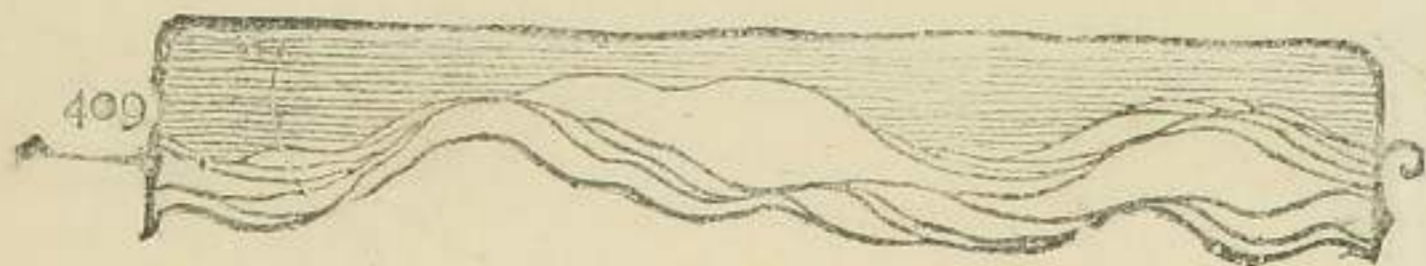
彼の寶物(の光)空へ其間に揚れるならずや、

(メフ) 夫の釜を引き揚ぐるの愉快を

君は遠からず味はふことを得べし、

我先つごろ其中を一瞥せしが、

煌々たる獅子弗その裏に満ちたり、



(ラウ) 吾が可憐の處女を裝ふべき

寶玉は有らざるか、指環は無きや?

(メフ) 我は其中に眞珠鏈索の類に似たる

一箇のみごとなる佳物あるを認めねきぬ、

(ラウ) 并は甚だ善し! 贈物持たずして、

彼女の所へ往くは心苦しく思はる、

(メフ) 或る快樂を無報酬にて享くることは、

君必ずしも憂ふるを要せじ、

今天に星宿爛然として耀やける間に、

君は一篇の眞箇に美術的なる佳什を聴くべし、

我は彼女の爲に一箇の道德歌を歌はんとす、

庶幾くは彼女一層深く君を慕ふに至らん、



(三絃に合せて歌ふて曰く)

戀人の門口に徘徊りて、

汝は何を爲つゝあるや、

カサリナ嬢よ、茲に、

味爽の朝まだきに？

罷よ！ひかへよ！慎めよ！

彼は歡んで汝を迎へ入れん、

汝は處女として入らん、

處女としては出で還らじ。

「處女よ、善く氣をつけよ！
事若し既に終へたらんには、



(バレ進み出)

汝此に誰を盡惑さんとする乎、

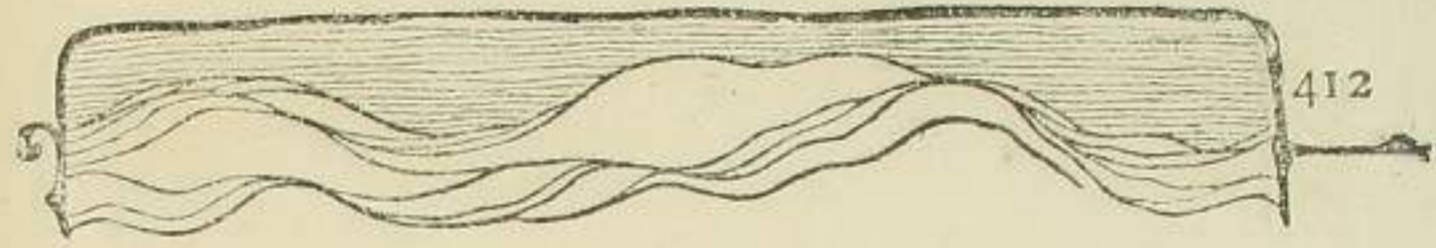
天神地祇も照覽あれ、此の穢らはしき捕鼠者よ！

先づ樂器を破壊して呉れん！

次には其歌ふ奴を打殺し遣らん！

(メフ) 三絃は折れたり、最早何にも成らぬ哇！

(バレ) 今度は汝が頭の顱骨を叩き割るぞよ！



(メフ) 博士、負け給ふな！奮發！

我に接近して居たまへ、我が君を導く如くせよ！

君の劍を以て突進したまへ、

只衝きたまへ、我うけん。

(バレ) 之をうけよ！

何ぞうけられざらん。

(マス)

(バレ) 之をも！

(メフ) 勿論！

(バレ)

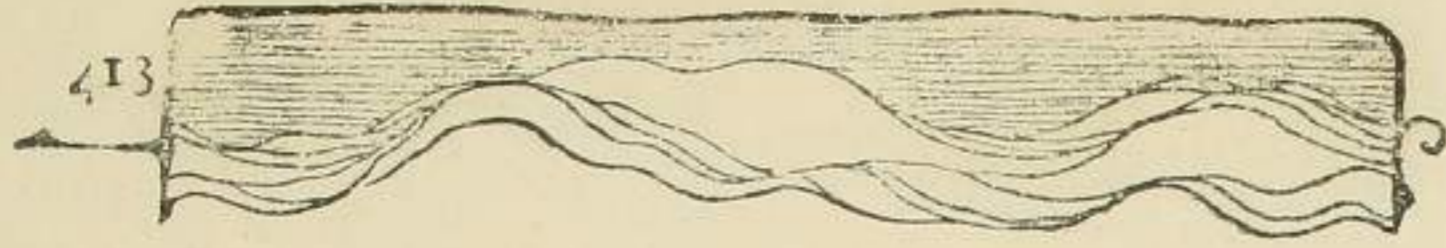
悪魔自ら戦かふに違なし、

然らずば是は何事ぞ！既に吾手は利ずなりぬ！

(メフ) 博士、奮發！

(バレ)

差残念！



(メフ)

今痴漢はをとなく成りぬ。

然し乍ら率逃ん！我々は迅く消ぬ失ねばならぬ。

蓋すてに人殺てふ叫聲は起れり、

警察官は我善く之を買収するを得れど、

刑事法廷は我その與しにくきを知る而已。

(マルタ) 窓より出あへよ、出あへよ！

(マー) 窓より

此へ燈火を！

(マルタ) 窓より 彼等罵り撃あふ、——彼等叫び闘かふ！

(人々) そこに一人すてに殺されて倒れ居る！

(マルタ) 家より出 下手人は、——彼等早や逃たりや？

(マー) 家より出 此に倒れてるの誰にや？

(人々) 御身が母刀自の子ぞ！



(マーガ) 全能の神よ！嗟何たる不幸ぞ！

(バレ) 我は死なんとす！とは言ふに迅けれど、

死の來るは猶それよりも迅からんとす！

汝等婦人等よ、何ぞ吠へ且吠やくや？

此に來りて、我[が言ふ所]を聽けよ！

(皆彼の周圍に集まる)

親愛なるマーガレットよ、視よ、其方は尙年若し、

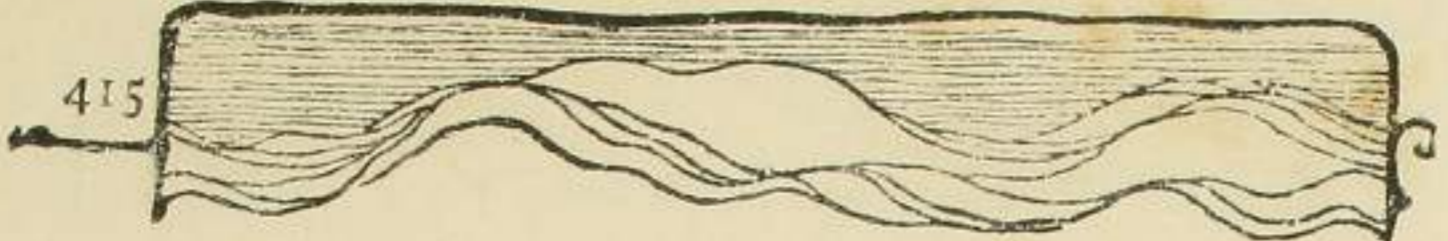
随つて其方は未だ十分伶俐からず、

そなたの業を嗟悪く行りぬ！

我は腹心の語として一に之を其方に言ふ、――

そなたは早や既に一たび身を汚せり、

然れば亦頓て公明正大に之を爲せよ、



(マーガ) 親愛なる兄上、吁嗟神よ！我は何たる意味ぞ

(バレ) 此の遊戯の中には神様の名を措いて唱へざれ！

爲したる事は既に爲したる也、奈何とも爲る無し、

而して其結果は成り得る如く、成らん而已、

汝密かに或る一人と事を始めんに、

忽ち他の男子續々これに次で來らん、

而して十人先づ汝を弄びたらば、

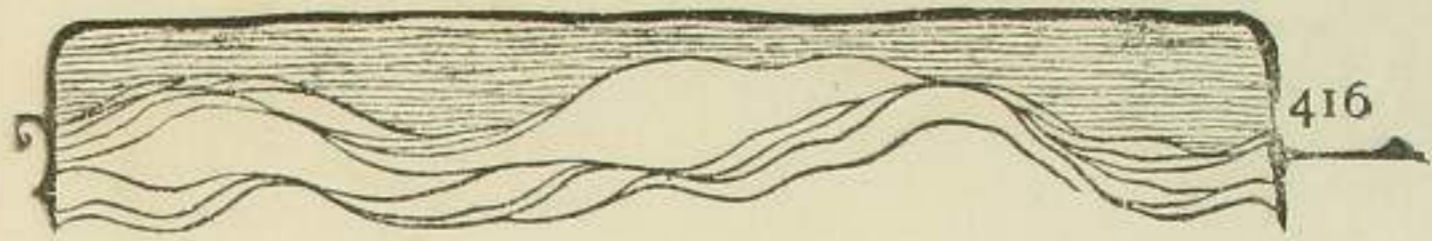
遂には全町の人々なんぢを弄ばん、

抑も羞恥てふ女や、其初めて生るゝ時は、

密かに此世へ導びき入れらる、

而して人は暗夜なる覆面巾を

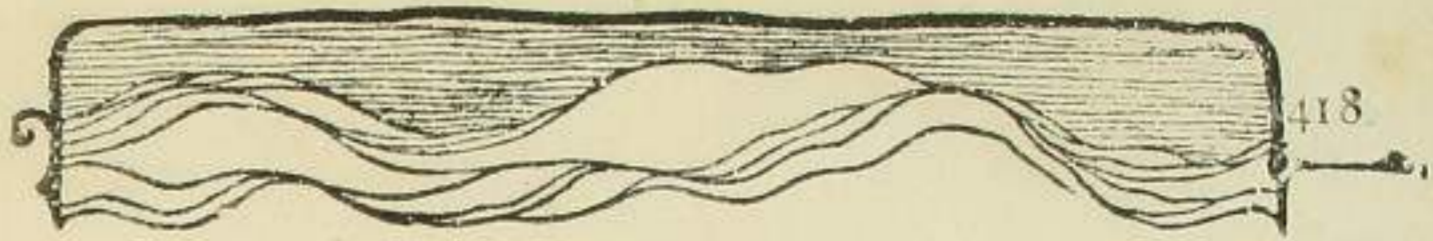
之が頭ねよび耳の上より掩ひかく、



然り、人は彼女を殺さまく欲す。
 然し乍ら彼女は成長す、大膽となる、
 遂には亦白晝顔曝して歩く、
 而も其美は露ばかりも増す無し、
 其の顔いよいよ悪らしく成るや、
 彼女いよいよ白晝の光を好むに至る、
 我は夫の「怖ろしき」時の至らんとするを確に認む、
 其際にや諸の體面ある市民は、
 傳染病に死せる屍を避くる如く、
 嗟淫奔婦人よ、汝を傍らへ避けなん！
 彼等なんぢの眸子を直視する時は、
 汝が心は五體の中に悄然として絶望せん。



汝は最早花嫁として黄金の鏈鎖に身を飾らじ、
 教會堂裏にて復誓約の爲め壇前に立たじ！
 汝は今後美しくしきレース襟して、
 舞蹈の中に愛嬌をふりまく事あらじ！
 頓て或る暗澹たる窮巷に、裏店に、
 乞食や癡人の中に潜まん！
 而して縦や天帝、汝の罪を赦したまふとも、
 地上に汝は指彈せられて生活せん而已！
 (マルタに向ひて) 君が靈魂を神の慈悲に托せよ、
 君は又讒誣を己れの死土産に加へんとする乎、
 (バレ) 吁嗟我なんぢの皺頭を斬り落さんこともがな！
 汝鐵面皮なる、恥知らぬ忘八婦よ！



然らば我は吾が諸の罪愆の
赦宥を澤山に〔彼世に〕獲るならん！

(マーガ) 親愛なる兄上よ！何たる地獄の苦患ぞ！

(バレ) 涙を流すことを措けと申すに！

蓋其方が不名譽の淵に墮落したるこそ、

是れ此の我に最も苦しき致命傷を蒙しめし者なれ！

我は死の永眠を心安く通りつゝ、

軍人とし、勇士として天帝の所へ參るぞよ！(死)



第二十場

大教會堂の景

禮拜式、風琴、讚美歌

マーガレット多人數の中に居り、惡靈マーガレットの
後に立つ、

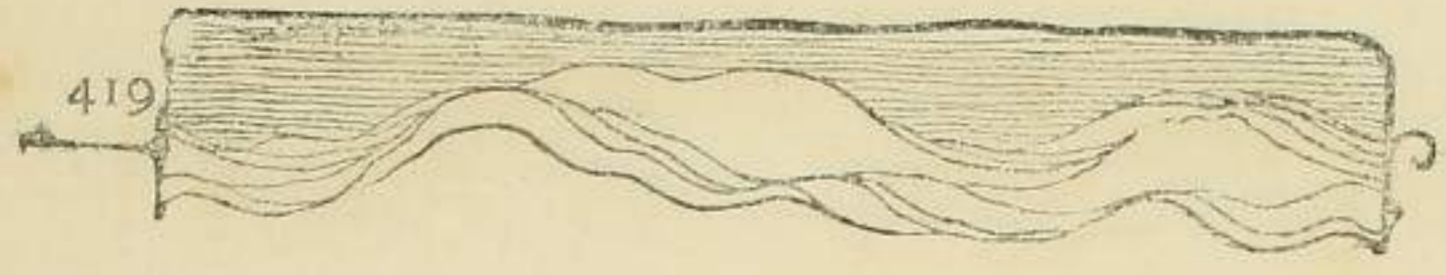
(惡靈) マーガレットよ、彼の昔は如何に今と異なりしぞよ！

彼の時には、卿は尙全く罪なき處女にして、

此に無邪氣にも壇前に進み坐し、

き破れたる小き書中に就きて、

あどけなしに祈禱を唱へ、





半ばは小兒の戯めける者、

半ばは神が心にやどれる者なりき、

嗚呼マーガレットよ！

汝の思考は今何に在る乎、

汝が心の裏には

何たる罪惡潜めるぞよ！

汝は己が母の靈魂の爲に祈るや！

彼女は汝の手にかゝりて永苦の場へ睡りゆきぬ！

汝が戸闕の上に着けるは誰が血ぞ？

而して汝が心の中には

既に一種の不安涌き出て、

自ら苦しみ、且汝を苦しむるに

纏やかならぬ胸騒を以てせざる耶。

(マーガ) 吁嗟禍なる哉、吁嗟哀しや！

346(

3465

3470



我この思想を脱せんこともがな！

此の思想や縦に横に我を襲ひ、

而も我は之を奈何ともする能はず！

(唱歌班の合唱) 「オルガン鳴る」

3475

Dies irae, dies illa

Solvat saeculum in favilla.

(吁嗟夫の大々震怒の日に於てや、

世界は炎々たる猛火に溶け去らん！)

(心鬼) 悚然たる恐怖なんぢを執ふ！

最後の喇叭は鳴り響く！

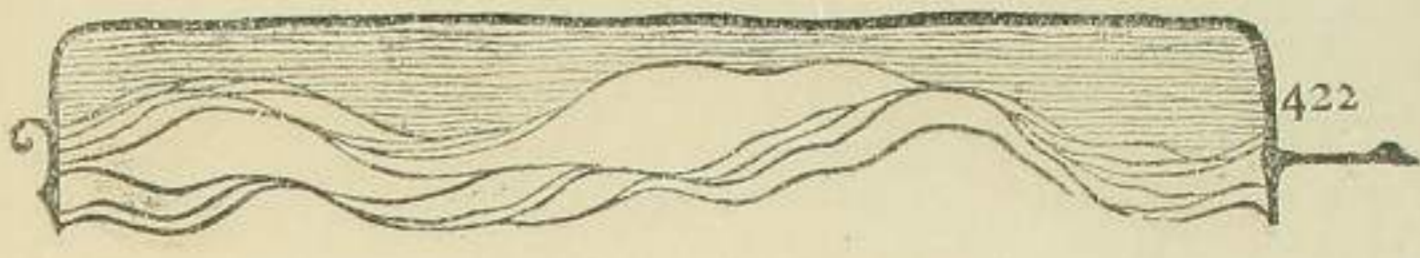
墳墓は悉とく震ひ撼く！

汝が既に久く動かぬ心は、

火焰の苦惱を蒙むるべく、

死灰の如き静止の態より、

3480



忽ち再び喚び活けられつ、
躍如として甦へり來たる！

3485

(マーガ)

嗚呼われは茲を去りたやふ！
風琴の洋々たる音は、
宛然わが氣息を奪はんとす、

讚美の爛曉たる歌は

吾が心を底にまで鎔かし去んとす！

3490

(唱歌班の合唱)

Index ergo cum sedebit,

Quidquid latet adparebit,

Nil inultum remanebit.

(大審判主嚴然として坐し給ふ時は、

諸る隠れたる事等は皆顯はれん、

一も惡として罰せられず遺る者なけん)

(マーガ)

我は息つまりて苦るし！

3495

四壁の大柱は我を擲にす！

穹窿たる天井は吁嗟夫れ

上より我を壓潰さんとす！空氣を！

汝の身を隠せよ！否な、

罪と恥とは決して隠れをらじ！

3500

空氣を？光明を？「唯是れ暴露の種！」

嗟マーガレットよ、汝は禍なる哉！

(唱歌班の合唱)

Quem patronum rogaturus,

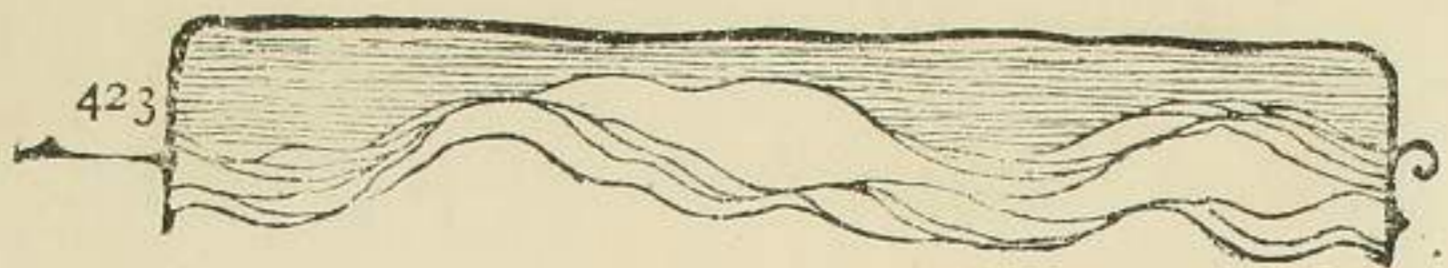
Cum vix justus sit securus ?

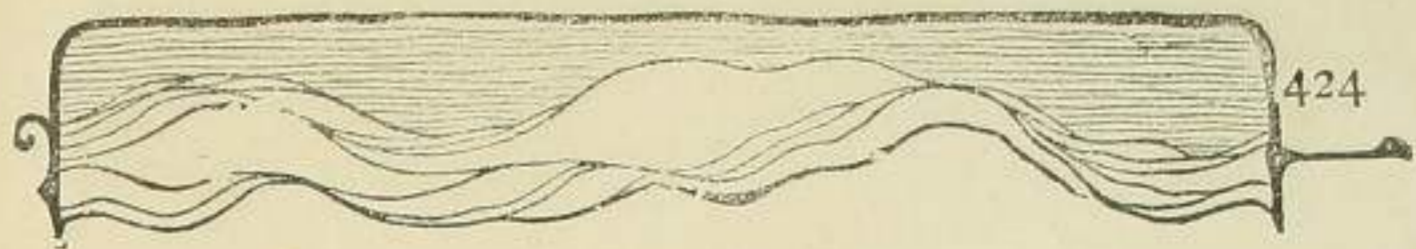
(吁嗟われ不幸なる者何をか言ふべき！

吁嗟われ孰れの教聖にか頼り頼むべき！

正義き者すらも辛うじて無事なるぞよ！)

3505





(心鬼)

榮光に入れる人々は

其顔を汝に背く、

心の清き人々は

汝に手を伸るを屈む、

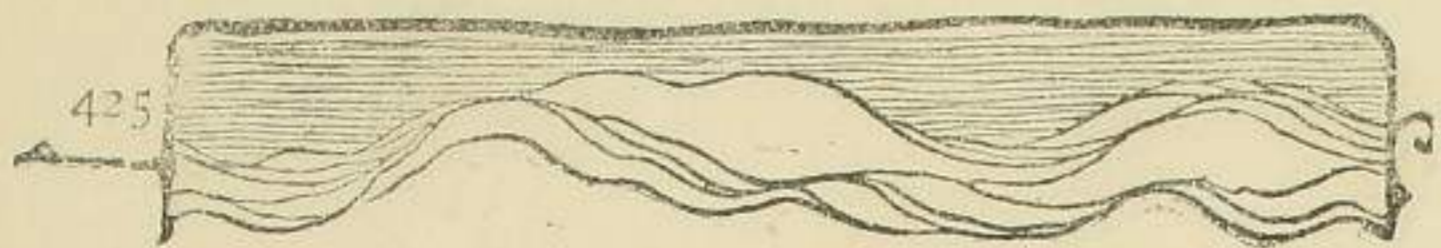
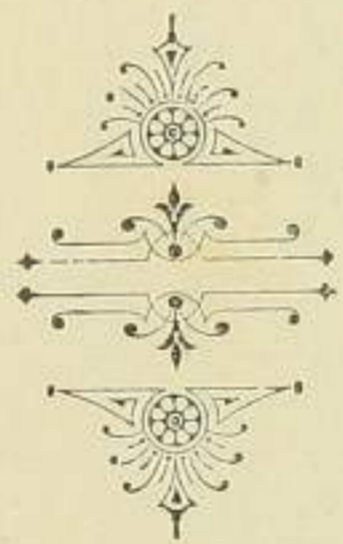
吁嗟禍なる哉、汝！

(唱歌班の合唱) Quid sum miser tunc dicturus?

(吁嗟われ不幸なる者何をか言ふべき！)

(マーガ、驛馬の婦人) 御隣の方よ、御持の興奮薬を！

(方ぬけて昏倒しする)



第二十一場

ワルプルギスの夜

ハーツ山の景 エシールケ及び エレンド地方

フアウスト及びメフキストフェレス登場

(メフ) 君は遂に「乗て往くべく」「箒柄を」「獲まく」願はざるや。

僕は至極幅強なる牡山羊をに乗往んと欲す、

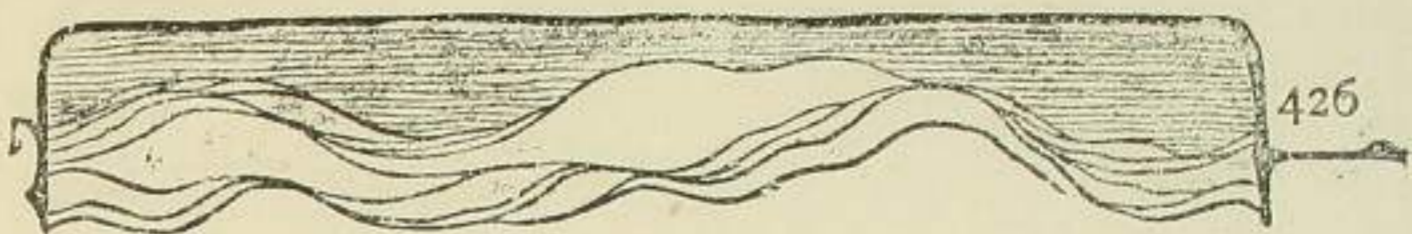
此の道にては、尙目的地を距る頗る遠し。

(フアウ) 我ふは吾が脚に爽快なるを感ずる間は、

此の節瘤よしこぶだてる自然木の杖にて足れり。

道通みちを然か切つむるは、何の益ぞや！

此の谷間たにまなる羊腸つとらぢりにそひて匍匐はひあるき、



然る後これらの巖に攀のぼり、
其處より清泉の永久に混々と遊ばしむを賞する、
是れ斯る山道にて獲らるゝ興味にこそ！

春は既に樺の嫩緑に動き、
松柏すらも既に之が淑氣を感じ、
寔に春は亦我々の四肢五體にも働かてやは有るべき。

(メフ) 我は斷言す我は毫も斯る物を尋ね認め得ず！

わが身體の中は今なほ嚴冬の候のみ！
わが途上には却つて霜雪をこそ冀ふなれ！
夫の紅なる月の既に圓ならざる小輪は、
嗟如何に虧残れる薄輝を以て哀に昇るぞよ！
而して其照すや悪ければ、人々は一步ごとに、
樹の根や岩の角に走り觸れんずる哉！
請ふ、我が一箇の鬼火を命ずるを咎めざれ、

かしこに一箇盛んに燃なる者を我はみとむ、――

(鬼火) 來れ、友よ！汝の光を我等に借らばや！

何とて汝は然か徒らに光るや、

請ふ幸ひに我々を照して登らしめよ！

(鬼火) 閣下よ、莊重の心を以てしなば、望むらくは

小生の輕麗なる天性を抑ふるを得ん歟、

只我々は平生進路逶迤として九折するを奈何せんや。

(メフ) 嗟、嗟！汝は人間に倣はんと欲するよな、

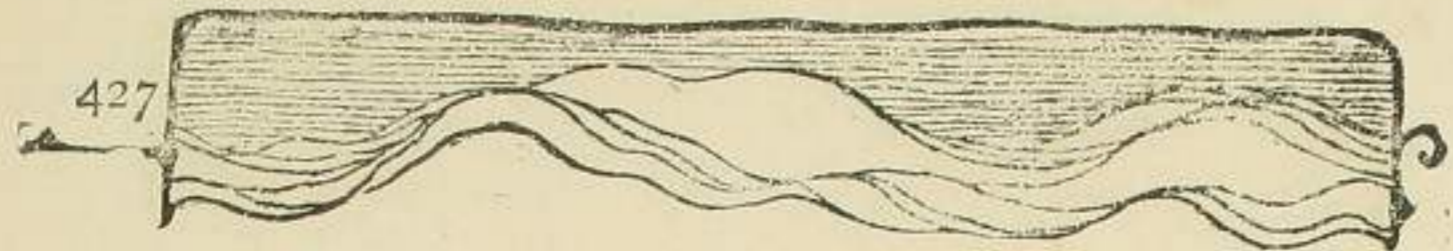
我魔王の名を以て命ず！唯請ふ眞直に行けよ！

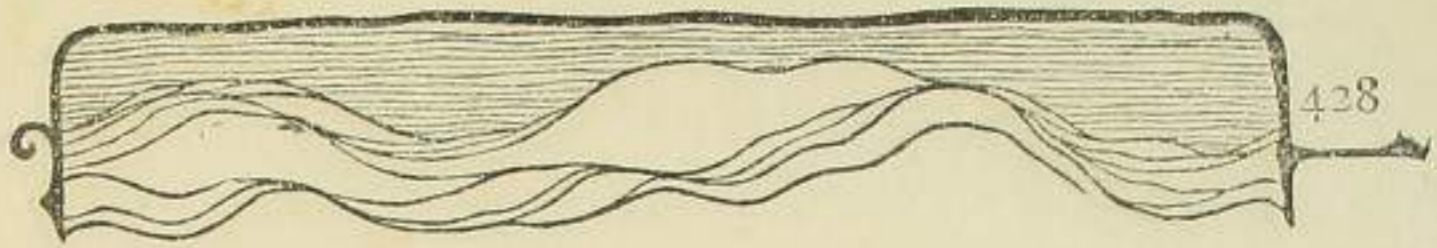
然らずば我は汝の其明滅する生命を吹き消さん。

(鬼火) 小生は閣下が此に君長たるを善く識れり、

而して閣下の御意に應はんことを只管冀がふ、

然れども、請ふ一考し給へ、此山は今夜は魔狂しなる、――





君は縦し踏迷ふとも、然な咎めたまひそ。

(フアウスト、メフキスト、フェレス及び鬼火互に鹽合にて相歌ひ登る)

(二怪一暫) 我々は夢界に、魔界に

早や打入りぬと見ゆ!

我等を善く導け、汝に譽を得よ!

庶幾くは我等速かに前み往きつ、

空漠たる廣き原野に出ることを得ん。

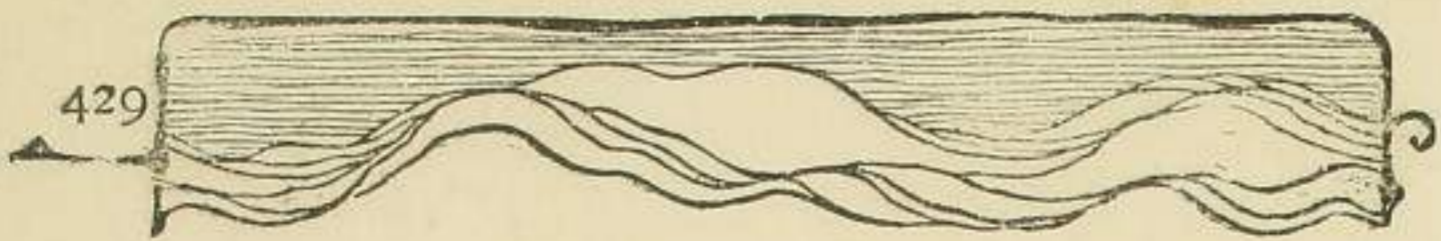
視よ、樹また樹、梢また梢と

何ぞ其れ送迎に忙がはしきぞよ!

斷崖は嵯峨として長空に懸り臨む哉!

[視よ]長く引延ふる天狗然たる岩鼻、

何ぞ夫れ雷の如く、駭し且氣吹くぞよ!



巖石を穿ち、青草の中を經て、

大川小川は瀧の如く奔り降る。

颯々涼々是れ林泉なるや、

洋々是れ歌聲なるや?

嗚呼呢々喃々たる是れ戀愛を訴ふる聲なるや。

是みな曩日の微妙なる天聲耶?

嗚呼何たる希望の調ぞ! 何たる熱愛の聲ぞ!

此往日の反響は古傳説の如く只微に聞ゆる哉!

ウフー、ジュフー! 段々と近く響き來る。

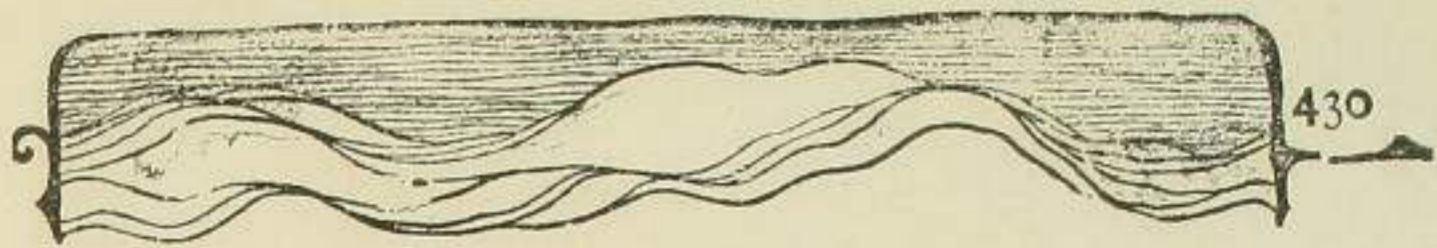
嗚、梟、産婦鳥、および五位鷲、

嗟彼等は皆目覺をるにや。

藪を通るは是れサラマンダルなる乎、

何たる長脚修脛! 何たる厚腔大腹!

突兀たる盤根は、巨蛇の如く、



岩や砂石の上より蟠屈し、

鬼工かと怪まるゝ長爪を延ばしつ、

我等を恐れしめ、我等を捕へんとし、――

幾多の活る堅き節の上よりや、

鱗の如き衆多の脚を延しつ、

登山者を攫まんとす。而して鼯鼠は、

其色や千種に滔々群をなしつ、

苔蘚を過り、叢地を経ゆく哉！

而して螢は星の如く相群がり、

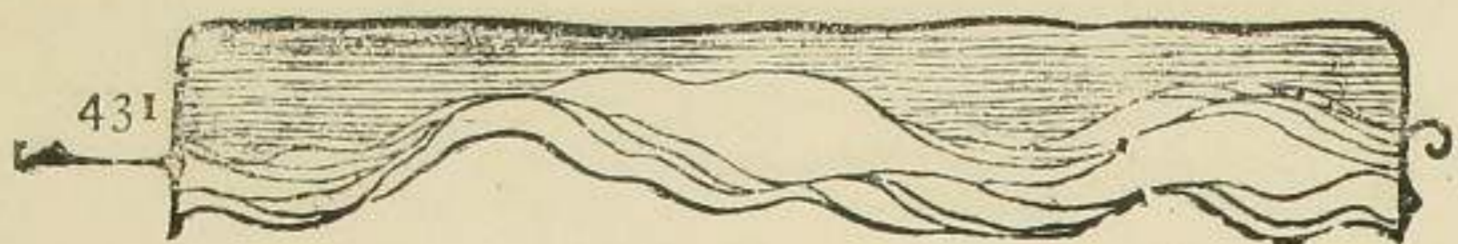
紛々瑩々爛然として飛びつ、

動すれば却て他を迷はすべき嚮導とこそ成れ！

然しあれど、我々は茲に止まるべきか、

又は尙遠く進むべきか、請ふ我に告よ！

一切皆悉とくケルケル旋轉する如く見ゆ、



岩も樹も均しく相率ゐて、

滔々と其れ歪面を作り、

妖光は頻りに殖え且擴がる哉！

(メフ、トアリス) 請ふ、勇ましく吾が裳裾を執らへよ！

此は早や一箇の中央峯巒にこそ、

茲より我々は、如何にマンモンが山中に

赫奕と輝くかを驚き看るを得ん。

(ラウ) 如何に怪しくも髣髴と豁壑を通じて

一種の朝霞めける妖光閃めくぞよ！

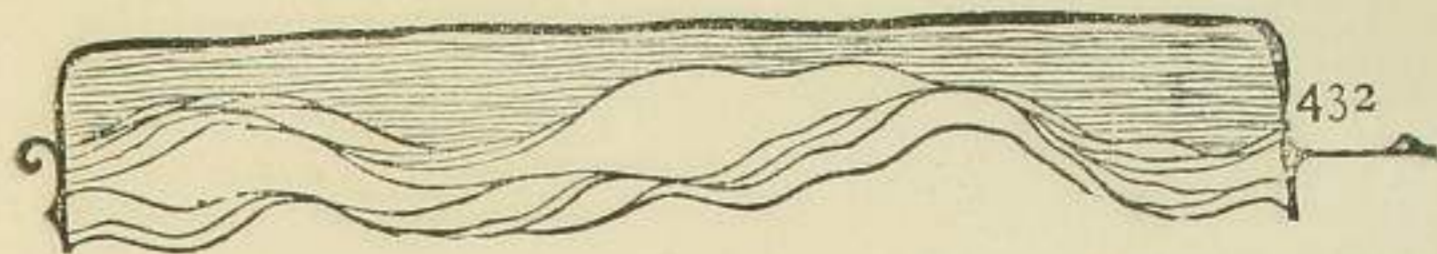
而して开は断崖の深き底にまで、

幽靈然として照り透る乎哉！

此には水蒸氣起り、彼處には雲氣立騰り、

此には暗霧紅霞裏よりして光輝灼然たり、

〔其光輝や〕時に或は細き縷の如く匍行し、



時に或は源泉の若く爆發し來り、

此には百千の脈絡を呈して

綿々山谷を縦横貫穿し、

彼處には窮隅に突き詰るや、

俄然として四分五裂し去る乎哉！

之を近くしては、宛然金砂の飛散するが如く、

閃々たる火光一面に發散する驟雨の如し。

但し請ふ視よ！全山中に聳ゆる

巖牆石壁は悉く炎々と燃なるぞよ。

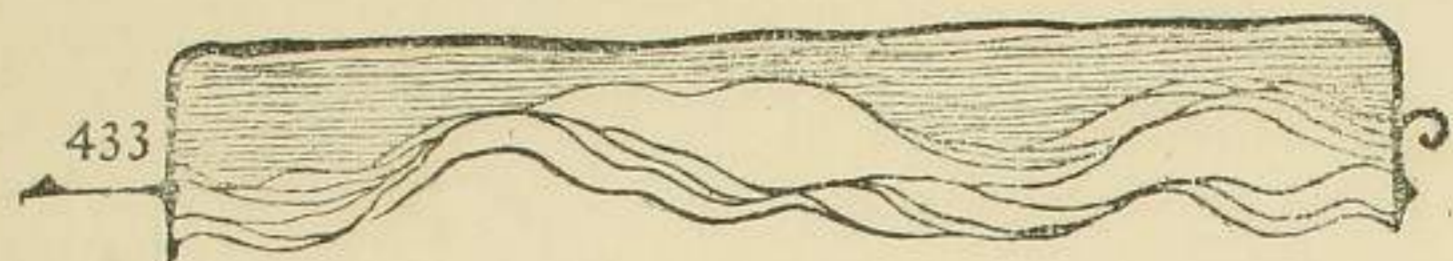
(メフ) マンモン公今夜の佳會の爲めに

其宮殿を美しく輝やかさゝらんや。

君が之を看るは甚だ幸ひとす、

君は既に喧々囂々たる賓客の續々到来を嗅ぎ知る。

(ラウ) 如何なれば十八姨猛婆は然か空に狂奔するぞや、



嗟何たる勢を以て彼女は吾が頸を撃つぞよ！

(メフ) 君は巖石の老肋に縋らざる可らず、

然らざれば彼女(猛婆)君を千仞の谷底へ拂ひ落さん。

朦霧は此の夜を闇となしぬ。

請ふ聽けよ、如何に森林は轟々鳴とゞろくぞよ！

流石の鳴鳥も駭き怕れて飛まはる。

請ふ聽けよ常磐の翠綠殿を支ふる

大楹巨柱吁嗟其れ裂くる乎哉！

枝々は何ぞ呻り且折るゝや！

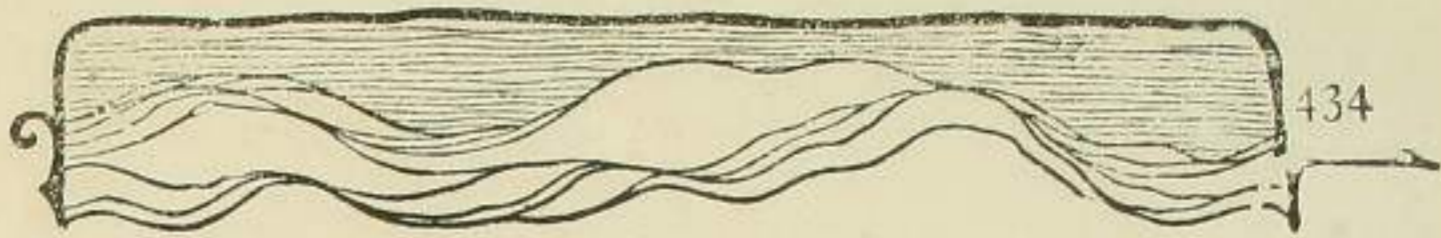
樹幹々々何ぞ怖ろしく電轟する！

盤根怪柢何ぞ喧すしく相轢り鳴るや！

毛髮悚然たる如き一大瓦解となりて、

渠等は皆天地に轟きつ、彌が上に倒れ重なり、

而して破片斷碎の累々散點する巖巖を通じて、



狂風は嘯きつ、颯々として咆哮す。

汝は峰巒に高く響く音を耳にするや、

近方にも遠方にも齊しく喧すしき聲を聴くや、

然り、長く全山に沿ひて、一面に、

一種の狂怪なる魔謡は滔々たる哉！

(妖婆合唱) 妖婆等はフロッケン山へと往く、

刈程は黄めり、立禾は青し、

彼處に大衆は群がり集まり、

ウリアン公高く之が上に位ぬす。

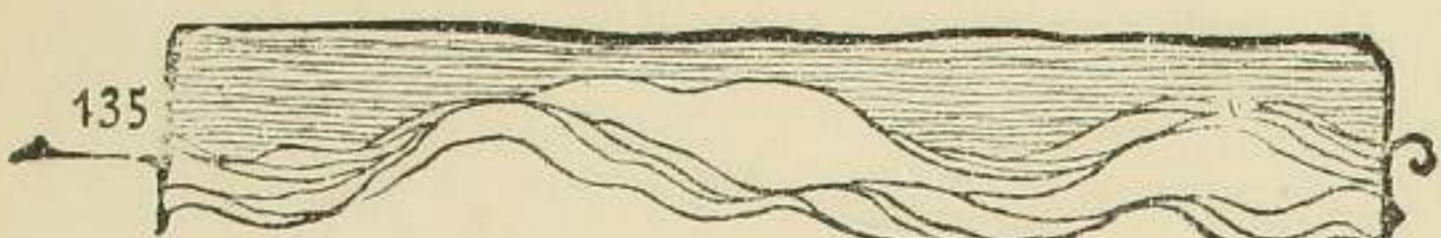
斯く石を越え木を越えて彼等往く、

妖婆は——す、牡山羊は——す。

(一の聲曰く) 老パウホ夫人獨りにて御入來、

一疋の猪母に乗りて至り給ふ、(席を譲れよ！)

(合唱) 然り、榮譽は其宜く歸すべき者に歸せよ！(萬歳！)



パウホ夫人進み給へ、請ふ指揮を主さどれ！

嬰鏢たる猪母及び其之に乗れる者よ！

然らば妖婆等皆齊しく之に従がはん。

(聲) 卿は孰の路を経て來れるや？

イルセNSTAINを越えて！

彼處にて我鳴鳥を其巢に覗きしに、

彼は嗚呼何たる一對の大眼玉を光らせしぞよ！

(聲) オ、地獄へ奔り入れよ！

汝何ぞ然か速かに乗り往くぞや！

(聲) 彼女は我を執へて皮引剥けり、

請ふ只一目其傷を視たまへ！

(妖婆合唱) 路は廣し、——路は修し、

此の狂妄なる雜選は果して何ぞ！

肉又は衝き掃箒は掻く、



(半妖婆下) 我は甚だ久しく急り進みぬ、

是れこそ永遠に淪亡びたる人なりけれ。

今夜此機に乗じて登り得ざる者は、

肉又も善く乗せ奔る、牡山羊も善く乗せ奔る、

掃箒も善く乗せ奔る、木片も善く乗せ奔る、

我は吾が同類の中に住んことをこそ冀がへ。

不幸にして未だ山嶺に迷するを得ず！

我は三百年來既に攀上らんと務めつゝあり、

(聲下) 我をも俱に携へよ、我をも俱に携へよ！

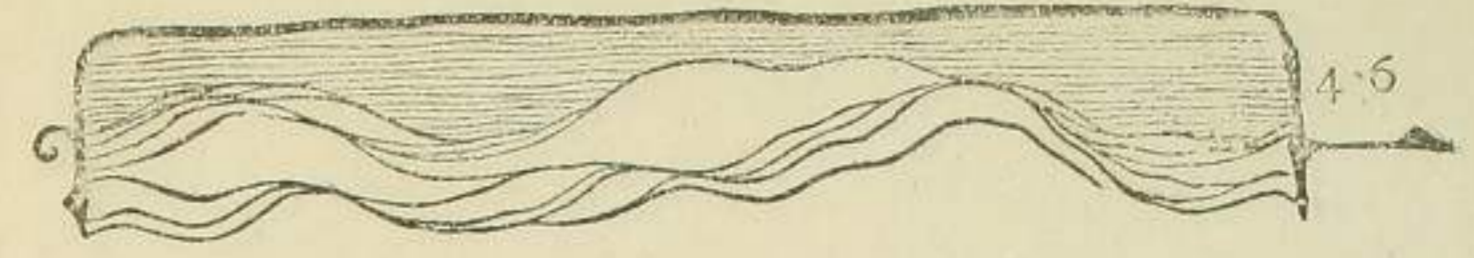
(聲上) 千尋の巖窟裏より呼はるは誰ぞ。

(聲下) 休めよ！休めよ！

幾百千の火花を散らしつゝ。

暈れる月は悦んで顔を匿くす。

冤群の唱歌は酬はなる哉、



小兒は窒息し、母親は破裂す。

(魔術師半合唱) 我々は家を背負る蝸牛の如く匍行す、

婦女子は皆悉く先だてり、

然れば、悪魔の家へ往く時は、

婦人は千歩衆に先んず。

(他の半合唱) 我々は开を然か精密には致て計らず、

婦人あるひは千歩を以て之を過ぎん、

然れども、婦人如何に急がば急げ、

男子は一飛躍にして、之を過ぎ了らん。

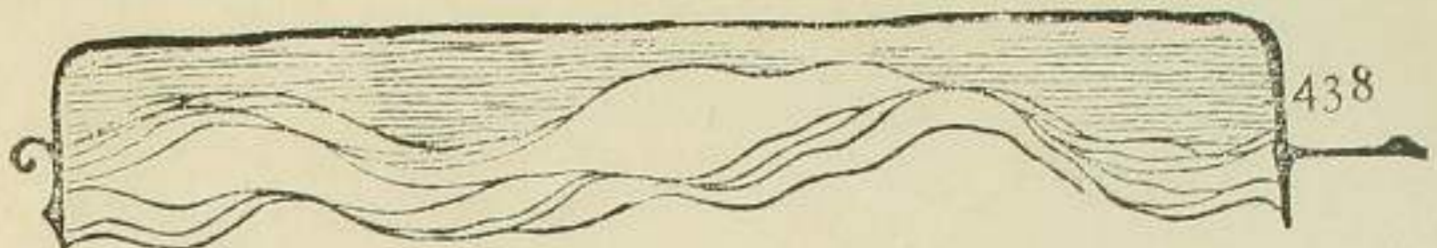
(聲上) 「我等と俱に來れよ、俱に來れよ、フェルゼンゼーより！」

(聲下) 我々は高く俱に飛んことをこそ欲すれ、

我々は自ら洗ふて、今や全く清し、

然はあれど、亦何時までも石女のみ。

(兩合唱) 風は靜まりぬ、星は飛ぶ、



他の者等は嗟如何に既に遠く行けるぞや！
家に在てや我は老末の安心をだも有たず、
此に在りても亦哀い哉これを得ず、噫！

3685

(妖婆合唱) 軟膏は妖婆に勇氣を與ふる者なる哉、
襪は以て帆と爲すに善し、

3690

有ゆる水槽は以て船舶と爲すべし、
今夜飛ばざりし者は終生復飛べじ。

(兩合唱)

斯て我々嶺を巡り了れる時は、
更に降りて地におりたてよ！

而して汝等の妖嬈的遊戯を以て

遠く且廣く原野を蔽へよ！
(彼等野)

3695

(メフ) 彼等は相群がり、相擠し、相衝き、相撃つ哉、

相嘯き、相旋り、相罵り、相踊る哉、

相閃めき、相光り、相燐り、相燃る哉！

眞箇の妖魔的天地ぞ！

唯請ふ我にヒタと接しなれ、然らずば我等直ちに相離れなん。

3700

(フアウ) 君は何處に在るや。
(を顧みて)

(フアウ) (を遠く隠れ)

此に！

何！既に

其處へは押遣れしや。

(メフ) されば我は茲に家長權を用ひて路を開かざる可らず、

(フアウ) 通路あけよ、フナランド公來り給ふ通路！
(通路) 群衆諸君よ、通路！

(フアウ) いざ、博士、我に執つき給へ、今一躍にして、

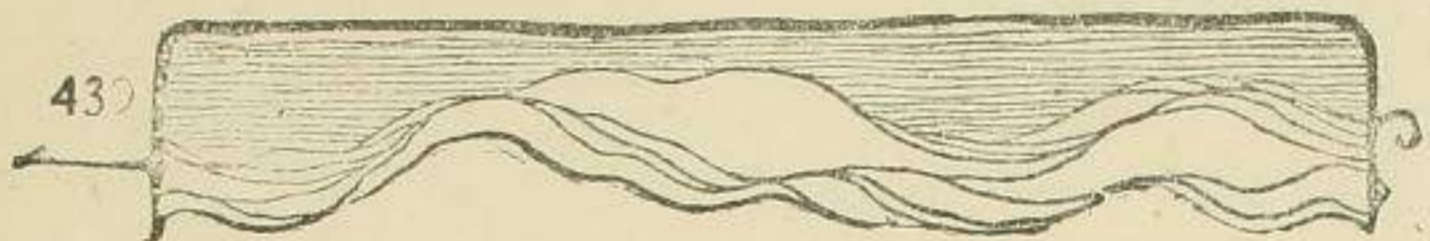
3705

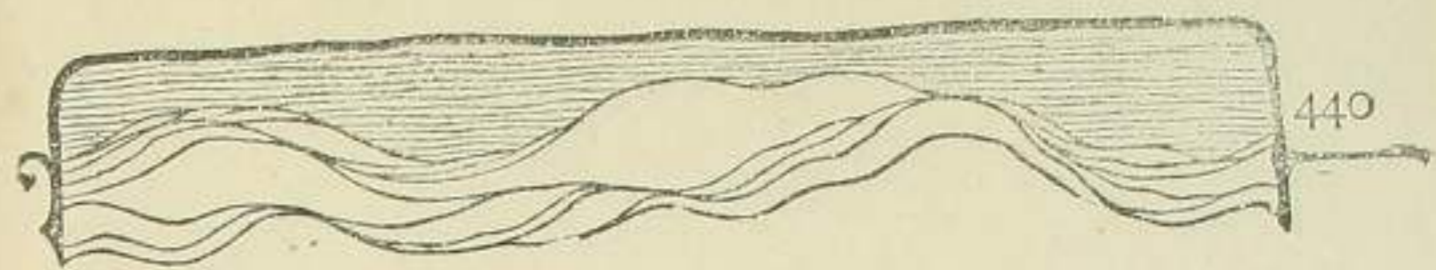
我等は此の雜遝する群衆の中を脱出せん、
是は吾が若き者、(彼)にすらも餘りに狂亂に過ぐ。

彼處に、程遠からず何か異常の光彩を以て光る物あり、

何物か我を彼の叢林の方へと牽くを覺ゆ。

來れよ、來れよ、我々かしこへ滑りこまん。





(ファウ) 嗚呼汝諱、吾の靈よ、唯請ふ往け、我は從がはん。

我は思ふ、是は眞に智く行ひたる事にこそ、

アロツケン山へ我等ワルブルギスの夜を以て來り、

且自ら好んで今此の處に、脱然孤處すとは！

(メフ) 唯請ふ視よ、如何に陸離たる光焰ぞよ！

彼處には快活なる一俱樂部の集まれる也、

蓋し小團中に在てや、吾人は孤ならじ。

(ファウ) 併し乍ら我は寧ろ上へ往んことを欲す！

既に我は彼方に火光および渦まく煙を認む。

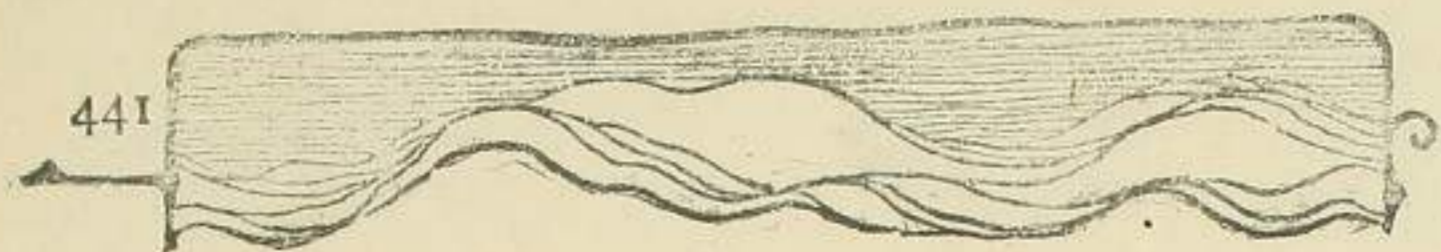
酒々たる群集惡覺を拜まんとて彼處へ輻輳す、

想ふに必ず幾多の謎の解かるゝ者あらん。

(メフ) 然し乍ら其代りに亦幾多の謎は新たに結ばれ來らん。

請ふ大衆をば其狂奔するに打任せよ、

我々は此に安靜の裏に自から宅らん。



大會園中に在りてや必ず幾多の小會團起るとは、

是れ開闢以來一定せる事實ならずや。

彼處を我觀來るに、妖婆の年若き者は皆赤裸々にて遊ぶ、

只其の年老いたる者稍羞て身を掩ふ而已。

只請ふ我が爲めに溫和かれ、彼等を罵詈する勿れ！

其斯くする勞は小にして、其興は大なるん。

我は管絃の何をか吹奏し來る者あるを耳にす、

其亂吹濫撥は忌はしけれど、吾人は聽き慣るゝを要す。

俱に來れや、俱に來れや、——止むを得ざる而已。

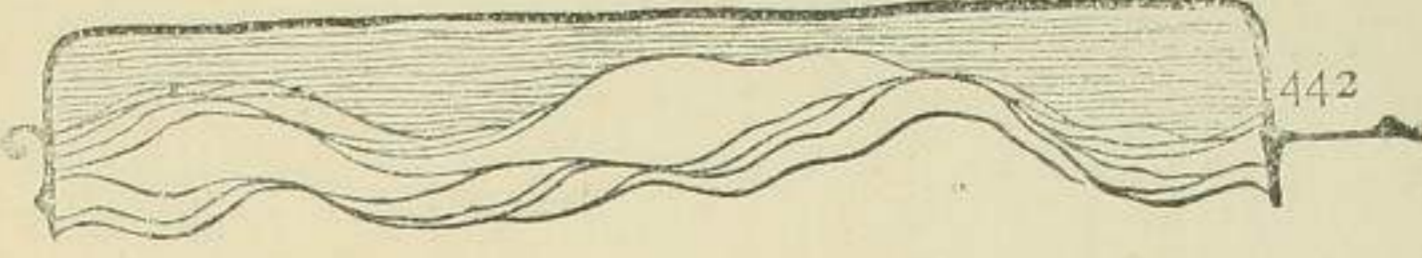
我は先きへ進みて、君を案内し紹介せん、

而して更に再び君に恩を擔はしめん。——

友よ、君は何如んか思ふ？ 是は決して蝸麈の類に非ざ、

只請ふ看はらし給へ、殆んど其盡る所を見ざらん、

一百の火は列をなして炎々と燃ゆ！



彼等は踊る、語る、彼等は炊ぐ、飲む、彼等は求婚す。
今請ふ曰へ、世上之に勝れる者果して何處に在る乎。

3740

(ラアウ) 汝は今我々を紹介するに方りて、
自ら魔術師と名るや、又は悪魔と名るや。

(メフ) 我は實に平素大抵は微行するを常とす、
然れども祝祭日に於ては人は其位を示すも可し。

然れども吾が馬脚は此處にて最も尊重せらる。
君は夫の蝸牛を見るや？彼は匍ひつゝ進み來る、――

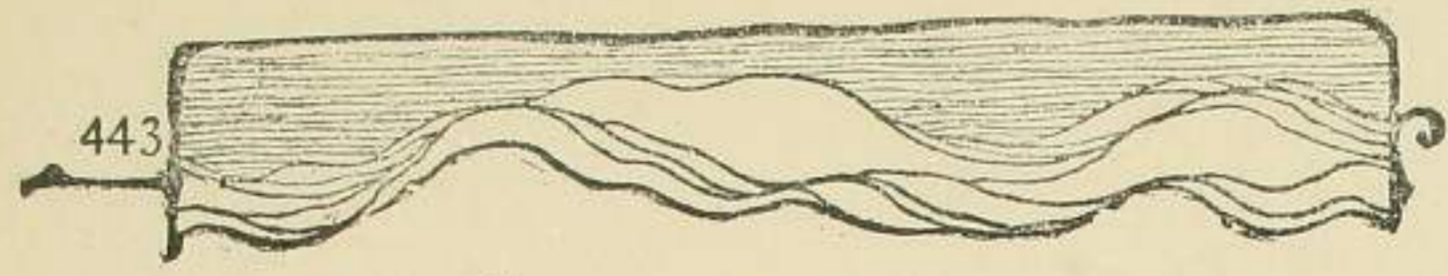
3745

然り、彼は其微妙なる觸角眼を以て
既に我の此に在ることを嗅ぎ出しぬ。

假令我欲すとも、此にては我姿をやつす能はず。

3750

只請ふ來れ、いざ我等は火より火へと進みゆかん。
我は媒妁なり、君は請ふ求婚者たれよ。



(領て滑へ去らんとする鉄燈の周圍に坐せる一隊の所に語す)

(彼等に) 君等老紳士よ、諸君は茲に此隅端に何を爲しつゝあるや、
真中にて諸君が氣焰を吐くを見れば、我は却て君等を譽ん、

牛飲馬食を縦まにし、年少の歌舞淫樂を極めよ！
孤處獨棲は各箇おのが家に爲して既に十分ならずや？

(將軍 其聲中に歌) 嗟誰か國民に信を置かんや、
如何ほど彼等の爲に盡せりとも、(効果なし)

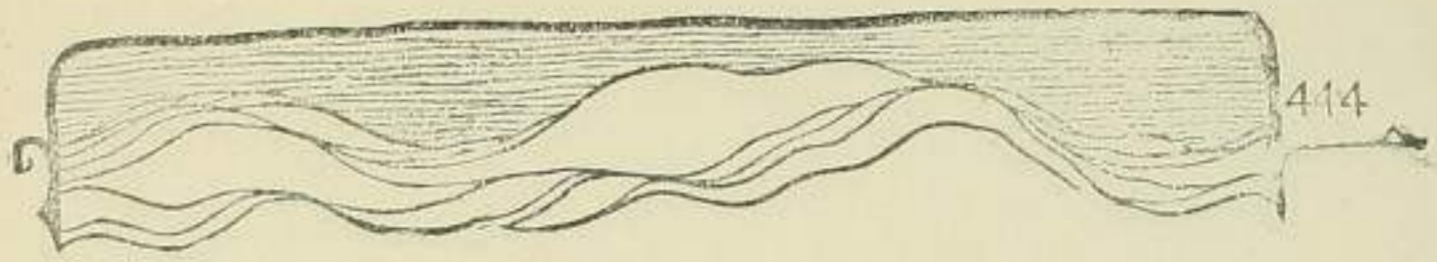
寔に國民に於るは、婦人に於るが如し、
何時も年若き者勝を制す。

3760

(前大臣) 今や正道を去る極めて遠し、
我は曩日の良風美俗を稱讚す、

寔に嗜昔我々政權を握れりし時こそ
是れ即ち眞箇の黄金時代なりけれ！

(新富豪 其聲中に歌) 眞に我々は亦愚なる者にて非ざりき、



而して須らく爲す可らざる事をも屢々断行したりき、然るに今は百事悉く顛倒錯亂せり、我等秩然之を堅く保たんと欲しても可爲道なし。

(著作家)

今や到る處天下滔々讀書家の墮落せる誰か復多少卓見を載たる頁書を讀む者あらんや、而して年少社會に至りてや、今日ほど

黃吻乳臭輩の無禮なるは未だ嘗て有らず。

(メフ、人の如く見えて老たる) 人類は終極の大審判を受くべき機熟せりと我は感ず、

今我は最後に此の妖婆が山へ登れり、

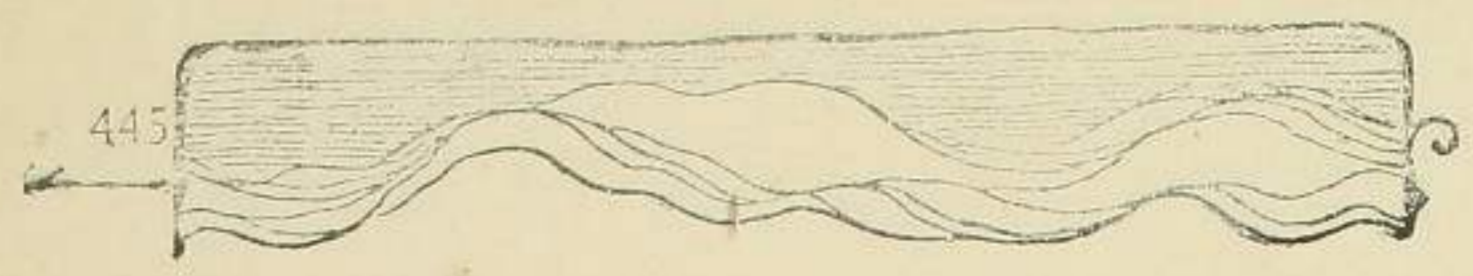
吾が「生命の權」は「其酒」既に「渣滓」となりて「濁り」出づれば、

此の世界もまた既に「終滅の」渣滓に臨める者ならざらんや。

(行商妖婆) 君等よ！然しな迅く通り過ぎ給ひそ！

此の機會を逸し去らしめ給ふ勿れ！

請ふ我の貨物に一顧をたまへよ！



此には眞に千差萬別なる「品」ありて列べり、

此の世界に無比なる奴が店舗には、

併し乍ら孰れの貨物に論なく、何一つとして、

嘗て人類と世界とにむかひて

劇甚しき害を及ぼさざりし者は無し。

一の短刀として血を流せしこと無き者は此にあらず、

一の爵杯として、全く健全なる身體に

激烈なる大毒を注がざりし者は有らず。

一の寶玉として可憐の婦女を籠絡せざる者は無く、

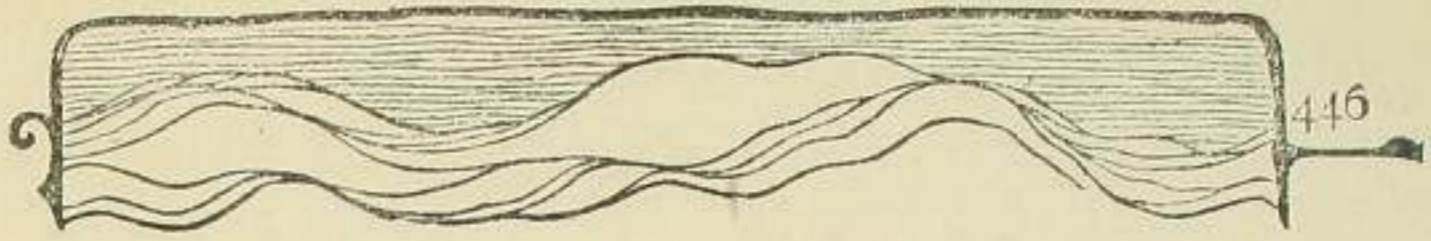
一の劍として平和の「泄」を切り断たざる者は無く、

又は敵人を背後より刺殺さざる者は無し。

(メフ) 老媪よ、御身は時勢を善く領會らぬ、

爲たる事は出來たる事、出來たる事は爲たる事なり。

請ふ新奇なる事物に向ひて王夫一番せよ！



只新奇なる事物獨り吾人を牽き得る而已。

(ファウ) 願はくは「餘りの繁觀に」我や忙然自失せざらんことを!

寔に此や是れ絶大の市とこそ稱すべけれ!

(メフ) 全渦流は滔々として天に漲ぎらんとす、

君は他を推すと信じて、實は自ら推さるゝ耳。

(ファウ、一箇の女を認めて) 但し彼は誰ぞ?

彼を熱視せよ、リリースぞ。

(メフ)

(ファウ)

誰?
アダム
適當の初妻。

彼女の美髪に、彼女が以て自ら裝ほへる此無比の飾に、用心せよ!

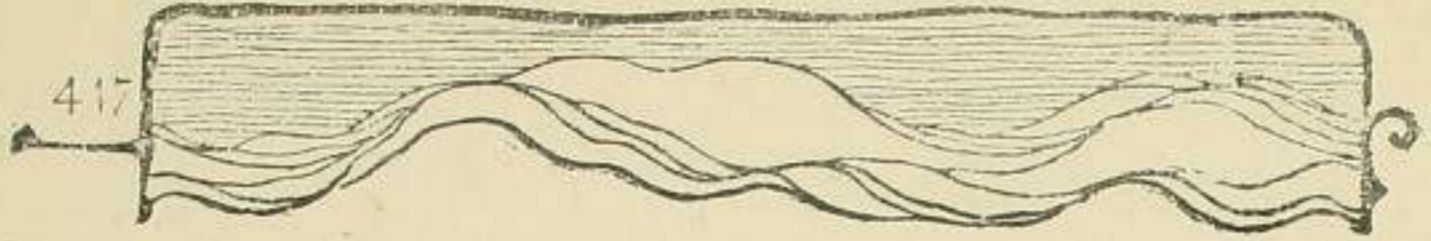
彼女若し之を以て青年を執へたらんには、

復再び之を急には放たざるべし。

(ファウ) 彼處に、老少相携へて、二婦坐す、

彼等は既に十二分に桃れ踊りぬ!

3800



(メフ) 今夜は毫しも休息あること無し、

彼等復新らしき舞蹈を始めんとす、率來れよ、我等も連ならん。

3805

(ファウ、其若婦人と曾て我は美はしき夢を得にき、)

其中に一株の林檎樹を見しに、

二箇の美しき林檎は枝上に耀やきつ、

顔りに我を誘なひければ、我攀のぼりぬ。

(美婦)

林檎は嗚呼君甚だ之を戀ふ、

是は「エデンの」樂園よりして然りき、

歡喜を以て我は踊る哉、

斯る林檎をわが園も生ずと思へば!

(メフ、と婦りと) 曾て我は怪しき夢を得にき、

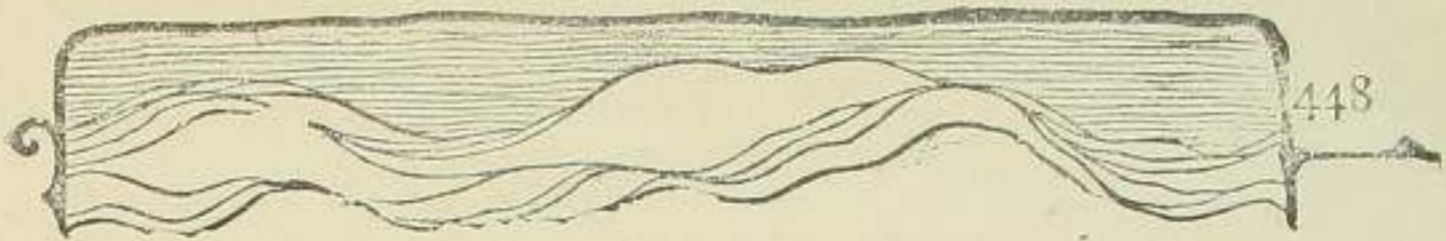
其中に一株の割れたる樹を見しに、

是は一箇の………を有てり、

其狀甚だ………ければ、我は悦べり。

3815

3810



(老婦)

妾は最も厚き敬禮を

馬脚もてる君公にぞ呈し奉つる!

君請ふ一箇の………を茲に備へよ、

君若し………懼れじ。

3820

(ノロクトフアンダスミスト)

家) 誼ふべき狂衆よ! 汝等は何を敢て爲す耶、

妖怪なる者は普通の足にては決して立たぬとは、

人(我)もくれぐれも汝等に示せしに非ずや?

然るに今汝等は異類たる我々人間の如く踊る乎哉!

3825

(美女(踊り))

然ば何とて彼は我々の舞踏に臨めるや。

(フアウ(全く)偏)

オ、彼こそは到る處に居れ!

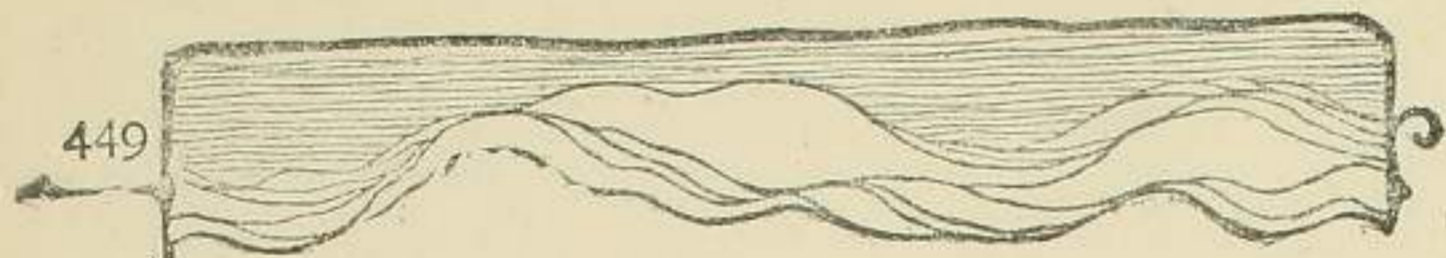
他が踊る間に彼は批評を雜れ事とす。

彼若し毎歩喋々論評を選しうせずんば、

其の歩は絶て全く着けざるに同じからん。

3830

我等若し進んで行るならば彼は最も怒らん。



君若し、彼が其舊き腦白裏に爲つゝあるに倣ひて、

亦同じく狹圈内に區々として廻然彷徨せんと欲せば、

开を彼は必ず善美なる擧と稱せん、

特別にも君若し其が爲に彼を厚待しなば、然る可けん。

3835

(譏評家)

汝は尙茲に在る乎、咄! 何たる前代未聞の事ぞよ!

請ふ消え失せよ! 我等は眞に世界を照らせり、

魔群は元來何等の法軌をも尙とばぬ者ぞ。

我々は頗る智しと雖ども、デゲルには妖怪出づ。

3840

此の迷想に向ひて如何に久しく我は屢ば突撃せしぞ!

是は決して竟に清からじ、何たる前代未聞の事ぞ!

(美女)

然れば請ふ茲に我等を倦しむることを止めよ!

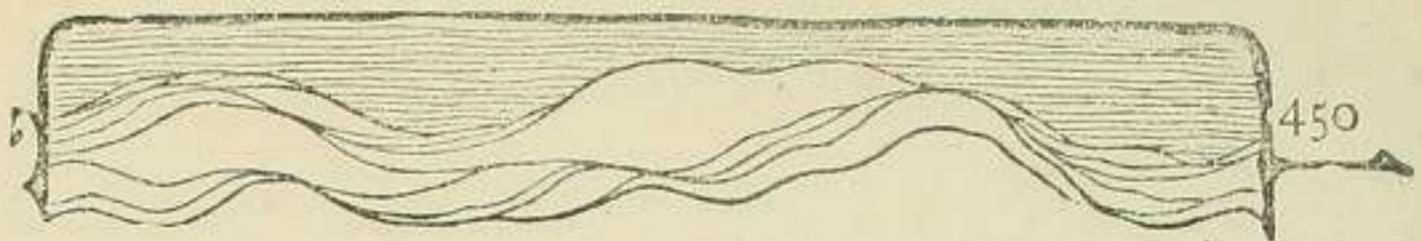
(譏評家)

我は汝等妖怪に面前敢へて告ぐ!

精神的壓制は我斷じて甘受容忍せぬ、

3845

吾が精神は之をを行なふ能はざるを奈何せん。(魔群)



今夜我は何事にも成功せじと自ら認む、
然れども我は常に旅行を廢せず、
猶吾が最後の歩を墓へ運ぶ前に、

我は悪魔等および詩人等を克服せんを望む。

(メフ) 彼は今直ちに或る淤泥の中に坐せん、

是は彼が以て慰藉められんと欲する方法のみ！

而して姪夥しく彼が臂に血吸はん時に、

彼が妖怪病及び神靈然は醫去らん。

(附くてメフキストフエレスは既に舞踏を脱けて居れるフアウストは向けて言ふ)

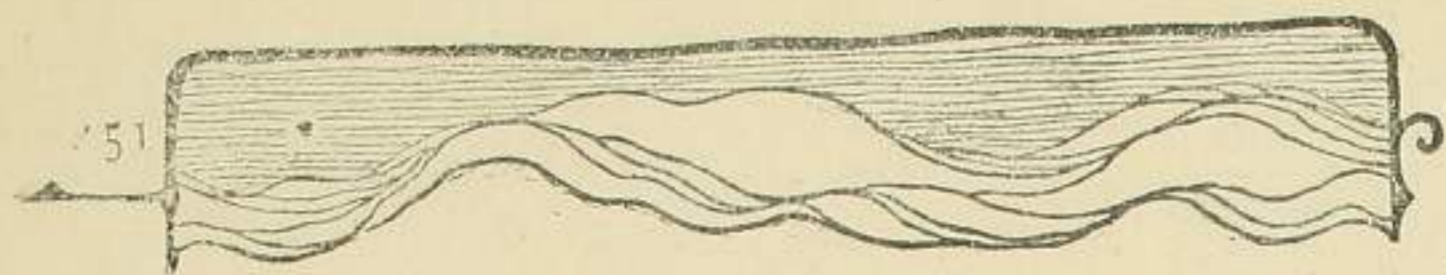
何とて君は彼の美女子の手を放せしや、

彼女は舞踏に然か快よく歌ひたる者を！

(フアウ) 吁嗟是はしい哉！歌謡中に怪しくも

一疋の赤き鼯鼠彼女の口より飛出しぬ！

(メフ) さも有りなん！人は餘りに潔癖家たる可らず、



其の鼯鼠が灰色ならざりしを以て足れりとせよ
才子佳人喃喃相語らふ時に於て誰か復斯る細事を問んや。

(フアウ) 次に我は見たり

(メフ)

何を？

(フアウ) 色青ざめたる一美女子が只獨り悄然として遙かに立てるを？

メフキストよ、汝は彼處に見ざるや

彼女は其處より只徐々と身を推し進むること、

恰かも枷鎖たる脚もて行く者の如し、

我は告白せざるを得ず、彼の女は

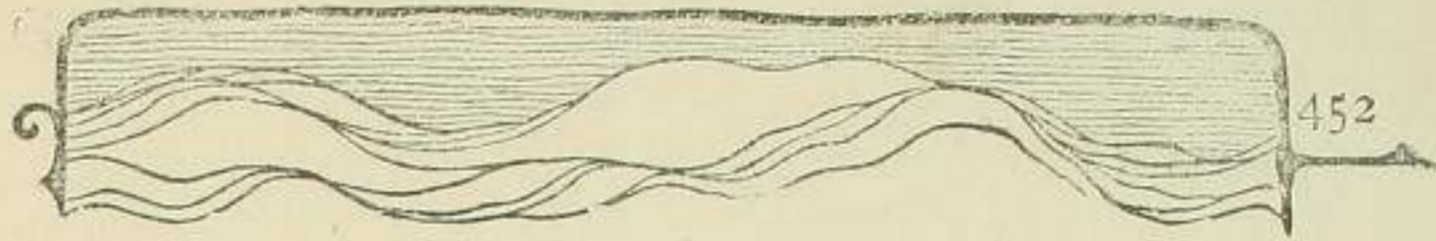
例の好マーガレットに似たりと我には思はると。

(メフ) 手を打棄おけ！何人も之に就ては好消息を得じ！

是は覺力の造り出せる幻影虚形のみ、偶像の類のみ、

之に出で會ふは不祥にして善からず、

其寒冽なる眼光は人間の血を凍結らしむ、



「観る人々を石に化したる」メテュラの故事は君必ず聽けるならん
 (ファウ) 眞箇に、是は既に死たる人の目にして、

親愛なる手が未だ之(其)を閉ぢ、眼さぐる者にこそ、

嗚呼此は是れマーガレットの我に開きし胸ぞ、

嗚呼此は是れ我が享樂たる夫の芳ばしき體軀ぞ！

(メフ) 汝容易く迷はさるゝ愚物よ、是は魔術のみ！

然れば彼女は各箇の男子に其が各自の鍾愛者としてこそ現はるれ、

(ファウ) 嗚呼何たる快樂！何たる哀傷！

我は此の睥視より吾が目を離す能はず、

嗟如何に奇なる哉、彼女の美しき頸(の)周圍(を)
 一條の赤紐ありて装ほふとは！

其の潤は小劍の背よりも廣からず「見ゆ」！

(メフ) 全く是なり！我も亦之を認む、

彼女は亦其首を腋下に携ふるを得、



如何となればヘルセウス之を斬りたれば也。――

猶も「君は同じ迷想に然か耽りつゝある乎！

いざ此の小山を登りゆかん、

茲はブラーテル(大蛇)に於る如く甚だ賑はし、

而して彼等若し吾が耳目を魅したるに非んば、

我は眞に一演劇を「茲」に「認む」、

(母は向ひて) 何を行るや？

(セルピ)

復直に始まらん――

一種の新狂言にして、七狂言中の最後なる者、――

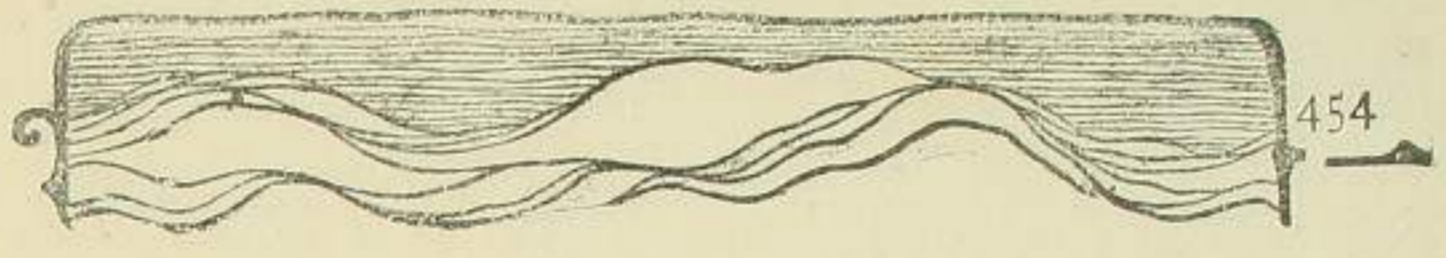
此の「七」數を出すは、此にての風俗にこそ、

某好事家これを作りたり、

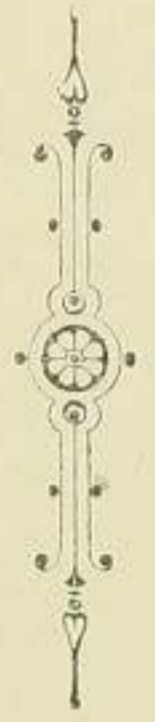
而して群好事家亦これを出演す。

諸君請ふ許したまへ、我は消え失せなん、――

我も一好事家として、幕をあげればならぬ。



(メフ) 我此プロックス山上に汝を見るに、
甚だ善し、此こそ汝の本領なれ。



第二十二場

ワルプルギス夜の夢

オベロンとチタニアの金婚式

問狂言

(座主)

今日は我等一たび休まん、

ミーザンク氏(神言)の剛健なる子弟よ、

年古りたる山と霞罩る谷、

是ぞ天然の好舞臺なる、

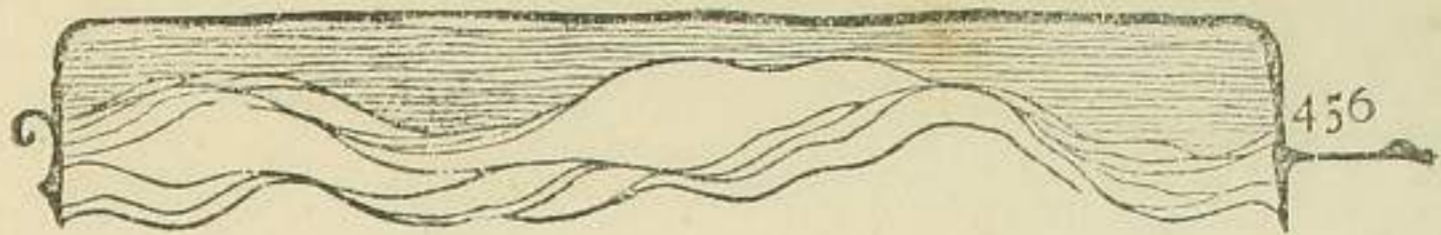
(使者)

金婚式を舉行するには、

五十年を経ざる可らず。

されど、喧嘩既に止みぬれば、





今で頼て我には黄金なれ。

(オペロン 妖鬼の聲以下は之) 神靈よ、汝等此處に在らば、

請ふ今の時を以て顯はれよ、

王と其の后とは嗚呼芽出たや、

新たに合歡の契を結びぬ。

(ブック) ブックは來りて、斜に旋轉し、

其の足を六法に踐むや、

幾百の群鬼は次で臻りつ、

亦彼と偕に踊り樂しむ。

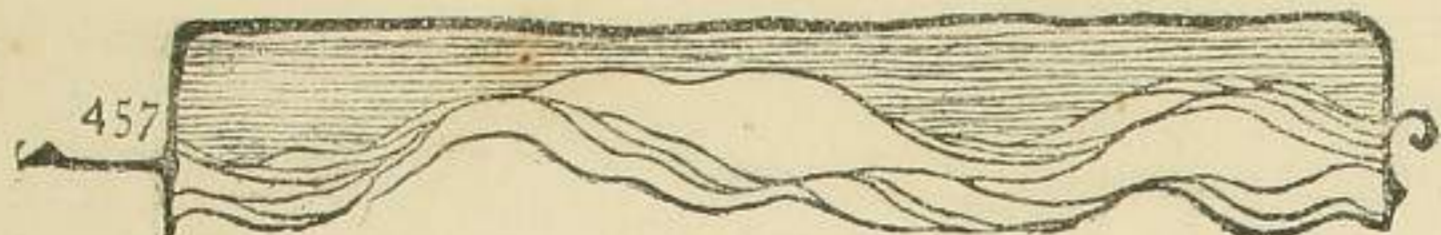
(アリエル) 天の如き清らかなる音調もて、

アリエルは洋々と其歌を行る哉!

彼が歌謡は幾多の醜怪を誘へども、

彼は亦美女子をも誘なふ。

(オペロン) 夫妻にして善く相和合せんと欲する者は、



請ふ其模範を我等二人(註)より學べよ!

若し兩姓の膠漆相愛せんを欲さば、

人は唯先づ彼等を分離するを要す。

(チタニア) 夫若し罵しり、婦若し驕らば、

只請ふ速かに彼等を引拉へよ、

婦をば遠く赤道の下へ遣り、

夫をば遙かに北極にまで移せよ、

(奏樂隊 第一同合奏) 蠅の口および蚊の嘴、

並びに彼等の有ゆる族類、

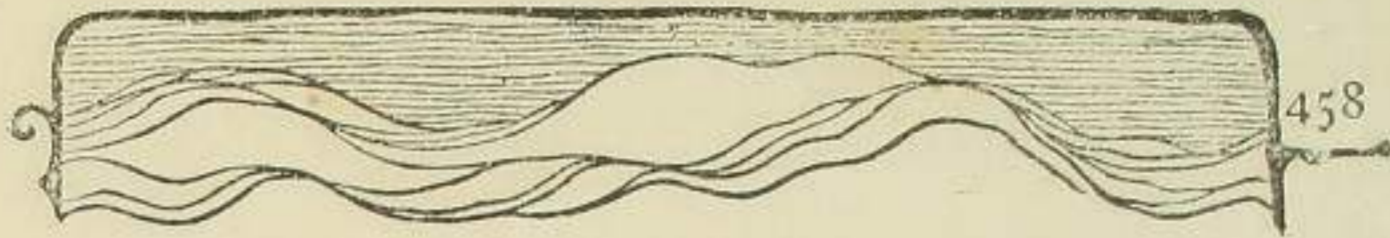
葉間の蛙や、草中の蟋蟀、

皆悉く是れ俗人樂師にこそ!

(獨吟) 視よ、茲に蘘笛來れり!

其の蘘は是れ石鹼の泡球のみ!

其の平扁き鼻より發し來る音聲!



シネツケ！シネツキ！シナツクを聴けよ。

(朦朧たる神靈) 蜘蛛の脚および蟾蜍の腹、

及び矮少漢の帯ぶる短翼！

寔に小動物は一も茲に在らず、

然れど一小詩篇は茲に在る乎哉！

(兩箇の少舞者) 穠々たる蜜露を踐み、馨香を聞て、

嗚呼何たる細歩ぞ、何たる高躍ぞ！

寔に汝は盛んに跳れ踊る也、

然れど竟に高く空へ飛のぼる能はず。

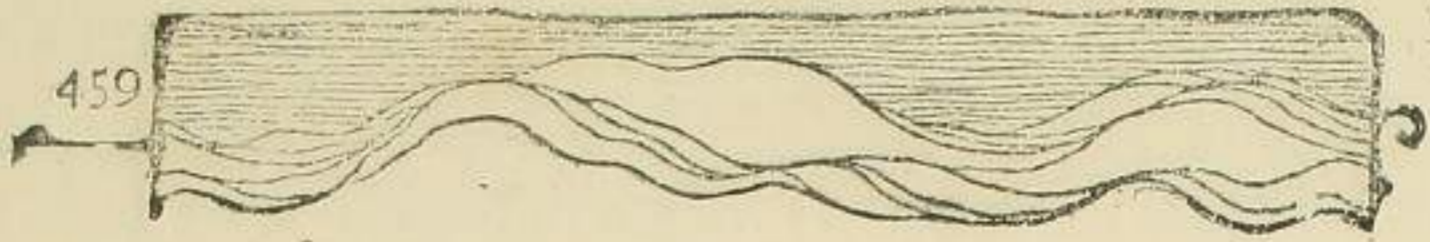
(好奇の旅行家) 嗚呼是れ假面茶番には非じか、

我が目果して信を置くべき乎、

美はしき神オベロンさへも、

今夜此に仰ぎ觀らるべしとは！

(正統神學家) 何等の爪も、何等の尾も、見えず、



されど希臘の神々の然る如く

彼(オベロン)も亦惡魔ならんこと、

是れ蓋し疑の存する無けん。

(北地の美術家) 我が捕へ描く所の物は、今日は

只是れ眞に寫生的粗畫なる而已。

然れども我は伊太利亞漫遊の爲に

夙に自から旅行の準備をなしぬ。

(潔癖家) 吁嗟我の不幸なる茲に來れり！

此の地何ぞ其れ醜行熾盛なるや。

且斯の全妖婆群中に在りて、

白粉を殊勝に着けたるは只二人のみ！

(年少妖婆) 白粉は表衣と均しく、

只是れ白髪のお婆に宜しき而已、

然れば我は裸にて吾が牡山羊に乗りつ、



肥膩こたあぶらつける一小軀をこそ敢て曝さらせ。

(中老女)

我等は深く禮儀を知れば、

茲にて君と喧嘩いふかふ能はず、

然れど君も若く且柔かにはありとも、

遂には老い朽ちんとぞ我は信ずる。

(樂隊長)

蠅の口や蚊の嘴くちばし、

然な群がりて裸體者を圍みそ！

葉間の蛙や草中の蟋蟀こしろうき、

善く調子を整へて錯なごはされ！

(檢風子向ひて)

交際、嗚呼何たる大満足ぞよ！

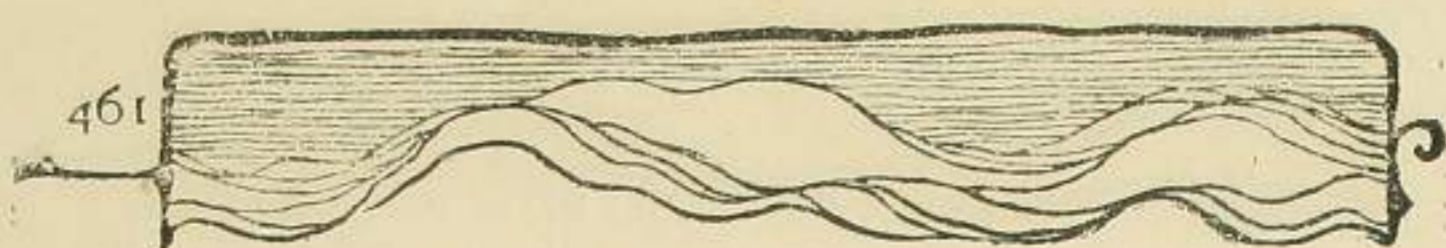
眞に満目只花嫁のみ！

年若き男等は各々前途多望、

好むに循したがひて選えらび採とられん哉！

(檢風子拒して)

嗟あはれ、地もし口を開きて、



彼等を悉とく吞まば「善し」

否しかされば我は足を速めて「逃れ」

直ちに地獄の中へも飛こまん哉！

(クセニエン)

我々は蟲むし站たとなりて茲に在り、

小さき鋭とどき鋏はさみをぞ戴かたく、

願はくは我々の大爺おやサタン公を

其高き位に準じて崇あがめまつらん。

(ヘニングス)

視よ、如何に彼等推おしあひ擠しあひ、

俱ともに天真爛漫と相戯あそむるゝぞよ！

果さては彼等相誓ちかひて言ふらく、

我等は誠心まごころより互に戀こひ慕あふ也と。

(ムサゲット)

此の滔々たる妖婆の群中に

我は全く没入めいじゆせんことを冀ねががふ、

如何となれば、寔まことにヨウズ等らより、



此等これらを駕御すること更に易ければ也

(前代の天才) 具眼の公衆に遣はし我々は響はびられん、
來れ、堅く吾が裾を執へよ!

プロックス山は、獨逸の詩壇たる

バルナサスとして、其巔は嗚呼廣い哉!

(好奇の旅行家) 請ふ告よ、堅苦しげなる人は何と曰ふや、

彼は傲然たる歩武あゆみを以て行く、

彼は徧れく嗅かぎ得るだけ嗅かまはる、

然り、彼はシエズ井ト僧の後あとを追ふ而已!

(白鶴公) 悦んで我は清き水の中にも、

濁れる水の中にも、能く魚を捕ふ、

斯く君は自ら見ん、敬虔かたじけなくの士が

亦惡魔あくまと俱ともに遊びつゝあるを、

(世界子) 然り、我は信ず、敬虔なる人士に取りてや、



百事百物、建徳の媒介たらざるは無し、

彼等は此に、プロックス山にも

既に夥多の寺觀を建たりき。

(舞踊者) 新唱歌班、今や來らんとす、

我は遙かに大鼓の鳴るなを聞く、

騒ぐ勿れ、是は蘆葦あしの中に於る

五位覺ごいげつの千遍一律なる鳴聲而已。

(舞踊師) 如何に各々その脛はざを揚ぐるぞや、

各々相競ひて逸り進む哉、

跛者も跳ね、肥満家も飛ぶ、

復其の外觀みえの何如を問はず。

(胡弓師) 此の烏合せる群衆は蛇蝎視せらる、

他を居るを其得意の快事とす。

囊管ぶくろいんこゝに彼等を寄せ集むること、



オルフェウスの琴が歌に於る如き哉。

(獨斷論者)

我は毀譽の爲にも、疑惑の爲にも、自ら誤まらるゝことを肯てせじ、

悪魔も亦多少觀るべき所なくんば非ず、否ざれば焉んぞ世に悪魔あらんや。

(唯心論者)

吾が耳目に於ける幻影は、此度こそ餘りに猖獗を極むれ！

我若し果して「萬有の全體ならんには、寔に今夜我は狂愚化せる而已。」

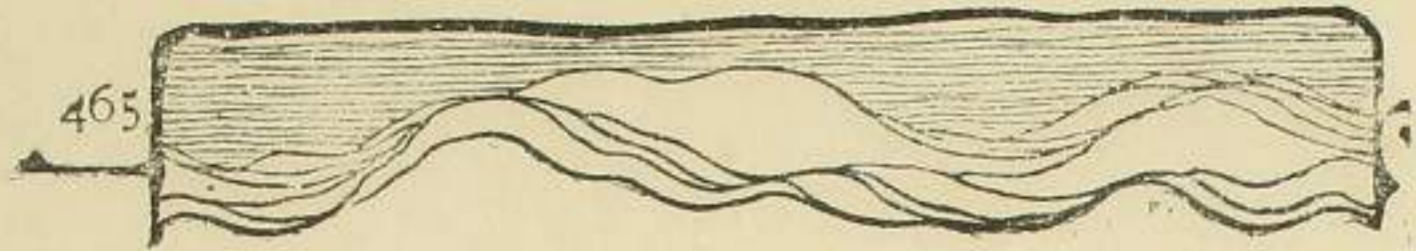
(實有論者)

此實有體は眞に我を懊惱せしむ、我は悲傷に堪へざらんを恐る、

今茲に始めて我は忙然として、吾が立脚地の堅からざるを覺ゆ。

(神秘論者)

大満足を懐いて我は此に在り、



此等「狂妄狼籍の光景」を賞翫す、蓋悪魔より推して我は能く

良善なる神靈を付度り得べけん。

(懷疑論者)

彼等は鬼火の蹤を追ひきつ、自から「眞金の實」に近しと信ず、

悪魔と疑惑とは必ず形影と相追隨す、

故に我は得々として茲に居る也。

(樂隊長)

葉間の蛙や草中の蟋蟀、

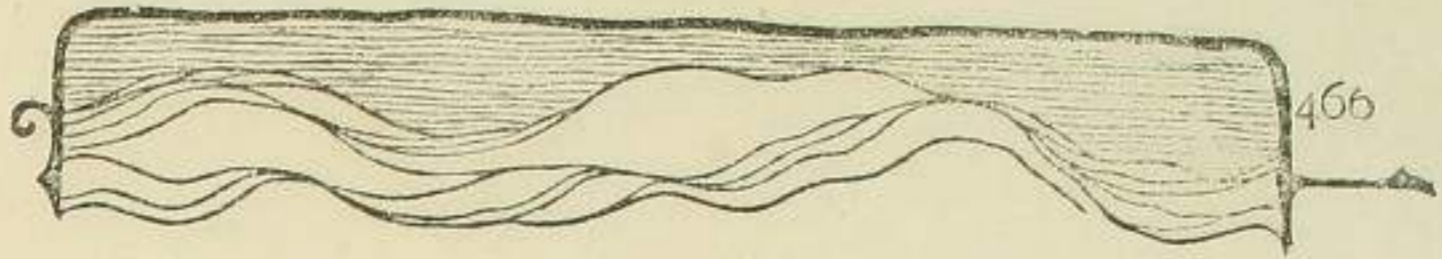
嗚呼詛ふべき好事家輩よ！

蠅の口や蚊の嘴、

(狡僂兒)

汝等は眞に音樂師なる乎哉。此の氣樂なる人群をこそ

無憂漠とは名けん歟、最早足にては歩むこと叶はず、



(薄弱兒)

故に我等は頭にて歩むのみ。

嘗て我々は一口の美味を屢ば掠め取りぬ、

然れども今は神禁じたまふ、

我等の靴は皆踊り脱げたり、

我々は只素足の躑にて奔らん耳！

沼澤の中より我等は來りぬ、

彼處より我等は元興れり。

然るに我々は直ちに列をなしつ、

茲に赫奕たる才子とぞ仰がる。

高き天より茲へ我は、閃々と、

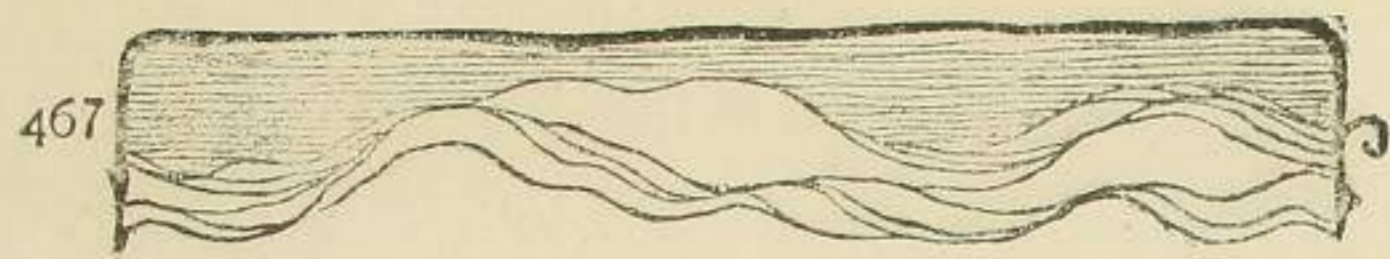
星の光もて、射くだりぬ、

今は草の中に横たはる哉、

誰か我を助けて起立しめん者ぞ！

空地を作れ！餘地を周邊に「設けよ！」

(肥大漢)



視よや、百草は忽ち下に臥す、

神靈來る、妖怪も亦到る、

「靈とは云へど、彼等は肥太れる手足を有す。

然か象の子の如く、テクアク

肥ふとりて前み來る勿れ、

今日此にて最も豊満なるは

肥膩つけるブツク彼自身にこそ！

(アリエル) 旻天若し汝に翼を予へなば、

神靈若し汝に翼を授けなば、

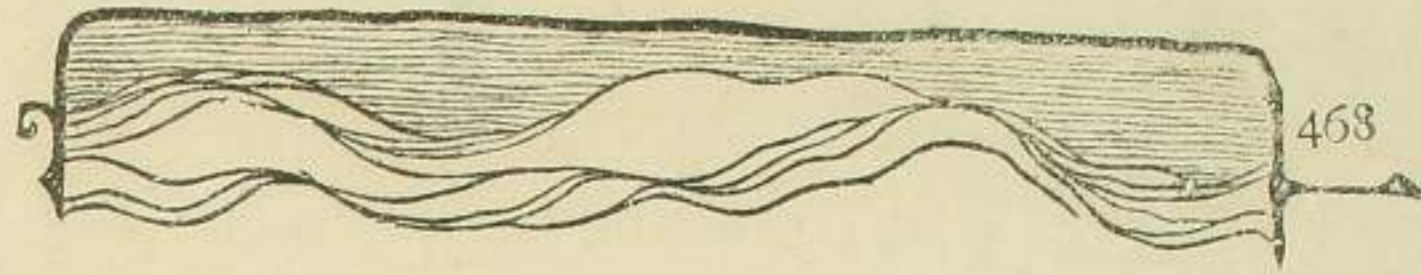
我の輕快なる蹤に従がひ、

高く薔薇山の巔に登れよ！

(奏樂隊) 棚びく雲と罩る霞は

上よりぞ光を承て輝やき來る、

葉間の氣、葉間の風、



嗚呼皆悉とく消散り畢んぬ！



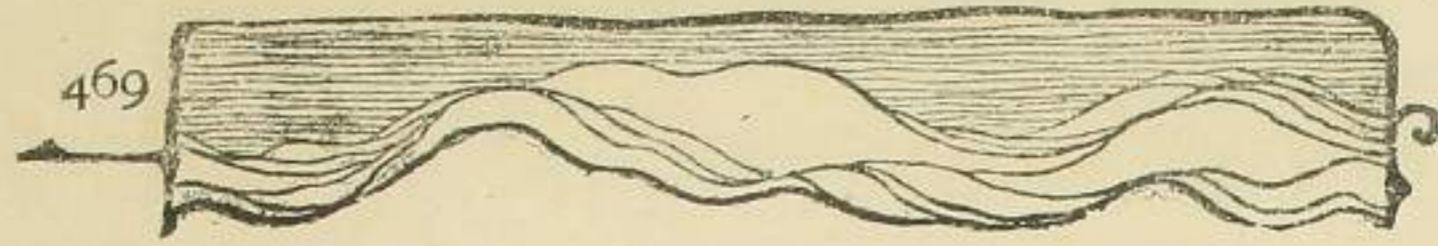
第二十三場

陰鬱ふる日景の光

野外に於て

ファウスト及メフキストフェレス登場

(ファウ) 吁嗟悲哀！絶望！惘然なる状態にて、久しく地上に彷徨ひつ、遂に捕縛せられたりとな！此の可憐なる、而も不幸なる人間(マを指サレ)尤も怖ろしき刑罰を蒙るべく、黯澹たる牢獄裏に囚はれをるとは、抑そも何たる事ぞ！嗟事竟に茲に至れる歟、茲に至れる歟、信に背き友を賣る醜靈よ、汝此結果を我に隠くしねける哉！立て

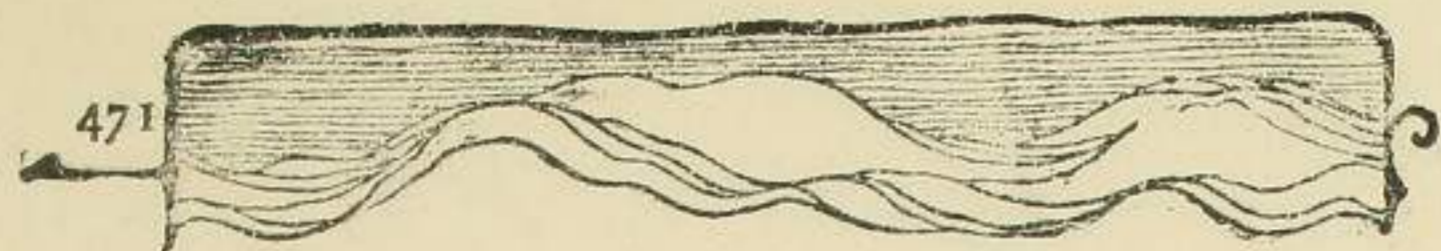




よ、されば立てよ！悪魔眼を汝の顔に憤然として回轉せよ！汝の擗猛なる面相を以て、立て我に反抗せよ！捕縛せられたりとな！嗟挽回すべからざる悲境ぞ！悪靈の手に交附せられ、且情知らぬ法官の掌裏に一任せらるとは！然る間に汝は乾燥無味極まる放佚の業を以て我を惑はしつ、彼女の日に月に増し來れる悲哀を我に隠くし、彼女をして誰も助くる者なしに只獨り沈淪せしめたる哉！（4083—4094）

（メフ）开は彼女に始まれるに非ず、我が仆したる者は既に夥たし！

（ラウ）犬め！最も忌はしき怪獸よ！——（天帝）彼を化し給へ、嗚呼爾無窮無極の神靈よ、夫の蛆蟲を彼が原犬形



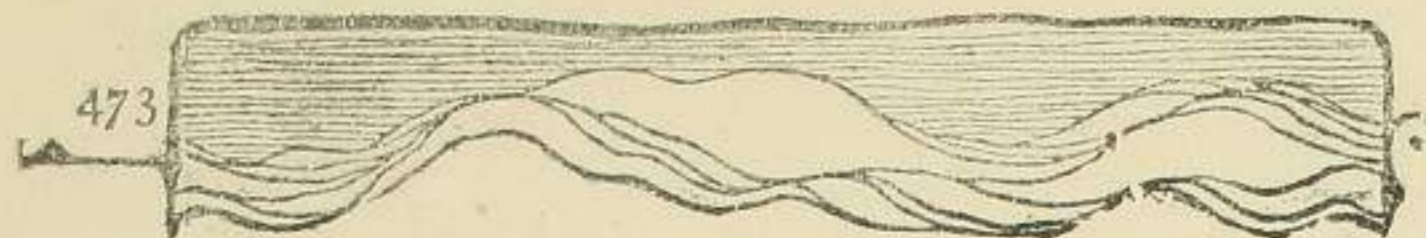
に再び化し給へ、彼は屢ば其形にて我の前に奔りき、無害なる周流者の脚下に轉び、而して其倒るゝや之が肩に食ひつかんとす、彼を再び其得意の形狀（變）に化し、彼をして吾が前に沙の中に腹匍しめ、我をして夫の兇惡を蹂躪らしめ給へ。——「彼女に始まれるに非ず」とは噫！大傷心、大恨事！古來斯の悲歎の淵に沈める者は一人に非ずと云ふが如き、又其第一なる沈淪者が己れの七顛八倒する死の苦惱を以てしても、夫の名にし負ふ無窮なる大赦罪者（天帝大慈）の面前に自餘の人々の罪を悉く消滅せしむるに足らざりしと云ふが如き、其悲惨は何等の人心も之を領會し盡くす能はざる也！此唯一人の悲哀は吾が骨髓にまでも徹し、我をして生を



聊ずる能はざらしむ、然るに汝は却つて幾百千人の運命に對して平然冷笑せんとすとは、噫！ (4095—4109.)

(メフ) 今我等再び思慮に窮する者の如し、正に是れ君等人類に於て理性狂ひ心思濫るゝ時なり、君は、若し之を行り通す能はざらんには、何とて我等と交を結びたりしや？ 君は高く飛んと欲して、而も眩暈を患ふるか？ 我々汝を強ひたるなる乎、抑は又汝我々を強ひたるなる乎？ (4110—4114.)

(ラウ) 汝が吞噬を逞しうする牙を然か我に向ひて嚙鳴す勿れ！ 开は我をして悚然たらしむるぞよ！ (天を仰いで) 萬有に主たる巨靈よ、爾は忝なくも嘗て我に現はれ給へり、爾は吾が心魂を知り給ふ、何が故に夫の——害惡



を樂み、破壊を喜ぶ——不祥の友に我を結び付けねき給ふや。 (4115—4119.)

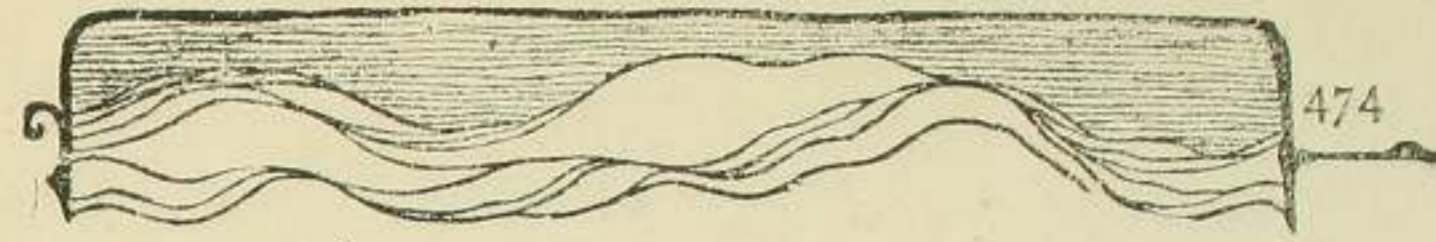
(メフ) 「既に言ひ」終つたる耶？

(ラウ) 彼女を救へ、否ざれば汝は禍なる哉！ 最も怖ろしき詛罰百千萬年間汝の頭上に降れよかし！

(メフ) 我は罪惡を罰する天帝の結びし索を解く能はず、又天帝の鎖せる門を開くる能はず、——彼女を救へとない！ 彼女を破滅の淵に陥れたる者は誰なる耶、我か君か？ (4120—4125.)

(ラウ) (メフ) 狂氣の如く周囲を見まはす。

(メフ) 汝は雷を攫んで「抛た」んとする乎、雷は汝等の如き薄弱なる人類には與へあらざるこそ幸ひなれ！ 罪



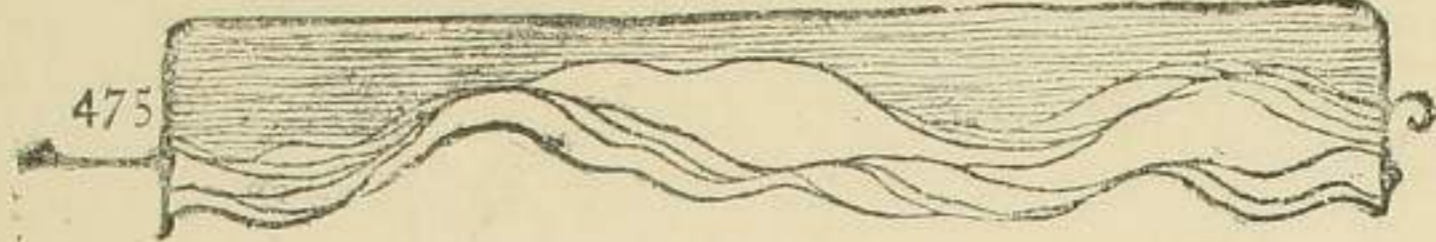
無きに敵手を粉碎するは、是れ困難裏より切抜け出る
暴君の工夫なる而已。(4125—4129.)

(ラウ) 我を彼處へ導けよ、彼女は自由の身とならざる可
らず。

(メフ) 而して君が自ら暴露せんずる危険は何如ん、君が手
づから流せし血の罪痕は該の町に尙鮮かなりと知れ
よ！夫の人が殺されたる處の上には復讐の靈許多翔
翔りて、其下手人の還り来るを窺がふぞよ。

(ラウ) 开も亦汝の口より？嗟一世界の謀殺罪汝怪物の
頭上に歸せよ！「汝こそ其張本人なりけれ！」——請ふ
我を彼處へ導びけ、而して彼女を救へよ！

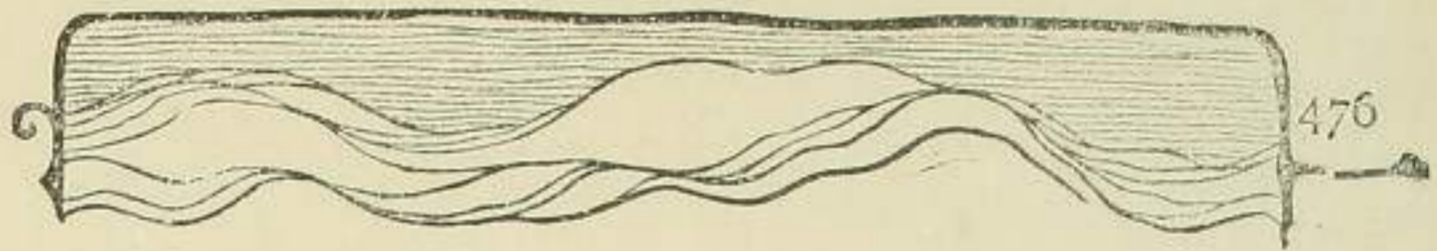
(メフ) 君を我導かん、而して君の爲に我が爲し得ん所を聽



けよ！我豈天上天下の有ゆる權能を悉く有たんや、我
は只獄吏の耳目を暗まさん、君は鍵を奪ひ、人間の手を
以て彼女を導き出せよ！我は番兵となりて看守らん。
二頭の靈馬は既に來れり、我は君を導きゆかん、是は我
能くす。

(ラウ) 起てよ、いざ往かん！(4120—4145)





第二十四場

夜 景

開潤なる原野

フアウストとメフキストフェレス黒馬に乗りて急がし来る、

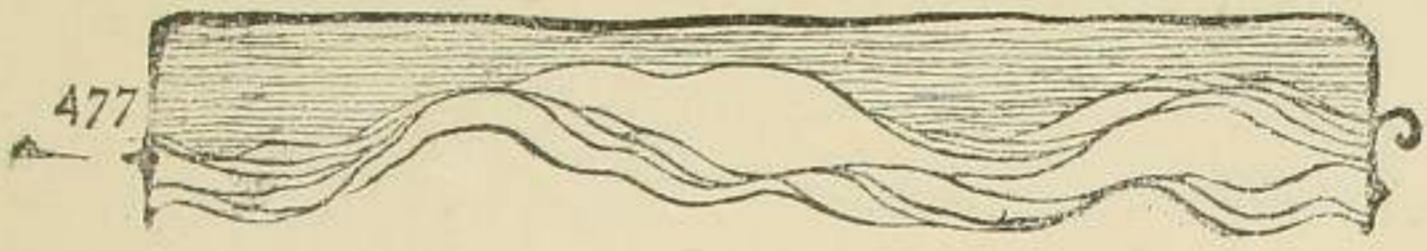
(フアウ) 彼等は彼處かしこに、烏岩ラベスダイの周圍まはりに何を編做あみましつゝあるや。

(メフ) 知らず彼等果して何を醸し何を造りつゝあるやを。

(フアウ) 彼等は上へ揚り下へ降り横に傾き前へ屈む。

(メフ) 是は妖婆まじの社やしろのみ。

(フアウ) 彼等は何か撒まきちらす厭いや盡なふ、



(メフ) 行かうぞ！行かうぞ！



第二十五場

牢獄の光景

(ファウスト一夥の鍵一臺の燈を携へて鐵戸の前に立つ)

(ファウ) 久しく感ぜざりし寒戰の驟雨我を執ふる哉！

人間の有りと有ゆる憂悲苦惱我を圍むぞよ！

此に斯の濕れる壁の後に彼女は宿りをる、

彼女の罪惡と云ふは一種の愉快なる迷夢にてありや！

4155

(己が身) 汝は彼女の所へ行くを躊躇するや！

汝は彼女に再び茲にて會ふを懼るゝや！

入れよ！汝の遲疑は只死期を近づかしむる而已。

(ファウスト頓て鍵を握るに、内に歌うたふ聞ゆ)

わらはが母なる遊女は、

わらはを執へて殺しぬ！

わらはが父たる惡徒は、

わらはを煮て食へり！

わらはの小さき妹子は

わらはの骨を拾ひ集めつ、

或る森林の涼しき處に之を保存ふ。

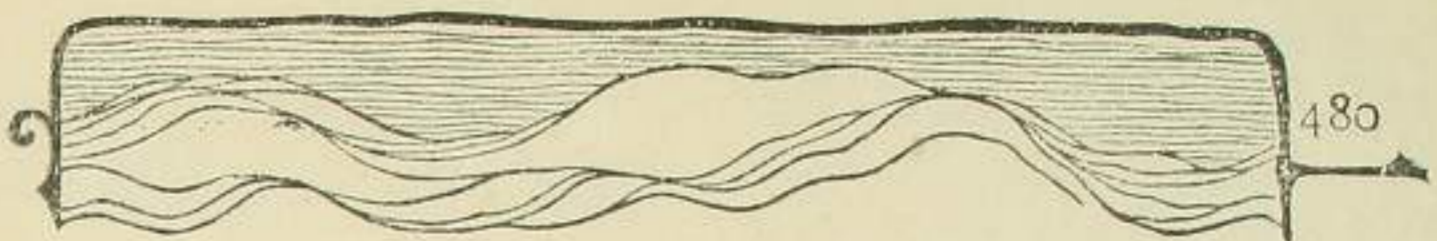
1163

其處にて妾は美しき野鳥となりぬ、――

飛び去れよ、飛び去れよ！

(ファウスト)

彼女は夢にも思はじ、其の戀人が傍に潜みて、
鐵索のがらめき藁牀のがさつくを聴くとは！



(ファウスト入るに、マーガレットは藁床の上に顔かくしつゝ言ふ)

(マーガ) 嗟！嗟！彼等來れり、苦しき死ぞ！

4170

(ファウ、低聲) 静かに！静かに！我は卿を助け出すべく來れ

り。

(マーガ、彼が前を辟) 君は男なるか、然らば請ふ妾の困厄を憫れ

み給へ。

(ファウ) 卿は番人の睡眠を驚かして目覺しめん、

(ファウスト頓て其鐵索を握みて、之を解かんとすれば、マーガレ

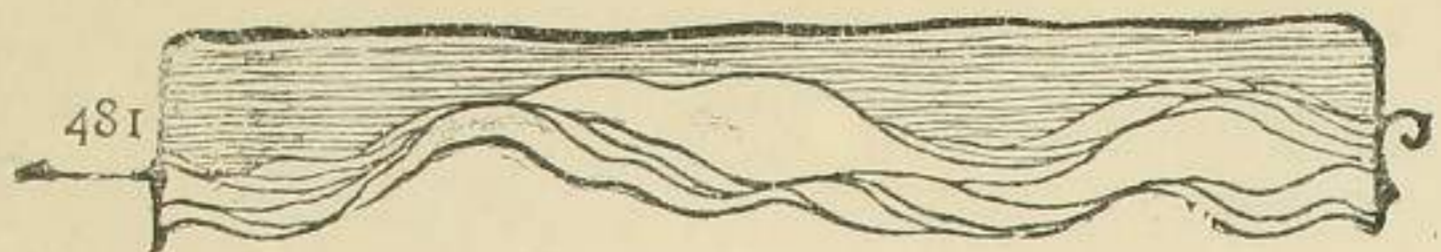
ット言ふらく)

(マーガ) 獄卒よ妾を左右すべき此權力を

果して誰が君に與へしや？

4175

君は既に夜半に妾を執へに來れり、



請ふ哀憫を垂れて、妾の生命を助けよ！

詰旦は今より早や間も無きに非ずや、(お女起あがる)

然し乍ら妾は尙甚だ若し、

4180

而して早や既に死なねばならぬとは、噫！

妾は亦美しかりき、而して开は妾が滅亡となりぬ、

吾が戀ふ君は嘗て近くをりぬ、嗟今は遠く去れる哉！

翠緑の冠は裂けて横はり、花葩は皆散りにき！

然か手荒くな妾を攫みたまひそ！

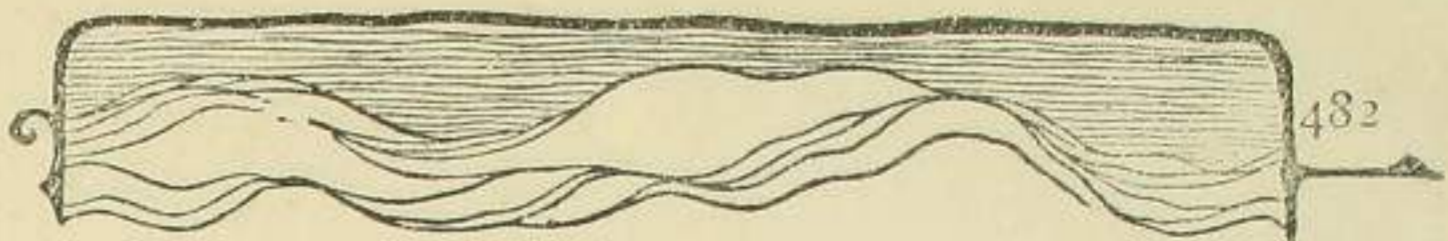
4185

わらはを容赦れよ、妾君に何をか爲したる？

妾をして空しく懇願を陳べさせ給はざれ！

わらはは今まで絶て君を見しこと有らぬぞよ！

(ファウ) 嗟我この悲境を忍んで視られ得べきや。



(マーガ) 妾は今全たく君の掌中に在り、

請ふ唯先づ妾をして今一たび此兒に乳哺さしめ給へ、 4190

妾は終夜此兒を抱き緊てありしが、

人々は妾を惱まさんとか、之を妾より奪ひ、

而して今彼等は妾これを殺したりと言ふ、

嗟我は決して復樂しまじ。

人々は妾の事を種々歌に謠ふ、是は世人の無情にこそ、 4195

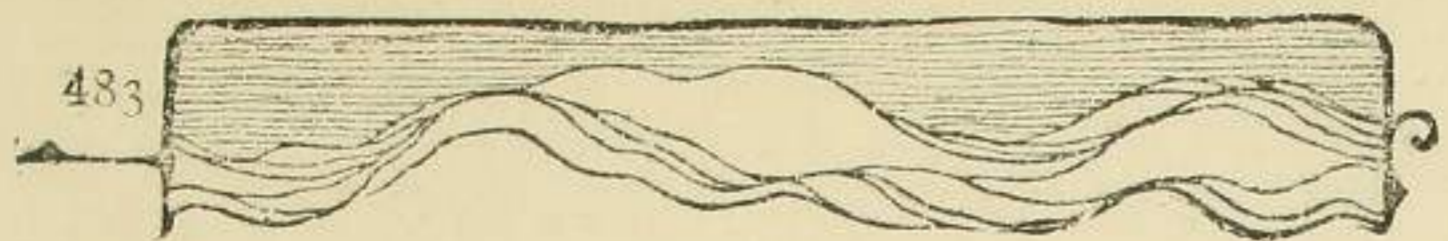
或る古き俗謡に云々の結句を載たるあり、

嗚呼誰が是は妾の事を指すと教へしや。

(フアウ、床に膝をつき) 卿を愛する人今卿の足下に坐し、

卿が悲哀懊惱の此の苦境に終を告しめんとす。

(マーガ、フアウの身を投じて) いざ俱に跪づきて、聖衆等を願ばん！ 4200



視よ！此等の段階の下に、

此の戸闕の下に、

地獄ありて炎々たり、

悪魔乃ち

怖るしき怒氣を含んで

熾んに咆哮す！

(フアウ、腹を打つて) マーガレットよ！マーガレットよ！

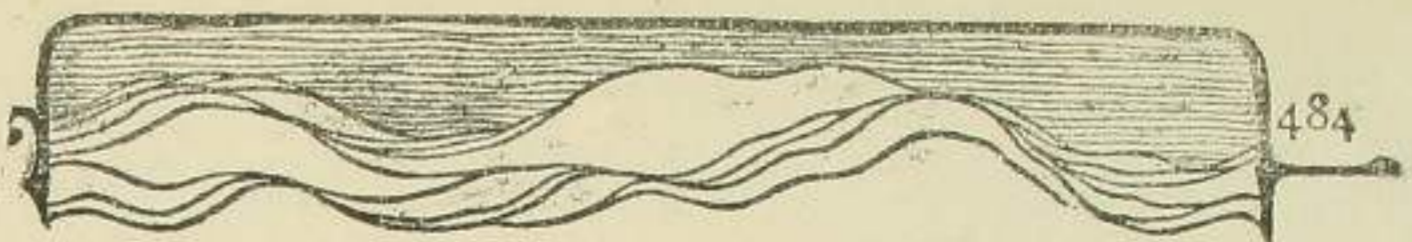
(マーガ、泣き) 是は戀しき友の聲にこそ！

(彼女飛び立つや、鐵索落つ)

彼は何處に在るや、我は彼が呼ぶを聞けり、

我が身は自由なり、何人も我を束縛せじ、

我は彼が愛しき頸に飛び縋らん、



彼が温かなる胸懐に横たはらん！

彼はマーガレットと呼べり闕の上に立てり、

地獄の叫喚れよび喧鬧の真中にて、

悪魔めける怒號及び嘲笑の中にて、

我は夫の芳ばしき愛しき音調を聴とりぬ。

(ファウ) 我ぞ！

(マーガ) 君なる！オ、今一たび开を言たまへ！

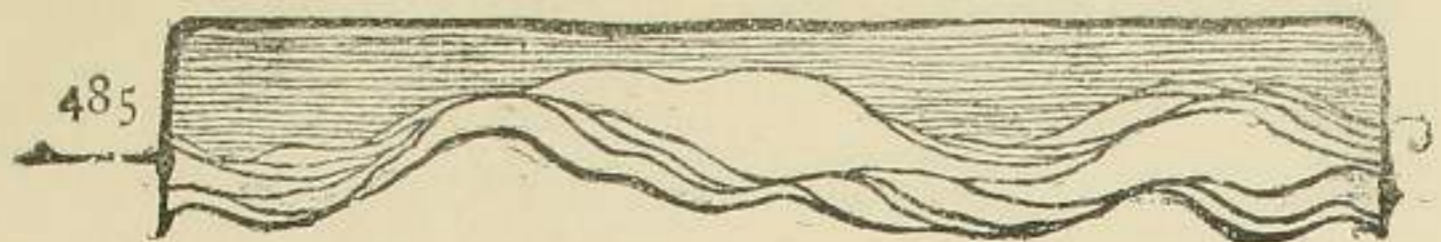
彼の君なり彼の君なり、嗚呼一切の苦痛は何處へ去れ

るや、

嗚呼牢獄の嗚呼鐵索の苦痛は今何處へ往きしや、

君にて坐す、君は妾を救はんとして來ませり！

嗚呼わらはは救はれたり！——



夫の妾が初めて君に見えたる嬉しき

街衢は既に再び彼方に見ゆ、

また妾とマルタが君を待うけし

夫の煌々たる愉快き庭園も然り。

(ファウ、彼女を助け出) 俱に來れ、俱に來れ！

(マーガ) あゝ止まり給へ！

妾は君が止まり給ふ處には、亦悦んで止まらんとすれ

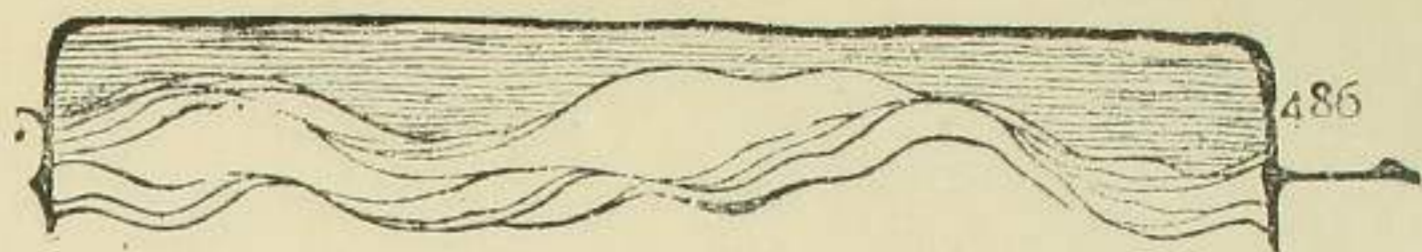
ば、(彼に取

つ) 急げよ、迅くせよ！

卿が急がぬ時には、

我々二人は爲に大なる禍を蒙むらん、

(マーガ) 如何にせられたる？君は最早接吻する能はぬに



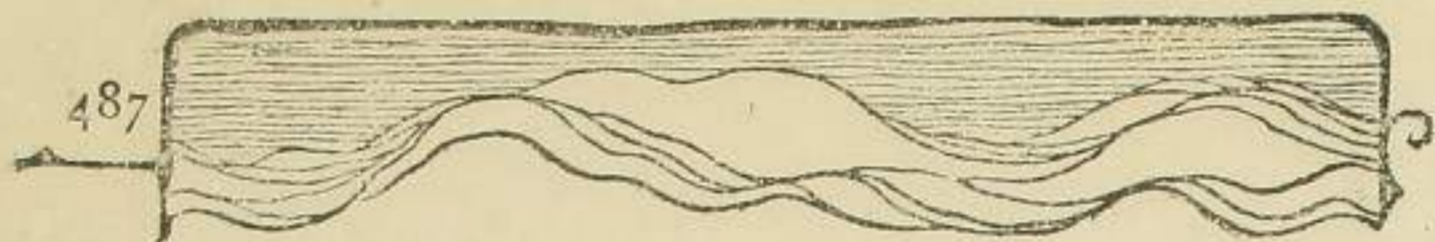
や？

嗚呼戀しき友よ、君は只暫く妾と離れをりて、
而も既に接吻することを忘れたまへる乎？
如何なれば君に縋り乍ら妾は心安からざるか？
之に引替へ、曩には君が言葉や、君が目は、
至大なる快樂を妾の心に傳へしものを！
而して君には妾を窒息らせんばかり接吻を疊ね給へ

4236

請ふ妾に接吻し給へ！(彼に取
つ)
否ずば妾君に接吻せん！
嗟哀しや、君の唇は寒たし！
動かぬ！

4240



君の愛情は今何處に在る乎？

戀しき君よ！

4245

嗟誰が妾を茲に至らしめし耶！(轉じて彼
を離る)

(ラウ) 來れ、我の後に從がへ、鍾愛者よ！勇を鼓せよ！

我は千重の熱情を以て卿を愛擁せんとす、

只請ふ我に從ひ來れ、只此事を卿に願ふ。

(マーガ 彼の方に) 然らば君なるか、確に君なるか、

4250

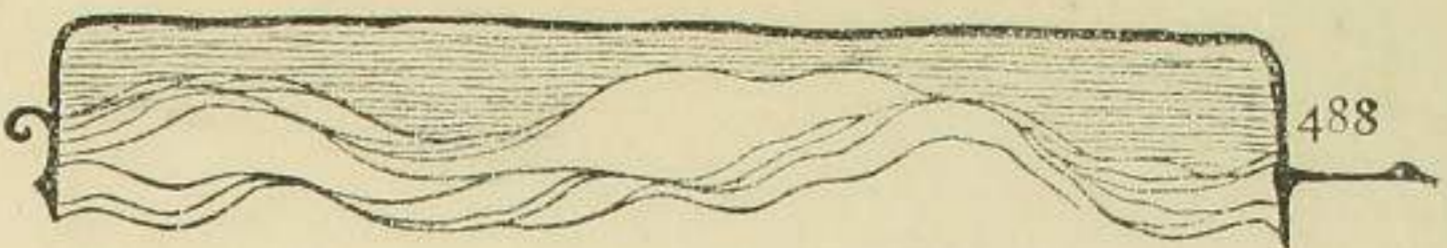
(ラウ) 我なり、請ふ俱に來れ！

(マーガ) 君は鐵索を解き給ふ、

再び妾を君の膝に抱き取り給ふ、

如何なれば君は妾を避けたまはぬ乎？

戀しき友よ！君は然らば今誰を救ひ出しつゝありと



知り給ふや。

(フアウ) 來れよ、來れよ、深き夜も早や明なんとす。

4255

(マーガ) わが母を我は識らず知らず殺しぬ。

わが産る兒をば水に投ぜり。

彼は妾と君とに賜はりし者ならずや、君にも亦——

嗚呼是は君なり、妾は殆んど之を信じ得ぬ。

請ふ君の手を授けたまへ！——是は夢ならず、

4260

君の愛しき手を！——吁嗟是は濡てをるぞよ！

汗を拭ひたまへ！蓋し意ふに

尙血の着ける者ならん歟。

嗚呼晏天よ！君は何を爲したりや？

刃を鞘にをさめ給へ！

4265



妾は汗を切に君に請ふ耳。

(フアウ) 既往は措て問はされ！

卿が言葉は我を慚死せしめんとす。

(マーガ) 否な、君は後に生き残らねばならぬ！

妾は君に墓の立て方を告ん、

4270

實に君は直ぐ明日に於て

此等の墓の爲に慮ばかるを要せん。

母には最も尊き位置を與へよ、

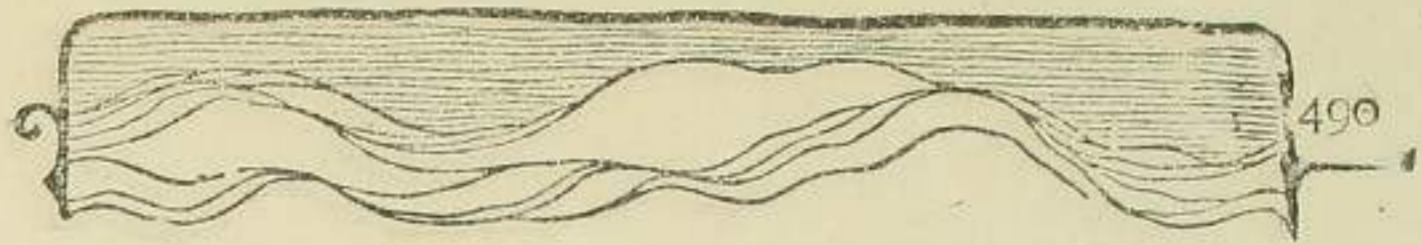
吾が兄には直ぐ其側にて處を與へよ、

妾のをば少しく離らしめよ、

4075

唯餘りに遠ざからしめされ！

嬰兒をば吾が右の胸に安け、



外には誰も妾の傍に横はる可らず！——
君の側に縋りをすること、

4280

是は最も快よく且嬉しき福祉にてありき、
されど是は妾もはや獲る能はぬぞ情なき！

妾は君に飛つき度くこそ思ほゆれ、

而して君は却て妾より飛のき給へる如し！

而も是は君なりいと親切いと忠實にぞ見ゆる！

4285

(ファウ) 卿若し是を我と感ぜば然らば來れ！

(マーガ) 彼處へ外へ？

(ファウ) 自由の天地へ。

(マーガ) 墓若し戶外に在るならば、

死若し埋伏しをらば然らば往かん！



此より永遠なる安息の床へ往かん而已。

4290

其以外へは一步も踏ださじ、——

君は出ゆかんとする！嗟ハインリヒよ妾も偕に行か

れたらば噫！

(ファウ) 卿は行かる！唯請ふ欲せよ、戸は開て在り。

(マーガ) 妾は出るを敢てせじ、妾には毫も前途に望なし。

逃るゝは何の益ぞ、彼等は尙妾を待伏す、

4295

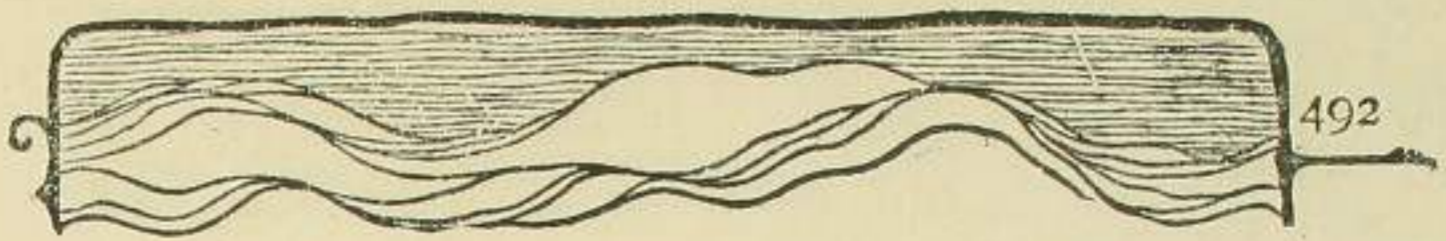
止む無くして乞食するは甚だ苦々し、

況んや亦心の鬼に責めらるゝに於てをや！

外國に彷徨ふは、是また甚だ苦るし、

彼等は尙わらはを逮捕せずんば措かじ。

(ファウ) 我恒に卿と偕に在らん。



(マーガ)

迅くせよ！ 迅くせよ！

4300

君が可憐なる兒を救へ！

往けよ！ 何處までも道を

川上へと追ひ進み、

橋をわたりて行き、

森林の中に分け入りつ、

4305

左せよ、其處に板ありて、

池の中に彼を浮べをる、

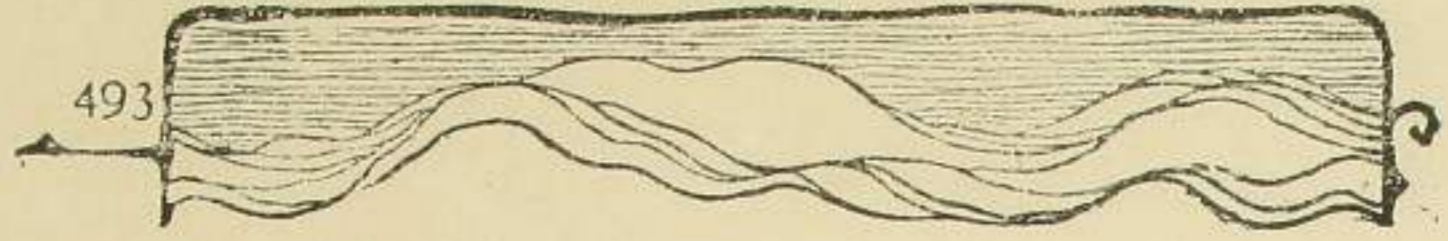
只請ふ速かに彼を執へよ、

彼は揚らんと悶へつゝあり、

彼は活きんともがきつゝあり、

4310

救ひ給へや、救ひ給へや！



(ファウ) 請ふ自ら氣を落つけよ、己に還れよ！

只一步のみにして、君は自由の身とならん。

(マーガ) 嗚呼我々只山を越むんこともがな！

彼處に母は或る石の上に坐す、

4315

妾は悚然として水かけらるゝ如し！

彼處に母は或る石の上に坐し、

頻りに其の頭を前後へ振る、――

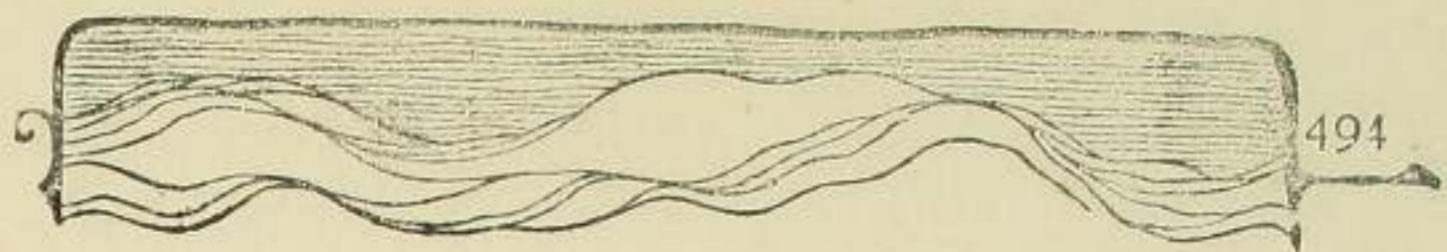
彼は目瞬がず、船漕がず、其頭は重く垂る、――

4320

彼睡りたれば、其間に我々は相樂しめり、

嗚呼こは幸福なる時にて有りける哉！

(ファウ) 今は懇願も効なく、説諭も効なし、



されば我は敢て卿を^{おろ}ぎ出さん而已、

(マーガ) 棄れさ給へ、否とよ、妾は腕力を許さぬぞ！

4825

請ふ人を殺す如く、然かな強く攫み給ひそ！

曩に妾は何事も君を愛してこそ爲したるなれ！

(フアウ) 日は出てなんとす！最愛者よ！最愛者よ！

(マーガ) 日は出でなん、最後の「大審判」日は来る！

是は妾が結婚の日たるべき者にてありき！

4830

請ふマーガレットと偕なりしとは誰にも言ひ給ふなよ！

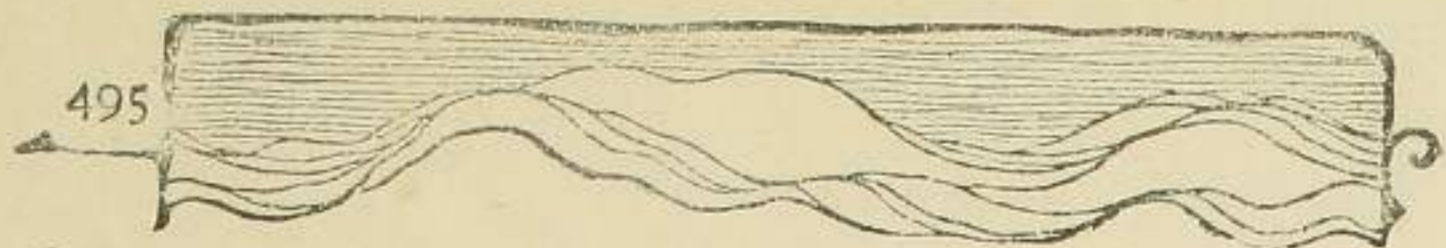
わらはの花冠は禍なる哉！

萬事すでに休みぬ！

君と妾とは再び遇はん、

されど、是は舞踏場にては非じ、

4835



群衆は「無言にて」嗟、逼り来る、人之が音を聴くなし、
市場も街衢も

彼等を容るゝに處なし！

死を送る鐘は鳴る、杖は折らる！

如何に手荒く、彼等は妾を捕へ且縛るぞよ！

4840

斷頭臺へ妾は已に曳かれ來ぬ、

妾の頸に閃めける刃は

各々の頸に既に寒さを覺ゆしむ、

嗚呼世界は墓の如く寂然たる乎哉！

(フアウ) 吁、嗟、我は生れざりしこそ善かりつれ！

4845

(メフ) 起てよ！然らざれば君は亡びなん！

無益の躊躇ぞ！「無用の」繰言ぞ！

吾が馬は嘶なく、

東は白まんとす！

(マーガ) 床より起ち現はるゝは何物ぞ？

彼なり！彼なり！彼を逐はらへ！

此の神聖なる處にて彼は何を要むる？

吁嗟わらはをこそ獲んとするなれ！

(ファウ)

卿は生くべし！

(マーガ) 天帝の大審判よ、爾に我は此身を交附す。

(メフ) 来れよ！来れよ！来れよ！我は君を彼女と共に抛棄

せん。

(マーガ) 天父よ！我は爾の〔兒〕なり、我を救ひ給へ！

爾等天使よ！神聖なる天軍よ！

周圍に營を列ねて、我を擁護たまへ！

(ト) わらはは君が爲に毛髪よだつぞよ！

(メフ) 彼女は審判かる！

(聲上)

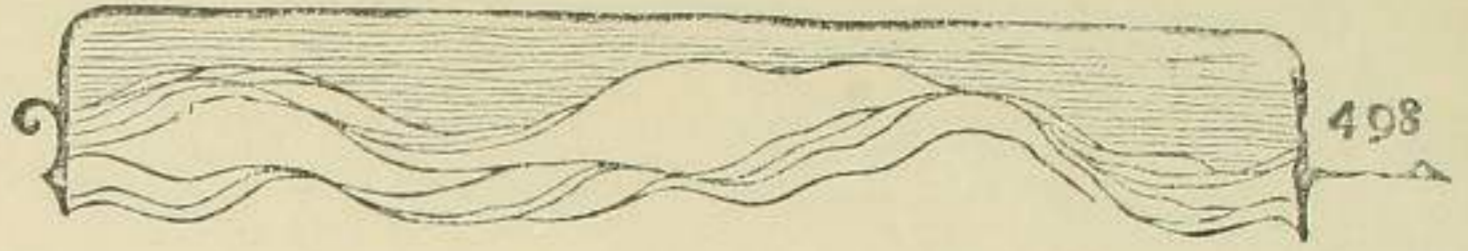
救はる！

(メフ) トに言ふ

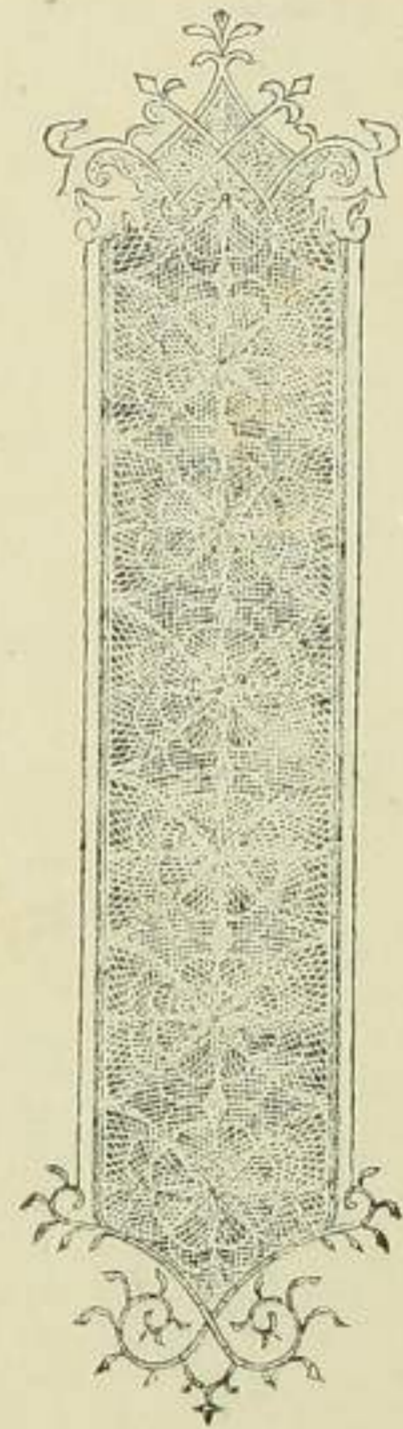
我に飛來よ！

(メフ) キストフェレンスはファウストと俱に消え失す

(女聲) 細り作ら ーハイインリヒー！ハイインリヒー！



を
は
り



明治三十七年八月廿一日印刷
明治三十七年八月廿五日發行
明治三十七年九月十三日再版

フ
ア
ウ
ス
ト
奥
附

※
定
價
六
十
錢
※

著譯者
高橋五郎
東京市芝區三島町十二番地

發行者
前川亦三郎
東京市日本橋區箔屋町十六番地

印刷者
横田五十吉
東京市神田區松下町十番地

印刷所
横田活版所
東京市神田區松下町十番地

東京市日本橋區箔屋町十六番地

發
行
所

前
川
文
榮
閣



文榮閣出版及發賣書目

海軍軍令部附譯官高須五湖先生著

速日露會話獨習

總價金五拾錢
郵税六錢

露語に精通せらるゝ高須五湖先生多年の研鑽に依り、獨力露語を練習應用するの便を開かれたり、露語の發音文法より日常必要な各種の用語を網羅し終に當世會話の粹を萃む、眞に刻下の好著亦永代の名作と稱す可し、

長田秋濤君著

世界の魔公園巴里

定價金五拾錢
郵税八錢

文明中の文明を以て世界に誇る巴里。紅粉を剝し來れば即ち骸骨。腥風指端に透しる一笏鐵如意的の筆。文明てふ大假面を粉粧し去つて。大鬼は跳梁小鬼は哭する底の活ける體蓋は眼前に展開さる。苟も血あるものは。三伏流汗の候だも膚候にして粟を生ぜん。

加藤咄堂先生著

運命觀

菊版全一冊
定價卅五錢
郵税六錢

本書は加藤先生が斬新の論を以て八封、陰陽、五行、子支、九星等の舊運命觀を擊破し、深遠なる哲學科學の眞理によりて新運命觀を建設し、更に人生の眞趣を解して、これが開拓策を説き、終に運命は神秘なる、之を開くの鍵は吾人の手にありと絶叫し、古來の實例を擧げて、此の運命と奮闘して成功の位地に達せるの原因を示す、流麗の文は健全の想と相待て現代の文壇に一異彩を放たん、

加藤咄堂先生著

死生觀

定價卅五錢
郵税六錢

著者が多年の研究を傾け盡して古來の哲人傑士英雄烈婦が事跡に徴して、更に東西の學說に考へ、終に此千古の疑問に一大解決を與へられたるものなり

獨乙ゲーテ氏原著 高橋五郎先生譯

ファウスト

定價六拾錢
郵税十錢

十九世紀の最大軍人ナポレオンにゲーテを見るや還りて人に告て曰く、余今日始めて人を見たりと、人とは勿論眞箇の偉人を謂ふ也、嗚呼英雄は英雄之を知る、要するにゲーテは十九世紀第一の偉人と公評せられ、而して其の傑作ファウストは十九世紀の最大著述と稱せらる、其天下各國の語に翻譯せられたる夥し、今獨英兩國語に精しき高橋五郎先生之を原文厚意に照して原文一行邦文一行兩々相對して精密に一字を増減せず最も忠實に翻譯せらる、英獨兩國文のファウスト讀者本譯書に由て原意を確知することを得べし、近來稀なる大翻譯と謂ふべし、高橋先生の譯腕は人生哲學の翻譯以來已に天下の均く認むる所なれば發聲を費さず、諺曰ファウストを讀めば讀者は讀書を説かずと、今より吾人は始めて讀書を説くを得ん歟

獨乙ゲーテ氏原著 高橋五郎先生註疏
米國テール氏翻譯

英ファウスト

定價四拾五錢
郵税六錢

本書は英譯の粹を選び必要な註疏を附して初學者の便にせらる、以て學校の教科書とす可く、以て英學者の獨研究に供せらる可し、本書出て、ファウスト始めて我國に紹介されると云ふべし

宮中御歌所寄人 中郵秋香先生著

古今集詳解

和裝美本
全四冊

卷壹 古今集序 定價卅六錢 郵税四錢
卷三 戀 定價卅六錢 郵税四錢
卷二 夏秋冬賀 定價卅六錢 郵税四錢
卷四 雜 定價卅六錢 郵税四錢

本書は國文界の泰斗中郵秋香先生が多年の研鑽になりたる大著にして、詞に顯はれたる一首の心、詞の組合せ、風調、語勢に就て生ずる餘情等を懇切に説き分け、一首の妙處を示したる、古人未發、未曾有の解釋、一讀忽ち歌の秘訣を悟るべく、而も講義筆記體總振かな付にせられたれば、國歌國文初學者研究者は勿論我國文學の花を味はんとする者は是非一讀すべき也

中郵秋香先生著 增訂四版

文鑑千草の錦

菊判和裝
定價五拾錢
郵税八錢

此書は中郵秋香先生が三十餘年間讀書の余暇、古學復興以來諸名家の文中金玉の響あるものを抄録せられしが積んで數十卷と成りしを、中に就て男女學生の模範となるべき美文、記事、紀行、論說、消息、物語等無慮數百篇を選出せられ、之に加ふるに當代諸名流の文を以てせられ、特に上欄には要語數萬を載せ、作習の模範と應用とに供せられしは、他に其比を見ざる最良の文鑑なり國文學研究者は是非一本を座右に供すべき也

宮中御歌所寄人 中野秋香先生新作
華族女學校講師 小野鷺堂先生淨書

新編手紙

木版半紙摺
無類の美本
男女各一冊
定價四拾錢
郵税四錢

女子文の手ほどき

無類の美本
男女各一冊
定價四拾錢
郵税四錢

本書は中野秋香先生の新作にして書簡文獨習者の爲に通俗平易なる實用の文題百餘種を總振かな付にせられたるは他に其比を見ざる處、特に小野鷺堂先生が大字に書かれたれば習字の Handbook として此上なき長書なり

新編書簡文例

木版半紙摺
頗高尚優美
男女各一冊
定價六拾錢
郵税六錢

新編女子書簡文例

木版半紙摺
頗高尚優美
男女各一冊
定價六拾錢
郵税六錢

本書の文例は現代の文豪中野秋香先生の腦漿より進出せしものなれば、一言一句洋々たる趣味あり、繁に流れず簡に失せず、擬古に陥らず流俗に同せずして眞に今日書簡文の好模範たり、加ふるに書は筆硯界の巨擘小野鷺堂先生の手腕に成りしものなれば又習字の範疇として上乘の書なり、特

に上欄に類語数千句を掲げ書簡文を作習せんと欲する人をして自由自在に意を達せしむるの便に供せられたるものなれば、新編書簡文法式と相待て斯道の完璧と稱すべきものなり

書簡文の法式男女に別ちて大成せるものは、古來未だ嘗て有らず、蓋し書簡に法式のなからざるべからざるは、尙人に禮儀の缺くべからざるが如く、苟も人に禮儀なく、書簡に法式なからんか、其人如何に貴しと雖、又いかに富めりと雖、一日も交際場裡に立つこと能はざるべし、御歌所寄人中野秋香先生深くこゝに感ぜられ、即ち男女に就きて各書簡文法式の撰著ありて之を世に公にせらる

新編書簡文法式

總グロス
金文字入
定價五十錢
郵税六錢

新編女子書簡文法式

西洋綴美本
定價六十錢
郵税六錢

◎女子は男子と自ら差別ありて特に散らし文は小野鷺堂先生の書に係るものを挿入せり

此法式は元來封建制度の代に於ける尊卑上下に就きて種々の段階を分つが如き煩を避け、今日の現狀に依り舊新を對照して以て時の宜に従ひ、適當の式を設けられしものなり、故に人間處世には一日も缺くべからざるは勿論、苟も筆を書簡に把る者は瞬時も座右を放つべからざる要書なり

豫言者 宮崎虎之助君著

我が新福音

定價四拾錢
郵税六錢

古來天師若くは豫言者は國家多難の時に起れり、我國近來豫言者を呼ぶ聲層一層多く且高きを加ふ、豈圖らんや豫言者既に起りて吾人の前に在らんとは、俗姓宮崎今道名をメシヤ佛陀と號す、抱負の深大其名に炳然天下爲に轟然たる宜なる哉、此仁自ら我が新福音を著し舊來の宗教をして後に墮若たらしむ、必や二十世以後心靈界の大革命の本源たらん、請ふ刮目一讀せよ

高橋五郎先生新著

戦争哲学

定價四拾錢
郵税六錢

戦争や小は民人の禍福、大は一國の存亡に關す、暗中飛躍程危険なるは無し、幸に世戦争哲学なる者あり、著者即ち國家社會上より宗教道德上より、人道上、美術上、哲學上軍事上より推究し、東西古今の哲論を會萃折衷し以て此天下の最大事に千古の大鐵案を下せり、朝野官民の必讀は勿論出て戦ふ者居て守る者共に戦争の哲理を常に胸裏に藏するを要す、立論の新警目を醒すに足る也

高橋五郎先生著

新一元哲学

定價五拾錢
郵税八錢

著者が該博の智識と深遠の考慮とを以て一元哲學を根底より歴史的に社會的に哲學的に駁論し、附録に「天人論」の一元主義を無遠慮に評議して餘蘊なし

高橋五郎先生著

世界三聖論

定價四拾錢
郵税六錢

著者が富贍の知識と犀利の筆鋒を以て縱横に論評せらる、壯快の文字深遠の思想三聖の眞面目をして紙上に躍如たらしむ

高橋五郎先生著

人生觀

定價五拾錢
郵税八錢

本書は古今幾多の人生觀を掲擧し遂に健全無病なる安心立命的大人觀を打出し來れるものなれば、人間の人間たる本分を知らんと欲する者は一讀せずんばある可らず

哲學博士リ一君著 高橋五郎君譯

人生哲學

本書は超群絶倫の人生哲學にして學問と宗教此書に於て始めて琴瑟の和階に達せりと云ふべし、實に萬人必讀の良書なり

定價五拾錢 郵税八錢

人間論

百の哲學書を讀まんより千の科學書を看んよりはと一夫抱負を以て世に出づるや、稱讚に罵倒に批評の矢を放たれたる、空前絶後の奇文を見よ

定價卅三錢 郵税六錢

病骨錄

嗚呼明治昭代の大文豪尾崎紅葉先生が第一醫院の病室裡に枯瘦を支へられつゝも紙に落ちたる天機神韻の大文字曰く病骨錄曰く生死論曰く觀月とす、高微なる想は篇々織りて千丈の錦を成す、實に吾人が精神修養上、將又詞藻の軌範として千古に傳ふべき良書なり

定價五拾錢 郵税六錢

黑岩涙香君序 伊藤銀月君著

人情日本史

文界に異彩を放てる銀月君、炬の如き批評眼に燃ゆるが如き熱情を注ぎ、日本史の裏面を貫通せる活ける血の潮流に筆を染めて、獨創の人情觀的日本史を成す、之を一面より見る時は新式なる三千年間の人物評也、紅焰櫻花を撲ち、露酒玉盞に滴る、眞に是れ千古の痛快文字、現下の興奮的國民の讀物として此書の右に出るものある無し

定價五拾錢 郵税八錢

社會訓

當代の才筆大町文學士が●文藝●教育●宗教●道德●風俗●習慣等に關し大なる訓戒を興へられたる吾人必讀の良書也

定價四拾錢 郵税六錢

筆のしづく

同文學士の●美文●論文●紀行●史傳●隨筆●韻文等を集めたる、明治文壇の珍什也

定價四拾錢 郵税六錢

谷口賞華君著 永井尚行君譯

さくらとばら

本書は神武天皇東征より日英同盟に至る二千五百有餘年間の我歴史に顯著なるものを優秀精美なる和英兩文に對照して一は學生諸君の研鑽に供し、一は學絶せる大日本の光輝を全世界に發揚せる古今未曾有の好著也

定價卅五錢 郵税四錢

實驗雄辯學

文明社會の戰は言論を武器として、輸贏を決せざるべからず、不辨舌は竟に社會競争の上に於て劣敗者たるを免かからず、本書は著者が多年の實驗に基き、雄辯の秘訣雄辯の妙用を講述せられたる者なれば、唯に雄辯のみならず、亦文學にも創見する所少からず、故に學生諸君は勿論、苟も文明の國民たる者は一本を座右に備へ自己の運命を向上發展せられよ

定價卅五錢 郵税六錢

正岡藝陽君著

新時代の道德

本書は著者が道德觀を有體に忌憚なく告白せしもの、氏の筆力世に定評あり、然れども此篇の如く大膽にして思想の嶄新なるもの氏に於て未曾有なると共に、又文壇の珍とすべきものなり

定價廿五錢 郵税四錢

獨乙 エツカルト氏作 齋木仙醉君譯

譽の毒盃

本書は獨乙文豪エツカルトの傑作にして、材を希臘に取りたる大戯曲也、登場人物ソクラテスプラトンヘレナ其他幾多の人物紙上に活躍し人をして新舊思想の混濁たる時代に處する大見識を得せしむる一大燈明臺たるは喋々を要せず、脚色亦快絶妙絶

定價五拾錢 郵税八錢

湯淺觀明君著

戰爭論

菅綠蔭先生閱 渡部竹蔭君著

定價三拾三錢 郵税六錢

明治の家庭

本書は我國現今の不完全、不規則極まれる、家庭を矯正せんが爲めに生れたので、理想の家庭を作らふと云ふ者は是非一讀せざるべからざる珍書なり

定價廿五錢 郵税四錢

佐藤政治郎君著

韓國成業策

定價廿五錢 郵税四錢

久津見巖村君著 増訂六版

家庭教育の子供のしつけ

定價廿五錢 郵税四錢

本書は著者が該博の識と多年の實驗に依り幼稚時代、兒童時代、少年時代、青年時代の四段階に至る家庭教育の仕方

を言文一致にて十三章百六拾餘條に説き示されたるものな

れは婦女子にても容易に理解せられ直に實際に試むること

を得べきやう記述せられたる近來稀に見る處の好著なり

叻鹿庵主人著 前編後編合本

鳴呼古英雄

定價五拾錢 郵税八錢

古來の英雄豪傑數百人を捉來つて、縱橫無盡に品評せる壯

絶快絶の珍書なり

鳴呼今や暴露征討の時にあたりて此書を讀む、何等の快感

か是に如かんや

實業の葉

定價四拾錢 郵税六錢

はらのや春雄著

洋行 奇談 赤毛布

定價二拾錢 郵税四錢

ドクトルユーマ氏譯

英文赤毛布

定價三拾錢 郵税四錢

長田秋濤君著

新赤毛布

定價廿五錢 郵税四錢

長田秋濤君著

遠征新々赤毛布

定價四拾錢 郵税六錢

遠征新々赤毛布

本書は露西亞、朝鮮、支那及び南洋等に於ける珍事奇聞を蒐

集せる愉快絶の妙著也

佐藤鐵嶺君 相島虛吼共著

渡米のしるべ

定價廿五錢 郵税四錢

吉村大治郎君著

渡米成業手引

定價廿五錢 郵税四錢

吉村大次郎君著

獨立 北米遊學案内

定價廿五錢 郵税四錢

